語り継ぐ１２

阪神・淡路大震災から２１年。
２０年という節目を過ぎた今、私たちが繋ぐあの日。
『　過去から未来へ　』

兵庫県立舞子高等学校
環境防災科１２期生

題　　名	名　前	頁
語り継ぐ	安　藤　知　貴	p.　1
語り継ぐ	飯　尾　太　一	p.　4
語り継ぐ	石　倉　優　風	p.　7
語り継ぐ	井　上　拓　磨	p. 12
語り継ぐ	今　井　啓　輔	p. 16
語り継ぐ	大　熊　莉　果	p. 20
語り継ぐ	梶　原　謙　司	p. 24
語り継ぐ	加　藤　明日香	p. 28
語り継ぐ	川　口　祐　貴	p. 33
語り継ぐ	川　嶺　桃　香	p. 36
語り継ぐ	久保田　大　貴	p. 40
大阪の阪神・淡路大震災	駒　井　　櫻	p. 43
語り継ぐ	阪　田　翔　大	p. 48
語り継ぐ	佐　藤　葉　月	p. 52
語り継ぐ	塩　川　丈　瑠	p. 55
知らない世代だからこそ	清　水　咲　希	p. 58
語り継ぐ	新　本　優　香	p. 62
語り継ぐ	瀬　尾　昂　平	p. 67
語り継ぐ	外木場　浩太朗	p. 70
語り継ぐ	滝　村　佳理那	p. 74
語り継ぐ	爲　平　　涼	p. 78
語り継ぐ	寺　井　美　紀	p. 82
語り継ぐ	寺　尾　莉　子	p. 87
語り継ぐ	中　林　真　鈴	p. 92
語り継ぐ	西　田　芽　生	p. 96
語り継ぐ	萩　野　彩　未	p. 100
語り継ぐ	長谷川　瑞　起	p. 104
たくさんの『　奇跡　』	濱　岡　小矢佳	p. 107
語り継ぐ	平　井　祐　衣	p. 111
語り継ぐ	平　田　駿　也	p. 115
語り継ぐ	福　田　智　都	p. 118
語り継ぐ	藤　田　涼太郎	p. 121
語り継ぐ	松　尾　優　花	p. 125
語り継ぐ	三　浦　秀　也	p. 129
語り継ぐ	森　脇　ますみ	p. 132
語り継ぐ	山　崎　祐　太	p. 136
語り継ぐ	山　田　力　輝	p. 140
語り継ぐ	吉　田　さやか	p. 144

語り継ぐ

安藤　知貴

１　はじめに

1995 年 1 月 17 日　午前 5 時 46 分 52 秒、淡路島北部を震源とする非常に大きな地震が阪神地区と淡路島を襲った。阪神・淡路大震災発災当時、私はまだ生まれてもいなければ、母のお腹の中にもいなかった。そのため、震災を体験していない、震災を知らない世代にあたる。だから私自身の体験談を書くことはできない。だが、生まれ育った街、神戸で起きた悲惨な震災を忘れないために私の父と母から聞いた２人の体験談をここに記し、語り継ごうと思う。

２　震災前

私の父と母は、震災が発生した 1995 年の５月に結婚式を控えていた。結婚式前に母が「お父さんとお母さんに、こんなドレスを着るよって見せてあげたい」ということで、田舎から、お父さんとお母さん（母方の祖父母）が神戸に出てきていた。ドレスを見せてご飯を食べて、震災発生の前日に田舎へ帰ったそうだ。

父は鷹取駅前で私の祖父が営んでいた電気店を一緒にやっていた。母は北区で幼稚園教諭をしていた。

３　震災当時

当時、母は北区に、父は垂水区に住んでいた。北区のアパートに住んでいた母は地震の揺れでテレビが飛んで来たり、お皿が割れたりした。外に出なければと思った母はアパートの外に毛布を持って出た。外は雪がちらついていた。少し時間が経ち、母は公衆電話から父に電話を掛けた。電話に出た父は「いま朝ごはん食べてるよ」とケロッとした様子だった。そこから父と母は鷹取駅の近くにあるお店を見に行った。店が地震で潰れることはなかったが、店の倉庫がぐちゃぐちゃになっていて、倉庫としていた建物は倒壊するかもしれない状況だった。

日本人はよく「礼儀正しい」「災害の時は暴動や、略奪は起きない」などと言われている。しかし、そんなことはない。店のシャッターは地震の揺れのせいか、何者かによってこじ開けられたのか、目撃者はいないので何とも言えないが開いていた。そこから店内に侵入され、乾電池やラジオなど震災時に必要なものが店内から盗み出され、レジに入っていた現金も盗まれていた。店の外に置いていた乾電池の自動販売機も壊されてこじ開けられて全部盗られていた。報道されたりはしていないが、実際に起こったことである。どれだけ治安のいい日本だといってもそういうことは起こるのだと実感した出来事であった。

父は店の近隣の人たちから「家財道具を出すのを手伝ってほしい」と言われ、家々が地震によってなぎ倒され、道路が塞がれて足場もなく、いつ天井が落ちてくるかわからない状況の中で住宅に入っていった。その場にいる母に父はバイクのヘルメットをかぶせた。母はとても不安だった。それを聞いたとき、私自身も非常に怖い気持ちになり、不安になった。自分がそういう状況になった場合、できるのかどうかわからなかったし、おそらく自分のことで精一杯になっていただろう。

４　まとめ

今回親に震災の話を聞いて、年齢のせいもあるかもしれないが、とても深く重いものだと感じた。環境防災科に入り、たくさんのことを学んで感じるものもある。小学生の頃から道徳の授業などを使って震災について学んだり、話を聞いたりしていたが、正直言うと何もわかっていなかった。写真などを見せられても「どうして火事を消さないのだろう？」「なぜ高速道路は倒れているのだろう？」「どうして人はこんなに急いでいるのだろう？」そう思うだけだったし、そう思いながらも何もわかっていなかった。「なぜ？」という疑問は出てくるが、それを解決しようとしなかったし、する気もなかった。中学に入って環境防災科を知り、今まで震災について学んできたし、自分の夢があったので、入ろうと思った。

私の夢は消防官になることだ。なぜ消防官を目指すようになったのかというと、私が幼稚園に通っていた頃、幼稚園へ通う道の途中に垂水消防署の本署（現・垂水消防署高丸出張所）があり、朝幼稚園に行く時には、前を通ると車両点検や朝礼をしていて、帰りに前を通ると救助隊が庁舎の屋上から降下する訓練や屋上へと登はんする訓練をしている姿、消防官の方が庁舎の周りや近所をグルグル走っている姿を見て、「かっこいい！」という印象を持った。その次の日から消防署の前を通るたびに消防官の方に大きな声であいさつをしていたのを覚えている。防火衣を着用している消防官の絵、救助隊のオレンジ、救急のグレーなど、絵が描けたら消防署に持って行っていた。そうしていた時には私の中で「かっこいい！」という憧れから、夢へと変化し、「僕がなる！」という思いへと変わっていった。幼稚園の友達、先生にも毎日のように言っていて、遊具の上り棒、少し傾斜のある壁に垂らされたロープを登っているときは自分が消防官になったような気分だった。

中学生になると、中学２年から毎年夏休みに新しい垂水消防署（舞多聞）で中学生を対象とした消防の仕事を体験する「垂水ジュニアファイヤーファイター」というのをやっているのを学校の掲示板に貼ってあったポスターで知り、それに参加することにした。そこで知り合った環境防災科の先輩も複数名いらっしゃった。内容は、礼式、消火隊の業務と訓練、救助隊の訓練、車両点検などを一週間の日程で行った。すべてやりがいのある仕事だが、やはり私は救助がしたいと強く思った。現在の消防の花形でもあるし、私は要救助者をどんな形であれ必ず救出して家族のもとに帰してあげたいという思いが強いからである。身内が事故や火災等で亡くなったわけではないが、私が遺族側の立場に立った時、生きていれば１番良いだろうが、やはりどんな形であっても帰ってきてほしいと思うから「自分が助ける。なにがなんでも絶対に救い出す」という思いがあるから消防官を目指している。

消防の業務は多岐にわたる。大まかにいうと消火、救急、救助、警防、予防に分類される。その中でも表立って活躍している消火、救助、救急といった業務は誰もが知っているであろう。街中を走っている消防車両が印象的だし、ニュースでも取り上げられることが多い。おそらく一般の方々はこれが消防の業務だと思っているだろう。しかし、それだけではない。消防署に届く書類を選考したり、相談を受けて解決したり、施設の消防設備の点検や、防災教室の開催なども大切な仕事だ。ここに書いたものはほんの一部分でしかないので自分の希望等で配属が変わるが、どの部署もやりがいがあると思うし、必要不可欠な仕事だと思うので、非常に魅力的だと思う。だが簡単な仕事ではないし、現場に出ると一歩間違えれば死に直結する仕事でもある。現場でなくても、「消防」という職に就くということは「人の命を預かること」だと考えている。なぜなら前述したように、防災教室や消防設備の点検、夏祭りなどで火気を使用する際、消火器はどこに設置するかなどを指導したり、119 通報を受けたり、家庭での出火などの原因を調査し、新しいものなら対策を立てて、実験し、公表するのも人の命を守る大切な仕事である。現場で活躍している消防の方たちは火を消す、人を助ける、隊の連携力を高めるためだけに訓練をしているのではなく、「自分の命を守るために訓練をしている」とおっしゃっていた。自分が死んでしまっては元も子もないと思うので、訓練でキツイ怖い思いをしておいたら現場でうごけるし、ダメだと思った時にすぐに退避だったり撤退だったりの行動がとれるので訓練は非常に大事だと思う。それは地域の防災訓練などにも言えることなのではないかと思う。

僕の最終的な目標は、救助隊員としての人柄と、技術など、レスキューに必要なスキルと冷静な判断力を兼ね備えた日本一のレスキューマンになることだ。

環境防災科に入って、まず感じたことは、専門教科の多さだ。正直言って「多すぎるな」と感じた。阪神・淡路大震災をキッカケに設立されたのだから、専門科目が多いのは当たり前だし、キッカケを学ぶためでもあったと思う。それにしても入学当初の僕には多すぎてこなせないものもいくつかあった。外部講師の方の話を聞かせていただく機会がたくさんあり、はじめの頃は何のことか全くわからなかった。ライフラインの大切さはわかってはいるし、考えることもあった。しかし、話を聞き終わってから「で？どうしろと？」と思っている自分もいたことは間違いない。この「語り継ぐ」を書いている今でさえ、「これ書いて、誰が見るんやろ？」と思ったり、「見るとしても、知らん人に見られるのもな～」と思うところもある。しかし、阪神・淡路大震災は、これから起こる大規模災害という名のトンネルの入り口となった災害だ。長田のまち歩きで、久しぶりに行った鷹取の町もすっかり変わっていて驚いた。僕が幼いころに走り回っていた鷹取の町は当時悲惨な状態だったことは環境防災科に入ってから知ったことだ。勉強してから歩いてみると昔と違って、広く感じていた町は体の

せいもあるのかとても小さく見えた。狭く小さな町が一瞬にして火の海にのまれ、家々が倒壊してがれきの山と化すのを想像したときぞっとしたことを覚えている。大国公園も僕の遊び場だったところだが、あの公園で火の手が止まったことを考えたら、「やっぱり昔にお社があったから、その時の神様が守ってくれたのかな？」などと思った。このように見え方も変わっていくのを感じ、この町の復旧・復興に対する思いの大きさや、地域を大切にする気持ちを町をみるだけで感じ取ることが出来た。

この阪神・淡路大震災を語り継ぐのは、これからの歴史に残るような大きな災害なのだから語り継ぐしかないし、語り継がなければならないと思う。震災被災体験は人それぞれだ。ギリギリ命拾いした人、亡くなった人、結果的にいい思いをした人、嫌な思いをした人、助け合い、絆を感じた人、大きな喪失感を感じた人、ひとつの震災で、災害で、多種多様な感じ方がある。被災体験は被災者の数だけある。同じものはないと思う。それをひとりひとり聞いていくのは違うと思う。話せる人にだけ聞くべきだと思う。それ以外の人に聞いたら失礼だし、心の傷をえぐることになる。それは一番してはいけないことだと考えている。語り継ぐではなく単なる嫌がらせでしかないと思うのでそれだけは避けたい。語り継ぐというのは、見てくれる人や聞いてくれる人がいて初めて成り立つと思うので、もし読んでくれる人がいるのであれば、何か一つでも伝わればいいと思う。

話をしてくれた親には非常に感謝している。話したくないこともあっただろうし、なぜだろうという気持ちもあったかもしれないが、初めて聞くような話もあったので驚くところもあった。

私が未災地に防災面で提言できることは何一つとしてない。考えてみたものの、防災面で僕たちが知っていることよりも詳細を知っているだろうし、被害が大きいと想定されている地区は、なにより住民のひとりひとりがその災害に対して考え、意識して対策していると思うので防災面で言えることはないのではないか。ただ、ひとつだけあるとすれば、耐震や津波に備えたり「災害に備えること」も大切なのだが、防犯面もキッチリとやっておいてほしいと思う。それは私の親の実体験をもとに言えることである。確かに、絆や助け合いが大きくクローズアップされるが、そういった盗みなどの犯罪も発生することも事実である。絆などの綺麗なものだけが見えるのではない。そういったものだけを報道するのではなく、そういった災害時に出る人間の汚さの様なものもしっかりと報道に出してほしいと思う。

語り継ぐ

飯尾　太一

１　はじめに

僕は加西市に住んでいる。両親もずっと加西市に住んでいて阪神・淡路大震災のときは、今までにない大きな地震は体験したが被害は全くでなかった。しかし加西市の市役所に支援物資を届けたそうだ。両親からは震災時の話が聞けないので母の友人で当時神戸市に住んでいた方のお話を聞かせていただき、この「語り継ぐ」を書きたいと思う。

その方は当時、灘区の阪急六甲駅のすぐ近く６階建てマンションにいとこと住んでいた。働きだして、加西市からでてきて２年ぐらいだった。

２　１月１７日

（１）地震発生時

初めはなにが起こったのかも分からず、地震とは思いもしなかった。マンガのように上から怪獣が降ってきたのかとも思った。

（２）揺れがおさまってから

地震と気づき外に飛び出した。当時、地震が起きたときのための避難訓練というものはなく、なにをすればいいのかが全く分からない状況だった。住んでいたマンションは、同じように単身の方が集まっていて、みんなで地震が起こったときはどうしたらいいかなどを話し合った。看護師の人は病院に行かないといけないということでそのまま病院に行かれた。このとき教えてもらったことは、トイレの水を流してはいけないということだった。部屋に戻ると、テレビが落ちたりして散らかっていた。最初は電話が繋がり、実家から電話がかかってきて、実家の方が驚いていた。

（３）歩き回る

情報が全くなく、情報がほしくて外を歩き回り、商店のラジオから流れてくる情報が頼りだった。歩いていると、毛布にくるまった人がたくさんいた。また、道一本ちがうだけで家が全くないところもあった。お金も食べ物もなく、泥棒をしようかとふと思ってしまったりもしたが、そこは人間としてしてはいけないことだからそのまま家に帰った。家は高い所にあったので、火事の火が見えたりしてとても怖かった。

（４）その夜

家に帰ってからも、窓から火事の火が見えていてとても怖かった。その日は家にある食料を食べたが、水道が出なくてとても困った。トイレは駅のトイレまで行った。夜は電気もつかず真っ暗で怖かったのでいとこと二人、今晩は起きておこうと決めていた。そうすると、夜中２時ごろにテレビがつき、電気もついた。

３　１月１８日

まず、災害が起こると避難所へ行くということを知らなかった。避難場所を聞き、行こうとしてもその〇〇小学校の場所がわからずなかなか見つけることができなかった。避難所で水をもらい、その日はご飯を炊いて食べた。

４　数日後

地震発生から３，４日目に加西市からも支援が来ており、色んなところからの噂話で加西市に帰れる車があるということを知り、その日病院にいく車に乗せてもらい実家のある加西市に帰った。車の中から見えるのは他府県のナンバープレート、沖縄などからも支援の車が来ているのを見て、感動し、みんなの助けがあるのだということを感じた。

５　神戸にもどって

仕事があったので神戸に戻った。水道は使えるようになったが、ガスがだめだったのでお風呂は銭

湯へ。銭湯にはたくさんの人が来ていて一時間は待っていた。その銭湯自体がきれいというわけでもなく、銭湯に行くと体がかゆくなるときもあった。
仕事は、ポートアイランドだったので歩くか船に乗るかの移動手段しかなかった。

６　復旧、復興

震災が起こって多くの被害を目にしてきて、もう神戸が元に戻ることはないと思っていた。でも、建物や電車など少しずつ元の姿に戻っていった。形だけでも元に戻っていってびっくりした。電車が開通したときは本当に感動した。そして、現実逃避をしたくなり友人とできるだけ遠くまで遊びにいった。今でも、「がんばろう神戸」、「ルミナリエ」などには元気づけられるし、感動して涙がでそうにもなる。当時教え子を亡くされたりしている先生から今、自分の子どもがお話を聞くことがあり、貴重な話を聞けていい機会になっているなと思う。

７　震災を経験して

半年くらいはずっとガタガタという音に怯えていた。震災は経験したが周りの人が亡くなったり、家が壊れたりという大きな被害を受けていないので「被災者です」とは自分で言えない。

８　まとめ

（１）環境防災科に入ったきっかけ、夢

僕が環境防災科に入ったきっかけは将来の夢が消防士になることだったからだ。防災の知識を得たり、過去の災害はどういうものだったのかを学んだりすることと、市民のリーダーを育成するという科の目的を知り、僕の将来の夢を知った母の勧めがあった。消防士になる前から災害のことを学ぶことができるほかにコミュニケーション能力をつけることができたり、消防学校の体験入校など環境防災科でしか体験できないことがたくさんあり、消防士になってから役立つことがこんなに多くある高校はないと思い、環境防災科に魅力を感じた。

初め消防士になりたいと思った理由は、人の役に立ったり人を助けることができる仕事がしたいと思ったからだ。今もそういったことも思っているが地域の防災意識を高めたいと考えている。上に書いた話の中に「避難所に行くことも知らなかった」や「避難訓練をしたことがなかった」ということがでてきた。今は避難訓練もするしニュースで防災の話がでてくることがあるので、阪神・淡路大震災が起こる前のようなことはないが僕の地元ではまだまだそういった活動が少ないと感じた。そこで僕は消防士になり、地域での防災訓練を行ったり、災害に備えるという意識を高めるための話をする場をつくりたいと思う。

僕は小学生のときに小学校から数名行くことができる消防署の体験にいかせていただいた。そのときに消防士の人が日ごろやっている訓練をやったり、消防士の活動についてのお話を聞いたりした。将来は逆の立場になって子どもに防災を教えたりしたい。そういう活動を通して地域と繋がったり、また消防士の主な仕事となる火災が起こったときの消火活動などをしながら地域を守り災害に少しでも強い町にしていけるように努力していきたい。

地域のリーダーとなり多くの人からの信頼してもらえる消防士になりたい。

（２）感想

阪神・淡路大震災について授業ではないときに体験者の話を聞くことは初めてだと思う。「語り継ぐ」を書くということで話を聞かせていただきいい機会だったと感じた。僕は親が神戸で災害にあっていないので、今までにない大きな揺れだったということを聞いたことしかなかった。災害が起こったときの周りの様子や体験を聞いて驚くようなこともたくさんあった。

初対面の僕に、母の友人は震災当時のことを本当に丁寧に話してくださったし、そのときの強い思いを聞かせてくださった。「自分は被災者です」と言えないという言葉を聞いたときは本当に驚いた。震災を神戸で体験した人の中にそういうことを思っている人が一人でもいるということを知った。幸い、大きな被害を受けたり身内の人が亡くなるということはなかったが、阪神・淡路大震災を経験し、生活に影響を受けたことは変わらない。こういう方がもしかしたらほかにもいるかもしれない。そういった方々のことを考える時間も必要になってくるのではないかということを初めて思った。

これまで阪神・淡路大震災が起こった時の話はたくさんの方から聞かせていただいた。ライフラインを支える会社の方、語り部の方などのお話を聞かせていただいた。今回は身近な人の経験を初めて聞くことになった。話を聞いて一番に驚いたことは、避難訓練もしたことがなかったし地震についてなにも分からない、備えのしようがなかったということだ。今では多くの人が地震というものを認識しているし、備えもしている人はしていると思う。全く知識がない状態で大きな災害にあい生きていけていてすごいなと思った。避難所に行くということも知らなかったと聞いて、今では当たり前になっていて誰でも知っていることになっているので阪神・淡路大震災の教訓がちゃんと活かされているということがわかった。また、それだけ社会が災害に対する意識をもっていなかったんだなと感じた。

ほかに驚いたことは、母が加西市の市役所に持って行った支援物資などを届けた車に乗って母の友人が加西市に帰ってこれたということだ。支援物資を自分の家の近くで集めていてそこから送るだけで終わってしまうのではなく、本当に少しだけだが繋がりがあったということだ。阪神・淡路大震災が起こったことで日本は災害についての考えが変わり市民の知識が増えた。阪神・淡路大震災のときは支援物資はなんでもいいから送ってというような感じだったそうだ。東日本大震災のときはどこでなにが足りていないなどということがしっかりと伝わってきているので変わっていっているなと思った。

僕は、加西市で育ってきた。高校に入ってから神戸市に通ったことで阪神・淡路大震災が本当にどんなものだったのかということを少しずつ知っていくことができたし身近なものだということを感じられるようになった。これまで小中学校ではそこまで深く学ぶこともできていなかったし、防災の意識を身につける場面がなかった。同じ兵庫県で起こった災害なのにこんなことでいいのかと思う。もっと勉強する時間を増やしたり、避難訓練も避難するところまでで終わってしまうのではなく、自分の町ではどんな被害が考えられるのかということから避難の方法を考えたりしていくとまた、災害に対する意識が変わっていくのではないかと思う。

話は戻るが、災害にあわれた方々はルミナリエなど、もう一度町全体でがんばっていこうという活動に元気づけられていることが分かった。難しいけれど、がんばっていこうということを言うだけでなく形にできるようにしていきたい。

（３）これからやっていきたいこと

まず消防士という夢を叶えること。消防士になってからやりたいことも大切だが、なるための努力が今一番必要だ。勉強や体力づくり、やらないといけないことがたくさんある。そして、その夢を叶えることができれば僕は地元の地域のために精一杯働きたい。消防士になってから学ぶことの方が多いと思う。ひとつひとつをしっかりとこなしていきたい。消防士として、火災が起こったときなどの緊急時に迅速な対応ができるように知識を増やしたり、体を鍛えたり、そういったことがしっかりとできた上で、地域の防災のための活動も行いたい。避難訓練や防災教育、災害に備えることや過去の災害はどんなものだったのかということなど自分も勉強しなおしながら地域の人に伝えていきたい。田舎は子どもが少ないのに対して高齢者がたくさんいる。そこで災害時どんな対応をするのかということが重要になる。近所付き合いがいいなどという利点を生かしながら考えていきたい。災害に備えるという面で僕は地域のために自分のできることを探し地域が変われるように頑張っていく。地域の安全や市民の防災意識を高めていきたい。

僕が環境防災科で学んできたことや、この語り継ぐに書かせていただいた体験のことを今の若者に伝えたり、読んだりしてもらいたい。これから先、起こるとされている地震もある。その地震が起こったときに、近所の高齢者を助けたり、社会を守っていくのは今の若者だと思う。そういう人が防災の知識を増やし、過去の教訓を生かしていかないといけない。そのために、自分が伝えていく、語り継いでいくということをしたい。 環境防災科に入り、外部講師の方のお話を聞くことや消防学校の体験、専門科目などを通して色々なことを学んだ。災害のことや、災害で被害を受けた後のことを学んだり、ほかでは経験できない貴重な経験、体験が多かった。学んだことの多くは、たくさんの人に僕たちが語り継いでいかなければ、聞いた意味がなくなってしまうことだった。今までの時間が無駄にならないようにやるべきことをやっていきたい。

語り継ぐ

石倉　優風

１　はじめに

阪神・淡路大震災が起きたとき、私は生まれていなかったし、母のおなかの中にもいなかった。そのため私は、震災のことを写真や映像、外部講師の方などから聞いた話でしか知らないし、分からない。地震が起こった時どのような様子だったのか、私の家族はどうしたのか、経験した人にしかわからない話を、母に聞いた。

当時、父、母、兄の３人家族で、母のおなかには妊娠８カ月になる姉がいた。家族は垂水区福田にある４階建てのコンクリートマンションの２階に住んでいた。

２　１月１７日

（１）午前５時 46 分

いつも通り寝ている時だった。仕事がある日は起きている父だったが、この日は遅番だったためまだ寝ていた。午前５時 46 分。急に「ゴオオオオ」というダンプカーがすぐそばを通ったような音がした。そのすぐ後に「ドンッ」と突き上げられるような揺れがきて、体が持ち上げられた。そう思うと次は横に揺れ、食器が「ガシャンガシャン」と音をたてながら落ちた。揺れがきて、咄嗟に小さかった兄の上に覆いかぶり、またその上に父が覆いかぶさり、揺れがおさまるのを待った。今まで味わったことのない揺れで、何が起きたのかわからず、ただじっとしているしかなかった。

（２）揺れがおさまって

揺れがおさまっても、しばらくの間ぼーっとして動くことができなった。子どものころに避難訓練をして、地震が来たときは机の下にもぐる、建物がないところに逃げるなど、学んでいたはずなのに、ほとんど活かされなかった。周りも騒がず静かだったし、外に出ている人はいないようだった。この時、まだほとんどの人が、地震が起きたとは思えなかったのではないか。

少し明るくなって、やっと事態がつかめるようになった。家の中を見ると、棚とこたつの間にテレビが落ちていたり、倒れないように固定していた食器棚が前に移動していた。しかし、そこまで大きな被害はなく、電気はつかなかったが水道もガスも普通に使えたことが、何より幸いであった。水が使えるとわかった時、何を思ったのかすぐに洗濯機をまわし、洗濯を始めた。水が使えない、止まってしまうという感覚がわからなかったことからの不安だったのかもしれない。

窓を開けてベランダに出ると、ベランダに黒い灰がたくさん飛んできていた。朝なのに空も薄暗かった。近くで火災はおこっていないのに「なぜだろう」と不思議に思ったという。ラジオを聞いてそこで初めて、ただの揺れじゃなかったこと、ほかの地域では、火災がすごいことに気づかされた。黒い灰は、須磨や長田で起こった火災によるものであった。

（３）落ち着いてから

遅番だった父は、バイクで職場へと向かった。母は小かった兄と、お腹にいる姉を守り、余震の恐怖に耐え、電気のつかないこたつに入ってじっとしていた。祖母や妹達に連絡を取ろうと思ったが、今のように携帯電話が普及しておらず、連絡がなかなかつかなかった。祖母の家とはそれほど離れていないが、家に行って安否を確認する余裕などなく、ただただ、無事を祈るしかなかった。昼ごろから夜までには、全員の安否が確認できた。食事にも困らず、電気の復旧も早く、夜には使えるようになり、水道も止まらなかった。しかし、どこかでガス漏れが見つかったためにガスが止まってしまった。

３　１月１８日

（１）震災から２日目

家にあった食べるものが少なくなったため、近くのスーパーに行ったが、皆が買い占めたためにほとんどなかった。そのため父は、三木にあるスーパーまでバイクをとばし、食料を調達しにいった。道路が陥没していたり、混んでいる道で、車はなかなか進めなかったこのとき、バイクが役に立っ

た。三木にまで足を運んだが、三木でもたくさんの人が買いに来ていたため品薄になっており、レトルトのカレーなどしかなかった。ガスは止まってしまったけれど、家にはガスコンロもキャンプ用のガスバーナーもあったので、食事に困ることはなかった。普段の生活で使っていたものが役に立った。ガスが止まってしまったので２日目からお風呂に入ることができなかった。しかし、まだ小さい兄をお風呂に入れてあげようと、小さい器でお湯を沸かし、何度もそれを繰り返してお腹ぐらいまでお湯につかれるようにしてあげた。大人が入るにはもっとお湯を沸かさないといけないので、母と父は入れなかった。ガスが止まって１日目にしてお風呂を沸かすことができないこと、お風呂に入れないことが苦痛であった。

４　少しずつ元の生活に

（１）震災から 3，4 日目

震災から３，４日たち少し落ち着いたので、同じ兵庫県でもほとんど被害のなかった東加古川に住む親戚の家にいった。親戚とは仲が良く、日頃から関わりがあったため、このように困った時に手を差し伸べてくれたのだと思う。親戚の家は、ガスも止まっていなかったので、お風呂に入らせてもらった。２日ぶりのお風呂はまた格別で、ガスが使えることがどれだけありがたいことで、普通にお風呂に入れることがどれだけ幸せなのか改めて気づかされた。

少し経って、垂水の母の祖父母の家の近くにある銭湯が再開した。しかしその銭湯を待っていたのは、もちろん母たちだけではなく、お風呂に入るまで１時間並ばなければならなかった。まだ小さい兄とお腹の大きな母には、そのお風呂に入るための１時間はとても大変であった。寒い中ずっと並んでいたために母の体やお腹は冷え、お腹が張ったり、うずいたりしてしんどかったという。出産を２か月後に控えていたが、産婦人科では、ガスが止まったりしていて検診をするための機材が使えず、検診をすることが出来なかった。「赤ちゃんはちゃんと成長しているのか」「無事に生まれることが出来るのか」病院が再開するまでとても不安だった。

（２）家族の現状

１月に２歳の誕生日をむかえた兄は、赤穂の親戚の家で誕生日を祝ってもらった。赤穂でも揺れは感じたが、被害はなく普段通りの生活を送れていた。母の親戚のほとんどが、加古川や赤穂だったので被害がなく困ったら家に呼んでくれて、助けてくれた。普段から仲良くしていると、困った時にすぐに手を差し伸べて助けてくれると思った。

父はバイクがあったため、17 日の震災当日から仕事場に行くことが出来た。祖母は仕事場が西宮だったため、電車が動かなければ仕事場に行くことが出来なかった。１週間ぐらいは自宅待機で電車が復旧したらすぐに仕事に行っていた。電車とバスと徒歩で通い、電車が止まっているところから、歩いて仕事場まで向かっていたという。朝は早く夜は遅かった。歩かないといけないため、リュックとスニーカーで通っていたそうだ。

５　ライフライン

同じ垂水の福田でも、30 歩ぐらいしか離れていないところでガス・水・電気が使えない区域があった。幸いなことに私の家はガス以外、震災当日から止まることなく、普通に使うことが出来た。そのため、水が止まってしまった近所の人が水をもらいに来たり、西区の友達や須磨に住む妹が、洗濯をしに来ていたそうだ。水が使えるのと使えないのは大きく違う。こういうときこそ、助け合いが大切だと思った。

震災１日目の夜から止まってしまっていたガスは、１か月ぐらいで復旧し家でお風呂に入れるようになった。ガスが復旧したときは、本当に嬉しかった。元栓をひねればガスがつき、ボタンを押せば電気がつき、蛇口をひねれば水が出る、そんな生活を当たり前だと思ってはいけないと感じさせられた。

６　子どもの様子

当時２歳だった兄は余震が来るたびに「怖い。」と言っていた。母は、姉の出産のため一緒に居られることが出来なかったので、祖母の家にいた。一緒に居られないときに余震がくると心配になった

が、兄は「怖い。」とは言うけれど、大人しく、夜泣きもしなかった。一緒に居られるときは常に傍に寄り添った。また、兄は、地震がきていないのに「地震がきた。」と言い、自分が揺れたり、物を揺らしたりしていた。いわゆる地震ごっこというものだ。初めはびっくりした母だったが、怖いことをうまく表現できない子どもの正常な反応なのだと思ったそうだ。

３月に無事に母は姉を産むことができた。身長も体重も正常で安心したが、産まれたとき、体が真っ白だった。真っ白になってしまったのは、ガスが使えずお風呂に入れなかったり、お風呂に入るために銭湯に長時間並んだりしていることが続き、お腹が冷えてしまったことが原因だそうだ。白いものは脂で、赤ちゃんが自分で自分の身を守るために出す。赤ちゃんの自分を守る力に驚かされた。

７　最後に

（１）母の気持ち

「今思えば、前日の空は変な色やったかもしれへんなぁ。」

いつも通りの日だった。何も予期していなかった。まさか地震はこないだろうと思っていた。なにも地震に対しての備えがないまま、１月 17 日はやってきた。

地震が起こって、落ち着いてからテレビで、建物や高速道路が倒壊している様子や、外に避難している人たちを初めて目にした。自分たちは、ほとんど被害を受けることもなく普通に家にいることができているのに、ただテレビの前で座って、その光景を眺めるしかできないことが申し訳なかった。お腹が大きかったし、小さな兄もいたから、ボランティアにも行けない。何もできない自分の無力さが辛かった。

阪神・淡路大震災のときにこのような経験をしたからこそ、どこかで災害があったら、募金をしたり、被災地の特産物を買ったり、被災地に行けなくても、何か自分にできることはないかと考えて実行することができていると思う。

阪神・淡路大震災が起こってから、防災意識が高くなった。また、遠い出来事だったことが身近に感じられるようになった。神戸にも地震は来るのだと。震災当時、神戸には地震が来ないと言われていたから、何も準備していなかった。震災が起こってから数年は、非常持ち出し袋の準備をしっかりしていたけれど、月日が経つと慣れがでてきて最近では準備ができていない。時間がたって、備えに甘い部分が出てきた。怖い思いをしたからといっても、忘れてしまう。慣れがでてきてピリッとしなくなったことが自分でも気になるし、駄目だと思う。最近また、次の地震に備えて、避難のことを考えるようになった。自分だけじゃなくて、家族の避難も考えるようになったかな。お母さんの様に、怖い経験をしていても、忘れてきている人もいる。しかし、忘れてはいけない。震災を知らない子どもたちに、ショッキングかもしれないけれど、語り部さんのお話しを聞いたり、地震の映像を見る機会を与えて欲しい。

（２）20 年たって

被害にあった人にとってはとても長い 20 年だったと思う。けれどあまり被災していない自分にとったら普通の 20 年だった。でも気持ち的には早かった気がする。被害の大きさなどで温度差があるように思う。背負っているものが違うからかな。そうなると、復興への意識も全然違う。神戸に住んでいるから、「阪神・淡路大震災の被災地で大変やったね。」と言われるけれど、自分はほとんど被害を受けていないから何とも言えない。言われるたびに、同じ被災地と言っていいのかと心が苦しくなる。20 年たった今でも考えさせられる。

８　感想

（１）母の話を聞いて

小学生くらいのときに、母から阪神・淡路大震災の話を初めて聞いた。その時から、あまり震災のことについて聞いてこなかった。だから今回このような機会があって、詳しく母から震災体験を聞くことができてよかった。聞いた話は、知らないことばかりで、環境防災科で勉強する前から話を聞いておくべきだと思った。なぜこれまで聞けなかったのかと言うと、話を聞くことで母に辛い経験を思い出させてしまって、悲しくなってしまうのではないかと不安だったからである。しかし、逆に聞くことで母の辛い気持ちを少しでも和らげてあげられたのではないかとも思った。環境防災科で勉強

した上で母の震災体験を聞いて、良かったと思う。なにも知識のないまま聞いたら、「大変だっただろう」とか「お風呂入れないのはいやだな」とかそんなことしか考えなかったのではないかと思った。そんな状態で経験した話を聞くことは失礼だと思った。伝えていってほしいから話してくれているのに、聞かせてもらう側が、知識のないままではいけないので、これからもっと知識をつけていきたい。そして母の話から、その教訓をこれからの災害にどう活かしていくのか、家族と一緒に話す機会を普段からつくっていこうと思う。今回は母の話を聞かせてもらったので、母だけでなく、父の話や親戚の話など色々な人の経験した話を聞き、当時の教訓と私が学んだことを伝えてこれからの災害に、皆で備えていきたい。そして、自分の命だけではなく、自分たちの大切な人の命まで守れるようになってほしい。

また、私が環境防災科に入学して、母が前よりも防災や災害について考え、そして私と災害について話すようになった。お店に行って防災グッズを見たり、「ここの土地は海抜何メートルなのだろう。」など、今までは話してこなかったことを話すようにもなった。少しずつだけれど、母を含む家族が防災に興味を持ってきてくれているように思う。そのことがとても嬉しい。これから未来の災害に備えて、家族でもっと考えていきたい。そして、悲しい思いをする人がいないように、大切な家族を守るために自分に何ができるのか、考えていきたい。

また、母の話を聞いて普段からの地域の人とのかかわりは本当に大切なのだと改めて思った。

小さいころから「挨拶は絶対にしなさい。」と言われてきた。挨拶を交わすだけで地域の人たちと仲良くなることができ、挨拶を交わすだけでなく色々な話をすることもできるようになった。地域の人たちとのかかわりを強くするにはまずは「挨拶すること」が私は大切だと思った。だからこれからどこに行っても挨拶を大切にし、また自分の子どもにも挨拶の大切さを伝えていきたい。そして、いざという時は助け合える地域にしていきたい。

（２）私にできること

ボランティアをしているときに、「阪神・淡路大震災を経験していないお前たちに何が伝えられるんや。」
と何度か言われたことがある。初めは「私は伝える側になったらだめなのかな。」と思ってしまった。

言った人のその言葉は間違っていないと思う。確かに阪神・淡路大震災が起こったとき、私は生まれていなかったし、母のお腹の中にもいなかった。経験した人にしかわからない、辛さや悲しみはあるし、経験した人しか伝えられないこともある。しかし、経験していないからと言って話を聞かず伝えていかなかったら、風化していってしまう。辛い思いをしたことをまた繰り返してしまうかもしれない。２度と同じことを繰り返さないためにも、伝えていくことは大切である。話してくれた思いを無駄にしないように、もっと知識をつけて正しく阪神・淡路大震災について伝えていきたい。そして、母がつらい思いをしながら話してくれた震災体験を、私だけでとどめずに、震災を知らない子どもたちや将来自分の子どもができたらその子にも伝えていきたいと思う。そしてその子が自分の子どもたちにも伝えていって、未来の子どもたちが自分で自分の命を守り、また自分達の命は自分達で守れるようになっていってほしい。未来に阪神・淡路大震災を伝えることが、神戸に生まれ育った私の使命だと思う。

（３）将来の夢

私の将来の夢は、警察官になることだ。小さい頃からとても強い憧れを持っていた。中学３年生のときに環境防災科の存在を知った。それほど年の離れていない高校生の人たちが、街頭で募金活動をしていたり、災害のあった被災地に行って活動をしている姿を見て、「私もこんな風に人の役にたったり、助けになりたい。」と思った。無事に環境防災科に入学することができ、したかったボランティアにもたくさん参加することができた。その中でも、小さい子どもから、高齢者の方々までたくさんの人と関わることができる、地域のボランティアに参加することが何より楽しかった。人とふれあうことができたり、たくさんコミュニケーションをとることができたり、地域の方々の温かさや優しさに身近に触れることができるからだ。もともと人が好きだったので、人を身近に感じ、人に寄り添うことができる仕事がしたいと思った。また、ボランティアを通して、夢への気持ちがより強くなった。人を身近に感じたり、人と寄り添うことができる仕事は、警察官ではなくても、介護の仕事だ

ったり看護師だったり、他にもたくさんあると思う。しかし、なぜ警察官なのかというと、困っている人や助けを求めている人のもとに私がすぐに駆けつけて助けたいからである。また、私が警察官になることができたら、警察官に防災教育をしたいと思う。私たちの様に高校生の時から防災を専門的に学んで、警察官になっている人はほとんどいないと思う。興味がなければ、災害について勉強することはないだろう。しかし、災害が起きた際、警察官が災害のことを知らないまま現場に出ると、助けられる命も助けられなくなってしまうかもしれない。

人の命を助けるためには、まずは自分の命を守ることが必要である。だから、過去の災害からの教訓、

防災について知るなど警察官のために防災教育をして、防災を広めるだけでなく、地域の人たちの命をたくさん救ってほしい。また、犯罪が起こらないように行っているパトロールの時に、災害時に危険な場所がないか、避難経路はどこにあるかなども見る必要があると思う。パトロールをしている警察官たちだからこそ、知ることがあると思う。その情報を警察官だけが知っていても仕方がないので、地域新聞を作ったり、小学生と一緒にまちを歩く機会を作ったりして広めていったらいいと思う。子どもが知ることで、親に話してくれるので、より広く伝わることができると思う。

私自身、まだまだ「未知」の部分が多いのでこれからもっと災害について学んで、警察官になったときに、犯罪にも災害にも強い地域を創っていきたい。そして、どんな形でもこれからもずっと防災に関わっていきたいと思う。

語り継ぐ

井上　拓磨

１　はじめに

阪神・淡路大震災が起こってから 20 年がたった。

阪神・淡路大震災は 1995 年 1 月 17 日に起こり神戸を中心とし大きな被害を与えた。被害の状況は建物の倒壊、火事などと様々で町だけではなく多くの人の心に大きな傷を残した。

当時自分は生まれていなかったため当時の状況は聞いたものや映像で見たものしか知らない。だけど体験をしていない自分達でも忘れてはいけないし、当時のことを風化させず語り継いでいきたいと思う。

今回は父の体験を中心に書いていく。

２　１月 17 日

震災が起こった５時 46 分、父は会社の寮にいた。地震の揺れが収まってから父は仕事場の工場に向かった。工場に着くとひどい状況が広がっていた。父の工場は海沿いの人工島の上に位置している。中でも父の仕事場は海の前に位置していた。台風などのせいで波が高くなると普通に水が入ってきそうなところだ。他にも人工島の上にはたくさんの工場が密集していて、昔から今に至るまで工業が盛んな地帯である。震災が起きたとき人工島であることから敷地の大半で液状化現象が起こって地面は水浸しになっていた。液状化や激しい揺れのせいで地面はひび割れていたり、でこぼこになって隆起している部分もあった。父の工場の中もそのような状態になっていた。震災は地面を揺らして建物に衝撃を与えるだけでなく、ライフラインにも大きな影響を及ぼしていた。父の工場では電気が止まってしまった。そのせいで機械を動かすことができず、仕事がまともにできる状態ではなかった。父の仕事はガラスを加工して瓶を作ったりするものなので、なおさらだった。ライフラインがダメになってしまったために生活の中でも電気、水、ガスをまともに使うことができず、生活には本当に困ったし、普段の生活がどれほどいいものなのか思い知ったと言っていた。

３　その後

父は震災に関する情報をかなり聞いたりしたようだ。テレビが使えないうちはラジオなどを使って情報を集めた。連日神戸の上空では報道のヘリが飛んでいて、放送の中では震災が神戸に与えた影響や死者とけが人の数などが流れていた。震災から少しして、ライフラインの復旧がすすみ、中でも電気が一番早かった。電気が通るようになり、父はテレビを見ていた。そこに映っていたのは衝撃的なものばかりだった。ラジオでもどこがひどい状況であるかは分かっていたけれど、映像で見ると自分の知っている街並みや様子ではないと感じた。その中でも特に長田の大火事と高速道路が倒れていたことには驚いたという。大火事の映像は町全体が燃えて火の海になっていて、まるで戦時中のようだったと言っていた。高速道路は父も通ったことがあった所なので町が壊れていっていると思っていた。このようにして自分の知っている場所がボロボロになっていてすごく信じがたかった。後に電気の復旧と共に父の仕事場にも電気が入るようになり仕事が再開されるようになった。幸いなことに工場に働く人の中で亡くなった人はいなかった。

震災から少しして父は自分の住んでいる近くを見て回った。父の周りは長田などのような大きな被害は出ていなかったが、やはり少し町の雰囲気や様子が変わっていたようだ。ライフラインなど生活の基本となる物は復旧が進んでいたが、建物が少し壊れていたり、お店が開いてなかったりと小さなことだけど震災のせいで生活に影響を受けた人がいると感じて、震災の規模の大きさを改めて感じたそうだ。

４　震災の現場から少し離れた場所では

父の体験のほかにも祖母や母の話を少し聞いた。

祖母や母は当時姫路のほうに住んでいて、そこまで大きな被害を受けることはなかった。だが、震災が起こったときは凄まじいゴーッという音とともに突き上げられるような揺れを感じ、何が起こったかも分からず動けなかった。それから揺れが収まってキッチンやリビングに行くと、父の体験と同じようにお皿が飛び散っていたり物が倒れていたりとしていたそうだ。規模の大きな震災は震源から離れていても被害を及ぼすので本当に怖いと言っていた。祖母は当時父が神戸のほうにいたのでとても心配だったとも言っていた。

祖母は心配だったので地震が発生して少ししてから父に電話をかけた。電話を何度もかけたが全国から電話が集中していたせいか輻輳という現象が起こってしまい、父に電話がつながることはその時なかった。その他にも交通網は神戸のほうに向かおうとしても、電車や高速道路はなかなか利用できなかったりして、震災は生活に様々な影響を及ぼしてくると言っていた。けれど阪神・淡路大震災から地震などの災害は決して他人事ではないと気づいて、次の災害に対する備えが大切だと感じられたから震災から学ぶこともあって、決してマイナスなことばかりではなかったと話してくれた。

５　感想

（１）父、母、祖母の話を聞いて

普段僕はそこまで父とは話すことはないが、父の話を聞くのは今回が初めてではなかった。初めてではなかったがすごく新鮮な気持ちで話を聞くことができた。それは自分自身が震災に対してある程度の知識と考えができてきているからだと思う。父のような身近な人の話を聞いてみるのも授業ではない視点を知ることもできるので、聞いてよかったと思った。父の話の中で印象的だったのが町の様子のことだった。町の色んな場所が震災前とは違っていたりしていて、今自分が住む周りの様子が変わっていけば違和感しかないだろうなと思ったからだ。いつ来るか分からない自然災害に対応するためにも、普段からの備えをしっかりしていこうと思う。それに加えて自分が周りを守れるようになりたいと感じた。

父の話から日頃の備えも大事だと感じたが、もしも自分の住んでいる場所ではなく自分の身近な人が災害の被害にあったときどうしたらいいか考えた。すぐに助けに行こうと思うが連絡もつかなければ何をしてあげたらいいかもわからないし、こちら側の不安は高まっていくだろうと思う。そうならないためにも日頃から親戚など身内で災害時はどこに避難しているかなどを話していけたらいいなと思う。連絡がつかなくても所在地さえ分かればそこへ行って行動を起こせるからだ。

（２）環境防災科

阪神・淡路大震災のことは小さい頃にも聞いたことはあったが、その頃の自分は震災に対してなんの関心もなく自分が生まれる前に大きな地震があったんだなとしか思っていなかった。

小学校や中学校でも１月 17 日が近付くと授業が普通の授業ではなく震災に関する話を聞いたり、しあわせ運べるようにを歌うことが毎年あった。その中でずっと言われていたのが命を大事にして欲しいということだったが、周りの人が災害によって命をおとすということは考えられなかったし、防災のことを考えることもなかった。そのため震災についてはほとんど知ろうともしなかったし、深く考えたこともなかった。それでも環境防災科に入った大きな理由は東日本大震災だ。その時の僕は中学生で、幼い頃と違って自分の住む日本の中で大変なことが起こっていると分かったし、自分にはなにかできることはないのかと思った。そんなことを思い進路を選ぶ中で阪神・淡路大震災の教訓を活かすために勉強をする環境防災科と出会った。

環境防災科に入って今までの考えはすべてとも言っていいほど変わった。実際に震災で家族をなくした人、救助活動に参加した人など様々な視点の人の話を聞いたり、文書を読んだりしたからだ。どの話も内容が重たくてつらいと思うこともあったが、どの人も聞いている僕たちのためにと熱心に話してくれていた。本当は思い出したくもないようなこともあるかもしれないのに語ってくれる人たちを見ていると、自分たちは体験したことがなくても決して他人事ではないなと思った。その話を自分の中だけで留めておくのも勿体ないとも思ったし、周りに伝えていくこともしていくべきと思った。そうしていくことでかつての自分のように震災や防災に対して関心のない人たちにも知ってもらうことができるし、語ってくれた人の気持ちを汲み取ることができてくると思うからだ。他にも阪神・淡路など災害の規模や災害を大きくしてしまった社会の背景などの知識を学ぶこともできた。

そのように環境防災科の中で色んな経験や学習をして人間的にも成長することができたと思う。

（３）これからの自分

僕はここまで環境防災科で学んできたことを、周りに活かせることができるようになろうと思う。

先の環境防災科について書いたことにもあったが、周りに活かすために発信していくことを自分がしていくべきだと思っている。その手段というのは学校にいれば環境防災科ということもあって、ボランティアなどのさまざまなチャンスを与えてもらうことがある。しかし、卒業後はそんなに今のように声をかけてもらえる訳ではないし、どう防災に携わることができるか難しいのではないかと思う。

そこで、自分は大きなことは一人ではできないから小さいことからやっていけばいいんじゃないかと考えた。まずは自分の家族に自分の勉強したことや、避難の時の行動や持ちだす物、備えなどを話していく。そこから親も色んな人と話す機会があると思うから色んな人に伝えていってもらうことができれば防災が段々広がっていくと思う。そうしていけば地域の避難訓練、防災訓練に参加する人も少しは増えると思うし、自分もその場に入って小さなことから伝えていきたい。

合わせて自分には体育の教師になるという夢がある。その夢を叶えていくことは難しいけれど、勉強などの努力をして少しでもその夢に近づけるようになっていきたいと思う。教師になるということは今と違って、伝えられる側から伝える側になっていく。自分はスポーツが好きで、スポーツに携わり続けたいから体育教師を夢にしている。体育教師では体育の授業がメインになってくるが、防災教育という時間があれば自分が率先していこうと思う。生徒に震災の時に実際あった話や上でも挙げたように普段からの備えを伝えていき関心をもってもらうようにしていきたい。その中でも一番自分が大事にして伝えていきたいと思うことは命の大切さだ。命を大切にするということが根底にないと防災をしていくことはできないと僕は思うからだ。だけど、そこを理解してもらうことは個人差があると思うし、難しくなってくる。だから自分は教材を作って終わりではなく、実際に話をしていこうと思っている。そのほうが生徒にも伝わりやすいからだ。

もしも上で挙げたように近くに防災を伝えるという場や教師になるということが将来なかったとしても、自分は防災を伝えるためにできることをしたいと思う。その考えの中で出てきたのがＳＮＳで防災などの情報を発信していくということだ。近年、大人だけではなく中学、高校生などの若い世代も携帯などを使ってインターネットやＳＮＳを利用している。さらにスマートフォンを所持している人たちの利用時間は自分もそうだがとても長くて、様々な情報をニュースや新聞ではなくスマートフォンから手に入れていると言っても過言ではない。だから僕はそこを利用するべきだと思った。ツイッターやフェイスブックなどメジャーとなっているＳＮＳの利用者は世界を通じて増えている。だから、そこで防災に関する情報を発信するアカウントを作り、非常持ち出し袋を備えることや家具の固定などの備えを推奨していけるようになりたい。その他も正確な災害の情報や時事問題なども発信していこうと思う。しかし、この伝え方では携帯などを通じてインターネットとＳＮＳを利用できる人にしか伝えることができないため、大半の高齢者や障害者には情報を伝えることがこの方法では難しいし、自分の中でもこれ以上の伝え方がまだ分からない。年を重ねていく中で伝え方、情報の発信の仕方の考えを深めていこうと思う。

（４）南海地震に向けて

阪神淡路大震災から 20 年が過ぎたがまた新たな南海トラフの地震の話題がよく上がっている。それは大体 100 年から 150 年の周期で起こる大地震で、日本の長い歴史の中でも南海地震は大きな被害をもたらし非常に危険視されている。南海地震というのは単発ではなく連動して東海地震、東南海地震を引き起こす。特に近い将来のうちに来ると予想されている南海地震は前回起こった昭和南海地震の規模が過去に比べて比較的小さかったため、規模が大きくて三つの地震が重なって起こるとも言われている。そのためハード面の強化だけではこの地震は乗り切れないと思う。日本の人みんなが、ハザードマップなどを見て普段から避難経路と場所を確認していてほしいと思う。その他にも高齢者や障害者などの災害弱者を誰がどのように助けるのか、逃げ切った後の行動を考えていってほしい。それが過去の災害から学ぶということだと思うからだ。それでも防災に対して関心のある人は少ないと僕は思う。自分のところにはこないかもなどと他人事と思っている人がまだまだいる。そんな人にも地震などに対する防災、備えの大切さを伝えることが出来るように上で挙げてきたＳＮＳでの発信な

どを実践していこうと思う。
　もしも将来に南海地震が起こった時、被災した人だけでは復興に向かうことは困難だから災害ボランティアが活躍していくことが大切だ。けれど、ボランティアの人が向かうことで迷惑になることがある。
それは自分のことを自分でできない人だ。そういう人たちが向かうことによって力作業では活躍できるが、夜に避難所の寝床のスペースをもらったり、食料を分けてもらったりしていると、元々避難所で過ごしている人達に迷惑をかけてしまう。そうならないためにも自分で食料やテントなどと自分の生活ができる最低限のものを集めてからいくべきだ。だから自分が周りにそういうことを教えていかないといけないと思う。力作業ができない人でも心のサポートをしたい人たちも行ってもいいと思う。心のサポートと言われても難しく考えるのではなく、子どもの相手をすることが好きな人や人と話をすることが好きな人が集まっていけばいいボランティアになる。なぜなら、被災地の人たちはストレスや不安を抱えていて、発散できないという人がたくさんいる。そういう人たちの話や愚痴を聞くことでその人は一人じゃないと思えるし、話題を話し手と聞き手が共有していくことでストレスも発散されていくと思う。子どもに対しては遊んであげることで、避難所という窮屈な環境で過ごすストレスを解消できると思う。その中で子どもは津波ごっこや地震ごっこなどのごっこ遊びをする子もいる。震災のことを忘れることができずにいるからだ。そういう子どもたちを相手にする時は、難しいと思うがその子の目線に合わせて話してあげたりして共感してあげるべきだ。それを自分自身が被災地の人にできるようになっていくことが、今後の自分の課題だと思う。これを読んだ人が少しでもいいから、被災地の人を支えていきたいと思ってくれたらいいなと思う。

語り継ぐ

今井　啓輔

１　はじめに

神戸は阪神･淡路大震災が起こったことで多くの死者、ケガ人を出した。また建物も多く倒壊した。そのような大きな災害が起こった時僕はまだ生まれていなかった。だから阪神・淡路大震災は全く経験していない。だが自分が生まれ育った町で起こった災害で、環境防災科が出来たきっかけだから知っておくべきだと思った。そして未来まで伝えていかねばならない。同じことが繰り返されないよう未来の人たちが知識をしっかりと蓄え、それをまた次の代につなげていってもらえるように自分たちがもっと知識を付ける必要があると感じた。

２　父の体験

（１）震災の直前

父は神戸市西区の二世帯住宅に妻と両親と妹と一緒に住んでいた。その頃は地震に対する警戒心や防災意識は全くなかった。地震が来る直前は何の変化もなく過ごしていた。まさか巨大地震が来るとはだれも想像できなかった。警戒心がゼロのまま起こった地震だったので、被害も大きくなった。

（２）地震直後

地震直後父は長野県にいた。当日の朝６時のニュースで震災のことと神戸の状況を知り、12 時間かけて帰宅した。家族の安否を確認するために電話を掛けたがなかなかつながらず、何度もかけた結果１時間後に携帯につながり安否が確認でき家族全員が無事だとわかった。

父は幸い県外だったので車のラジオから情報が得られた。そして、恵那サービスエリアでテレビを見たとき神戸の惨状に言葉がでなかったそうだ。テレビで神戸を見てとにかく帰宅を急いだが、彦根から大渋滞になり伊丹の友達の家でバイクを借りて地道を走り、西宮から２号線を通ったが街灯りは全く無く、車のライトと火災の灯りで街の惨状を目の当たりにした。道は所々陥没や地割れ、建物の倒壊などで全く思うように進めず大変だった。見慣れた風景や街並みから想像もできない程の状況で、まるで違う世界に迷い込んだような感覚を今でも覚えている。パニックと混乱でとにかく自宅に辿り着くことが最重要になっていた。

（３）震災から少したって

兼業農家だったので野菜や手作り味噌などがあったのと、井戸もあったので食料については慌てずに済んだ。

買い物は少量の食品が買えるほどだった。鉄道は動いておらず道路の渋滞もひどかった。農作物の出荷などはできない状態だった。

地域の周辺の状況を知る必要があったため、住宅の倒壊や怪我人の状態、食品の手配の状態を聞いていった。父の住んでいた場所にあまり大きな影響はなかったので避難はしなかった。

（４）震災から数日後

とにかくライフラインが使えなかったので、発電機を使い調理をしていた。地震から数日たって少し落ち着いたと同時に今後の生活をどのようにしていくのかという不安が先行していた。

（５）地震が起こってから気を付けるようになったこと

父は地震をきっかけに食料の備蓄の大切さがわかったので、今は万が一地震が起こっても大丈夫なように食料の備蓄と防災グッズの用意をしている。

３　父の話を聞いて

僕は父の話を聞いて驚いた。なぜ驚いたかというと、阪神・淡路大震災が起こる前はほとんどの人が神戸に地震が来ることがないと思っていたからだ。ほとんどの人が地震に関する知識がなかったと分かった。

防災力が無ければ、どんな災害にも耐えることが出来なくなる。そして自らの命を守る手段も分からないので正しい行動が出来なくなる。正しい行動が出来なくなると周りの人も巻き込んでしまう可

能性がある。
阪神・淡路大震災の時は何をすればよいのかわからなかった人がたくさんいた。もしかしたら、たった一つの行動で助かる命があったかもしれない。例えば、地震が起こって消防が来るだろうと思い込んでしまい救助が遅れ、助からなかった命がある。そのようなことを思うと、防災を学ぶことはとても重要だということがよくわかる。
父の住んでいる場所はあまり地震の影響はなくとても恵まれていたと思う。一方避難所の生活の話はあまり聞いたことがないが、多くの人が集まり神経を張りつめた生活をし、ストレスがとてもあっただろうと感じた。当時は知られていなかった非常持ち出し袋なども今は多くの人に知られている。だが非常持ち出し袋を用意している家はとても少ないと思う。あれだけの大きな災害が起こったにもかかわらず用意していないのはまだ防災意識が低い証拠だと思う。だから防災意識が高くなるように防災の重要性を少しでも広めていけたらと思っている。
地震から復興した後に防災、減災はとても重要なことだと知った。地震が起こることはよくない事だが、この地震から学んだことは山ほどあると思う。その学んだことを生かしていかなければいけない。そして前と同じ失敗をしないようにすること、未来に伝えることが僕たちの使命だと思う。
「語り継ぐ」を書くために当時のことを語ってくれた父のように自分も子供が出来た時には語り継ぎたいと思う。

４　感想

（１）将来の夢と防災

僕の今の夢は消防士になることだ。理由の一つは、火事を消して活躍しているところや、東日本大震災で活躍しているところを見て素直に「かっこいい」と思い、自分も火事や事故の現場で人の命を守りたいと思ったからだ。二つ目は、この仕事は誰からも嫌がられることなく人から感謝されるのでとても充実感､達成感のある仕事だと思ったからだ｡消防士は体力的な面ではとても大変だと思うが、嫌な仕事ではないと思う。だが、交通事故などの現場で人が車の中で挟まっていたりするのを見るのは精神的にダメージが大きいと思うのでそこの点が少し大変だと思った。自分の精神的なダメージを少しでも和らげることができるよう、心のケアをもっと学ぶことが必要だと思った。
消防士の仕事としてもし助けられる可能性がある人を助けられなかった時、とても悔しい思いをすると思う。阪神・淡路大震災の時の消防士の話を聞いた時も、火事が目の前で起こっているのに水が一滴も出ず、消せなかったことなど、人命を助けることを仕事としてやっている消防士にとって目の前で何もできず、助けられなかったという状況は一番つらいことなのではないかと思った。
僕は防災活動や予防活動などで防災と関わっていくと思う。消防の消火活動や、救助活動は災害や事故が起こった後にするものなので、防災や予防と関係のないことをしているように見えるが、防災活動や予防活動をすることも重要なので、関わりはある。防災活動では、万一の事態に備えて、地域住民の防災に対する意識を高めると同時に、基本的な行動や避難路を知ってもらうため、町内会・自治会を中心に、消火器や起震車などを活用して初期消火、身体防護、救出・救護等の訓練・指導を行う。また、小学校で防災訓練をすることもある。予防活動では、建物の防火上の安全性や消防用設備等の設置について、現場の実状を厳格に審査・検査し、その結果に基づく指導を行う。関わりがあることで今知らない知識もこの仕事をやっていく中で覚えていくと思う。そこで覚えたことを友人や家族に教えて、次に来ると言われている南海トラフ巨大地震に備えてほしいと思っている。

（２）環境防災科に入った理由

僕が環境防災科に入った理由は、将来の夢が消防士なので防災の知識をつけておきたいと思ったからだ。消防士になる前から学ぶことで、どこかで役に立つと思ったからだ。なぜ将来の夢が消防士かというと、東日本大震災の時ニュースで消防士の人たちが人命救助をしていたのを見て自分も救助活動をして人を助けたいと思ったからだ。
環境防災科では、消防署に行って消防体験もできるので、消防士は普段どのような訓練をしているのか知れると思い、入ろうと思った。また外部講師として消防士の方が来てくださり、様々な話が聞けるし、そのほかにも普通では聞けないような人たちの話などが聞けるのでとても良いなと思ったからだ。その聞いた話を自分の知識として吸収し、生涯に生かしていきたいと思う。そして、知識を自

分だけで留めないで家族、友人などに伝えていきたい。

（３）東日本大震災

東日本大震災が起こった日、僕は家族で三宮に行っていた。すると、東北で地震が起こったことがラジオから聞こえてきた。大きい地震と聞き気になったので、電気屋さんに行きテレビを見てみると巨大な津波が町を襲っている光景を見た。その時、日本ではなく外国で起こっているのではと疑った。日本で起こっていると知った時、自然の恐怖を知った。津波が黒かったのでより恐ろしく思えた。家や車などが簡単に流れているのを見て、みんな逃げているのかと心配になった。

津波での死者が多かったらしく、地震が起こった日から時間経つにつれて数字がどんどん上がっていくのを見てこれ以上は上がってほしくないと思った。ニュースで違うことも流してほしいと思ったが、地震のことしか報道されていなくて地震によって日本の経済が大きく影響を受けたことがわかった。

東日本大震災で一番印象に残ったことは、福島の原子力発電所での爆発だった。この事故が起こるまでは原子力発電なんて全く興味がなかったし、放射能という物がどんなものかも知らなかった。だが、ニュースなどを聞いて人体に悪影響を及ぼし、癌や白血病になってしまうと知って驚いた。放射能は臭いもなく色もついていないので自分に危機が迫っていることがわからないので津波や地震よりも恐ろしいものだと思った。このまま日本は汚染されていってしまうと思った。今も放射能が漏れだしているというニュースが流れているので不安はずっと消えないと思った。

これからまだまだ復興に時間がかかるので支援は続けていくべきだと思う。そのためにはこの災害を忘れないようにすることが大切だと感じた。

５　これからの災害

東日本大震災では２時 46 分の直前、NHK が国会中継のさなか緊急地震速報を発表した。そのときはマグニチュード 7.2 の地震として報道された。震度５以上の地域として、宮城、岩手、福島、秋田、山形と発表された。しかし実際はマグニチュード 9.0、都内でも震度５強の強さで揺れた。

なぜこのような結果になったかというと、地震警報の検知というのは震源地から発せられるマイクロ波を感知して後から来る地震の大きさなどを推測する。それが第一報として発表される。東日本大震災では宮城県沖の震源が割れた後、南北に 500km、岩手から茨城まで秒速２km で割れ続けた。よって、地震の揺れは長くなり、地震の規模も最初マイクロ波を感知してから徐々に大きくなっていった。

津波速報も同様に、津波の大きさは非常に複雑な計算が必要になっている。正確な値をはじき出そうとするとスーパーコンピューターでも１時間半以上時間が必要になる。地震後に１時間半もかかっていては遅いため、気象庁ではあらかじめ想定される地震を元に 10 万通りほど計算をしておく。その計算を元に震源と規模が一番近いものを発表することになっている。ただし、事前の想定は、岩手県沖、宮城県沖、福島県沖など７つのブロックにわかれた状態だった。南北に 500km も走る巨大地震は想定していなかった。そのため、最初に出た津波の予想高さは、岩手県で３メートル、宮城県で６メートル、福島県で３メートルといったものだった。実際は 10m を超える津波が各地に到達した。

このように、最初に発表される速報は小さくされる傾向がある。そのことを念頭において、避難の準備などを急ぐことが必要だ。予想はあくまでも予想なので、それ以上が来ることを想定して避難することが重要になる。

「阪神・淡路大震災と東日本大震災から学ぶ 3 つの教訓」によると、阪神・淡路大震災では死因のほとんどが建物の倒壊によるものだった。主に、窒息死、圧死、ショック死、打撲によるもので死因の 83%を占める。木造建築における出火が原因で焼死・やけどによる死亡は 12%、死亡原因の 95%が古い木造建築の倒壊によるものである。

昭和 56 年に新耐震基準という耐震基準が施行された。阪神・淡路大震災では昭和 56 年以前の建物に関しての倒壊が目立った。一方、新耐震基準を守っていた昭和 57 年以降の建物については倒壊したものが 10%を切るなど、耐震の効果を発揮した。

家が倒れるから人が亡くなり、家が倒れるから火災が起きるので、家の耐久性、耐震性が必要だ。家が倒れて、火災で人が亡くなるということが多かった。つまり、家が倒れないようにすれば、亡くなる方を減らすことができる。古い家屋は耐震補強工事をすることによって倒壊のリスクを軽減する

ことができる。耐震補強工事は建物にもよるが、一般的には、おおよそ 100 万円程度と言われている。自治体によっては半額補助してもらえるところもある。家族の命を守る出費として 100 万円という金額は安いと思うので生活に少しでも余裕がある人は是非してほしいと思う。そして、災害が起こった後では遅いので、早めにしてほしい。

震災経験者の中で防災のために特に何も取り組んでいない人は約 10%となっており、震災経験者の防災意識が高いことがわかった。また、具体的に取り組んでいるのは「防災情報の収集準備」である。震災で被災した際に、防災情報の収集で苦労したことがあったからである。さらに、震災経験者が被災初日に最も困った事は、「家族、知人の安否情報の確認」だった。被災すると情報の収集が最も困難となる事が阪神・淡路大震災でわかった。被災 2 日目以降で困る事は「食事」と「飲料水」となっていて、３日分の食糧を備蓄していた方がよい。

震災非経験者は、家族間の安否の確認方法を決めている割合が、震災経験者の半分以下となっている。そのため、実際に震災が発生した場合、安否の確認が困難になることが予想される。
震災経験者に比べ、震災非経験者が防災のために準備をしている割合は低い。その理由としては、直接的な被災経験がないため、災害の危険性がわからず、日頃の防災に対する意識が低くなっている。さらに、家族によるものや個人的に避難訓練を行った経験がない人が大半で、実際の災害を想定した事前の準備は、震災経験者であってもできていない現状がある。そのことから、震災経験者、震災非経験者問わず、防災訓練に参加することが求められている。また、防災準備の中で、災害に関する様々な情報を知る事ができる防災アプリがある。これを準備しておくと、災害時に非常に便利になる。大規模な災害が起きた場合、被災した当事者は災害の情報がないと自分がどんな災害に巻き込まれたのか分からず、どのような行動をとれば良いのか判断できない状況に陥る。その状況を回避するためにも災害の情報を素早く入手できるツールをあらかじめ準備しておく事が非常に重要だ。

大規模災害時には「自助」、「共助」、「公助」の三助が大切だ。「自助」とは災害時には自分の身を自分で守る事、「共助」とは皆で助け合う事、「公助」とは行政などによる救助活動や支援物資の提供などの公的支援の事を指す。しかし近年、大規模災害発生直後は「公助」が機能しないケースもあった。そのため「自助・共助」が重要になる。「公助」が機能しない場合、災害の情報が提供されないケースも想定されるため、自ら情報を収集し身を守る判断をする「自助」ができる準備をしておく事が重要だ。災害時に「自助」が出来て手が余っている場合は「共助」を進んで行ってほしい。

６　まとめ

今回、「語り継ぐ」を書いて感じたことは、阪神・淡路大震災がきっかけで多くの人の防災に関する意識が変わったということだ。

神戸の街は地震の前と比べても良い街になったと思う。このことを思うと、災害で壊れた街は復興すると前よりよくなることがわかるので、災害とは社会の変化を起こし、新たな状況をもたらす現象と言える。

これまでに学んだことや、これから学ぶ防災、減災の知識を家族や友人に伝えていき、みんなが身を守るすべを身につけて欲しいと思った。南海トラフの地震も起きると予想されているので、今からの準備が必要不可欠になる。

語り継ぐ

大熊　莉果

１　はじめに

阪神・淡路大震災発生時、私はまだ生まれていなかったため自分の被災体験を語り継ぐことはできない。実際被災体験をした父の話を語り継ごうと思う。

２　震災直後の様子

（１）午前５時 46 分

震災当時、西宮に住んでいた。家族全員が寝ていた木造住宅は屋根が７割落ちてしまい、階段はすべて潰れ、食器棚は壊れ、床はガラスだらけだった。部屋で寝ていた自分は、何かの悪い夢だと思い、揺れが収まった後もしばらくは目をつぶっていたが、もう子供ではない妹が泣き出したとき、これは大きな地震だとわかった。いそいで家族の安否確認をした。屋根が落ちて、空が見えてしまっているのに、幸い家族全員が１つの怪我もなく無事だった。

（２）近所

家の中にいては危険だ、と家族全員で家の外に出た。今から余震が来るだろうから車の中に避難した。外は寒かったため、エンジンをつけ、暖房が入った車の中にいた。すると、隣の家の小さな女の子が１人で泣いていた。仲良くしていた子だから、一緒に車の中に入れてあげた。隣の家も家が全壊していて、その子の親は、家の中にある貴重なものを探していたそうだ。向かいの家も全壊しており、しばらくすると「おじいちゃんが！おじいちゃんが！」と叫びながら、おばあさんが出てきた。兄を連れて、急いで向かいの家に入り、おじいちゃんを探した。腰が抜けてしまって、立てなかったそうだ。怪我がなかったため、一安心した。大きいものが落ち、通ることのできない場所を近所の人と協力してものを動かし、無事、避難することができた。

（３）もっと広い範囲で

なぜかテレビだけは電源が付き、屋根なしの家で震災後初めてテレビを見た。自分の住んでいるところは木造住宅が多かったから、こんなに被害も大きかったのかな、と家族で話しながらテレビを見ていた。すると高速道路が根こそぎに倒れているところが映し出された。家族全員が唖然とし、急に今何が兵庫県で起きているのか、わからなくなってしまった。自分はここにいて、こんなのんびりとしていていいのだろうか、友達は無事なのだろうか、これからどう生活すればいいのだろうかと、急に焦り出した。

（４）住む場所探し

ちょうど妹が結婚前で、住む場所を探しているときだった。妹は急いでお世話になっていた不動産屋に行き、住む場所を確保しようと走った。でも、帰ってきた妹は「不動産屋がなかった」といった。

「そうだ。この地震はただ事ではないんだ。住める場所もない。おなかがすいても食べるものを買いに行くスーパーもつぶれているんだ。」

（５）見たことのない表情

いつも通りの生活をしたくても、今の状況はふつうではない。周りの家はほとんどが全壊していて、空もいつもより暗い灰色だ。ここからは何もわからないが、もしかすると家に押しつぶされて死んでいる人もいるかもしれない。このまま自分たちは死んでしまうのではないか。と暗い気持ちになった。誰も暗い気持ちになっていることを声には出さなかったが、家族全員、表情に暗い気持ちが出ていた。

焦りと恐怖。混乱。今まで見たことのないような不安な様子が分かった。

３　母の判断

（１）外の景色

「とりあえず、落ち着こう。」母が言った。時々来る余震に、恐怖を感じながらも自分たちはその

言葉で冷静になることができた。
「こんな木造住宅の家だらけなのだから、全壊しているところは多いだろう。」避難所がもう人でいっぱいになっていると予想し、避難所にはいかなかった。
「とりあえず妹のところに行こう」安否もわからない母の妹のところに行こうと言い出した母も、表面上では落ち着いた様子だったが、内心は、妹のことが気になって仕方なかったのだろう。今考えると、もしここで妹が最悪な状況だったら、母は今以上に落ち着かず、何も判断できなかっただろうなと思った。車で 30 分くらいの距離にある母の妹の家。私たちは早速車に乗り、その家に向かおうと出発した。
予想通り、自分たちと同じような木造住宅は全壊していた。家だけでない。木は根こそぎに倒れていて、ガードレールは大きく曲がり、高い、頑丈そうな建物までも崩れてしまっていた。道路は盛り上がり、いつも通る場所も通れなかった。最近新しくコンクリートを塗りなおした道路にも砂埃がかぶさり、家が崩れて、その時に落ちてきた家の破片の木や瓦など、様々なものが、車で通る、私たちの障害となった。
時々泣いている人たちを車の中から見た。1 人で泣いている子どもや、お母さんを探しながら泣いている家族など。心がとても痛くなった。一緒に探してあげたいとも思った。それと同時に恐怖を感じ、車の中では目をつぶっていた。
「自分たち家族は無事でよかった。」家族の大切さを感じた。結局、母の妹の家には、３時間もかけて到着した。

（２）母の妹の家

母の妹はファミリーマートを経営していた。家の１階はファミリーマートで２階に住んでいた。奇跡的に母の妹の家は被害が出なかったため、ファミリーマートは食料を買いに来たお客さんで人がいっぱいだった。私たちがファミリーマートへ入ると、母の妹は嬉しそうに私たちのほうに駆けつけてきてくれた。
「私の家、全然被害でなかったから心配してたんよ。電話もつながらないし。無事でよかった。」と言い、２階のリビングに上がらせてくれた。
1 月 17 日の朝から今までいろいろなことがあり、気持ちがぐちゃぐちゃだった。私はそこからの記憶があまりない。精神的にも体力的にもとても疲れたので、ごはんを食べて、すぐ寝てしまいたかったが、なかなか寝付けず、不安な夜を過ごした。

４　これから

いつでも楽観的に物事を考えるけど、阪神・淡路大震災のことを思い出すと何も考えられなくなる。災害関連死というものがあるが、もし家族の誰かが地震で亡くなっていたら、私は自殺していたかもしれない。それほどあの出来事が恐ろしいことで、よくここまで神戸も復興できたなと思う。私は運が良くて身内の人は誰一人怪我もなく無事だった。でも精神的な心の傷は今も消えていない。震災を忘れてしまうのではなく、こういった何かの場で語り継いでいく。これはとても大切なことだと思う。
神戸は震災前よりもいいところになっていて、とても住みやすい。私は今の神戸、また震災前の神戸、震災直前の神戸。景色と状況、それに、いいところを忘れずに大切にしたい。
何よりも今は周りの人を大切にする。これから何が起きるかわからない。自分が挑戦したいことに挑戦し、今できることは今すぐにする。毎日を楽しく生きてほしい、ということを私は伝えたい。
震災は今後必ず起きる。防災、減災を取り入れた今の神戸のまちをもっとよくするために、私も何か協力できればいいなと思う。

５　感想

（１）震災の恐ろしさ

何よりも衝撃的だったのが、震災時の父の対応だ。いつもは笑顔が取り柄で、私が悩んでいたら大丈夫と言ってくれる、自分に不安や悩みがないように見える父。そんな父が自分を落ち着かせるので精一杯だというのは、考えることができなかった。精神的に耐えられなくなるというのは、実際経験

していない自分には想像がつかないが、父の実例を聞いたとき、震災で大切なものを失うという恐ろしさを改めて実感した。「こんな体験、二度と経験したくない。」父のこの言葉の重みを多くの人に伝えたいと思った。

（２）コミュニケーションの大切さ

木造住宅が多かった父の家の付近は全壊がほとんどだった。その時必要になったのはやはり近所づきあいだそうだ。

もし自分が倒壊した家に埋もれてしまったら、誰が助けてくれるだろうか。

家族も同じ状況になって、頼る人が近所の人だけになってしまったら。

「助けて」と声が出せたとしても声の主が誰だかわかるだろうか。

ここでもし、知っている人だったら助けてくれるかもしれないが、わからなかったら優先順位を考えて後回しになるだろう。この最悪な状況に陥ってしまった場合を考えると、近所の人とせめて挨拶程度の仲になる必要があると思った。また、近所だけでなく、もちろん家族も大切にする。震災で家族を失うということになったら後悔しか残らないと思う。ほかにも、震災で精神的なダメージを家族の誰かが持ってしまったら、それを少しでも解消できるのは、家族の人だと思う。その時になれば何かできるだろう、してほしいことを言ってくれるだろう、と相手まかせにしていては、実際何もできないと思う。

震災で不安や焦りでどうしようもない時は誰でも必ずある。それをサポートしていくという点でも、家族という存在は大きいと思う。今から家族を大切にし、コミュニケーションをとり、誰よりもよく、家族一人ひとりのことを知っておく。これくらいの気持ちで、家族を大切にする必要があると思う。この意識を多くの人に感じてもらいたい。

（３）語り継ぐということ

私はこの“語り継ぐ”を、多くの人に読んでもらいたい。そして多くの人に震災の恐ろしさを知ってほしい。震災の恐ろしさを知ってもらい多くの人が防災に興味を持ってほしい。経験していないから関係ないと思っている人は少なくないだろう。でも今の時代を生きている人には知ってほしいし、知るべきことだ。専門的に学ばなくてもいい。災害の知識、防災の取り組み、全部少しでもいいから世界中の人に知ってもらいたい。だから私は自分の持っている災害の知識、防災の取り組みを発表できる場があればそこで発表し知ってもらう。日頃の会話で防災についての話題が出たら、今自分たちがするべきことを自分の言葉で、自分の意見を言う。そうすることで多くの人が防災に興味がわくのではないかと思っている。

私から話を聞いた人が、聞いたままで終わらないように。初めは、「自分はこんな知識を知っている。だから早く誰かに言いたい。すごいと言ってほしい。」これでいいと思う。これがだんだん、多くの人に知ってもらいたい、もしもの時は自分の知識が役に立ったらいい、というふうに、実効性を持てるようになればいいと思う。

確かに大勢の前で自分の知識や取り組みを話すのは勇気がいる。もしかすると緊張して思っていたことが言えないかもしれない。だから少人数でいい。1 人に話したことが、次の人、その次の人と伝わったら、大勢の人に話したことと同じだ。語り継ぐことは、自分の気持ちが大切なだけで、語り継ぐこと自体は難しくない。

阪神・淡路大震災から約 20 年がたった今。これからの復興。自分の住んでいる場所をもっとよくするために、私たちが語り継ぐ必要がある。

（４）将来の夢

私の将来の夢は看護師だ。そして災害看護に関わりたいと思っている。環境防災科に入ろうと思った理由も、看護師として、被災した方の応急処置など、自分が何か災害時に手伝えることがあれば率先して取り組みたいと思ったからだ。

また、身体的なケアだけでなく、心のケアもしたい。高校生のうちは授業で心のケアを学ぶことができたけれど高校を卒業してしまったら専門的な心のケアを学ぶ機会はほとんどない。今まで学んだことにプラスして、私はこれから日頃の人付き合いで心のケアを学びたい。具体的には人とのコミュニケーションを今まで以上に多くとる。その際に人の目を見て話をする、これは当たり前のことだと思うが、人の目を見て話すということは相手の表情を見ることができる。そうすることで相手の気持

ちがわかるようになるかもしれない。気持ちがわかったら対応もしやすい。それは災害時でも同じだ。

私が心のケアをしたいと思うようになったのは東日本大震災発生直後のニュースで、小さな女の子がインタビューを受けている様子をテレビで見たときだった。その女の子は津波で両親を亡くして親戚の方と暮らしているそうだ。そんな辛い状況の中でも笑顔でインタビューを受けている様子に私は違和感があった。きっと心の中では悲しくて泣きそうになっているのだろう。それでも強い気持ちで頑張ろうとしている女の子を尊敬した。まだまだたくさんの人がそのような気持ちでいるのかと考えると、私が心のケアをしたい、一人でも多くの人が表面上だけの笑顔だけでなく、心から笑顔になれるようにしたい、そう強く思ったのがきっかけだった。

私は昔から笑顔だけが取り柄だ。人の話を聞くのも好きなので、優しい気持ちで、被災した方の話が聞けるのではないかと思う。この笑顔を利用して、心のケアをしたい。

もし看護師になることができて災害看護に関わることができたら、環境防災科で学んだ心のケアを活かして被災地では被災された方を励まして、少しでも精神的な要因による災害関連死を減らすことができたらといいなと思っている。今まで得てきた知識を活用し、多くの人を助けたい。

（５）これから

私は高校を卒業して、防災のことを専門的に学ぶ機会がなくなっても必ず、防災にかかわりたい、人を助けたいという気持ちを忘れない。一切防災に関わらない道に進んだとしても、ボランティア活動に参加して、機会は高校の時よりは少なくなるけれど、地域の活動にも参加したいし、もう一度東北を訪れて友達に会いたい。高校で学んだ専門的な知識や、貴重な被災体験など、私たちしか知らないことや、震災を経験していない私たちだからこそ言えることもある。私は、震災を経験していないからと言って何もできない、何もしないということが無いように、どんな人にも興味を持ってもらえるように防災を語り継ぐ。大人になっても防災に関する気持ちはそのままでありたい。

そして、今まで貴重な被災体験を語ってくれた多くの方々、防災、災害についてたくさんの知識や、学ぶ機会を作ってくれた方々に感謝したい。何も知識のなかった私だったけれど、ここまで成長できて、震災を経験していなくても語り継ぐことができる、語り継ぎたい、と思うようになったのは、全てその方たちのおかげだと思う。その方たちへの恩返しとして、私たちの世代の方、そしてもっと先の未来の世代に、語り継ぎたい。

これから今まで以上に辛いことがあると思うがどんな時でも周りの人と協力して助け合って生活したい。これは震災が起きても同じだ。自分が率先して避難し、周りの人と協力して復旧作業をする。その時には私ができることを最大限に活かしたい。例えば周りの人の話を聞いてあげる、少しでも元気づけることができると思う。表面上の笑顔だけでなく心から笑うことができるように、普段から思いやりの気持ちを大切にしたい。そのためにも周りの人のことをよく知りたい。また、多くの人に防災、減災の大切さを知ってほしい。そのためにも防災を専門的に勉強してきた私たちが動く必要がある。全く防災に興味がない人でも興味が湧くような企画を私たちがする必要がある。これを考えるのはとても難しいことだが、今まで学んできた知識、そして被災体験から得た教訓。これを活かして新しいものや発想はまだまだ思いつくはずだ。今から私たちはその新しいものを作り上げていくという大きな課題がある。未来の世代の人にも知ってほしい。自分は関係ないと思ってほしくない。

私がこう考えるすべての理由は、私と関わりのあるすべての人を震災で失いたくないからだ。失ってしまう前には気付かないが、その人のいいところはたくさんあるし、全員が今生きているこの時代に必要な人だ。今まで関わってきた人たちに助けてもらったことや元気づけてもらったこと、一人ひとり忘れられないたくさんの思い出がある。きっと皆さんにもあるだろう。だから周りの人を大切にして生きてほしい。そして自分自身も大切にして生きてほしい。

私は今を大切に生きる。周りの人に感謝し、今一緒にいる仲間や家族と毎日を楽しく生きたい。

これを読んでくれたすべての人に感謝したい。少しでも人の大切さを知ることができたら、記憶に残ったことをほかの人に話してほしい。そして少しでも興味を持つことができたら防災のことを調べてみてほしい。また、今実際に防災を勉強し語り継いでくれている人に、違った見方、思考で防災を一緒に考えてほしい。助かる命が一人でも多くなるように、これからも防災に関わり続けたい。

語り継ぐ

梶原　謙司

阪神・淡路大震災から 20 年がたった。自分たちは経験していない世代であり、大震災の怖さを知っているわけではない。実際に経験した方たちより多くを語ることはできずとも、数えきれないほどたくさんある震災への思いの一つとして伝えたい。

１　語り継ぐにあたり

（１）はじめに

私が今回お話を聞いたのは私の父だ。地震発生当時は神戸に住んでいない。現地で地震を経験し、被災したわけではないのだ。なぜそのような人に聞こうという考えに至ったか。それは語り継ぐということが決して“実際に被害を受けたところを伝える”だけではないと考えたからだ。悲しい出来事を伝えて次に生かすことが一番大切だとは思っている。それを伝えることを怠ればいつまでたっても災害は災害のままになってしまう。

あえて視点を変えてみる。帰宅困難者や災害弱者など、ひとたび災害が起こってしまうとさまざまな“者”が出てくる。なにより注目されやすいのは死者・行方不明者だ。何万人もの方が亡くなってしまうと誰しも胸が苦しくなる。知り合いが無事か、より不安になってしまう。そのどんな者よりも多くなる可能性が高いのが、ある意味で“部外者”だと考えられる。最近起こったネパールでの大地震も、現地で多大な被害がでた。被災地にいないから部外者とは一辺倒に言えないが、全く関係がなくてもつながりを持てる方もいる。そう考えるとひどい言い回しのように思えてしまうが、そんな一部外者が阪神・淡路大震災でどのように感じたかを聞いた。

これはあくまで被災の記憶ではないが、周りがどうあるべきかを考える一つの思いとして私はとらえている。

（２）あの日を迎えるまで

父は地震発生当時２６歳だった。実家を離れ東京都新宿区に住み、大学を卒業して一社会人として生活していた。神戸市から直線距離で約 400 ㎞もあるところに住んでいた。実家が兵庫県尼崎市にあり、これもまた震源から近いとは言えない地域だった。当時は日本の東側で地震が多いイメージがあった。関西には来ない。そんな風潮がやはり雰囲気として伝わっていた。父は神戸という町をとても気に入っていた。神戸にいるとそれほどでもないが、離れれば離れるほど神戸がとてもいい町である実感があった。これほど居心地のいいところはないと、そう感じていた。尼崎と神戸はそこまで近いわけではないが、父はよく神戸に行っていた。大きなビルが立ち並ぶ風景はいつみても壮観だった。私も神戸の都会と田舎が入り混じった、両方のいいとこ取りをしたようなところが好きだ。久々に通っただの道でも、どこか懐かしい雰囲気で故郷に帰ってきたような気持ちになる。父もきっとそこに惹かれたのだと思う。

２　地震発生

（１）じわじわと伝わる恐怖

父は地震発生日の朝、空港にいた。用事があって韓国に行こうとしていたところだった。地震のことを初めて知ったのはその日の午前８時ごろだった。出発する前に一言入れようと、実家に電話をした時だ。母が受話器をとった。すると「今日の朝でかい地震あってん。物いろいろ壊れてもたわ。」と話し始めた。いつもどおりの雰囲気だったためか、ああ、大きい地震があったんか。という気持ちでいた。ちょっと大きいくらいだろうとそこまで心配しなかった。その後韓国へ行くことを伝えて電話を切った。大きな地震なら報道されているかもしれないと思い、空港のテレビをふと見た。そこで父は大きなショックを受けた。一番に飛び込んだのは、阪神高速が根元から折れてなぎ倒されている映像だった。これはただ事じゃないと思った。ちょっと大きいなんてレベルじゃないと。こんなでかい地震なら亡くなられる方も１人２人じゃ済まないだろうと。それほど衝撃的だった。つい先ほどの電話が嘘のようだった。高速道路の映像も嘘なんじゃないか、嘘であってほしいと願った。同

時に、こんなに大きな地震でよく家族が生き残れたものだと感じた。あの電話のおかげで、ショックは少し和らいでくれたと思う。

報道もしばらくするといろんな映像が流れてくるようになった。よく行くので知っている町も多かった。その知っている町が燃えたりしていた。神戸は百万人のにぎやかな都市ではなくなるのかもしれないと思い、非常に悲しい気持ちになった。

（２）まわりの心配

発災後テレビは地震のことでもちきりだった。どのチャンネルを見ても同じように地震について報道していた。それだけでも地震の大きさというものを物語っている気がした。報道は使いようによって災害の規模さえも表すことを知った。

父は一つ不思議に思っていることがあった。これだけ報道されているのにもかかわらず、なかなか具体的な被害状況が出てこなかったことだ。少なくとも被害は出ているだろうと思っていた。確かに、この時現場はかなり混乱していた。がれきの山で現場の状況を具体的に伝えることは難しいだろう。父もゼロではさすがにないだろうと感じていた。３日、４日と日を追うごとに、報道の画面の死者の数が 2000、3000、とみるみる増えていった。その数が増えるごとに、災害の恐怖が増していった。数字で決めつけるものではないが、その数字が増えるとともに神戸の知人への心配は増して仕方がなかったかもしれない。

逆に父自身もとても心配されていた。韓国に到着すると知らない人からでも振られる話題が兵庫県で大きな地震があった話だった。着くまでにも宮城県の人と話したりしていた。今は逆にその宮城の人のことを父は心配している。実家は兵庫です、と一言いうだけで皆が同情してくれた。とても感謝している。父自身は大丈夫だったと伝えたが、周りの心配はその比じゃなかった。まるで、両親家族をみんな亡くしたとか、それほど想像もつかないような心配をしてくれた。父は複雑だった。きっとそのような家族もいるのに自分の親は怪我もなくいつも通り生きている。その地震の被害にあった方々のことを心配してくれている人に申し訳ないと思った。

３　神戸に戻る

（１）違う町

いろんな思いを抱きながら半年が経った。震災が発生してから初めて神戸に来た。やはり実際に神戸に来てみると、改めていろんなことにショックを受けたり驚いたりした。初めにそごうが崩れているところを見た。小さいころからよく行っていたところだった。思い入れもあったところだった。それを見てやはり悲しい気持ちになった。ほかにも崩れている建物というのは非常に多く、違う町に来たかのような気分だった。鷹取駅周辺の家もなかった。父は幼いころから鉄道が好きだ。小学生の時に岡山に一人で行くほど好きだった。きっと神戸の風景を楽しみながら行ったのだろう。小さいころと明らかに違う風景がそこにはあった。また、当時家の上にブルーシートが大量にかぶさっていた。それをとても不思議に思ったが、後からデマのせいでそのような風潮が広まったと聞いた。

建物に限らず、どこか違和感を覚える所があった。それは地域別に受けた被害の程度によって、温度差があったことだ。神戸はもっと温かい場所だったのに、震災のせいで好きだった神戸が変わっていくのを見てとても残念な気持ちになった。物資が足りないことに便乗して起こった値上がりもひどい話だと思った。災害がおこると物資面でもそうだが、復興におけるお金の動きが不親切だった。他の都道府県では儲かる会社も増えてきた。ある種の特需のような状態になったのである。そのような話を聞いてとても憤る感情を抑えきれなかった。しかし、不景気の時代でもあったため、いやでもそういう話が聞こえてくるのは仕方がないとも思った。この時に災害についての制度は見直す必要があると感じた。

多くは嫌な話がよく耳に入ったが、自分の目で確かめられた神戸らしさもたくさん残っていた。大惨事であることから被災者のことを思いやる行動がよく見かけられた。電車やバスに乗っているとよく震災で何かあったのか、心の面でつらそうな方が乗られた。その人と席をかわる方が老若男女問わずたくさんいた。そのような行為を見ることがただうれしかった。近所の風呂屋などは、被災者を思ってタダで入れてくれるところもあった。そんな被災者の方々と店の人がしゃべる様子を見て、何か希望を感じることができた。

（２）複雑な感情

行政の取り決めによって、建物の壊れ方が決められている。長田区近辺の火災でも甚大な被害を被ったが、多くは全壊や半壊などであった。父の実家は屋根瓦が崩れていたり、ブロック塀が倒れていたりしている程度のものであった。半壊の判断にもピンキリがあり、実家よりも軽い損壊で半壊扱いのところもあった。父には公務員の知人がいた。その知人にこの半壊の状況ならば申請できるといわれた。申請とは、建物の損壊状況によって行政から出るお金のことだった。当時の半壊の基準があいまいであったため、父の周りの家でも震災前より潤ったという家が増えていった。会社の景気が良くなったことと同じように不快感を覚えたが、自分の家も半壊で申請しているので本当に被災した地域を思うと非常に複雑な気持ちだった。私の祖父が当時三宮で復興の建設関連の仕事をしていた。それで余計に同じ被災した地域でも温度差が激しいことを感じさせられた。

実家に移った後も何度か神戸に行っていた。復興住宅や公団住宅に移り住む人が多くなっている時期だった。そこの近くのお好み焼きの屋台に行ったときに、被災者であろう人が涙を流しながら店主の方と話している様子を見た。悲惨な出来事と向き合う人と、それを受け止め慰める人、本来復興とはこのことを言うんだと気付いた瞬間だった。それ以来父もいろんな話を聞く役になっていた。

聞いている中で、一口に「震災がありました。」という文の背景には一人ひとりがとても大きな事情を抱えているんだということを感じた。神戸に来て以来、生きた人も死んだ人もその後何十年も苦しんでいるということをとても強く感じている。来た当時は希望がないような雰囲気で、好きだった街であった分すごく残念だった。現在もまだ癒えてない傷もある。しかし、神戸は少しずつ歩いている。

（３）今思うこと

部外者というのは自分の身に被害が降りかかっていない。やはり未災者と被災者との深刻さのレベルはかなり違う。人は少なからず良心を持っている。震災が起こった直後などであれば、募金活動を行ったり行動力があればボランティアをしたりするだろう。確かに復興への第一歩の活動ではあると思う。しかし、本当に復興をするには、より長いスパンでの活動が求められる。忘れてはいけない、風化させないということが重要である。一口に東北と言っても関西からすればわからないことや遠いことがある種の弊害となっている。そんな中でもうれしいと思うのは神戸という被災地と東北という被災地が交流し連携し合っていることだ。難しいことだがそれを継続していくことが何よりも大切である。

被災したというのは確かに悲しいことではある。それよりもっと前に被災したところが思いやるということはとても素晴らしいと思った。

４　感想

（１）お話を聞いて

まず被災されていない側の人としての父なりの考えや感じ方を話してもらったことに感謝したい。父の話をまとめたノートは４ページ分もあった。たとえ被災していない人でも、その被災地への感情や思いは人それぞれたくさんあることを知った。父のように実家がそこまで被害を受けなくても近い地域だといろんな方々が心配してくださることは、複雑ではあるがうれしいことだと思った。私は今まで父としゃべる機会を作ってこなかった。まわりとコミュニケーションをとることが大切だと思っておきながら、一番近い存在である親とちゃんとした会話をあまりしたことがなかった。親と腹を割って話をすることが周りと素直にコミュニケーションをとる方法だと思った。これをきっかけにコミュニケーションをとって語り継ぐことの第一歩としたい。

（２）語り継ぐこと

今後本当に語り継ぐことのできる人々というのは減っていくだろう。災害は忘れたころにやってくる。という言葉にあるように災害の恐ろしさは年を重ねるごとに風化していく。私は忘れたころにというよりは、社会が陰で弱りきっているころにやってくると考えている。災害を忘れること自体がもうすでに一家庭が、一地域社会が、一行政が弱くなってきている証拠だと思う。そう考えると語り継ぐことは防災に限らず広く重要な役割を担っているといえる。

一人で広く伝えることも大切だ。もっと大切にしていきたいのが身近な人から身近な人へ伝えるこ

とである。身近な人ほどより深く話を聞いて伝えられるからだ。今回父に聞いた理由の一つでもある。広く伝えるためにはそのような身近な人との関係を少しずつ築いていくことだと思う。築いていくためにも必要なことは聞く力であり会話する能力である。僕は父の口から阪神・淡路大震災の話を聞いたのは今回が初めてだった。一番身近な人の話も聞けていないことは伝える時も広く浅く伝えることになってしまう。だから、少しずつ築き上げることが重要なのである。

私自身が未災地の人間として、部外者として印象に残っている災害が東日本大震災だった。午後２時４６分、その時は丁度父と家にいた。小さいテレビがあったので何の気なしにテレビをつけた。その時に飛び込んだのが津波の中継の映像である。今思うと父が阪神高速の倒れている映像を見た時と同じ状況だったのではないかと思う。呆然と画面の前で立ちすくんでいた。父もとても深刻そうな感じだったことが雰囲気で分かった。初めて見る津波だった。どうしようもない恐怖感とこの先どうなるのかわからない不安感を少しだが感じた。現地の人はこれの何百倍も恐怖を味わっているのかと見ながら考えていて怖かった。

（３）これから来る災害に向けて

今一番心配されている地震が南海トラフ巨大地震である。一番に大切にしてほしいと思うのは、他人事、他地域事にしないことである。南海、東南海、東海地震が連動すればどれだけ離れていても被害を及ぼす可能性がある。神戸もそうである。時間がかかるとはいえ津波が襲う可能性もある。個々人が、自分が危険を被るかもしれないという意識を持つことが大切だ。

このように災害は予知されているものもあるが、突然予想もつかないところから襲ってくることのほうが多い。防災を全面に出しても実に住みづらい町になる。ただし、備えというのが０と１とでは何倍も効果が違ってくる。今後自分自身の備え、家族の備え、地域の備えとつなげていくには何よりまず自分自身が備えていかなければならない。

（４）将来に向けて

私は将来、人を陰で支えることに尽力したいと思っている。今若い人たちが大人になるころに地震が発生する確率は非常に高い。もちろん今起こるかもしれない。その中で災害時に地域の人たちのリーダーとして、積極的にまとめることは大切だ。陰で支える人、であればふつうはここでサポートにまわるというかもしれない。しかし、私は一人のリーダーとしてまわりのリーダーを支えたい。リーダーがたった一人では、たくさんの人が混乱している中でまとめ上げるのは非常に困難だ。それをただサポートするだけというのは少し無責任な気もする。私の考える人を支えることとは、人の為に生きることである。人に尽くしてこそ、愛情が育まれると考えている。これを教えてくれたのが祖母である。

あるおばあさんがいた。ホームヘルパーだった祖母は、そのおばあさんの担当になった。おばあさんは祖母のことをひどく嫌っていた。祖母も最初はなぜ嫌われるのかわからなかった。嫌われたならもう相手をしないのが普通だ。しかし、祖母は愛情いっぱいでそのおばあさんと接した。ほんとうに最後まで温かく接した。そのおばあさんは最後に祖母のことが実は好きだったと教えてくれた。いくら反発されてもそんな人にこそ愛情を尽くすことでトゲトゲした心が安らぐ。きっとそうだと私も強く思った。

災害時、避難所というのはたくさんのトゲトゲした心がともに生活することになる。もちろん地震そのものに対するショック、家族を亡くした悲しみ、変わり果てた街に対する絶望感、さまざまな感情を持って集まっているはずだ。まわりの存在すべてを憎み、恨むことだってあるかもしれない。避難所運営とはそういう意味で本当に難しいことだと思う。普段の人間関係もそうだ。私が今持っている夢である先生の仕事もそうだ。一人一人にじっくりと時間をかけて、場を和ませることのできるようなリーダーになることが大切だ。そんな人に私はなりたい。

語り継ぐ

加藤　明日香

私は阪神・淡路大震災よりも後に生まれ、震災は経験していない。これから生まれ、これからを担う若い世代が忘れ、震災を風化させてしまわないために私は母の友人に聞かせてもらった話を語り継ごうと思う。

１　震災以前の生活

当時は須磨水族園の近くで、母、父、自分の三人と飼っていた犬とで生活していた。古い平屋に住んでおり、近くには阪神高速道路があった。当時は西神そごうに勤務、姉は結婚して一緒には暮らしていなかった。震災当日自分の仕事は休みであった。

２　１月 17 日

（１）震災直後

当時住んでいた家は平屋だったため、玄関、居間、奥の部屋と一直線に並んでいるような状態で一番奥の部屋に母と自分、一つ手前の部屋に父が寝ていた。寝ているとき、突然「ドンッ」という音がして体が垂直に浮き上がった。突然のことで何があったのか分からず、自宅近くには阪神高速道路の事故が多発するカーブがあったため、家族全員が朝から大きな事故があったのだと思った。しかし、音の後に大きな揺れがあり、自分の体が一所にいなかった。布団にもぐって揺れが収まると、普段より朝早くに目が覚めた母は、飼っていた犬を抱いて既に避難していた。父も揺れが収まった際に状況を確認するために外に出ていた。父の部屋では、足元から仏壇、横からタンス、枕元からサイドボードが倒れてきており、父は倒れてきたものが折り重なった空洞で助かった。家の外からは近所の人の「大丈夫!？」という声が聞こえ、部屋に取り残されていた自分も無事に外に出ることができ、家族の無事を確かめた。外は真っ暗で、明かりがなかったため家にあるはずの懐中電灯を、揺れが収まった瞬間に取りに行った。近所に住む人が、「手を貸して!」と言っていたが、皆が手伝える余裕がなく救急車を待とうとつながらない電話を繰り返しかけた。

（２）落着き

周りがだんだん明るくなってくると家の中の様子が分かるようになり、余震も収まっていたので家族は家の中の様子を確認しに戻った。家の家具はほぼすべてが倒れ、置く場所がなくて玄関前に置いてあったアップライトのピアノが玄関をふさいでしまっていた。余震が何度も何度も起こるので、そこでようやくすごい地震だ、大変なことになっていると感じた。しかし、大変なことが起こったとはいえ自分の住んでいる地域だけだと思っており、普通の感覚でもともと予定していたスキーの予約をキャンセルしなければならないと思っていた。しかし、電話はつながらなかった。当時は１月で、まだ寒く家族は寝た時の状態のままだったので、近くにあるものを何でもいいから着ておこうと余震が続く中、着られるものを探した。近くにはスキーに行くために自分が用意していたスキーウェア、父の温かい素材でできたズボンがあり、普段では考えられないが、とても寒かったのでちょうど良いと思い、それらを着ておいた。情報がなく、何が起こっているのか把握できず不安な中、今できることをと思い、父と一緒に倒れた家具を起こしていった。

３　震災発生翌日から数日

震災後自宅が崩れておらず、ひびが入った程度で、父も母も家を空けてはならないという意識があったため、家のすぐ裏に避難所指定されている中学校があったが、避難所が狭くなってはいけない、崩れていないのだから自宅にいたほうがよいと、避難行動はとらず自宅にとどまることを決めた。自宅には割れた食器や家具が散乱していたため、家の中で靴を履くのは嫌だという気持ちもあったが、父の指示で夜寝る際には靴を履いて寝ていた。震災発生から翌日１月 18 日は午前中にぐちゃぐちゃになってしまった家を何とかしなくてはならないと思い、家族全員で家の片付けを始めた。まずは足場確保のために食器棚から飛び散ったガラスを処理した。ライフラインが正常に機能しておらず、水

道は、家の前で破裂してそこから直接飛び出していた水があったので飲み水にはならないが、手を洗ったり食器を洗ったりするのに利用した。ガス漏れをしている家庭も多々あり、周囲がガス臭かった。ガス漏れをしている家は危険だから火気厳禁と張り紙をしていたが、寒さもあってその近くでタバコを吸っていつも通り道に投げ捨てる人もいた。震災があって非日常になることで人々の普段の生活の良くない習慣が出てしまったり、自分のことが中心になってしまう人が見られたりした。自宅では電気もつかないため暗く、仏壇のろうそくを明かりとして利用していたが余震のたびに急いで消す、ということを繰り返しろうそくの小さな光では不安な気持ちになった。ラジオが家のどこにあるか分からず、情報を集める手段がなかったが近所の人のうわさ話をする声が聞こえ、近くの橋が落ちたなど家の近くで起こっていることを噂話から知った。そこから得た情報や自分の目で見渡す限りの状況しかわからず、広い範囲で大きな災害が発生したという認識はなかった。しかし、余震で川向にある、一軒家が余震で一瞬にして目の前で崩れ、とても大きな地震だったのだと改めて実感した。屋根の瓦がほとんど落ちてしまっていたので、残りの瓦も落とすことにし前向きに自宅を片付けていくことを考えていた。

しばらくはすぐに家から出られるようにと靴を履いて寝ていたが地鳴りや屋根瓦を落とした影響もある寒さでなかなか寝付くことができなかった。自宅には灯油を入れるタイプの丸いストーブがあり、その上でお湯を沸かしていた。四日市の親戚は、地震の亀裂などでうまく走れない道路を使ってブルーシートなどの支援を届けてくれた。電話が何度かけてもダメだと知っていながらかけ続けていると、唯一つながったことがあり、つながった先は当時の彼氏（現在の旦那さん）だった。心配してくれて、後に自宅まで駆けつけてくれた。彼が住んでいた北区鈴蘭台周辺ではお風呂を沸かすことができたため貸してもらった。自宅から移動する途中須磨の中でも、北のほう南のほうで電気がついているかいないかなどの差があり、同じ県でも違いがあると感じ、見慣れた場所の風景が変わってしまっていて驚いた。

数日たつと自分の働いていた百貨店から連絡があり、出勤できるかどうか尋ねられたが、出勤に利用する地下鉄が動いていなかったためしばらくは職場に行けなかった。大阪の本社からは百貨店に勤務するそれぞれの社員に水を持ってまわってきてくれた。親戚からも、多くの支援物資が届き、情報収集をするために近所の避難所に行っていた母が避難所で配られる支援物資をもらいに行っていた。行政からの支援物資や、震災の影響がなかった親戚からの支援のおかげで、食べ物に困ることはなかったが、温かいご飯が食べたくなることもあった。

４　地震発生から一週間がすぎて

一週間が過ぎると電気がつくようになり、久しぶりの電気に普段は感じない温かさを感じた。電気がつくことでほっとして長い緊張から解けたように感じられ、不安が少し和らいだ。電気がつくようにはなったものの、震災前までの生活にはまだ戻れず、風呂に入れていない生活が長くなっていたが、隣の家が当時は珍しいオール電化で、電気が回復したときに風呂に入れるようになり、何度か貸してもらった。小学校に自衛隊の風呂ができていたり、銭湯がお金を取らずに風呂をお客さんに貸し出していたりして、風呂に入るのは大切なことだと感じた。食事は相変わらず三食とも支給される弁当であった。仕事場に出勤できるようになり、通勤を始めたが最初は地域によって震災への感覚の違いを感じ、驚いた。

５　その後

２月になると自宅のリフォームをどこに頼むかが話題に上がり、その話を聞いた職場の本社のリフォーム部門が引き受けてくれるということで、そこに依頼することになった。自宅は半壊の認定を受け、罹災証明が発行された。この証明があれば住宅ローンを組むときに役立つと家族は前向きに考えていた。実際周囲には落ち込んでいる人も多くいたが、自分は家族で前向きにこれからどうするかを考えることで、あまり悲しまずにいられた。現在住んでいる家では震災を強く意識したわけではないが、家具の高さを倒れにくいもの（背が高いもの・天井に近いもの）を選んだり、家具の配置には少し気を使ったりしている。（寝るところに物は置かないなど。）震災がきっかけで家具などの荷物が減ることもあった。

子どもには、話したことがあるが、大変だったが前向きな話になるので、震災というものはあまりピンと来ていない、どちらかと言えば東日本大震災の方が子どもの印象には残っているように感じると語る。風化が問題視される中で東日本大震災が発生したことが阪神・淡路大震災のことを思い出すきっかけになった。

６　感想

（１）私にとって高校までの阪神・淡路大震災

阪神・淡路大震災について環境防災科に入るまでは、風化が問題視されて忘れてはいけないことなのだと思いながら、自分にはどうすることもできない、どこか遠いことのように感じていた。なぜなら、実際に自分が経験しておらず、知っているのは小中学校と学んできた、神戸市民だから最低限は知っておこうという道徳や総合の授業の内容だけであったからである。一度小学校からの課題で、「自分の親戚に阪神・淡路大震災についてのインタビューを行いなさい」というものがあった。私は叔母に話を聞かせてもらい、その時初めて自分の身近な震災体験を聞かせてもらった。しかし当時は幼かったからかあまり印象に残っておらず、大変なことだ、震災は怖いものだという漠然とした気持ちしかなかった。震災について考えるようになったのは 2011 年の東日本大震災がきっかけだ。あの日、学校が休みだった私はテレビを見ていた。そこで突然見ていた番組から画面が切り替わり、家が津波に流されていく様子が繰り返し流れた。なにが起こっているのか最初はわからなかったが、東日本で今起こっていることだと知り、その時に同じ日本で起こったことなのに、自分には何もできないのだろうか、東北のために何かしたい、と思ったがどうすればいいのか分からなかった。東日本大震災は東北で起こったことだが、繰り返しニュースや新聞で報道していたからか、自分の周りでも変化があった。阪神・淡路大震災の時は津波の被害ではなかった…などという言葉が聞こえるようになったことだ。そこで私は、阪神・淡路大震災のことを神戸市民である私が知って広められれば、東日本大震災のこれからの復興や復旧につながるのではないか、またこれから起こる災害の対策に役立てられるのではないかと考えたのが環境防災科を志望した理由である。

（２）高校に入学して

環境防災科に入学して、実際に防災や災害のメカニズムを学び、ボランティアに参加していくと、実際に阪神・淡路大震災を経験した方のお話を聞かせてもらうことが多々あった。今まで小中学校で学習していた内容が本当に最低限であったこと、それすらも薄れ阪神・淡路大震災が風化してしまうとはどういうことなのかを知った。そして東北の同年代の学生と東日本大震災がきっかけで交流して感じたのが、「語り部」という苦しかったことを伝えてくれる方がいるのに、これから忘れて同じことを繰り返して振り返って後悔したくないということである。阪神・淡路大震災で得た教訓がきちんと受け継がれ、若い人に伝わればこれからの地震による被害を減らすことは可能だと思う。しかし現状は若い人に阪神・淡路大震災が伝わっていない。興味がない、面白くない、そう言っているのも実際に耳にしたことがある。環境防災科できちんと震災について知ったからこそ身近なことのように感じられ、忘れてしまうことの怖さが分かるのだと思う。またそれだけでなく、もっとこれから先の災害のことに目を向ける必要があり、きちんと対策しなければならないと思う。震災を他人ごとではなく、怖いものだと感じられる自分たちが、これから同じことを繰り返さないために自分たちで防災を広め、防災を当たり前のことにしなければならない。

（３）将来の夢と防災

私の将来就きたい職業は消防士である。女性消防官はまだまだ数も少なく、珍しい。体力面でも男性と同じように訓練をするので、厳しいことはあると思う。それでも自分のしたいことのために消防士を目指していく。自分のしたいこととは、外国の人の防災についてである。日本でも、防災を広めるために工夫し、行政が働きかけたりしている。それを若い人が防災や震災に興味を持ってもらうために私達と同年代の若者がしていくべきだと感じる。防災に関しては、必修でないためか、同年代の日本人の中でも防災への意識に差がみられる。そこで考えたのは日本で生活する外国人は日本の若者以上に防災を知らないのではないだろうかということである。防災は一見生活していくうえで必要のないことのように感じられるかもしれないが、災害大国と言われる日本にいる以上は最低限、自分の命を守る術ぐらいは知っておいてほしいと思う。災害発生時、重要になるのが「正確な情報」であ

る。情報があれば自分が取るべき次の行動（津波が発生すれば、高台へ避難するなど）が分かると思う。しかし、日本に観光に来ている外国人や、日本語が分からない外国人は混乱する中情報から取り残されてしまうと思う。だから自分はそういった方を災害時要援護者にしないためにサポートする活動がしたいと思う。そして日本で最低限でも防災の知識をつけた人が母国に持ち帰って、自分の国に合った防災について考えてみてほしいと思う。

ほかにも、もっと防災やボランティアについて広めたいと思う。高校生になるまでは自分も防災やボランティアは難しいことだと考えていた。しかし、学ぶうちに日常的に多くのボランティアが行われ、それは決して特別なことではないのだと感じるようになった。高校生になるまでの私のように、ボランティアという言葉にハードルを感じる人もいるのではないかと思う。しかし、実際にやってきてボランティアではただひたすら相手のためにというものだけでなく、自分も楽しめるものもあるということが分かった。また人と関わって交友関係が広がることは自分にとってもプラスになると感じた。また、防災は、難しそう・興味がないという理由で防災対策をしなければ、災害で命を落とすリスクが高まる。生きていくうえで必要な基本的なことだということも感じた。災害大国である日本に住み、生きていく以上はきちんと知っておかなければならないと思う。これからボランティアに多くの人が参加しやすくなって人とつながることが多くなれば、災害時や何かあった時に協力しやすい、そのネットワークが広がれば、災害で命を落とさない防災に繋がっていくのではないかと考える。そういったことを自分が三年間学んできたからこそ伝えられるのではないかと思うので、伝えていきたい。

（４）震災の話を聞いて

震災の話を聞かせていただいて、感じたのは一言でいうと「驚き」である。理由は今まで語り部の方や学校で聞かせていただいたお話、学んできたこととは違ってあまりに前向きだったからである。それぞれの被災体験、感じ方があると知っていながら、自分のどこかで語る人は悲しいことを経験していると思ってしまっていたからだ。今回お話を聞かせていただいた方は、母の知人である。自分の両親には当時の記憶が薄く、母は大阪に住んでいたのでまったく被害がなく当時の記憶は断片的であるということで、震災体験を語って下さると快く言っていただいた方に聞かせてもらった。前向きな言葉がとても印象的で「身内が亡くなったりとかは幸いなかったけど、家族が皆ポジティブな性格やったから悲しむ前に行動できた。」という言葉で、震災があっても悲しむ人ばかりではなく、起こってしまったことと受け止めてこれからを考えていく人もいたということを知った。若い人に伝えたい言葉は、できないのではなくて自分でなんとかする、他からの助けを期待しないということだった。前向きに考えていけばショックからも立ち直れるし苦しいことも乗り越えられるということである。この機会にポジティブな考えで、震災があっても自分の力で立ち直り、震災を超えた人がいたことを知ることができてよかったと思う。このお話を聞く前に自分の両親の震災経験も断片的ではあるが聞かせてもらい、当たり前のことではあるが、当時もそれぞれの立場や地域でそれぞれ異なった震災体験があるということを強く意識した。今回お話を聞いた方は快く震災に関して語ってくださったが、そのお話の内容はとても細かいことまで覚えていて、それほど震災の印象が強かったのだと感じた。私たち若者に震災の怖い面だけでなく、人間の力強さをおしえてくれるような内容で、前向きに生きてほしいという思いが伝わってきた。私は、聞いて終わりではなく聞いた話を自分なりに解釈してわかりやすく、自分よりも若い世代に広めたい。

これからもっと時がたつにつれて、私たちのように震災を経験していない世代が中心になっていき経験した人たちは高齢者になっていってしまう。しかし経験していないからわからない、まったく知らないという状況になってはいけないと思う。同じことを繰り返さないためにということもあるが、その体験は必ずこれからの災害と向き合っていくために、自分にできることを探す一歩になると思う。まずは身近な人から震災体験を聞けば、自分の信頼できる相手でもあり、他人ごとのようには感じないと思う。教科書のように文字で長く広く伝えていくことも大切ではあるが、顔の見える距離で知っている人から聞く話は、聞いた人にとっても自分のことのように感じられるので伝わりやすいと思う。だから自分にできることは自分の身近な人に震災について知ってもらうことだと考えた。私は多くの人に伝わることを意識するだけではなくて、自分の身近にいる人にきちんと自分が学んでいる防災や、今まで聞いてきた震災の話を聞いてもらうことをこれから考えていきたいと思う。他にも周

囲の人が少しでも阪神・淡路大震災のことを身近な人に聞いてみようと思うようなきっかけづくりをしたいと思う。そのためにも、これからまず自分が、積極的に阪神・淡路大震災を経験した方からお話を聞かせてもらいその話を他の人に出来るようにしていきたい。自分の中から阪神・淡路大震災を風化させないように深く理解することがまず初めにすべきことだと思う。

そしてもし、これから同じような規模の地震や災害が発生したら「若者」を中心に前向きに動いて行ってほしい。自分たちが動くことでほかの人の体や心を守ることに繋がるのではないだろうか。当時は支援物資が多く届けられ、食べ物に困ることはなかった。しかし、一人ひとりがきちんと非常持ち出し袋の準備や食料の備蓄をしておけば支援物資が届かないなどの事態に対応できるし、余分を作って誰かの助けになれるかもしれない。東日本大震災を実際に経験した高校生からも、交流で、各家庭に一つ必ず非常持ち出し袋を準備しておいてほしいという声を聞いた。災害時に困らないために若者にできることはたくさんあると思う。地震がもう起こらないなどということはないので、これからに備えて非常持ち出し袋を用意し、震災を経験していない若者は経験した人の話を少しでも聞いて風化させないように自らが語り継ぐ立場に立ち、そこから出てくる問題点などについて考え、次に起こるかもしれない災害で困ったり悲しんだりする人を減らすためにできることを行っていってほしいと思う。

語り継ぐ

川口　祐貴

１　はじめに

私の家族構成は、母・父・兄・私の４人家族だ。阪神・淡路大震災が発生した当時、私の家族は母の実家がある静岡にいたため、被災体験がない。私はまだ生まれていなかったし、兄はまだ幼かったため震災について何も知らない。だから今回は母と父が当時何をしていたのか、また神戸に移り住むとき何を思ったのかを聞いてみた。

２　母の話

母が朝起きてニュースを見ようと思いテレビをつけてみると、そこには信じられない光景が映し出されていた。町が火の海になっていたり、途中で崩れている高速道路に今にも落ちそうなバスが止まっていたりなど現実では考えにくい光景だった。はじめはどこがこんな事になっているのかわからなかったが、しばらくして兵庫県だということを知った。母は昔から学校の先生や私の祖母に「いつか東海地震が来る」と言われてきて、いつ来るのだろうかと怯えながら生活をしていた。だから、兵庫県で阪神・淡路大震災が発生したのを知って、余計に驚いたそうだ。その日は１日中テレビの前から離れられなかった。

ニュースを見ていると、避難所の映像が映し出された。全国から物資が送られてきてそれを避難所にいる方々に配っている映像だった。その物資というのが、送った人が使わなくなったようなボロボロの布団や服などで、それを見ていて非常に腹が立った。

夜になり、晩御飯を食べる時間になった時、避難所でも食事の時間だった。避難所では冷たくなったおにぎりが二個ずつ配られていた。それを見ていると被災地の方々は冷たくなったおにぎりをたったの二個しか食べられていないのに、私はあったかい食べ物をこんなにたくさん食べていてもいいのかと思うようになり、その日からごはんがあまり喉を通らなくなった。

母には淡路島に知り合いがいた。昔、新婚旅行の時に旅行先で仲良くなったそうだ。その人が淡路島に住んでいるということを思い出し電話をしようと思ったが、いま電話しても迷惑になるだけだなと思い無事を祈って電話はもう少し落ち着いてからにしようと思った。

そして阪神・淡路大震災から１週間がたった時その人に電話をかけてみた。電話が復旧していなくてその人につながるのか不安だったけれど、ちゃんとつながった。幸いなことにその人の家族全員が無事だった。その人には、当時生まれたばかりの赤ちゃんがいたため、おむつや生活用品を送りましょうかと聞いた。だが、今は物資が足りていると言って断られた。ただ、電話をしてくれたことはとてもうれしかったと言ってくれた。

３　父の話

阪神・淡路大震災当日、父はその日も普段通り仕事があった。朝ニュースを見てから行くのが習慣だったためニュースを見てみると、町中が火事の映像だった。はじめは東南アジアのほうの違う国の映像かなと思っていたが、兵庫県だということがわかって目を奪われた。そのニュースの中で１番印象に残っているのが長田の靴の工場が激しく燃えている映像である。

父はそのニュースを見た後仕事に行った。父が勤めている会社は全国に支店がある。静岡の支店は阪神･淡路大震災の影響はなかった。父は今朝のニュースでの火事の映像が本当に印象に残っていて、大丈夫なのか不安になり兵庫県の支店に勤めている知人に連絡した。幸い知人は地震が発生した前日、スキーをするため遠くにいたので無事だった。ただ、道がふさがっていたり渋滞していたりなどで帰りたくても帰れない状態だった。兵庫県の支店には全然人が集まらなかったらしい。

また、別の人にも連絡した。その人は会社の寮（明石港の近く）で生活していたらしいがその寮は地震の揺れで全壊した。幸いにも全員無事だった。ただ、その後水道や電気やガスなどのライフラインが停止していたため、生活には本当に苦労したらしい。

４　神戸に移り住む

ここからは母に聞いた話だ。

父の転勤で神戸に住むことになった。震災から５年たったがどうなっているのだろうと少し不安なこともあったが、神戸に来ることにした。三ノ宮駅に着き町を見てみると驚いた。ニュースでビルが崩れていたりして悲惨な状況だったのに、面影が全く見当たらなかった。昔ここで震災があったなんて信じられなくて人間の力ってすごいなと感じた

神戸に住みだして少し落ち着いてきたころに兵庫県をいろいろ見て回ろうということになった。いろんなところを回って長田についた。三ノ宮などと違いまだまだ復興していなくて空き地だらけだった。その光景を見て本当にあんな悲惨なことがあったのだと実感した。

５　阪神・淡路大震災

私は今まで阪神・淡路大震災のことを外部講師の方から聞いたり、ボランティアに参加したときに地域の方が少し話してくれたりして、それなりに知っていたつもりだった。でも、今回両親から未災地といった違う視点からの話を聞いて、今までの見方とは違う考えができるようになったと思う。例えば、今までであれば救援物資の映像を見て、こんなにもたくさんの方々が送ってくれているんだなと思っていた。だが、話を聞いてからは量よりも質を見るようになった。こんな考え方のように、少し視点を変えた考え方だ。私はこの考え方を授業やこれからの将来に活かしていき、様々なことを学んで、他の人に学んだことを伝えていきたい。

６　感想

時々、親が震災当時のことを少しだけ話していた。けれどここまで詳しく聞いたのは今回が初めてだ。正直他の人に聞こうかとも思ったが、震災で被害を受けた人たちをテレビなどで見ていた人がどんなことを思っていたのかを、これを読んでいる人に知ってもらいたかったので、あえて被災体験のない両親に聞いてみた。両親の知り合いに亡くなった方がいないのが不幸中の幸いだと思う。

私たちの年代は、震災を経験していないため本当の怖さや辛さはわからない。だけど、今回話を聞いて、もっといろんな人に話を聞いて多くの人に阪神・淡路大震災や東日本大震災などの出来事を広めていきたいと強く思った。そしてその話から何かを得て、30 年後に発生するかもしれないし、数秒後に発生するかもしれない南海トラフ地震で少しでも被害を減らしてほしい。

避難所の話を聞いたとき、私も腹が立った。もし、自分が避難所にいる立場だった時、誰かの使い古しだったらって考えないのかなと思った。私は将来支援物資を送る時があったらすべて新品のものを送りたい。私の家族は全員被災体験がないので、もし巨大地震が来たときどうしたらいいのかわからなくて、パニックになると思う。そんな時に、私が３年間環境防災科で学んだことを最大限に活かしてまもりたい。そして、家族の安全が確認できたら近所の方たちの避難の手伝いをしたい。

７　これから

私の将来の夢は美容師になることだ。美容師になろうと思ったきっかけは、知り合いに美容師の方がいて、その方のコミュニケーション能力や技術の高さに憧れたからだ。そして、美容師という職業を調べるうちに日々成長していける職業ということが分かり、魅力を感じてなりたいと思った。そして、美容師になるという夢が叶ったら、次は自分の店を持ちたいと思っている。来てくれるお客さん全員にまた来たいと思ってもらえるように技術面や精神を鍛えていき、いつかは有名な店にしたい。美容師と防災をどう繋げていくかだが、私は来てくれるお客さんに接客を通して、生活上の防災を地域に広めていきたいと思っている。地域に広めるためにはある程度お店の知名度がないといけないと考えたため、お店を有名にしたいと思っている。

また防災ではないが、もし災害が発生したら現地に行き無償で髪を切るボランティアをしたい。現地の人といろんな会話をして、災害でのショックを少しでも紛らわせてほしいからだ。ただ、現地でのボランティア活動には期間が大事になってくると思う。その理由の１つは、ボランティア活動を長い間続けたら、すぐに自分のお金が無くなってしまうと思うからだ。そしてもう１つの理由は、無償で活動を続けると現地の美容師の方の仕事がなくなってしまうからだ。災害でお金がないときに有料

か無償どちらに集まるか想像してみたら確実に無償の方に集まるだろう。そういった問題があるため１か月～２か月でボランティア活動をやめた方がいいと思う。
　こういった活動をして将来、防災とかかわっていきたい。

語り継ぐ

川嶺　桃香

１　母の体験

震災を体験していない私は母から当時のことを聞いた。当時母は結婚する前の 22 才で祖父（母の実父）が明石市民病院に入院していたため朝霧で祖母（母の実母）と二人暮らしだった。ここからは、母の目線で書いていく。

（1）　震災当日

突然激しい揺れに目が覚め何が起こっているのか、まるで巨大な物が建物をゆさゆさと揺さぶっているように思っていると隣の部屋から「あやちゃん！地震！」と母の声がした。揺れがおさまってくると、部屋の中の惨状に驚いた。テレビや食器棚、たんす、あらゆるものが倒れていた。押し入れの戸袋の引き戸が外れて中の物が飛び出してきた。母のいた部屋のたんすは倒れてそのまま寝ていると大けがするところだったが、母はすぐに飛び起きて他の家具を支えていたそうだ。開き扉の食器棚は戸が開き、中の食器は飛び出てほとんどが割れていた。大きく余震が起こっている中この家にいることがとても怖く我に返ると「逃げなきゃ」と思った。着のみ着のまま上からコートを羽織りリュックの中には貴重品だけを詰め込み外に出ることにした。ご近所の方々も着のみ着のまま中には裸足の方もいた。建物の倒壊こそなかったが、みな余震におびえどこで何が起こっているのか情報収集のため外にでた。外は一月の真冬。ご近所の小学生の女の子がコートを着ることなく裸足のまま外に出ていてとても怯えていた。私は、その女の子をコートで包み温めた。その間母は余震におびえる事なく勇敢に建物に入って女の子の靴を取ってきた。しばらくすると、どこからか流れてきたラジオから震源地が淡路ということを知った。まさかすぐ目の前の淡路ということにとても動揺した。なぜか遠い所で起こっていると思っていたからだ。外の公園で避難していると空はどんよりとしていた。黒い灰がひらひらと舞い降りていた。家のことが心配になり母と家に戻ることにした。改めて家の中を見ると靴のままでないと家に入ることができなかった。ガラスが飛び散りすごい有様だった。みんな怖いはずなのに、怖かったはずなのにあちらこちらから家を片付ける音がしてきた。私は、何もする気になれずただ母のすることを見ていただけだった。父のことが心配で当時携帯電話もなく車を出して父のいる市民病院へ行った。病院も少し壁が崩れていた。父の姿を見ると安心して少し気持ちが緩み父の前で大声で泣いていた。

（2）　地震の現状を知る

まさか大勢の方が亡くなり大きな火災が起こって高速道路やビルが倒れているとは知らなかった。避難先から家へ帰ってテレビを付けたとき初めて神戸の町が大変なことになっていると知った。テレビから映し出される映像はどの場所も見覚えのある場所だった。つい先日まで遊びに行っていた大好きな神戸の町は見る影もない姿になっていた。

（3）　ライフライン

電気はすぐにつき、ガスと水道が使えなかった。今までに経験したことのない不便さだった。近くにある幼稚園が水を分けてくれて、水の大切さと水がとても重いのを実感した。炊飯器がガス使用の物だったのでご飯が炊けなかった。するとご近所の方がおにぎりを握って下さってとてもありがたかった。水がないととても困った。蛇口をひねれば水が出る、こんなことが当たり前になっていたのでひねっても水が出ない感覚は今でもよく覚えている。たった一杯のコップの水で歯磨きをして顔を洗う。当然お風呂に入ることもできなかった。地震の揺れはとても怖かったけれど地震の起きた後の方がもっと大変だった。ライフラインが途切れて買い物に行っても商品が並んでいなくて一本の水を買うのでさえ遠くの場所まで行っていた。

（4）　震災で得たこと

地震はたくさんの命を奪って人の住む場所も大好きな町も一瞬にして奪った。だがそんな中でも人の温かさや思いやりに触れることができた。あの時は、みんな一緒に頑張ろうという思いがとても強かったのだと思う。おいしいおにぎりを握ってくれた。重い水を運んできてくれた。食料を分けてくれた。食器を持ってきてくれた。挨拶程度だったご近所の方々とよく会話するようにもなった。

（5） 私の家でしていること

背の高い食器棚は置いていない。背の高い家具は一部屋にまとめている。お風呂の水は抜かない（翌日までためておく）。非常用持ち出し袋を用意している。寝室には物を置かない。全て体験を教訓にしている。

（6） 災害後でも

母は今でも震度１の地震でさえすぐに気が付くし、少しの揺れでも怖いらしい。サイレンの音も地震速報にもびくびくしている。これがＰＴＳＤやＰＴＳＲにあたるのかは正直わからない。だけど母は本当に地震に敏感だ。たとえ震度１でもテレビ速報より早いスピードで「地震や！」と反応するほどだ。これだけ敏感だから、南海トラフや次起こる地震で心に反応がでないか不安である。そのために心のケアなどもしっかり学んでいきたい。

２ 父の体験

当時父は 25 歳で祖母（父の実母）と祖父（父の実父）と垂水区の実家で三人暮らしをしていた。ここからは、父の目線で書いていく。

（1） 仕事

当時運送の仕事をしておりいつも大体６時ぐらいに起きていた。その日は突然の地鳴りと激しい揺れに叩き起こされ、その時は何が何だか分からなかった。すると二階で寝ていた私に一階から家族が「地震だ！早く起きてきなさい！」という声が聞こえ、ようやく状況が少し分かった。慌てて外に出てみたがその後揺れもなかったのでいつも通り仕事に行くことにした。仕事に行く途中で事の重大さが徐々に分かってきた。道は寸断されていて家が一部崩壊し電柱は倒れ信号も点かず道路はパニックになっていた。会社は西区にあり会社までなんとか行けた。会社につくと皆が地震の話をしていた。社員の半分は来ていなかった。とりあえず神戸の現場に配達に行くことにした。高速は走れなかったため西区から二号線で神戸に向かった。いつもなら一時間ほどで着くのだが道路の崩壊などで結局神戸に着くのに七時間かかった。道中長田、兵庫はすさまじい光景だった。瓦礫の上を走らなければならないところもあった。そんな状況が２、３カ月は続いたのを覚えている。

（2） ライフライン

震災後水とガスが使えなかった。最初は水が出ない重大さがわからなかったけど、水が出ないとトイレを使うことができずようやく分かった。近くの店にはもう水は無かった。少し離れた知り合いの家は水が出たので貰いに行った。次の日、自衛隊の給水車が公民館まで来た。しかし、長蛇の列でこのまま並んでいても水は貰えないと思い諦めて家に帰ろうとしていた。すると一人のおばさんが「お兄ちゃんあそこに行ったらお水もらえるよ」と教えてくれた。そこにいってみると井戸がある家があり、そこのお婆さんがみんなに水を分け与えていた。その水は飲むことはできず生活用水に使った。見ず知らずの方にわざわざ井戸から水を汲んで分け与えるお婆さんの姿に感動と感謝を覚えた。

震災から一週間したころ父の知り合いからガスコンロが届いた。ガスが止まっていたので本当に有難かった。温かい食事ができる有難みと喜びを感じ涙した。私はお風呂に入れていなかったのでガスコンロでお湯を沸かしお風呂にお湯を溜めて入ろうと考えた。しかし、お湯を沸かすには時間もかかり真冬だったこともありお風呂にたまった水は入る頃には冷たかった。だが一週間もお風呂に入れておらず私は我慢して入った。

（3） 震災後

私は仕事で神戸、長田に行く機会が多かったのでひどい状況を何度も見てきた。震災後も何年かはそういうテレビの特集を見ると胸が苦しく涙が出てくるような精神状態だった。しかし家族もでき一歩一歩進んでいかなければならなかった。そして、仕事や家族のことをしているうちに時間と共に薄れさせていくことができた。震災があったということは、決して忘れてはいけないけれど健康的に生きていくには時間と共に忘れていくことも必要だと感じた。

３ 感想

私は初めて聞いたことばかりでとても驚いた。まず、阪神・淡路大震災のことを学んでいても母と父の体験を直接聞くことがなかったからだ。また、そんな話をする機会もなかったからだ。阪神・淡

路大震災を学んでいるからこそたくさんのことを感じられた。両親の体験ときちんと向き合ってとても貴重な話を聞けてプラスになったと思う。消防、自衛隊、大阪ガスなどたくさん聞いてきたけど、身近な人の話を聞くことも大事だということが分かった。そんなに大きな被災をしていなかったことは知っていたが、だからと言って大変じゃないわけではないというのが伝わる。父はとくに仕事に行く際に被害が大きかった地区をみていたのでとても話が生々しかった。写真でよく目にするあの写真、映像が目の前に広がっているのだ。震災後に反応がでないわけがない。体もそうだが心にも負担がかかっていたのだなと感じた。

（1） 母の話を聞いて

私は起震車で何度も阪神・淡路大震災の揺れを体験したことがあるが、あの縦揺れを経験して普通でいられるわけがないと思う。揺れているときもそうだし、揺れ終わったあともそうだ。たまに下から突き上げられるような揺れを思いだすことがある。それほど激しい揺れで体が覚えているほど怖かった。また高校一年生の淡路での合宿のとき比較的大きい揺れにあった。被害はなかったが、揺れているとき本当に怖くてこのまま死んでしまうのではないかと思うぐらいだった。そして余震が怖かった。だけどそんな中、勇敢に女の子の靴を取りに行った祖母は本当にすごいと思う。祖母自身の心境はわからないがとても強いなと思った。裸足の女の子が隣にいて私はその子の靴を取りにいけるかと言われたら行けるとは到底言えないだろう。次起こる余震が怖くておびえると思う。靴を取りに行った祖母は勇敢でコートで暖めてあげた母は優しいなと思った。震災時、人がとても優しかったと両親は口を揃えて言う。二人とも誰かから食料や水を分け与えてもらっているからかもしれない。父が「あの優しい人たちはどこにいったんやろう。」と言っていた。普段から人に優しくするべきじゃないかと思った。災害時お互い様と言って助け合えて手を取り合えるのは日本人のすごく良いところだと思う。だけど災害時だけではなく日常から相手に思いやりを持って生きたいなと思った。それがまた防災につながるからだ。

（2） 父の話を聞いて

震災が起きてからも仕事に行かなければならない状態というのはやっぱりしんどかっただろうと思った。七時間もかかったというのは本当にびっくりした。しんどいというレベルではない。ストレスがたまっていたのではないかと思った。また、父が「忘れていくことも必要」と言っていた。震災を知らない私にとったら阪神・淡路大震災は風化させてはならないものだと思っていた。だけど経験した方にとったらもしかしたら忘れることも大事かもしれないと大切なことに気づくことができた。忘れることで一歩前に進むことができる。そういう考えも必要だなと思った。被災者にとったらこの言葉は楽になるかもしれないとも思った。風化させない一点張りもいいけどきちんと色んな角度から見ていきたい。

当たり前にある水、電気、ガスのライフラインはやっぱり災害時大切なのだなと思った。私は水を出しっぱなしにすることはあまりないけれどそれほど水にありがたみを感じて生きていないと思う。出て当たり前が定着してしまいもったいないという感覚もあまりないからだ。ライフラインが途切れて大変だった話を聞いて「やっぱライフライン大切なんや。」と思うのではなく、普段から意識しておきたいと思う。また水はきちんと補充してある。環境防災科に入ってから必要なものなど母と揃えきちんと備えている。備蓄は防災の基本だからだ。私の家はガスではなくＩＨだ。もし私の家の周りの方がガスで、温めるときに困っていたら積極的に助けてあげたいと思う。近所同士ではとても仲が良く毎年、忘年会をする仲だ。学校に行くときにすれ違うと「おはよう、いってらっしゃい」帰ってきたら「おかえり」と声をかけてくれる。この会話が当たり前になるぐらいコミュニティは強いのだなと感じる。このコミュニティを災害時最大限に活かすことができたらいいなと思っている。また周りを巻き込んだ防災をできたらいいなと思う。災害時、私が地域を守りたい。

（3） 環境防災科に入って

正直に言って、こんなに三年間で色々な分野を勉強するとは思っていなかった。中学生の自分に心のケアを勉強すると伝えたらきっとびっくりすると思う。それぐらい視野も狭かったし震災のことを表面的にしかわかっていなかった。地震以外でも土砂崩れや人災、洪水、貧困問題などたくさんのことを学んでいる。時には英語で阪神・淡路大震災のことを学んだ。そのおかげで幅広い知識を付けられた気がする。また考え方やモノの見方も変わり自分自身考え方が変わったかなと感じた。

私は、高校二年の八月に丹波で起きた洪水の被災地に行き泥かきをした。初めは、体力がなくて心配だった。もし行って倒れたら迷惑になるのではと思うぐらいだった。だけど担任の先生ができることはあると言って下さり行くことにした。生まれて初めて言葉で表せないという感情が目の前に広がっていた。遠くから見てもわかるほどの土砂崩れだった。現地に入った時もなぜか複雑な気分だった。だけど私は目の前にある泥を精一杯かき集め頑張った。昔の私はきっとしんどくて途中であきらめていた。兵庫県ということと災害のおそろしさを知っているからこそ頑張れた。心もとても成長できたなと思った瞬間だった。災害の感じ方が変わった今私に何ができるか、環境防災科の生徒としてしっかり考えたいと思う。成長できただけで終わらせてはいけないと思う。

（4） これから

私は今心理学を学びたい。そしてカウンセラーになりたい。 Active 防災Ⅰで勉強したのがきっかけだ。両親の災害後の反応を聞くとやっぱり誰にでも起きる身近な反応なのだと思った。私は心理学と言う知識を付けて災害後心のケアをしていきたいなと考えている。自分のしたいことと防災を組み合わせられるのは環境防災科生だけにできる特別な事だと思っている。そのためにきちんと災害の勉強をしていきたいと思う。災害という知識があってこそだと思うからだ。ただ誰かの役に立つのではなく、支えになりその人の心に寄り添いたいと思っている。心理学の知識さえ持っていれば、身近な人を助けることができるかもしれない。誰かの心が楽になるかもしれない。いつどこで起こるかわからない次の災害までに、対応できる力を持っておきたいと思う。

（5） １．１７

小学生のころ冬の寒い日に朝早くから両親に起こされて何かの光を見に行ったことがあった。当時私はまだ幼く光の意味も朝早く行く意味もなんとなくしか分からなかった。なぜ朝早くにいくのか。その思いが強かった。また、連れられていくという感覚だったかもしれない。光を見たあと両親の後に続き手を合わせた。わからないことだらけで感じるものが少なかった。小学校で「しあわせ運べるように」をみんなで合唱し、震災を少し勉強した。その頃はまだ震災の恐ろしさに気づいてなかった。今思うと小学生・中学生にきちんと伝える作業をしたほうがいいと思う。神戸市民として日本人として知っておいてほしい過去だと思うからだ。高校一年生になり無事環境防災科へと進学した。阪神・淡路大震災のことをたくさん学びたくさんの方の話も聞いた。1995 年 1 月 17 日から 19 年目になる日。始発に乗り東遊園地へと向かった。初めて自分の意志で行くようになった。高校生になり環境防災科の生徒になり一年で阪神・淡路大震災のとらえ方が 180 度変わった。復興のこと、支援のこと、心のケアのこと、1.17 であったこと。数字ではわからない事実を外部講師が教えてくださった。そして昔見た光が目の前に広がっていた。感じるものが多すぎて涙を堪えきれず気付けばたくさん泣いていた。灯篭の光は忘れられないぐらい綺麗でとても心に響いた。光を見ると絶対に風化させたくないという意思が強くなった。そして 6434 人のご冥福を祈り、手を合わせた。20 年目の 1 月 17 日も東遊園地に行った。20 年目はあの日からの節目にあたる。想像以上の人の数に驚きを隠せなかった。それぞれの思いを胸に皆が手を合わせていく。経験していないのにここにいて本当にいいのかという不安な気持ちにもなった。たくさんの方が、悲しみや震災の怖さを胸に訪れていた。私は絶対にこれからも東遊園地に行き続けたいと思う。行き続けることが何より大事だと思っている。そして絶対に風化させたくないと強く感じた。阪神・淡路大震災の経験はしていないし、姿形もなかった 20 年前。だけどそれなりに被災者の方の話に三年間耳を傾けてきた。その分たくさん私なりの思いは持っている。そしてなにより私は神戸育ちの神戸市民だ。だから私は、阪神・淡路大震災を絶対に忘れない。自分の町で起きた悲惨な出来事を忘れてほしくない。地震はいつどこで起こるか全くわからない。30 年後かもしれないし 10 秒後かもしれない。だから、周りを大切に生きていきたいと思う。後悔しない生き方をしたい。もし人間が敵わない災害が起きたとしても親に守られるのではなく、私が親と町を守っていきたい。そして父と母の体験を語り継ぐことは、私にしかできないことだと思っている。

語り継ぐ

久保田　大貴

１　はじめに

阪神・淡路大震災発生当時、ぼくの母と祖父母はそれぞれ互いに離れた地域で震災を経験している。
僕はまだ生まれていなかったが、母と祖父母の経験から語り継ぎたいと思う。そして今の自分に語り継ぎに関して何ができるかを考えながら綴りたい。

２　地震前

母は、地震の前日信州に仕事場の同僚と日帰りでスキーに行っていた。神戸行きのバスがなかったため、大阪行きのバスに乗りそこから電車で神戸に帰るはずだった。
須磨に住んでいる祖父母の家では母の姉の友達が泊まりに来ていた。

３　地震発生時（母の体験）

その時、母は大阪の梅田駅の始発の電車に乗っていたがまだ電車は動いていなかった。地震が起きた時、今までに感じたことのない揺れだった。まるでレールが外れるような感覚だったという。その時は母も大阪だけがすごいと思っていたそうだ。車内アナウンスでは「しばらくお待ちください」と流れるが、どれだけ待っていてもなかなか動かなかった。母の同僚の一人が仕事場の上司に連絡を取り、そこで初めて神戸の街がひどいことになっていると知った。まだ具体的な状況は分かっていなかったが、大阪よりも神戸のほうがダメージを受けていると確信したそうだ。心配になった母は祖父母(母の両親)に連絡を取った。奇跡的にこの連絡はつながったが、祖母は半泣きの状態で今の家の状況を伝えたそうだ。その連絡以降、祖父母とは一度も連絡がつかなかった。それからは梅田駅に滞在していたが午前 11 時くらいに駅員に、「これ以上は動きません。」と移動をお願いされたそうだ。神戸に帰ろうとしても、帰る手段がなかった。しかし父の仕事の上司が高槻に住んでいて、この人とも奇跡的に連絡が取れたので迎えに来てくれた。かなりのスピードで飛ばしたそうだが、それでも到着した時間は午後の２時だったという。車は定員オーバーの状態だった。通行規制などがかかっていたところもあり、ルートが限られていた。神戸に向かえば向かうほどひどい状態になっていた。神戸の市役所に向かっていた車が到着した時は夜の９時になっていた。つまり約７時間もの間車に乗り続けていた。神戸の市役所はほとんど避難民で溢れていたという。母の同僚が被害の少ない北区に住んでいたので、そこの家に３日間泊めてもらうことになった。北区では神戸とは思えないくらい無傷で普段通りの生活が送れていたので、震災が起こっているのも忘れるような生活だったという。しかし祖父母のことを思うと早く家に帰りたい気持ちが強くなったので須磨に向かう車に乗せてもらった。須磨に着けばほとんどの家がなくなっていた。前まであった家がなく母は驚いた。祖父母は無事であったが、須磨では北区と真逆の生活だった。ライフラインがないので何もできない、家の掃除もできない、食べ物もない。唯一祖父が風呂の水をためていたのでトイレには困ったりすることはなかった。母の実家は石油ストーブだったので餅などを焼いたりして過ごしていた。

４　祖父母の体験

阪神・淡路大震災が起きたとき、祖父母は偶然の重なりで怪我も何一つせず、助かったと言っていた。
まず一つ目は家具がしっかりと固定されていたことだ。祖父母の親戚が建築士の方であったので地震が起きる前から偶然、家具の固定をすごくすすめられていた。本棚に関しては、もし固定されていなければ祖父母の寝室に倒れていたので生きていなかったかもしれなかった。
地震の大きさはとてつもなかった。電気の傘が３メートルほど吹っ飛び、テレビも飛び、冷蔵庫が転倒し、あたり一面には割れた食器が散らばったという。風呂場ではお湯を張るタイルが地震の影響でぽっかり穴が開いていて風呂には入れない状況であった。

偶然旅行に行っていた母が普段寝ている寝室はあちらこちらの家具が倒れていたので、もし部屋にいたら助かったか分からなかった。祖母はこれだけ家のあちこちが無茶苦茶な状態になっているのに家族誰ひとり怪我していないのが不思議で、助かったと言っていた。

地震直後は近くの東須磨小学校に避難をしに行ったが、余震や火事などが周辺で起こっており違う場所への避難を考えていた。そこでたまたま近所の方が車を貸してくれて、四人乗りの車の中で被害が収まるまで待機していた。瓦屋根の家は多くが倒壊している中、祖父母の家は瓦であるのに潰れていなかったが、地震直後は余震でいつ倒壊するかわからない状態だった。その時に親戚の大工さんが「このままじゃアカン」と言い早急に駆けつけ瓦を屋根から下ろす作業に力を入れてくれたそうだ。そのおかげで祖父母の家は余震で崩れることはなかった。

水に関しては、祖父が普段から毎日須磨寺の神社に水を組みにいって家に貯めていたので困ることはそんなになかった。食料は正月の餅がたくさん余っていたので石油ストーブの上に乗せて焼いて食べていた。

２、３日は余震が続き、地震から４日後、祖父は仕事場に出勤をするようになったが、道のりはやはり大変だった。自宅から鷹取駅まで歩き、電車に乗ったが神戸駅で止まりそこからは三ノ宮まで歩いた。三ノ宮駅では観光バスが災害支援のために送迎をしてくれたという。

５　復旧

一番復旧が早かったライフラインは電気（震災から１週間後、夜の８時頃だったという）、その次に復旧したのが水道であるが（震災から１か月後）特別遅かった地域もあった。車が通れないほど狭かった地域には差が出た。

ガスは４月になってからだった。これにも地域によって差が出る。そういった地域の人はお風呂が炊けるようになった祖父母の家にお邪魔したそうだ。また、近所同士で一緒にご飯を食べる機会も増え、地域のつながりが強くなった気がしたと言っていた。

６　感想

震災を語り継ぐということで、親や祖父母に震災の記憶を聞くことになった。今まではその内容を詳しく聞くことはなかったが、今回の機会で今まで自分が知らなかった親の苦労を知ることになった。阪神淡路大震災当時、たくさんの偶然が重なって震災から生きてこられたと言っていた。母がもし旅行に行っていなくていつも通り家で寝ていたら生きていたかわからないと言われ少しゾクッとした。あの時僕の母が生きていなければ当然僕も今存在していない。そんなことを考えてしまうと、普段しつけなどにうるさい親でうっとうしいなと思う日もたくさんあるけれど感謝と尊敬の気持ちを絶対に忘れてはいけないなと改めて思うようになった。またこういった厳しい状況を生き抜いた母、祖父母の偉大さというものにも気づいた。そして聞いた話をどう語り継ぐのか色々な方法で真剣に考えないといけないなと思った。この文集は舞子高校のホームページに載りますが、それだけで知ってもらうのではなく自分の力で母、祖父母から聞いたことを他の人にも発信できる方法を探していかないといけないなと思う。今回祖母は偶然で助かったと言っていたが、耐震の重要性を強く感じた。阪神淡路大震災までは耐震ということにあまり積極的ではなく地震に弱い建物が多かった。家に補強している家としてない家はすごく差が出るのだなと改めて思った。阪神淡路大震災が起こる前の家は瓦屋根の家が多かったと言われるが、今は神戸の街に瓦屋根の家があることは珍しいと母が言っていた。

阪神淡路大震災は神戸に住んでいる以上知っておかなければいけない大災害。この災害を聞いて知らないと答える人は神戸にはいないと思う。そのくらい忘れてはいけない出来事だ。「震災はその人の人生をすべて奪った」このことを絶対忘れたらいけないよと祖母から強く教えてもらった。その人の恋人、家族、家、職場など奪われた人が山ほどいた。「なんでこんなことになった」と絶望した人もいる。普段、僕が当たり前のように過ごしている平和できれいな神戸の街にいられるのはここまで震災を乗り越えて街を回復させていった神戸の人たちのおかげだよと言われた。まさにその通りの言葉ですごく感動した。震災発生から二十年が経過し、少しずつ経験者が減っていくような時間の経過を感じる。経験者が少なくなるということは語り継ぐ人が少なくなるということだ。阪神・淡路大震災を風化させないために新しい世代の若者が震災を知らない世代に伝えるというボランティアもある。

僕は環境防災科に入るまで、毎年行われている１．１７の追悼行事にはあまり興味を持たずお決まり事のような行事だと思って参加していた。今思えば、すごく失礼な態度だなと自分でも思う。その時は自分の目の前のことにしか興味を持たず、社会の出来事にはなんの関心もなかった。そして環境防災科で社会の防災に対する取り組みなどを学んでいく中で初めて震災を語り継ぐ大事さに気づいた。『災害は忘れたころにやってくる』この言葉の通り、たとえ阪神・淡路大震災のような大災害でも弱点を補強したりせずに忘れてほったらかしにしてしまえば、また同じような結果になる。そんなことが二度と起こらないためにも防災を学び、震災の経験を語り継いでいくことはとても大切なことだと思う。ここまで豊富なボランティア経験と防災知識を持っているたくさんの外部講師の方のお話を聞いてきたことは自分の中に留めておくものではなく周りの人に発信していかないといけないなと思ったが、そう思っていながらなかなか行動に移せていないのが今の僕の現実だ。
市民のリーダを育成することが特徴の環境防災科にいる僕はこれまで環境防災科で学んできたことを伝えることができる職業につきたいなと思うようになった。

僕は、警察官になることが夢だ。しかし警察官という職業は防災とそこまで深いつながりはないと言われている。なぜ警察官になりたいかというと、最初はある刑事ドラマへの憧れから始まり刑事ってかっこいいなと思うようになった。防災と震災のことを語り継ぐには僕の憧れる刑事課では難しいと思う。でも生活安全課であれば、地域の方と交流する機会が多く防災を語り継ぎやすいなと思う。例えば、近所のおじいちゃんおばあちゃんや、子供達と会話をつなげていき「南海トラフ地震起こったら、どうする？」や、「耐震化ちゃんとしています？」など、最初はたわいもない話だけれど地域の人に防災の重要性を知ってもらえる機会が多くなると思う。いつか必ず起こるであろうと予想されている南海トラフ地震も地域の防災意識を少しでも高めることによって予想される事態から大きく変わることができると思う。恥ずかしい話ここまで環境防災科で学んできたことを発信できずにいた。もし自分の夢を叶えて警察官になることができたら、できていなかったことに挑戦し地域の活性化に貢献したいと思っている。

最後に、今僕がこうして生きているのは両親の苦労や、震災から復興するために立ち上がった神戸の住民の苦労のおかげであることは絶対に忘れないようにしたい。また、このことを語り継いでいき世代を超えて伝えていきたい。

大阪の阪神・淡路大震災

駒井　櫻

１　はじめに

今から 20 年前の 1995 年１月 17 日午前５時 46 分、神戸の町は甚大な被害を受けた。たくさんの人、町、思い出…今まで積み重ねてきたように思っていたものが崩れ、火に包まれた。しかし、この話は、私が聞いた話であり実際に経験した話ではない。後の文は、私が生まれる約２年前の出来事である。当時の私の家族は父、母、そして生後３か月だった姉の３人家族だった。家族は神戸市ではなく大阪市で生活をしており、産まれたばかりの姉を中心に生活をしていた。また、親戚全員が神戸市には住んでいなかった。

この“語り継ぐ“を構成するにあたって、当時、比較的被害の小さかった大阪市に住んでいた家族ではなく、あの日、神戸市で震度７を経験した方から話を伺ったほうがいいのではないかとも考えた。しかし、先生に相談を持ちかけると、「阪神・淡路大震災は神戸だけじゃないからね」と返ってきた。阪神・淡路大震災＝神戸市というイメージが定着しているが、実際は神戸市だけが経験したのではない。そのため、この機会を使って、私だからこそ書ける、少し離れた大阪市で経験した家族の阪神・淡路大震災、また大阪市から見ていた当時の神戸をここに残そうと思う。この文を読み、どこかの町で災害があったときに、他人事とは考えず未災地にできることをあなたが考えてくれることを願う。

２　大阪市の被害

当時、家族が住んでいた大阪市鶴見区は、私も小学５年生まで住んでいた町だった。その頃までの私の記憶によると、誰もが思う“便利な町”そのものだった。コンビニエンスストアもスーパーマーケットも駄菓子屋さんも洋服の有名ブランドが集まるデパートのような店も、徒歩で行ける場所にあった。また、治安も良く、お祭りや近所の人が集まり行うラジオ体操、子ども会などの地域のイベントが多かったため、コミュニティは強い町だった。1995 年、その年も私の記憶と同じような町だったという。

家族３人、８階建ての団地の２階に住んでいた。寝室は、父が大きな部屋を１人で使い、母と姉が２人で小さな部屋を使っていた。そして、あの日もいつも通り別々の寝室で寝ていた。午前５時 46 分、大阪市でも大きな地震が発生した。母の記憶からすると、ドンッ！と大きな縦揺れが最初にきたという。その揺れに母は起き、即座に生後３か月だった姉に覆いかぶさるようにして守った。あの時、別の寝室にいた父は、あの時間帯にもかかわらず布団に入ったままテレビを見て起きていたという。ドン！と父の部屋でも大きな縦揺れが起きた。そして、大きな揺れとともに、見ていた大きなテレビが父の方に倒れてきた。咄嗟に父はテレビを支え、家の中の被害を小さくしようとした。この時のことを母は「大阪は震度４やった」と話していたが、後に調べてみると、大阪管区気象台の発表では震度４となっていた。しかし、それは気象台が地盤の強固な上町台地の上にあるからであり、大阪市内の大半では実際は震度５であったことがわかった。母は、当時の情報を鵜呑みにし、20 年たった今でも事実を知らなかった。このことから、当時の情報の信憑性が欠けていることがわかる。揺れが収まると、両親と抱きかかえられた姉は、安否を確認し合った後、すぐに玄関の扉を開けに行き、右、左と横を見た。隣近所の人も当たり前のように全員が扉を開け玄関の外に出ていたため、助かっていることを確認し合えたという。そこでいつものように、今の揺れは何だったのか、家族は大丈夫かどうか、家の中に被害はあるかどうか情報交換が始まった。当時住んでいた団地では、どんなに小さな地震でさえもすぐに家を出て安否を確認し合うことが当たり前であった。幸い、家族は２階だったことなども関係したのか全員擦り傷１つせず助かり、タンスが倒れてくることも、お皿１枚ですら割れず、本棚の本が落ちてくるだけの被害で収まった。また、鶴見区は外壁のブロックが倒れるなどの被害もなかったという。後に母が聞いた話では、団地の人の中には、いつも通り玄関の扉を開けようとすると開かなかったという人がいたらしく、そこで初めて地震の時は扉が開かなくなることがあることを母は知った。しかし、大阪市でこれだけ被害を小さくでき、たくさんの命を救えたのは、

“地震があればすぐに家を出て安否を確認する“という日ごろからコミュニティの強さがあったからなのでないかと思う。

３　震災に対する捉え方の違い

父と母は家の中に入ったあと、すぐにテレビをつけた。そこには神戸の町が映されており、やっと両親は事態の大きさを知った。大阪と神戸の被害の差は大きく、テレビで映される神戸の光景が母には戦争のように見えた。そこで、両親はたまたま運が良かったことで助かったということを知った。17 日が過ぎた次の日も、また次の日も、テレビでは避難所などの神戸の様子が放送されていたという。震災が起きて少し経った後、父は原付バイクを走らせ神戸によく向かっていた。バイクを走らせて見た神戸の光景を、父は「ほんまにすごかった」という言葉で表した。当時、父は工事現場の仕事に就いていたため、仕事で神戸を訪れ、阪神高速道路の復旧に携わっていたという。しかし、この時の話を父は今までしてくれたことはなかった。父からこの話を聞いた時、父は辛そうに話すのではなく、顔色を変えず淡々と話していた。そこには、身近に失った人がいなかったことや、大阪と神戸の被害の大きさの違いにある阪神・淡路大震災の捉え方の違いがあった。きっと今でいう、東北と関西の東日本大震災に対する捉え方の違いのようなものだろう。そんな父を見て少し悲しかったが、この神戸と大阪の間にある溝が当たり前であり、当たり前であったのが現実だった。

地震から少し経ったある日、団地に女性の方１人と小さな男の子３人が引っ越してきた。後日、この家族は、神戸で阪神・大震災を経験し、女性の旦那さんは建物の下敷きになり亡くなっていたことを母は知った。当時小さかった３人の男の子は大きくなり、あの時のことを振り返ったとき、私の母に「母（女性）は当時ずっと泣いていました」と話してくれたという。この家族のように、神戸から引っ越してくる方は少なくはなかった。この家族は生き続けてくれたものの、もしかしたら自分から命を絶っていたかもしれない。そのような方に、大阪の人はどう接するべきだったのだろうか。心のケアが必要だったのではないだろうか。

４　私が知っていた阪神・淡路大震災

（１）　歴史の世界

震災から２年が経った 1997 年に私は大阪市鶴見区で生まれた。両親や親戚は、震災が起きたとき、擦り傷１つ被害がなかったため、震災の話を聞くことはなく、何も知らずに大阪で育った。小学校に入学すると、道徳の授業で阪神・淡路大震災をテーマとして取り上げられることは数回あったが、小学生だった私にとってみれば、“どこかの場所で昔に地震があった”という印象でしかなく、阪神・淡路大震災は教科書に出てくるような実際に起きたかどうかわからない歴史の世界のような感覚だった。もちろん、どこで、いつ、どのくらいの規模で、どんな被害で、どれだけの人が犠牲になったのかなど、知っていることよりも知らないことの方が多かった。

（２）　大阪から神戸へ

何も知らずに育った私は、小学５年生の時、大阪市から神戸市西区に引っ越してきた。そこで初めて、その地で震災があったことを知った。しかし、「ここやったんや～」と、まだ教科書に出てくる歴史の世界の出来事にしか思えなかった。だが、阪神・淡路大震災をテーマに扱う学習時間の多さは、間違いなく神戸の方が多かった。被害の大きさの違い、それは人の意識の違いにも繋がり、その後の将来にも関係してくるものだということを小学生ながらに感じた。大阪と神戸、遠いようで近いのに、意識、震災の捉え方、震災学習の時間、何もかもに差があった。阪神・淡路大震災をきっかけにつくられた“しあわせ運べるように”という曲も、神戸に来てから知った。この差をこのままにしていては、南海トラフ巨大地震の時、阪神・淡路大震災の教訓が生かされることはないだろうと私は思う。

５　環境防災科

先ほども述べたが、ほとんどを家族と大阪で過ごしてきていたため、阪神・淡路大震災について何も知らず、かといって学校で勉強することも少なかった。今は専門的に学んでいる防災も、言葉の意味すらしっかり理解できてはいなかったし、それ以前に“防災”という言葉自体が身近になかった。

また、ボランティア活動に対しても、“親切な人がする活動“というイメージがあり、自分には関係ないと他人事と捉えていた。しかしそんな時、私が中学１年生だった 2011 年に東日本大震災が起きた。あの震災は私にとって生まれて初めての大きな災害で、未災地である神戸にいた私にとっても衝撃的な災害だった。また震災が起きて当分は、テレビで津波の映像を見るたび気分が悪くなったりもし、その映像は震災から５年近く経った今でもはっきりと覚えている。また同時に、もしかすると自分にでもできることがあるんじゃないだろうかと根拠は何もなかったが、支援をすること、ボランティア活動をすることに初めて興味を持った。それほど、今までとは違った考え方にガラリと変わり、初めての感情の連続だったのが私にとっての東日本大震災だった。そんな時に出会ったのがこの環境防災科だった。震災が起きた 2011 年、年に一度だけ放送されるある有名番組を見ていた。そこに映っていたのは、高校生という立場なのに、東北に足を運び、大人と変わらないボランティア活動をしている環境防災科の生徒たちの姿だった。その姿は私にとってすごく衝撃的で、それから２年後、東日本大震災で被災された方や町のために出来ることを探していきたいとの思いから環境防災科に入学することを決めた。この入学をきっかけに、両親の震災に対する意識も変化していった。

６　私から家族へ　語り継ぐ

入学してから、警察官、消防士、救急救命士など、たくさんの方から阪神・淡路大震災の話を聞かせていただく機会があった。何も知識がなかった高校１年生の時の私は、授業のたびに驚きと悲しみでいっぱいいっぱいになり、しんどかった時期があった。しかし、同時に、ありきたりな言葉かもしれないが防災の重要性や命の尊さ、助け合いの素晴らしさを心から理解ができた。高校２年生になると、念願だった東北訪問をさせていただいた。しかし、知識のなさと無力さを感じ、ここでもまたゴチャゴチャの感情でいっぱいいっぱいになった。できるだけ多くの人に伝えて広めていきたいが、どの言葉を使うべきで誰に話すべきかわからなかった。東北から神戸に帰ったら、まずは家族に話したいと思ったが、今にも泣きそうで自分から話せるとは思えなかった。しかし、家に帰ると、母が気を遣いつつ「どうやった？」と恐る恐る聞いてくれた。その瞬間、涙が止まらなくて、声は詰まる上に、説明力のない私が見た光景の話を、両親は「うん、うん」と聞いてくれた。これをきっかけに、授業で初めて知ったことがあると、両親に話し続けた。最初は、聞き流すように聞いていた両親だったが、今となれば、新聞にあった防災関連の記事を切り抜いてくれていたり、私の話にしっかりと耳を傾け話し合えるようになった。

幼い頃、両親から阪神・淡路大震災のことを詳しく聞かされることはなかったが、今は、私が両親に阪神・淡路大震災を語り継いでいる。子どもから親へ語り継ぐというのは、おかしいことかもしれないが、こういう形で震災を知っていくのもアリなんじゃないかと私は思う。私がこうして両親に話し続けるには意味がある。それは、単純に家族が大好きで、家族を災害から守りたいからだ。私が話すことによって、両親にも一つの行動、一つの備えで救える命があるということを知ってほしい。また、大阪で被災した両親にも、やっぱり阪神・淡路大震災のことをもっと知ってほしいと思う。

７　夢と防災

両親から聞いた大阪での経験は、神戸の人とは少し違うと思う。大切な誰かを亡くした人の今と、亡くしていない人の今は大きく違うはずだ。あの時、母親に抱きかかえられていた姉は去年 20 歳を迎えた。しかし、姉の記憶にあの時があるはずもなく、いつ起きたのかさえ知らない。学生時代、震災学習の時間も少なかったことが深く関係しているのだろう。また、1995 年 1 月 17 日以降、両親の生活に変化があったわけでもなかった。しかし、あの時の両親はきっと、東北に対する今の私の気持ちと同じだったんだろうと思う。何かしたいけど何ができるかわからず、ただ想うことしかできない、と。そのため被災した神戸の方からすると、何も被害がなかった両親から何も聞かされず何も知らずに育った私が震災を語り継ぐというのは失礼になってしまうかもしれない。私がこの“語り継ぐ“に残したいのは、そんな被害の大きさの差により生じていた災害や防災に対する意識や知識のズレである。このズレを誰もが被災者に合わせなければ、いつまで経っても同じ被害の繰り返しになってしまうのではないかと思う。

東日本大震災で衝撃を受け、なんとかしたいと必死の思いで入学した環境防災科を私はもうすぐ卒

業する。阪神・淡路大震災の教訓を基に設立された学科であるのに、入学当時の私は日付すら知らなかった。しかし学年が上がるごとに、災害を勉強するということが想像以上に残酷だということを知っていった。そして、同時にもっと救えた命があったのではないだろうかと思うようになった。この震災で亡くなった方の中には、きっと一緒に今を生きることができた人がいたはずだっただろう。この学科で高校生という立場なのに、東北訪問や丹波での災害ボランティア、募金活動など、様々なことを学習し挑戦できたことを私はすごく誇りに思う。また、そんな恵まれている環境があるこの学校に来てよかったと心から思う。私はこの環境防災科に入学し、防災をはじめ、貧困問題や心のケアなどの、そういった知識だけを学んできたのではないと考えている。私にとって環境防災科にいたこの３年間という時間は、人に対する思いやりや気遣い、気配りといった人として一番大切なことを学ぶことができた時間だったのではないかと思っている。

しかし私は将来、防災関連の職業に就くことは考えていない。そのことを、高校一年生の頃は正直大きな声では言えなかった。メディアに多く取り上げられる環境防災科は、「将来に期待！」と将来は防災関連に就くことを期待されているかのようなことをよく言われてきていたからだ。だが、高校２年生の夏、東日本大震災の被災地に訪問したことがきっかけで考えが大きく変わった。たくさんの児童と先生方が亡くなってしまった宮城県石巻市にある石巻市立大川小学校に足を踏み入れた時のことだ。その地に足を踏み入れた瞬間、「この亡くなってしまった子どもたちは自分の夢がそれぞれあって、でもその夢を叶えるどころか一歩挑戦することもできなかったんじゃないか」と思った。しかし、私には幼い頃から洋服に囲まれながら仕事をするという夢があり、しかも今、挑戦することができる。そういった目指すべき道を見つけることができたのは、石巻市立大川小学校で亡くなってしまった子どもたちとの出会いがあったからである。私は亡くなった子どもたちに、夢を持ち続け、夢に向かっていけることがどれだけ幸せなことかということを教えてもらった。

私は将来、ファッション業界に深く携わっていきたいという夢がある。高校卒業後はファッションの専門学校に進み、色彩や服作り、企画や運営の技術を学び、海外研修などさまざまな経験を経て夢を叶えていきたい。また貧困地域の生活の向上を目指す貿易の仕組みであるフェアトレードに携わり、フェアトレードと洋服を架けた商品を企画するのがその後の大きな夢だ。そして、もちろん防災にも何らかの形で携わっていこうと思っている。もしかしたらそれは、「職場で働いている時に地震があったら率先避難者になり、大きな声を出して全員を助け出す中心となる！」だとか、「火事があったら一番に消火器を持ってくる！」など小さな行動かもしれないが、傍観者にはならず、先頭に立ち災害時に頼られる人材になっていけたらと思う。

８　最後に

高校二年生で東北訪問を終えた後、ご近所の方々が「どうやった？私ら今の東北知りたいねん。また話してくれへん？」と声をかけてくださったことがあった。こうして声を掛けてくださるのは阪神・淡路大震災を経験した神戸の人だからなのだろうか。また、募金活動を行うたびに、募金してくださった方から「このお金は阪神・淡路大震災の時に助けてもらったお返しやねん。」という言葉を掛けていただいた。阪神・淡路大震災の心の復興はまだ終わっていないというが、こうして今、大変な状況の中にいる東北を想ってくれる神戸の人はたくさんいる。こういった方々がいるのは、阪神・淡路大震災があったからなのではないだろうか。

また、私が幼い頃、母からたった１つだけこの震災について語り継がれたことがあった。それは、震災が起きた時、それぞれが大変な状況の中にいるにも関わらず、炊き出しの列の順番を守り、譲り合っていたという話だった。そうして、母からたった１つこの震災について語り継がれていた話は、被害がどうだとか、死者がどうだとかといった話ではなく、神戸の人の“温かさ”の話だった。また、声を掛けてくださったご近所の方々からも、募金活動で声を掛けてくださった方々からも、感じてきたのは人の“温かさ”だった。阪神・淡路大震災で失ったものはたくさんあるが、失ったものばかりの震災ではなかったのだろうと思う。きっと、人の人に対する思いやりや温かさという、人として一番大切なことを教えてくれたのがこの震災だったのではないだろうか。

例えば、私たちの世代にとって戦争というのは、どうしても非現実的なものとして捉えてしまう。そして、阪神・淡路大震災も、専門的に学んでいる人、または経験していない人は戦争と同じように

非現実的なものとして捉えてしまっているだろう。しかし、もちろん、戦争も震災も間違いなく現実に起きたことである。だが、生まれる前に起きた出来事であろうと、たくさんの人も財産も思い出も奪い、たくさんの人の人生を変え、今に教訓を残してくれた阪神・淡路大震災を私たちは知る責任がある。何度も言うが、この震災は現実に起こったことである。絶対に忘れてはいけない。そして、絶対に現実のものとして受け止めなければならない。学ばなければならない。そのために、１つ願うならば、神戸市以外の場所でも、もっと震災学習の時間を増やしていってほしい。もし、私が今も大阪で暮らしていて南海トラフ巨大地震に遭ったら、きっと「知らなかった」で命を失っているだろう。阪神・淡路大震災、東日本大震災で亡くなった方々の命が教えてくれたことを無駄にすることだけは避けたい。語り継いでくれた父と母のためにも、阪神・淡路大震災を次は私が必ず語り継いでいく。

語り継ぐ

阪田　翔大

１　はじめに

現在高校３年の僕は阪神・淡路大震災を体験していない。これから出てくる文章は震災を実際に体験した母、父から聞いた話だ。

２　震災直後

当時、神戸市内にある５階建てマンションの２階に住んでいた。当日の朝は大きな横揺れとともに目
が覚めた。初めての大きな地震に動揺し、一瞬何が起こったのか分からなかった。そこでまず窓を開けて、外の様子を見たら近所の人たちがみんな外に出てきていた。それを見て外に出ようとしたが、台所の床には食器などが散乱していて危なかったので父が母の靴を取りに行き、一緒に外に出た。すると同じマンションに住む親戚も出てきて、顔を見ると血を流していた。タンスの上に置いていた物が子どものところに落ちてくるのをかばって怪我をした。すぐに父と母は舞子台病院に連れて行った。病院にはたくさんの怪我人が来ていたが、ロビーは電気もつかず床は水浸しになった状態でまともに患者の治療を行える状態ではなかった。応急処置だけしてもらい、家に帰った。

帰ってから最初に須磨に一人で住んでいる父の祖父に電話をかけたがつながらず、安否確認ができなかったので須磨まで車で探し行くが、行く途中の道中では、信号も止まり、がけ崩れが起こっているところもあり、東のほうを見ると火災らしき煙が見えた。須磨につくとたくさんの家が倒壊し、細い道、路地では道路がふさがり、遠回りするしかなかった。祖父は幸い救助隊の人たちにより家の外に出ることができ、怪我もなく無事であった。

３　震災翌日からの行動

震災の次の日から、父と母は母の実家に避難し共同生活が始まった。普通なら避難所に避難するが、実家は大きな被害を受けておらず、その地域だけ水と電気が通っていたので避難所に行かずに済んだ。

母は当時、和田岬の近くにある歯医者に勤めていたが電車も動いておらず病院自体もすぐに再開できる状態ではなかったので自宅待機となり、ずっと家にいた。家にいる間、当時祖母は役所に勤めていて、配給されたお米でおにぎりを作るボランティアをしていたのでその手伝いをしていた。電車が動き出したと同時に母の職場も再開。

父は当時、三宮にある会社に勤めていた。地震が起こったその日のうちに会社に車で向かった。道中から見える周りの景色はぐちゃぐちゃで、信号なども機能しておらず、交通網はマヒしている状態の中会社に向かった。会社に着くと、地震の影響で元の姿はなかった。もちろん会社が再開できる状態ではなったし、家族のことが心配だったため、すぐに引き返した。１年後ぐらいにその会社はまた再開しだしたが、父はその間、仕事をしないわけにはいかないので、転職という形でちがう仕事に就くことにした。

４　災害を経験して

母は、自然の力を目の当たりにして自然災害の「おそろしさ」「怖さ」を思い知ったが、それ以上に「人間の生きる力」のすごさを感じた。今まで作り上げてきた、家族や仕事など全てのものが一瞬にして失われた、何もないところからまた新たな希望や目標を持って、前に進んでいく強さを感じたからだ。全国からライフライン復旧のためまだ余震の続く中かけつけてくれた人々。ボランティア活動で炊き出しや支援物資を送ってくれた人。強さの中にも人の優しさを感じた。正直、こんなにも大きな地震が来ると思っていなかったので何の対策もしていなかったし、知識もなかったので少しぐらい災害について知っておけばよかった。そうすれば少しでも私も誰かの役に立つことができたかもしれない。阪神・淡路大震災をきっかけに地震に対して少し敏感になったし、深く考えるようになっ

た、と母は話してくれた。

５　僕の住んでいる地域

僕の住んでいるマンションでは、災害時どのような対応をするか、などの防災についての話し合いもなければ、そもそも普段の付き合いも少ないと思う。挨拶などは普通にするがそれ以上に関わることがない。目の前には公園もあるし大きなショッピングセンターもあることをもっとうまく活用できないか、とも思う。公園では小さなお子さんのいるお母さん方が毎日いる。難しいことではあるがそんな場面でいろんな人とコミュニケーションをとる。また、地域での防災訓練を実施することで少しでも災害時の避難がスムーズになると思うし、地域で何かすることでつながりが生まれ、強くなり、災害時でも近所の人たち同士で助け合うことができ、災害に強い地域になるだろう。住んでいるマンションは阪神・淡路大震災後に建てられたこともあり、僕の母も含めて住民は地震が来てもつぶれないと思っているのが事実なので、その意識をまず変えていかないといけない。僕は防災について勉強してきたのでその意識がだめなのが分かるが、防災の知識のない人たちに分かってもらうためにどう話していくのか。誰にでもわかる言葉で、なおかつ、一番伝えたい重要なことを主張していきたい。それをすることでみんなの意識が少しでも災害に向き、災害に備えようと思ってくれたら何よりだ。

６　夢と防災

僕は将来、教師になりたいと考えている。教師という立場で生徒や地域の人たちに防災を広めて根付かせていきたい。今の学校での防災に対する意識は低すぎると思う。定期的な避難訓練とたまに防災教育があるだけだ。それだけではしっかり対策ができているとは思えない。もっと頻繁に防災教育を行ったり、いきなり避難訓練を行うなど、災害の怖さであったり対策の重要さを知っておかなければならない。また、災害に備えるにあたって地域とのつながり、コミュニケーションが大切だと学んだ。学校と地域での共同の防災訓練や防災教育を行うことで、より地域とのつながりを深めることができ防災も広まると思うし、災害が起こった時に対応できるだろう。教師は災害時、すごく大きな役割を果たすと思う。生徒や地域住民の避難誘導、勤めている学校が避難所となれば避難所の運営などたくさんやることが出てくる。

僕は中でもやりたいことがある。一つ目は避難所で生活する人たちが少しでもストレスを感じないように衛生面をよくしたい。阪神・淡路大震災のときも避難所で水が流れないのでトイレがすごいことになってしまった。不衛生な生活により感染症を引き起こす原因やストレスを抱える原因となったと聞いたので、少しでも避難所での生活が苦にならないような気づかいや働きをしたい。

二つ目は心のケアだ。避難所に避難してこられる方のケアとして一人ずつちゃんと話を聞いて、困っていることがないか、というところから始めて、災害への恐怖や病んでいる心を和らげてあげたい。一番ケアしたいのは生徒だ。災害直後では、子どもが心理的影響を受けやすい。ＰＴＳＲやＰＴＳＤなどといったストレス障害に陥ることが特に多い。そんな子どもたちには災害直後だけではなく、中長期的に心のケアをしていく必要がある。その心のケアを行う大きな役割を果たすのが、子どもたちにとってとても身近な存在である親や教師だ。教師という立場からは難しい部分もあるが、毎日学校で関係を持ち、生徒のことをよく知っているのは教師である。親にも話せないようなことが教師には話せるかもしれない。そういったところで環境防災科に入って学んだ知識や経験を活かしたい。また、生徒の命を守る、地域の人の命を守れる立場の人になるためには、正確な判断と行動ができるようにこれからもっと勉強して幅広い視野と知識を持てるようになりたい。

７　ボランティア

高校に入ってから、いくつかのボランティアに参加させてもらった。地域との交流を深める夏祭り。小学生などに防災を教える出前授業。ひょうご安全の日というイベントへの参加。なによりも東北訪問。部活との兼ね合いがあり、たくさんのボランティアには参加できていないけれど、それでも数少ない中で学ぶことは多かった。授業などでは学べないものも、直接、人と関わるボランティアを通じて学ぶことができた。

高校２年生の夏休みに参加した東日本大震災被災地支援ボランティアは自分の中でものすごく濃い

2 泊 3 日となった。環境防災科に入った時から行きたいと思っていた。現地について町を移動する途中から見える景色や仮設住宅を訪問したときは言葉が出なかった。震災から 4 年が経つのに復旧が全然進んでおらず、瓦礫なども完全には撤去されていなかった。講義で聞く話はどれも悲惨で胸が苦しくなった。現地の生徒との交流で、いろんな考えを共有することもでき、すごく勉強になった。生徒との交流ではまだまだ自分の考えが甘いことや、具体的に何をしていきたいのかの思いの中身の差を感じさせられた。

今回の東北訪問で自分自身見つめなおさないといけない面もわかったし、今の東北の現状というのを自分の目と耳で感じることができ、高校生活で経験できるものの中でも一番僕の中で大きいものとなり、それがこれからの活動でも活きてくると思う。

震災を経験しているのとしていないので、少し状況、立場は違うけれどこれからやるべきことは同じだった。石巻の生徒も震災を忘れないために語り継ぐ、伝えていく、ということを言っていた。最後帰るときも、今回ここで聞いて、見て、知ったこと感じたことを同じ被災した地域である神戸でも伝えてほしい、と言われたので僕は伝えていきたい。それが数少ない東北訪問に行かせていただいた人にとって一番しないといけないことだと思う。そしてそれが体験を話してくださった方へのお返しになる。

8　感想

今回、語り継ぐ、を機会に母と父の当時の様子や心情、また、現在の心情を聞くことができた上に改めて災害の怖さやこれからしていきたいことなどたくさん考えることができた。僕が環境防災科に入ったことがきっかけで多少、阪神・淡路大震災の時のことや防災について話したことはあったけれど、ここまで詳しくじっくりと聞いたことがなかったので初めて知ることが多かった。環境防災科に入る前でも話せる機会は何度もあったけれど、詳しくは話してくれなかった。思い出したくないことがあり、まだ中学生の僕に話しても、という思いがあったそうだ。確かに中学生のころ僕だと、この「語り継ぐ」で聞いた話も聞いただけで終わっていただろう。だが今は違う。高校に入ってから防災を学んで、今の僕なら話を聞いてそこからどうしていくのか、どうしていかないといけないのかをそれなりに考えられるところまできたから話してくれたと思う。両親が話してくれたことは、これから大きくなって自分にも子供ができれば、伝えていくし、学んだことはもっと多くの人に発信していく。

年末年始に会う、あの元気な親戚の人が阪神・淡路大震災の時は子どもをかばって頭から血を流すほどの怪我をしていたとは、思いもしなかった。この世の中にはそのような人が何人もおられる。今では元気に働き、明るく過ごしているが心には大きな傷がある人も大勢いる。今僕は毎日をあたりまえのように過ごしている。父と母も含めて僕の周りいる人は普通に過ごしている。それがどれだけ幸せなことなのかを改めて感じることができた。

今回話を聞いたことや今まで勉強して学んだことで一番大切だと思うのはやはり、「災害に備える」ということだ。阪神・淡路大震災では神戸では地震は起きないと思っている人が多くて、十分な備えができていなかったことが被害拡大原因の一つの要因だと考えられている。この備えをしっかりとしていれば、どれだけ人の命を失わずに済んだか。ひとつはハード面である建物の耐震化や道路整備が不十分だったことだ。大きな揺れによる建物の倒壊や家具の落下によって亡くなった方や怪我をした人も大勢いる。これは前もって家の耐震化をしておくことや家具を金具で固定しておくことで、助かった命はいくつもあると思う。道路が狭く細かったことが原因で、建物の瓦礫が邪魔で消防車や救急車が通れず救助活動が遅れた。火災発生に対して、消火活動が遅れてさらに被害が拡大した。もっと救助の手がスムーズに市民の元に届くような道、街づくりが必要だ。そうすることでもっと救える命が多くあったと思うし、公助の活動がもっと活きたはずだ。

次にソフト面だ。ハード面を強化することは「備え」として重要ではあるが限界がある。最終的に一番必要なのはソフトの面だ。ハード面をいくら強化してもソフト面が強化されていないと意味がない。この阪神・淡路大震災で助かった命が、救いだした手段の中で消防・自衛隊・警察などの公助よりも共助によるほうが多かったと聞いた。全く知らない人同士がお互いを助け合った結果がいい方向につながったと思う。来るとも思っていなかった災害が来て、対策もしていなかったのにこれだけ出

来たなら、前もって地域全体、日本全体で防災について考え、備えていたら、もっと被害が小さくて済む。まず近くに住んでいるご近所さんとのつながりを深くして、コミュニケーションを普段からとることで災害時にも助け合える仲になると思うし、一つでも多くの命を救うことができるだろう。ハード面の強化は行政に任せて、ソフト面の強化を、防災を知っている人を中心に、各自治体で活動を行っていければいいと思う。

今回、「語り継ぐ」を通じて改めて阪神・淡路大震災のことについて考え、これからしていかないといけないことなどを、自分自身も含めて見つけることができた。これをこれからの世代の人など、大勢の人に発信したい。

９　これからすべきこと

環境防災科に入学してから３年間、過去の災害や防災・減災についてたくさん勉強してきた。僕たちは「環境防災科」というすごく特別な環境で特別な経験をさせてもらっている。課外授業でいろんなところに行っての勉強、実際の募金活動や防災教育、といった普通ではさせてもらえないことばかりだ。ということは防災を学んでいない一般の方よりは防災のことも災害時の対応なども知っているし、知っていないといけない立場である。また、実際に現地に行かせてもらい、被災者の方の話を聞かせてもらっている僕たちは、その聞いたことを自分の中で留めておくのではなく、防災を知らないもっといろんな人に発信していかないといけない。阪神・淡路大震災からもうすでに 20 年が経ち、世間では「過去の災害」と思われがちであるが、神戸の町は、体験した人の心はまだまだ完全に復興したわけではない。今でもあの時のことを思い出すとすごい恐怖感と不安に襲われる人も中にはいる。実際に体験した人も少なくなり、どんどん知らない世代へと変わっていく。そこで一番気を付けないといけないのが、風化することだ。あの悲惨な災害を絶対に忘れてはいけない。忘れないために、今まで環境防災科で学んできたこと、聞いた話を僕たちが語り継いでいかないといけない。被災体験を話してくださる方はその話を色んな人に広めてほしいという思いを込めて話してくださっている。本当は思い出したくないし、話したくなくても話してくれている方もいる。実際に体験していない僕たちに語り継いでいけるか、しっかりと防災を広めていくことができるのか、自信はないし不安のほうが大きい。それでも語り継ぐ。それがこれから災害が起きた時の備えとなり、減災につながると思うから。今回、卒業研究でこんな機会を与えてもらえてよかった。この「語り継ぐ」に書いたことを書くだけでは終わらせずこれからの生活、将来で実行していきたい。

語り継ぐ

佐藤　葉月

1995 年 1 月 17 日、私の母は祖母と犬の太郎と明石の住宅に住んでいた。母は友人とスキーに行く約束をしていた。

１　地震発生

母は友達とスキーに行く約束をしていたので５時 45 分に目覚ましをセットしお弁当を作ろうとしていた。布団の中で目を覚ましじっとしていると「カタカタ」という音が聞こえた。いつもは吠えない太郎が家の中を走りまわり吠えていた。すると「ドン」という音がなり祖母も母も布団をかぶった。その時の音は大型トラックが家の隣を走るような音だったという。母の寝ている部屋にはものがあまり置かれていなかったので倒れた物はなかった。揺れている間、台所からガラスの割れる音や物が倒れる音がしていた。母は布団をかぶり揺れが収まるのをじっと待っていた。

揺れが収まると母と祖母は台所へ移動した。食器棚から食器が飛び出し、床には食器が割れた破片が散乱していた。母と祖母は寝室の入り口のところでいつもスリッパを脱いでいた。だから地震が起きた時、足元をけがすることはなかった。足の踏み場はなく物をかき分けながら玄関まで行くとドアが開かなかった。

外から近所の人の話し声が聞こえていたのでドアが開かないことを伝えると近所の人に「蹴って開けろ！」と言われ、蹴って外にでた。すると外はまだ薄暗く、近所の人はパジャマに上着を羽織った状態で集まり何が起こったのか話していた。

２　揺れが治まってから

近所の人と話している間も余震は続いていたので家に入るのは危ないと言って外で待機していた。近所の人の情報で地震の震源地が淡路だということがわかった。何時に家に戻ったかわからないが、家に戻ったのは外が明るくなるころだった。家に入ると足もとはガラスが散らばっているので靴のまま入り、ガス、水道、電気が使えるか確認したがすべて使えなかった。でも、電気はその日のうちに使えるようになった。家の中で余震が起こると怖くなり、その度、すぐに走って外に出ていた。

３　状況の把握

周りがどうなっているのか、状況が把握できていなかったので母は近所の人と一緒に歩きながら確認していった。家の横の崖は崩れて、家の近くの高速道路ではガス管が破裂し火事が起こっていた。幸い、母の住んでいる地域では倒壊した家はなかったそうだ。そして母は、自分の目で確かめるうちに段々と被害状況がわかってきた。

４　避難所

余震が続いていたため、母と祖母は地域の小学校へ避難することにした。小学校に着くと多くの人が小学校の中庭に集まっていた。母はどうして体育館に入らないのか疑問に思い体育館を覗くと屋根が落ちていてとても避難出来る場所ではなかった。外で待っている人たちは寒さに耐えきれず体育館のガレキを集めて燃やし、暖をとった。

避難出来なかった人たちは母の住んでいた団地の隣にある小さな集会所に押し寄せた。集会所は足の踏み場がないほど避難してくる人でいっぱいだった。その日はみんな体を小さくし雑魚寝した。

５　安否確認

母はスキーに行く約束をしていた友達に連絡しようとしたが繋がらなかった。母の友達は新長田と東灘区に住んでいた。そして祖母の兄（母の伯父）は長田区の駒ヶ林に住んでいた。母は友人に何度も連絡したが繋がらなかった。母が連絡を取れたのは次の日だった。東灘区に住む友人の家は全壊したが近所の人に救出され、友人は無事だった。新長田に住む友人は家が倒壊し下敷きになったが自衛隊

に救出され無事だった。長田に住む母の伯父は地震が起きた後、家の近くの大正筋という商店街を見に行った。商店街は焼け焦げていて、遺体もそのままの状態だった。

６　震災から少し経って

母は何日もお風呂に入っていなかったのでお風呂に入るために少し離れたお風呂屋さんに行くとお風呂に入りに来た人で長蛇の列が出来ていたそうだ。冬だったのでみんな凍えながら並んでいた。母はお風呂に入るために近所の人を連れて加古川まで行った日もあった。また、地震が起きてから食料を調達するために近くのスーパーを回った。でもどこの店も商品が残っておらず食料や生活用品を調達するのが困難になったため車で西神の方へ行くと布団を干している家があり、とても地震があった地域には見えなかったという。

母は車で長田の友人に会いに行った。長田に行くまでの途中で電柱が倒れていたり、電線が垂れ下がっていたり、倒壊した家屋がたくさんあったそうだ。その中でも衝撃的だったのは道端に止まっている普通の乗用車に毛布でくるまれた遺体が置かれていたことだ。一体や二体ではなかった。長田に着き大正筋を見ると昔の面影は全くない状態で、戦争を体験したことのない母は「焼け野原というのはこのことをいうのだ。」と思ったぐらいだったという。まるで爆弾がおとされたような街。

母は助かった友人に会うために、長田の避難所を探し回った。長田のテント村を訪れ、友人と再会することが出来た。テント村では公園に点々とテントがはられていて避難している人が肩を寄り添いながら過ごしていたという。その中には外国の方、特にベトナム系の方が多かったそうだ。その後友人は震災が起きてからテント村で２，３カ月過ごした。

７　感想

（１）母と祖母の話を聞いて

環境防災科に入ってたくさんの人から防災のことや、震災当時の話を聞いてきた。外部講師の方の話で震災は恐ろしいものだということは分かっていた。自分の両親や祖母など多くの人が震災を経験した。でも、私の身近な人から当時の話を聞くことはあまりなかった。環境防災科に入るときも資料などから情報を得て両親からは簡単な話しかきいていなかった。今回、初めて震災について真剣に話を聞いた。いつもはあまり震災について話さなかったけど、今回話を聞いてみると、両親も祖母も当時のことを思い出して語ってくれた。20 年経った今でも当時、どこに行って、何をしたのか、母が出会った人の表情までも鮮明に覚えていた。話を聞くと、私の親戚で亡くなった人はいなかったが、家屋の下敷きになったり、被害の大きい地域に住んでいたために辛い体験をした人もいる。今回の「語り継ぐ」がなければ私の身近な人たちがどんな辛い体験をしたのか知ることはできなかっただろう。母も祖母も私が真剣に話を聞くまで語ってくれなかったと思う。語ることで当時の辛かった経験も思いだしただろうし、母に話を聞いたときは少し暗い表情をしていた。

以前、母に震災当時の話を聞いても母の住んでいる地域は被害が少なかったからあまり深く話は聞いていなかった。20 年経った今でも祖母は住んでいるし、特に震災の跡も残っていない。被害の大きい地域では何人もの人が避難所で生活をしていたのに母の地域では倒壊した家屋もなかった。被害が小さい地域と大きい地域ではこんなにも差があることに驚いた。母は被害の大きい地域と小さい地域のどちらも見ていた。被害の大きい地域に行ったとき、自分の住んでいる場所との違いに驚き、それと同時に何か自分にできることはないかと考えたという。その話を聞いてやっぱり当時の人は変わり果てた街の姿を見てお互い助け合わずにはいられなかったんだろうなと思った。

母の友人が長田に住んでいて危険だったことを聞いた時、母もその当時は不安な思いをたくさんしたんだろうなと思った。母は実際に亡くなった方の遺体も見ている。ショックだったに違いないと思った。母はあまり被害を受けていなかったから冷静になって身の回りの人の安否確認ができたんだと思う。母は被災した時の街の様子を鮮明に覚えていたので、倒壊した建物の近くを通れば当時の様子を教えてくれる。母のように自分はあまり被害を受けていなくても周りの人が危険な目に遭うことで同じように辛い思いをするということが分かった。被害の大小ですべて決まるわけではないと思った。自分なりに災害に向き合うことが大切だと思った。

「語り継ぐ」で話を聞いたことによって阪神・淡路大震災に対する思いも少し変わった。今までは

自分が体験してないことだし、私の身近な人もあまり被害を受けてなかったからどこか他人事だったけれど、自分の家族や親戚の話を聞くと震災が身近なものに感じられるようになった。もし、両親が震災で助かっていなかったら、もし、同じようにまた地震が起きたら... と怖くもなった。自分があの時の震災を体験していたら母と祖母と同じような行動がとれたのだろうか。きっと私ならパニックで動けないだろう。母は震災が起きた時、普段と違う状況だと理解できず自分の目で被害状況を確認するまでは地震だと信じることができなかったという。そんな状況の中で震災が起きた時、冷静に判断し行動した母と祖母はすごいなと思った。

（２）今、すべきこと

今回話を聞いたことを無駄にせず今後、起こりうる災害に活かしていかないといけないと思った。震災を経験していない地域ではまだ耐震工事や防災活動があまりされていない。阪神・淡路大震災、東日本大震災のような辛い思いを一人でも減らせるように私たちが環境防災科に入って学んだことをもっと周りに発信していかなければいけないと思った。私たちは地域での防災活動は積極的にやらせてもらっているが、県外の地域まで発信できていない。この「語り継ぐ」を読んで、災害を経験したことない人や、次の世代にも災害の怖さ、残酷さを知ってほしい。このような出来事は今後起こってほしくないし、起こったとしても阪神・淡路大震災や東日本大震災の教訓を活かして災害で傷つく人を一人でも減らしたい。

発信の仕方をもっと工夫して震災を経験したからこそ伝えられること、災害の怖さというのをより多くの人に伝えて災害に対する知識・意識を高めていきたいと思う。そして、災害時に助かる命を増やすためにも自分が率先して行動できるようになりたい。ボランティア活動を通して発信できることが多いのでもっとボランティア活動ひとつひとつを大切にしたいと思った。地域の避難訓練や防災教育を通して災害を経験したことのない子供たちにも災害を身近に感じられるような伝え方も考えたい。

（３）将来の夢と防災

環境防災科を卒業して就職したとき、高校のように防災を発信する機会は減っていく。卒業すれば防災を広げる場を自分で作っていかないといけない。私は将来、歯科衛生士になりたいと思っている。自分の職業と防災を結びつけて防災を発信していきたいと考えている。

災害時の口腔ケアの必要性として、1995 年 1 月 17 日の阪神・淡路大震災では水不足や食生活の変化による口腔清掃不良や、義歯の紛失、歯周病の増悪などが起こり口腔内細菌が増殖して誤嚥性肺炎といった災害関連死が多く報告された。このことから口腔保健は「命を守るケア」として認識されるようになり、避難所及び仮設住宅の巡回などの必要性が高まった。当時の歯科衛生士の方はリュックに歯ブラシ、歯磨き粉、義歯安定剤を持ち避難所や仮設住宅を回った。1 月 26 日には診療車を使い巡回歯科診療が行われた。

歯科衛生士は災害時で迅速な行動がとれるように、平時から災害に対する意識を持ち診療を行う必要がある。災害時の行動としては、歯科救護活動、緊急歯科治療の補助、義歯の作成・調整の補助、口腔衛生指導など支援できることはたくさんある。災害で助かった人でも口腔の衛生が思うように出来ず様々な感染症などを引き起こし命を失ってしまうこともある。助かった命を守るためにも歯科衛生士はたくさんの活動ができる。日頃の治療の際、患者さんと会話をする機会が多い。その経験を活かし災害後の心のケアとして被災者の方とコミュニケーションをとることも歯科衛生士にできる支援の一つだ。また、歯科衛生士の仕事として治療を行うだけではなく、小中学校を訪問し口腔清掃のケアの仕方などを指導する歯科口腔指導という役割もある。そういう場を活用して災害時の口腔ケアはどのようにすればいいのか伝えて一人でも助かる命を守りたいと思う。

８　最後に

阪神・淡路大震災を節目だから思いだすのではなく、これからも風化させることなく語り続けていかなければならない。母も祖母も語ってくれたことで当時のことが思いだされ、災害に対する意識もさらに高くなったと思う。「語り継ぐ」をたくさんの人に読んでもらい防災意識を高めあっていきたいと思う。

語り継ぐ

塩川　丈瑠

１　はじめに

僕は、阪神・淡路大震災発生時にはまだ生まれておらず震災を経験していない。しかし経験していないから、当時の様子を知らないから、と言う理由で僕たちが阪神・淡路大震災を次の世代に伝えていかないと必ず忘れていってしまう。震災を経験していない僕たちだからこそできることはある。今回は当時震災を経験した母に話を聞いてみた。阪神・淡路大震災発生前は、家族は父と母だけで母は３歳年上の長女を妊娠していた。今回は、母の目線で当時の震災の様子を書いていきたいと思う。

２　阪神・淡路大震災発生

地震が起きた時は、部屋中真っ暗で何がどうなっているのかさっぱり分からなかった。ただ必死に主人と２人でお腹の子どもを守っていた。結婚してから関西に移り住み、関西は地震が起きないという噂を聞いていたし自分自身も大きな地震の経験はなかったので、震災に対する備えや考え、知識は全くと言っていいほどなかった。

地震が起きてから明るくなるまでは恐怖で何もできなかった。明るくなってから部屋を見回すと、天井近くに取り付けていたスピーカーがその辺に落ちていたり、テレビが枕元に転がっていたりするのを目の当たりにした。テレビが少しでもズレて私の頭へ落ちてきていたら、と思うとゾッとした。台所へ向かうと、食器棚からほぼすべての食器が飛び出してきておりまさに足の踏み場がない状態だった。不安になり外に出てみると近所の方も外に出てきており呆然としていた。顔を見て話をすると少しだけ安心した。

私が住んでいた垂水区では特に大きな被害はなかったのだが、東の空からは焦げ臭いにおいと灰が降ってきておりどこかで火災が起こっているのか、と思い恐怖を感じた。震災直後にこの地震はどれくらいの規模で、どの地区まで被害があるのか、気になり情報を集めようと思ったが当時は携帯電話やラジオなどの情報を集めるものがなく、固定電話も繋がらなかった。情報が全く入ってこずとても不安になった。

３　電気の復旧

阪神・淡路大震災から数日後に電気が復旧した。電話も繋がったので、埼玉県にある実家に無事であることを連絡した。テレビをつけると阪神・淡路大震災の被害の大きさに愕然とし、何もできずただただテレビ画面を眺めているだけの自分に無力感でいっぱいになった。しかし情報というものは被災地ではとても貴重なものだと分かった。自衛隊や多くのボランティアがこの神戸に集まってきてくれていると知りとても心強かった。その反面神戸の現状を映像で知らされた時はとてもショックだった。こんなことがこの神戸で起こっているのだと知り、この後どうなってしまうのだろうという不安に襲われた。情報がなかなか入ってこない聴覚障がい者や外国人の方はもっと不安だっただろうと思う。

４　実家への帰省

妊娠中であり、給水車から水を運ぶなどの力仕事もできず気持ちも不安定であったために少し早めに埼玉にある実家に戻った。神戸から西に向かう電車を乗り継ぎ、広島から飛行機で実家に帰省した。姫路駅でトイレに入ったとき、レバーを引けば水が流れてくれることに改めて日常生活のありがたさを実感した。

５　感想

（１）はじめに

今年で阪神・淡路大震災から 20 年がたった。今の神戸は当時の写真や映像からでは考えられないほど美しくいい街に復興したと思う。僕自身が物心付いた時には阪神・淡路大震災の爪痕なんてほと

んどなかった。しかし震災から20年たった今でも、当時のことで傷付いている人がいるということを今回の「語り継ぐ」という時間で実感することができた。また、こうして年月を重ねるごとに阪神・淡路大震災のことを忘れていく、知らない人が増えていくというのはとても悲しいことだと思った。この「語り継ぐ」で少しでも阪神・淡路大震災を知っている人が増え、防災や災害について関心を持ってくれたらと思っている。

（２）母の話を聞いて

今回僕は、母に初めて阪神・淡路大震災当時の話を聞いた。今までは、「あの時は電気と水道とガスがつながってなくて、トイレが流れなかった。」とか「関西では大きな地震は絶対に来ないだろう、という噂があったから地震の対策とか全くしていなかった。」とか「当時は携帯電話がなかったしラジオもなかったから情報が全然入ってこなかった。」とか、だいたい授業でやったことばかりしか聞かなかった。しかし、今回この「語り継ぐ」という授業で自分の一番身近な人の震災体験を聞けてよかった。この「語り継ぐ」がなければ、母の口から震災体験を詳しく聞くということはこれから先の人生で一度もなかっただろう。おそらく僕の友達全員に聞いても、自分の親から阪神・淡路大震災当時の経験を詳しく聞いた人なんていないと思う。「環境防災科に行きたい。」と言っても一度も反対せず許可してくれた母の震災体験や阪神・淡路大震災に対する思いを聞けて、環境防災科で頑張っていこう、と改めて思うことができた。

今回母の震災体験を聞いて一番驚いたことは、母は阪神・淡路大震災当時に3歳年上の姉を妊娠していたということだ。そんな話はこれまで一回も聞いたことがなかったし、自分の母が阪神・淡路大震災時に授業でやった災害弱者だったなんて想像したこともなかった。授業中に災害弱者の話を聞いたとき、正直自分にはあまり関係ないと思っていた。災害時には自分のことや家族のことで精いっぱいになって、身体障害者の方や、外国人の方と接する機会はあまりないと思っていたからだ。しかしこんなにも身近にいるものなんだなと、母の話で認識させられた。また小さな赤ちゃんがいる母親は子どもを守ろうとして亡くなった、という話を聞いたことがあるから「姉をまだ産んでいなくてよかった」とその話を聞き安心した。母は実家が埼玉県にあり、妊娠していたので早めに帰省することができたが実家も被災地にあり家も被災してしまった妊婦さんはもっと大変だっただろうなと感じた。改めて避難所には、災害弱者のための思いやりが必要だと感じた。

母は妊娠していたしすぐ実家に帰ってしまったので、阪神・淡路大震災が起きてからの復旧活動には参加していない。しかしもう二度とあんな経験はしたくないと言っていた。また大きな地震が起きたらどうなってしまうんだろう、という不安で夜も眠れなかったそうだ。震災が起きてからの被災者の心のケアというものはとても大事で、頼れる存在がいることはとても大きかったと母は言っていた。

（３）課題

阪神・淡路大震災では避難所のトイレの衛生面の問題や、仮設住宅での孤独死が多かったと聞いた。本来はこのことを東日本大震災で生かさなければいけないが、東日本大震災でも避難所のトイレの衛生面が悪く、孤独死も防げていないと聞いた。衛生面が悪いと感染症が広がりやすく最悪の場合、死者も出るので衛生面の管理は避難所ごとで大事にした方がいいと思う。また避難所には様々な方が避難してくるが、各避難所では身体障害者の方や外国人の方、また妊婦さんや高齢者の方といった災害弱者への配慮が足りないと思う。外国人や聴覚障害者の方は情報が入ってきづらいし、高齢者の方はトイレに並ぶのが嫌だからと言って水分を取るのを控え脱水症状になったりする。こういった問題をほっておかないで避難所ごとに解決していくことが大事だと思う。

また東日本大震災で福島第一原発の問題が起こり、原子力発電所を稼働するかしないかで問題になった。僕自身は、原子力発電は稼働してもいいと思うが、稼働するのは福島の原発の問題を解決した後の方がいいと思う。今のまま原子力発電所を再稼働しても南海トラフ大地震でまた同じ失敗を繰り返すと思うからだ。東日本大震災で想定外のことがたくさん起こったから、十分な対策をして安全を配慮してから稼働するべきだと思う。

災害へのハード面の対策は限界があると思う。東日本大震災時にも堤防はあったが、想定外の津波の大きさにあまり意味を成さなかったと聞いた。これからは南海トラフ大地震に向けてハード面の強化だけでなく、地域レベルでの防災意識の重要性を再認識するといったソフト面にも力を入れていっ

た方がいいだろう。

（４）環境防災科に入って

僕は環境防災科に入るまで全くと言っていいほど防災に関心がなかった。阪神・淡路大震災のことは「今まで起きた地震で一番被害が大きい地震で死者がとても多かったんだな。」くらいしか分かっておらず詳しいことはあまり知らなかった。正直に言うと、「防災訓練とかなんでそんなものがあるんだろう、めんどうくさいな。」と思っていた時もあった。小学生の時に、どこかの海沿いの場所で阪神・淡路大震災当時のまま残されているという場所に行った。街灯の金属が錆びきっていて本当にこの神戸市という場所で大きな地震がおこったんだな、という思いとまたこんな大きな地震が来たら、という恐怖を感じたのを覚えている。

東日本大震災が起きた時、僕は部活動をしていて顧問の先生から東北で大きな地震が起きたらしいって聞いた時はとても驚いた。なぜなら、いとこが埼玉県に住んでいたからだ。埼玉県は東北ではないけど東日本だったのでとても心配した。メールや電話をしたけど回線が混雑していてなかなかつながらなかった。大丈夫だよ、という連絡がなかなか来ずただ黙ってテレビを見ているしか出来ない自分に腹が立った。そんな時にこの舞子高校環境防災科の存在を知った。環境防災科に入って色々なことを学んだ。阪神・淡路大震災や東日本大震災を中心に、台風や火山噴火、国内の災害だけでなく発展途上国のネパールやアメリカのハリケーンなどの様々な自然災害について学んだ。しかし僕たちがやらなくてはいけないのはそれらの災害をただ覚えるのではなく、これらの災害を忘れ去られないように次の世代に伝えていくことだ。人間だから古い記憶は忘れてしまうのは仕方のないことだ。しかしこれらの災害を忘れてしまってはまた同じ失敗を繰り返してしまうだろう。だから僕たち震災を経験していない世代がこういった自然災害を語り継いでいかなければならない。

（５）これから

私たちが生きているうちに必ず南海トラフ地震は起きる。30 年以内に起こる確率が 60%と言われているが、明日起こるかもしれないし、一週間後かもしれない。ましてやこの 30 年以内には起こらないかもしれない。しかしまだ起こらないだろう、という認識ではなく、若い人たちは必ず経験するという認識でいてほしい。南海トラフ地震の被害を少なくするには、この間にいかに対策できるかが重要だと思う。家具の固定、水や食料の備蓄、家族で地震が起きた時バラバラだったらどこに集まるか決めておく、など今のうちに備えておくことで震災の被害は必ず減ると思う。近所付き合いも大事で災害時は公助より自助、共助が重要になってくる。普段から近所の方とあいさつをするのも一つの防災だと思う。

兵庫県では「迅速な避難」「耐震化」「防潮堤の整備」をすれば南海トラフ大地震の被害は最小限に抑えることができると言っている。僕たち若い人たちは「迅速な避難」しか出来ないが、予算があれば「耐震化」をするのがとても大事だ。また高齢者の方を若い人たちが何人も支えなくてはいけないので普段から避難訓練をして防災意識を高めておくのも大事だと思う。防災意識を高めるためにも避難訓練は定期的にやるべきだと思う。

3 年間環境防災科で学んできたことを、同世代や次の世代といった様々な人たちに伝えていきたいと思う。いつか誰かがやってくれるだろう、というような人任せな考え方じゃなく自分で考えて行動していくのが環境防災科だ。もし南海トラフ大地震が起きたら僕たち環境防災科が市民のリーダーとなって行動する、そんな人間になれるよう防災についてこれからも学んでいく。

知らない世代だからこそ

清水　咲希

１　はじめに

1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分、阪神・淡路大震災発生。神戸で起こった出来事は、今も、これからも決して忘れてはならない日。

1997 年（平成９年）に生まれた私は震災を体験していないため、当時の様子を母と母の友人に聞いた。

２　母の話

当時母は西明石にある二階建ての文化住宅に住んでおり、卒業を控えた高校三年生だった。次の日は普通に学校があるからと、いつもと同じ時間に眠りについた。祖母は当時介護の仕事をしており、少し離れた仕事場にいた。祖父も仕事に出ており、家には当時飼っていた猫と母だけだった。

（１）午前５時 46 分

初めの小さな揺れで目が覚めた。そのあとの激しい大きな揺れに、何が起こったのかわからなかった。たくさんの食器が割れる音がした。床に散乱している食器を踏まないようによけながらとりあえず外に出てみたら、空はとても暗く、日本が終わるのか、自分は死ぬのか、と感じていた。何かはわからないが、白い何かが降っていた。今でもそれが何だったのかはわからない。当時は携帯電話を持っておらず、母は祖母の仕事場に電話をかけようと家の近くの公衆電話に行ったが、大混雑しており、すでにたくさんの人が並んでいた。ようやく電話が使えても、つながらなかった。でも、どうにかして親とはその日のうちに連絡がとれた。

家には自分一人。高校三年生の母はどうしたらいいかわからなかった。

母の家の被害はそこまで大きくなく、一部損壊と判断された。

（２）卒業式まで

電気はすぐに復旧し、その日のうちにテレビがついた。長田が燃えている様子の中継を見て、「やばい」と同時に、「学校には行けない」と判断した。学校から連絡が来たかどうかは覚えていない。散乱した食器を片づけ、布団の中で、当時飼っていた猫と一緒にずっとニュースを見ていた。食べ物を食べていた記憶もない。後日、買い物に行こうと外に出てみたが、たくさんの踏切がシャットアウトされていた。他の道や道路もほとんどが封鎖されていて、通れなかった。

1 月 17 日から卒業式まで、学校には行けなかった。

（３）卒業式

卒業式は二月の最初に行われた。卒業式が行われることは、学校から連絡がきていた。そのときの三年生の学年では幸い死者はいなかった。単位がとれていない子や、出席日数が足りていない子も全員卒業できた。リハーサルもほとんど行っていない卒業式だった。

卒業式を無事に終え、そのあとに学年の先生たちがサプライズで和太鼓やいろいろなことをしてくれた。先生たちもいろいろ忙しかったはずなのに、生徒のことを思ってたくさんのことをしてくれたそうだ。生徒はみんな号泣だった。みんないろいろな思いを持って、高校を卒業した。

３　母の友人の話

当時は妙法寺に住んでいた。母の友人もそのとき高校三年生で、次の日に学校があるからといつも通り眠りについていた。

（１）午前５時 46 分

大きな揺れとともに目を覚ました。家族も全員目を覚ましていて、一緒に外に出てみると、５時台なのにたくさんの人が外に出ていた。台所がぐちゃぐちゃで、食器も散乱。悪い夢だと思い、もう一度眠りについた。寝ている頭の上にはたくさんの漫画や教科書の入った本棚があったが、大きな揺れのあとに自分が起き上がるまでは奇跡的に倒れてこなかった。もし起き上がるタイミングが少しでもずれていたら、と思うとすごく怖い。不幸中の幸いだった。

（２）１月 17 日以降

水が出なくて困っていたところに、水の配布を当時の啓明女学院（今の啓明学院）でしていると連絡が入り、貰いに行っていた。たくさんの人であふれていた。また、たくさんのボランティアの方があたたかい炊き出しなどをしてくれて今でも感謝している。数日間お風呂に入れていなかったため、被害が少なかった三木にいる親戚のおばちゃんの家にお風呂を借りに行っていた。当時は携帯電話を持っていなかったため、友達と連絡が取れず、駅に行ったら誰かに会える思い、親と車に乗り駅に向かった。北に向かう道は大丈夫だったが、西や東は大渋滞だった。

４　話を聞いて

話がとてもあいまいで、すべては覚えていなかった。「思い出したくないから、記憶から消しているのかもしれない」と言いながらも、涙を流しながら、当時の様子を話してくれた。辛いことを思い出させてしまってごめんなさい。母から震災当時の話を聞くことは初めてだった。環境防災科に入って、たくさんの人の当時の様子を聞いてきたから思うことだけど、一人一人震災への想いやとらえ方はやっぱり違うものだと感じた。

震災当時は高校三年生と聞いて、今の自分と同じ状況だから、自分だったらどうしていただろうとすごく考えた。今は携帯電話が便利になっているからいろいろな情報が得られるけど、当時はなかったから、本当に不便だったと思う。家には自分ひとりという状況もとても辛かっただろう。

今自分は環境防災科にいて、防災やいろいろなことを学んで、情報がしっかり手に入る状況で、もし大災害が起こったときに「行動できない」となるのはおかしい。行動しないといけないし、行動できる人でないとおかしい。本当に自分の大切な人や周りの人を守れるのか、と考えると、まだまだ備えておく必要があると感じた。

西明石で、被害は少なくとも、母がしっかり生き抜いてくれたことに感謝しかない。実際に心が不安定になって亡くなられた方もいる。母も相当辛かっただろう。でも、母が生きていてくれたおかげで、自分は生まれてくることが出来た。乗り越えてくれてありがとう。

５　環境防災科

舞子高校に環境防災科というものがあることは小学生の時から知っていた。小学校で環境防災科の生徒と交流する機会が何度かあったからだ。小学校低学年のとき、環境防災科の生徒と安全マップを一緒に作っているときに、「なんでこんなん作るん？」と聞いたら、「いざというとき大切な人を守りたいやろ？」と言われたことを今でも覚えている。

防災や震災について学ぶ機会がたくさんあったが、私はそのとき関心がなかった。どうせ大きな地震は起きないだろう。誰かが守ってくれるだろう。と、防災とは他人事だった。

2011 年 3 月 11 日、東日本大震災が発生した。私はそれを車の中のラジオで聞いていた。状況がうまく理解できなかった。家に帰ってテレビをつけ、初めて津波の映像を見たときは、本当に起こったことなのかと信じられなくなった、信じたくなかった。毎日速報される死者数、繰り返される津波の映像。心が痛かった。そのとき、ふと小学生のときに防災に触れたことを思い出した。もっとしっかり学んで他の人に広めれば、たくさんの命が犠牲にならなくてすむのではないか、そう思い環境防災科への進学を決めた。環境防災科で学んでいく中で、小学生のとき言われた言葉の意味が理解できた気がした。

今まで環境防災科というかたちでいろいろなボランティアに参加させてもらった。その中でも一番印象に残っているのが募金活動。東日本大震災とネパール募金に何度か参加させてもらった。そのときによく言われたことが、「舞子高校やから募金するんよ」「頼んだで」など、たくさんの言葉をいただいた。そういうときに一番、環境防災科の歴代の先輩たちが積み上げてきたもののすごさを感じた気がする。先輩たちの取り組みが、今の環境防災科を成り立たせているのだと感じた。環境防災科を卒業しても、自分の取り組みが次の世代の環境防災科に影響しているということを考え、自覚して、もっと行動にうつしていきたい。

６　交流

私はしゃべることが好きだ。たくさんの人と関わってきて、その人が伝えたいことや感じていることなど、いろいろなことに触れてきた。自分とは違う観点や視点の人がたくさんいて、人ってすごいなと毎回改めて感じている。

今までの自分の活動を振り返ると、本当に交流が多い。他県の高校生、お年寄りの方、子ども、外国の方、たくさんの幅広い方々と関わってきた。でも、交流は自分が思っていたよりも難しかった。実際に東日本大震災で被災された高校生と交流したとき、被災体験を聞いて頷くことしかできない自分に無力さだけが残った。同じ年の子の気持ちは理解したり共感したり出来ると思っていたが、そう簡単な話ではなかったことを感じた。でも、本当に辛いのは私ではなくて話してくれた側。辛いけど私たちに話してくれた理由は、伝えたいことがあるから、自分の話を聞いて少しでも次に生かしてもらいたいという願いがあるからだと思う。私は、交流を通して聞いたこと、伝えたいこと、思い、たくさんのことが絶対に無駄にならないように、これからの自分の活動に生かせるように行動したい。

東京での全国防災ミーティング、東北訪問、防災ジュニアリーダー育成合宿などに参加させてもらい、全国各地の高校生や国を超えての交流をしてきた。「防災」というものは必要不可欠だという考え方を、国を超えて広げていくことの大切さを感じた。

２年生の夏休み、東北訪問に参加させてもらった。宮城県の石巻西高校の生徒と防災カレンダーを作るという交流があった。班に一人石巻西の生徒に入ってもらい、調べる人や発表する人にわかれて作業した。私の班にいた同じ年の石巻西の男の子と雑談などしているうちに、震災体験を話してくれた。津波で家を流されたこと、３日間何も食べられなかったこと、みんな自販機を壊して飲料水をとっていたなど、当時の状況を教えてくれた。みんなの発表を聞いているときにその子が、「正直、みんなが話してることはきれいごとにしか聞こえんねんな」と、何気なく言った一言をとてもよく覚えている。東日本大震災当時の生の声をたくさん聞けた気がした。とても明るくて元気な子だったから、そういう体験があったことなんて知らなかったし、自分自身でそういう体験を乗り越えたならとても強い人だと感じた。本当は、私たちの前だから明るく接してくれていたのかもしれない。そういう気遣いも話してくれたことも、無駄にならないように、次の何かに必ずつなげられるように考えて行動していきたい。

交流はそのときだけのものではなくて、続けていくもの。今はありがたいことに携帯電話が便利になり、常に連絡をとれる手段が確保されている。そういうものを有効活用しながら、これからも継続的につながっていきたい。

７　これからの自分

環境防災科に入って３年、あっという間だった。普通の高校生だったら経験しないような、授業や体験、いろいろなことを学ぶ機会を与えてもらった。心が辛くなるような体験や授業もたくさんあった。それも含めて全部、自分の大切な財産だ。

実際自分に今、防災や災害についての知識がどれぐらいあるのかはわからない。まだまだ触れていない未知の部分はたくさんあるのかもしれない。でも、私たちはこういう学科だから人より多く震災のことなどを学んでいるが、震災を知らない人たちが年々増していることは事実だと思う。震災のことが人々の記憶から忘れ去られることが一番怖いこと。だから今、私たちが出来ることは震災を知らない世代に「語り継ぐ」ことだ。今の綺麗な住みやすい神戸は震災当時にたくさんの人が努力してくれたから自分たちが安心して暮らせているのだと、震災を知らない神戸の人たちに伝えたい。

いつ起こるかわからない災害に対して積極的に備えに取り組む人が少ないのは現実だ。でも、災害が起きてからでは遅い。どうせ起きないだろうという気持ちは消してほしい。災害が起きる前に災害後のことを見通して備えておくことの重要さをもっとたくさんの人に知ってもらわなければならないし、危機感を持ってほしい。これから先、高校を卒業したらもっとたくさんの人と接する機会が多くなる。こういうことを伝えられる機会があるならば、自分の考えや思っていることが少しでも相手の人の何かを変えるきっかけになってほしいと思う。また、伝えるからにはそういう自分の気持ちを忘れずに持っていなければならないし、忘れてはいけないし、進路先がどうであろうと自分のできる備えをこれからも行動にうつしていきたい。

震災当時、頑張ってくれたのは神戸の人たちだけではない。全国各地から救援物資を送ってもらったり、たくさんの人にボランティア活動に参加していただいた。国を超えての支援もたくさんしていただいた。そういう人たちがいたから、今こうして神戸は復興している。だから、もしまたどこかで災害が起きたら、率先して復旧復興に関わっていきたい。その時の自分の進路先がどうなっているかはわからないけど、周りの人を巻き込むぐらいの勢いで行動できる人になりたい。

これからを担っていく世代の人に命と向き合ってもらって、たくさん感じて考えてもらって、その日より次の日がもっと輝いてみえるような、ありがたさを忘れずに素敵な一日が送れるようになってほしい。そういうことを与えられるような人になりたい。

私は阪神淡路大震災を体験していない。でも、知らない世代だからこそ伝えられることはたくさんあると思うし、知らない世代だからこそできることがあると思う。神戸の人間として生まれたからには、阪神・淡路大震災のことをしっかり伝えていきたい。重要なのは、伝える場や話を共有する「場」や「きっかけ」づくりが必要だということだ。それはこれからの自分の課題だと思うし、それは自分の使命だと思うから、果たせるようにしっかり考えていく。

口だけの「語り継ぐ」にしない。

震災を通して人のあたたかさや人と人とのつながりをたくさん感じた私にとって、震災が教えてくれたものは決して悪いことばかりではなかったことを忘れてはならない。

阪神・淡路大震災が発生してから今の神戸になるまでのたくさんの人の努力を、決して忘れない。

語り継ぐ

新本　優香

はじめに

1995 年１月 17 日午前５時 46 分、震度７、Ｍ７．３の地震が起こった。当時私は影も形もなく震災当時のことは全く知らない。これは母から聞いた話である。

１　震災前日（１月 16 日）

この日は私の母の 19 歳の誕生日だった。誕生日を友達に祝ってもらい、その日一日はとても楽しんでいた。次の日にあんな大きな地震が起きるとは知らずに。

２　震災当日（１月 17 日）

（１）午前５時 46 分

母は神戸市北区鈴蘭台のマンションの４階に住んでいた。家族構成は私の母の母(祖母)、母の父(祖父)、母の姉、母の弟の５人家族で、当時は全員家にいた。

祖母はとても早起きで、５時には起きてコーヒーを台所で飲んでいた。それ以外の家族は皆寝ており、５時 46 分に地震は起きた。母は大きな揺れが来る前「ゴォォ」という地鳴りのような音が聞こえたという。その音がおさまると、母の姉の「キャー！！」という叫び声とともに今度はものすごい揺れが起き、今までに体験したことがないくらい怖いことが起きたと母は言っていた。少し揺れがおさまると、また大きな揺れが起き、住んでいたマンションが崩れていくかもしれないと思った。祖母の「危ないから布団にもぐっときなさい」という声に従い、布団にもぐりじっとしていると次第に揺れはおさまった。

（２）震災直後

揺れがおさまり布団から出てみると、食器などは割れず大きな被害はなかった。だが、タンスの上に置いていた仏壇が寝ていた母の姉の頭の数センチ横に落ちてきており、ずれていたら大けがをするところだった。家族５人ともけがはなく、近所の人たちも幸いそれほど被害はなく無事だった。母の弟はあんな大きな揺れでも起きてこなかった。この神経の図太さには家族全員があきれていた。

３　震災当日以降

（１）母の行動

この時は通信経路が混雑しており、連絡が誰ともつかなかった。安否確認をしたくて何十回、何百回と電話をかけてもつながらず、とても心配した。

幸いにも母の家は電気、ガス、水道どれ一つ止まらなかったので、友人の話でだれがどこの避難所にいるのかと聞き、実際に避難所まで行き友人を家に連れてきて、ご飯を食べてもらったりお風呂に入ってもらったりした。こういう時こそお互い助け合うことが大切だと母は思った。

母はこの時、神戸市北区にある谷上という駅の中にあった神鉄エンタープライズのスーパーに勤務していた。震災の翌日、勤務先から営業ができないという連絡があり、社員の方が自宅まで迎えに来てくれ店の様子を見に行った。店内はそれほど損害もなく、コーヒーの瓶が２、３本割れていただけだった。

親戚とは２日後に連絡がつき、全員が無事だと聞き安心した。震災の次の日母は友人の車に同乗させてもらい、北区から長田区、垂水区に友人の様子を見に行った。今まで当たり前に通っていた道路が割れていたり、盛りあがっていたり、車線が見えなくなっていた。もちろん信号も消えており、交通もすごく不便だった。どの道もぐちゃぐちゃでどういう経路を通ったかよく覚えていない。母は知人や親戚、友人は亡くさなかったのだが、友人の友人などには亡くなった方もいた。そのことを知ったのも、数日後の人もいれば数か月後の人もいたそうだ。

（２）私の両親

震災当時私の母と父は、交際はしていたがまだ結婚はしていなかった。母は北区、父は垂水区とい

う家の近さだった。父は震災当時、母に電話を何回もかけたらしいが全くつながらず、やっとつながった時に母は父に「なんで出えへんねん。あまり出歩くな」とものすごく怒鳴られたらしい。通信経路は混雑していてどの電話もつながりにくかったのだからそれは仕方ない。心配した上での怒りなのだろう。それから父は交通が困難な中、約２時間かけて垂水区から車で北区に母の様子を見に来たそうだ。

父の家は神戸市垂水区塩屋というところにある。震災で家は半壊状態になり、今も父の両親(私の祖父母)が住んでいるが、家が傾いていて、家の中でビー玉などを転がすと転がっていく。１階にある横開きのドアはほんの少ししか開けることができず、その部屋は開かずの間となっている。残念ながら父方の祖父母に話は聞けていないが、今思えば義援金などの補助は出なかったのかと思う。父は６人家族だがこちらも誰一人けがなどはしていなかった。だが、どのあたりに住んでいたかはわからないが父は友人を２、３人この震災で亡くしたと前に言っていた。

４　震災から 20 年

阪神・淡路大震災の翌年に生まれた人たちがもう 20 歳になる。あの出来事から 20 年。長いような短いような感覚だろうか。20 年たった今でも毎年１月 17 日には三ノ宮の東遊園地で追悼式が行われている。そこには昨年と今年行かせてもらったがたくさんの人であふれかえっていた。20 年経ったいまでもこれほどたくさんの人たちが当時のことを追悼しに来ているのは、震災で亡くなった方にとっても嬉しいことなのではないかと思う。昨年行かせていただいたときに、ある女性が不意に話しかけてきてくれた。涙目になりながらも震災を体験していない私たち高校生に当時のことを話してくださった。その方も語り継ごうとしているのがよくわかった。

どんなことでもやはり時間がたてば風化し、忘れ去られてしまう。だがこの阪神・淡路大震災というひとつの大きな出来事は決して風化させてはならないし、30 年目も 40 年目も次の世代へと語り継いでいかないといけないと思う。私は来年も追悼式に行かせてもらおうと思う。

５　環境防災科

阪神・淡路大震災という出来事はこの環境防災科ができる大きなきっかけになったものだ。もしも、阪神・淡路大震災という災害がなかったらこの学科は出来ていなかったかもしれないし、私たちが防災というものを学んでいなかったかもしれない。そして平成 14 年、阪神・淡路大震災での教訓を知り、新しい防災教育を学びそれを共生社会で活かし、主体的・自発的に考えられる市民のリーダーを育てるという目標で環境防災科という学科は創られた。

私は環境防災科に入り、今までにたくさん災害のことや防災のことを学んできた。その中には東日本大震災のことも入っている。時には目を背けたくなるようなこともあったし、体験していない私たちが軽々しく震災のことを話してもいいのかと思った。だが私たちに震災経験がないということはこれから先もっと震災経験のない世代が増えるということだ。今の私たちは、震災を経験した方からの生の声を聞けているが、あと何十年かすればそれすらもできなくなってしまう。だから私は今までに聞かせていただいた話や、震災を経験していないからこそ考えられることを考え、次の世代へと伝えていきたいと思う。

またこの学科でボランティア活動もたくさんさせていただいた。この学科に来ていなかったらボランティア活動は多分人生で経験していなかったことだろうし、誰かのために頑張ることがこんなにも達成感に満ち溢れていることだとは知らなかったと思う。

私は環境防災科に入り、本当に良かったと思っている。もともと小学生ぐらいの時は防災というものにあまり関心がなく、避難訓練や防災教育というものに意味があるのかと思っていた。だが中学生の頃から防災というものの大切さがわかってきて、この学科に入り、いかに防災が大切かということを改めて知った。阪神・淡路大震災で亡くなった 6434 名の方に対してすごく失礼なことをしていたのだと思った。

また、環境防災科では専門的な学習をすることが普通科の生徒に比べ多い。その分基礎的な学力を身に付ける時間が少なくなっている。防災を学ぶことも大切だが、範囲が広いためまずは基礎的な学力をつけることが大切だと学び、確かにそうだと思った。幅広い知識がなければ幅広い防災を深く学

ぶことはできない。今後どんなことでも学ぶには基礎的な学力は必要だと思うので、基礎をしっかり固めておくべきだと思った。

６　将来の夢

私の将来の夢は保育士である。子どもが好きという理由ももちろんあるのだが、子どもとかかわる場で防災というものの大切さを、今後の日本を担っていく子どもたちに伝えたいと思った。また東日本大震災の際、大川小学校の生徒が逃げ遅れて全校児童の約７割の児童が亡くなったという悲劇があった。保育園や幼稚園にいる間、お母さんやお父さんとは離れ離れになってしまう。もしその時に何か災害が起こってしまったら園児をだれが守るのだろうか。誰でもない保育士だと思う。この大川小学校のことは、教員の防災や災害に対する知識が足りなかったということがあったかもしれない。そうならないように防災面や災害面の知識を私自身が補い、小学生よりもさらに判断する力や行動する力が弱い、幼い命を守りたいと思った。だから私は将来保育士になり、子ども自身にも備えや防災の大切さを教えて、幼いころからそういったことについて学んでほしいと思う。そして子どもから両親や祖父母など、子どもを通して防災がたくさんの人に広がり、保育園、幼稚園自体で防災に取り組めるような環境を作れればいいと思う。

７　母の話を聞いた感想

祖父母は震災当時に住んでいたマンションに今も住んでいる。そのマンションの外壁には震災の傷跡であろういくつかのひびが入っていた。母は特に被災はしなかったと言っていたが、一歩間違えれば今の母はいなかったかもしれない。私は正直、母や母の周りの誰かが被災していなくて良かったと思った。だが母の話を聞く限りでは、ライフラインである電気、ガス、水道が止まり困った人がたくさんいたことがわかった。そして何日になるかわからない仕事のない日が続き、友人の安否も心配な日々を過ごしたと思う。だが母や母の周りの人に被害がなかったからこそ、今自分はここにいられているのかもしれないと思うと、たくさんの奇跡が重なりあって自分は生まれたのだなと思い知らされる。また、今では当たり前のように毎日使っている電気、ガス、水道などは阪神・淡路大震災でめちゃくちゃになってしまったものを、たくさんの方々が懸命に復旧、復興してくださったことを胸に、できるだけ無駄にせず使いたいと思う。

母に話を聞いたとき、母は「人とのつながりは大切に」と言っていた。それは友人や知人が多ければ多いほど、自分を助けてくれる人や正しい道へ導いてくれる可能性が大きくなるということだった。だから私は日頃から人との関わりを大切にして、もし自分が誰かに助けてほしいときや何か間違ったことをしたときに正しい方へ導いてくれるような人を見つけたいし、そういう人になりたいと思う。

また、母は今までに震災当時の話をあまり話したりはしなかったと思う。それは語りたくないなどではなく、語れなかったのだと思う。中には阪神・淡路大震災でとてもつらい思いをした方もおられ、語りたくないという方もいるかもしれない。だが私の母のように被災地にいながらも、被災していないから当時のことを語れないという人もいることを、今回の語り継ぐで知ることができた。だが、震災で被災していないからその方の話を聞いても意味がないわけではなく、被災していない人なりの当時の思いがあることも分かった。

いつもの母はこういう真剣な話をするタイプではなくどちらかといえば笑っているというイメージが強い。だがその母から聞けた阪神・淡路大震災の時の話はすごく貴重な気がした。

８　語り継ぐを通して

（１）風化

阪神・淡路大震災ではたくさんの尊い命が亡くなった。それは神戸には地震は来ないだろう、というどこからかの情報を信じた安心感から、備えがしっかりできていなかったことに大きな原因があると思う。幸いにも母の住む北区の鈴蘭台にはあまり被害がなく、母自身は被災というものを経験していない。だが被災者でないがゆえに当時は冷静に行動できただろうし、困っている人を助けられたと思う。今回母と普段しないような話をすることができたし、母自身の阪神・淡路大震災で学んだこと

を聞けて良かった。だがこの話を聞いたとき、「もう 20 年も前のことやからそんなはっきり覚えてないわ」と言われたときは、震災を経験した人でさえ当時のことを忘れかけている、風化しつつあるのだなと感じさせられた。

（２）防災意識

母はあまり被災をせず具体的な話は少ししか聞けなかった。だが私は環境防災科に入り、様々な分野の講師の方やボランティアでお世話になった方などから、阪神・淡路大震災や東日本大震災についてたくさんの被災体験や当時の状況などを聞くことができた。

自然災害というものは止めることはできないし、予測も難しい。だが備えをしていると被害を減らすことは可能だと思う。日本は地震大国であるのにもかかわらず、国民の防災意識が少し低いような気がする。現に災害などのニュースがテレビで流れると私の母や弟は「同じことばっかり」や「もう飽きた」などの言葉をつぶやく時がある。私は授業で防災や災害を勉強している分、自分たちには関係ない場所で起こっている災害に対して無関心ということはまずない。だが母や弟のように災害などにあまり関心を持たない人もいることが日常生活の中でわかった。悪いことではないが、やはり少しは関心を持ってもらい、もし同じことが自分の住んでいる場所で起こったら、などのイメージをしてほしいと思う。そうすれば少しでも防災意識があがるのではないか。そして国民ひとりひとりの防災意識が上がることで、災害時に被災者や死者、建物の損壊が少しでも防げるのではないかと思う。その防災意識をどのようにしてあげていくかが今後の課題だ。

（３）経験していないからこそ、若いからこそできる

私たちは震災を経験していない２年目の世代にあたる。1995 年１月 17 日に起こった阪神・淡路大震災は、今やもう１年に１度のその日にしか注目を受けることがなくなったように思える。それも震災を経験していない世代が増えてきている証であり、風化している証でもあると思う。だがその風化を止めるのが私たちの役割だと思う。実際に震災を経験していないとか、若い人に何ができるかなど思われるかもしれない。だが、若いからこそできることもあると思う。被災した方から聞ける生々しい話はできない。どのようなにおいだったか、どのような雰囲気だったか、どのような寒さだったかなど、身をもって感じた感覚はわからない。だが私たちは、今までに聞かせていただいたお話を語り継げるし、当時生まれていなかったからこそ考えられることがあると思う。震災を経験しているから偉い、経験していないからいけないとかではなくて、その震災に対してどう思っているか、今後どう伝えていきたいかが大切だと私は思う。また、当時の教訓や反省点があるからこそ次の災害に備えられ、より備えや防災が強化されると思う。

（４）繋がり

今までに震災や災害のことを学んできた中で、コミュニケーションというものは本当に大事だと思った。少し前には近所同士の仲もよく、だれがどの部屋のどこで寝ているかなどもわかるぐらいのコミュニティがあった。だが現代の日本はどのような人が近所に住んでいるかくらいは知っていても、どの部屋で寝ているかなどは知っている人の方が少ないと思う。会っても挨拶を交わす程度か、あるいは挨拶すらしないこともあるかもしれない。だがもしまた大きな災害が起こり助けを必要とする場合、近所同士や地域のコミュニティが薄ければ、助かる命も助からない可能性が出てくるのではないかと思う。そのことを防ぐためにもやはり日頃から近所の人には自分から挨拶をしたり、地域の活動に参加したりするなど、できるだけたくさんの人とコミュニケーションをとることが大事だと思う。防災は友達作り、人付き合いからだと思う。

（５）ソフトとハード

今後、南海トラフ地震が起きるといわれている。それは明日か 10 年後かそれとももっと先かはわからない。だが今の時点で起きるとわかっているのならば、阪神・淡路大震災や、東日本大震災の教訓を活かし非常持ち出し袋を用意しておくとか、避難経路や避難場所を決めておくなど災害を想定して備えをしておくことが大切だと思う。いくら備えをしていたとしても、東日本大震災のように「想定外」という事態になるかもしれない。だがある程度備えておけば、その「想定外」にも打ち勝てるかもしれない。

あの時少しでも備えていれば、少しでも早く逃げていれば、少しでも高いところに行っていれば、助かったかもしれない命がたくさんあったはずだ。そのようなことを繰り返さないためにも備え、減

災、防災は今後さらに強化していくべきだ。こういった個人が備えるソフトの面も大事だが、防潮堤を高くすることや、高台の設置などのハードの面を強化することも大事だと思う。だがハード面は政府や国などが取り組まねばならず、私たちではどうにもできないのが現実だ。一刻も早くハード面の強化に取り組んでほしいと思う。

（６）私たちの義務

今私たちが住んでいるきれいな神戸の街には、亡くなった方々や被災した人々の日常がかつてはあり、1995 年 1 月 17 日以降も生きたかった方々の日常が来るはずだった。災害による死は突然であり、何とも悲しいことだ。だがもし阪神・淡路大震災がなければ今の神戸の街はなかったのかもしれない。これまでにたくさんの方々が立ち上がり頑張ってくださった証である神戸の街だということを胸に、これからも神戸という街に私は携わりたいと思う。

また、阪神・淡路大震災という出来事を経験していない私たちだが、次の世代へと語り継いでいかなければならない。それは神戸市民として、環境防災科生としての義務である。

語り継ぐ

瀬尾　昂平

１　阪神・淡路大震災

・1995 年（平成 7 年） 1 月 17 日午前 5 時 46 分 52 秒
・淡路島北部沖の明石海峡震源（北緯 34 度　東経 135 度　深さ 16 km）
マグニチュード 7.3
・死者 6434 名　行方不明者 3 名　負傷者 43792 名
・死者の 80%は木造家屋倒壊による圧死・窒息死

兵庫県を中心に大阪府・京都府が大きな被害を受けた。特に震源に近い神戸市市街地（東灘区・灘区・中央区・兵庫区・長田区・須磨区）は甚大な被害を受けた。当時の話を父から聞いた。

２　震災当時

当時父親は、神戸市兵庫区に住んでいた。警察の仕事をしていたので兵庫県警の寮で生活を送っていた。その頃、地震に対する防災意識は全くもっていなかった。地震はこないと思い込んでいた。だから、耐震などもしていなかった。

３　震災の直前

普段と全く変わらない生活をおくっていた。まさか地震が来るとはおもっていなかったので、なんの準備もしていなかった。

祖父は、地震が起きるときに犬の散歩をしていて空がよどんでいた。鳥がいなかったと言っていたらしい。

４　震災当日

父は寝ていた。ドスンと大きな音がして、今までに感じたことのない揺れが来た。目を覚ますとふすまが半分開いていて、洋服タンスが倒れ、テレビが倒れ、食器棚が倒れていた。タンスが倒れてきていたがコタツにもたれかかり最悪の事態を免れた。揺れがおさまり兵庫県警本部を見に行くと、一階が潰れてなくなっていた。当直勤務の者が埋まっていたので素手でレンガをどけて小さなハンマーで壁を割り救出した。運よくロッカーが倒れ隙間ができ助かった。

近所のマンションのトランスが発火して火事が起きていた。水道が止まっているので、寮の屋上のタンクの水をバケツリレーして消火活動を行った。しかし、そのマンションでも一人か二人死者が出てしまった。他にも、近所から「助けて」の声がたくさん聞こえてきた。「あんた警察やろ助けて」と言ってくる人もいたが助ける道具はなくどうすることもできず、見ていることしかできなかった。無力であった。

ライフラインは全て止まっていた。一か月ほど止まっていた。安否確認も行う事ができなかった。その時は、携帯電話が普及していなかったので連絡を取る手段は公衆電話しかなかった。水も止まっているのでトイレが流せず風呂の残りの水で流していた。食べ物もなく困ることだらけであった。

５　震災翌日～三日間（72 時間）で起こったこと

三日間ほどは、寝ずに近所の救出作業をしていた。寝ていなくても助けないといけないという気持ちで眠気はなく寝るどころではなかった。二日目くらいに自衛隊が来て、一緒に救出作業をした。作業をしている時も余震がきて、来るたびにヒヤヒヤしていた。その時に自然の怖さを思い知った。

６　震災一週間以内で起こったこと

兵庫県西警察署の道場で寝泊まりしていた。電車が止まっていたので友人の車にのり署までいっていた。西区は被害が軽かったので電気の復旧も早く、店も再開しているところがあった。

７　震災が起こってから気をつけるようになったこと

寝床に倒れてきて危ないものは置かない。タンスなどを置いていると命を落としてしまうかもしれない。

懐中電灯の配置。ライフラインが途切れてしまい、夜であるとなにも見えなくなってしまう可能性があるので危険である。

スリッパを置いておく。揺れにより食器が散乱したというケースはたくさんある。裸足で歩き足を切ってしまうと大変なのでスリッパで足を保護する。安全をしっかり確保して自助を心がけないといけない。

８　感想

僕は阪神・淡路大震災を経験していない。だから、震災を受けている人の気持ちがわからない。僕がわかりたいと思っていてもわかってほしくないという人もいると思う。もしも自分が被災者の立場だったら、「生まれてもいないあなた達に、家族を失った人、友人を失った人、ペットを失った人、家を失った人の気持ちがわかるのか」と言ってしまうかもしれない。それでも僕たちは阪神・淡路大震災というたくさんのモノを奪った災害を決して忘れてはいけないし、もっとたくさんの人に語り継いでいかなければならない。震災を風化させてしまったら、大切な人を亡くした人が辛い思いをしてしまうと思うので絶対に風化させてはいけないと思った。

震災で失ったモノは多いけど、得たものもあると思う。耐震の甘さにも気づくことができたと思う。家の倒壊で亡くなった人が大勢いるので、簡単な家具の固定くらいはしなければいけない。耐震化をするのはお金もかかるのでみんなができることではないが、突っ張り棒を設置する、寝る場所に倒れてくるような危ない物を置かない、非常持ち出し袋を作っておくなどするだけで、被害を大きく減らすことができるのではないかと思う。そんな簡単なことをするだけでたくさんの命は救われるのに、自分は大丈夫と思い、対策しない人がたくさんいることは事実だ。それは、人間なのでみんながそう思ってしまうことは仕方がないことだが、災害が起き大切な人を失ってからでは遅い。どうにかして震災を経験していない僕らのような若い世代に災害の恐ろしさを知ってもらい、積極的に防災してほしい。そうしないと、自分たちが生きている時に起こると言われている南海トラフ地震が発生したらすごい人数の死者がでてしまう。恐ろしいことだが、対策をすることによって死者はかなり減少する。一人一人に災害に対する意識をもっとあげていってほしいと思う。

意識をあげてもらうためには、災害の授業を増やすべきだ。普段から災害の勉強をすることで防災しなければいけないと思うようになり、対策をしてくれる人は多くなると思う。災害に興味を持つ人も、もしかしたらいるかもしれない。興味をもってくれればボランティアに参加したいと思ってもらえるかもしれない。そうすることで減災につながりとてもいいと思う。しかし、ボランティアに参加したいと思っている人がいてもどのようにしたらいいかわからない人はいると思う。募金活動をしたくてもどうすればいいのかわからなくてやらない人はこの世の中にはたくさんいると思う。特に僕らのように高校生でそう思っている人は多いのではないかと思う。

そういった気持ちがある人のために、環境防災科を県に何校かとりいれるべきであると僕は思う。今は全国で唯一なので入りたいと思っていても遠すぎてはいれない人もいる。災害の被害はとてつもなく大きいのにそれを勉強する学科が全国に一つしかないのは、おかしいことではないのか。風化してはいけないと思う人はたくさんいるが、風化させているのも人間であり今生きている人々である。震災を忘れてはならないため、これから起きる災害の被害を減らすためにつくられたのが環境防災科であると僕は思っている。全国で唯一の学校で学んでいることは誇りではあるが、増やしていってほしいと思う。

東日本大震災が起きたから宮城県にも防災専門学科ができるが、起きてからでは遅いと思う。語り継いでいくのも僕らの仕事でもあるが、減災していくのもそうである。起きた後に作られるのではなく、起きる前に作ってほしい。そうしないと意味がないのではないかと思う。起きた後につくったら、風化させないことがメインの目的のように僕は感じてしまう。そうであるならば、環境防災科はないほうがいい。災害が起き、たくさんの人が亡くなっているのが、環境防災科の数だけあったということであるからだ。そうではなく、環境防災科の数が増えるにつれて被害が減っていっているよう

になればいいと思う。そうするためには災害が起こる前に、環境防災科をつくるべきであると思う。あくまで僕の意見であるがこれから環境防災科ができるのは災害が起きたからではなく、減災のためであってほしいと願う。僕が環境防災科に入ったのも何かの縁だと思う。誰かがこれを読み心に響いてくれたら嬉しい。そしてこれを読み環境防災科をもっと増やしていかなければならないと思ってくれたら、それでいいと思う。

僕は阪神・淡路大震災、東日本大震災を見て消防士になりたいと思った。震災をみて、命を助けたいと思ったのがきっかけである。命を助ける仕事ならほかにもあるが、僕は阪神・淡路大震災の火事を映像でみて助けたいと強く思った。震災の恐ろしさを知り防災に関わりたいと思い環境防災科に入った。環境防災科に入り消防士になりたいと言う気持ちはより深まった。実際に消防士の方に訓練していただける機会もあり、きつかったが僕は楽しかった。自分の手で人の命を救いたいと思った。この気持ちを忘れてはいけない。今生きている人の命を守るために消防士になる。消防士になり環境防災科で学んだことをいかしていけたらいいと思っている。震災について、防災についてもっと広げていきたいし、もっと教わりたい。そして、日本を守りたい。

９　親の話を聞いて

親に当時の話を聞き、地震の恐ろしさが改めてわかった。日本に住んでいるということは、地震と隣り合わせなのでもっと危機感を持ち生活しなければいけないと思った。今回初めて阪神・淡路大震災の話を聞いた。環境防災科に入ることができなければ、ここまで地震に興味を持つことはなかったと思う。阪神・淡路大震災と聞いてもすごい地震だったとしか思っていなかっただろう。防災にも関心がなかったと思う。しかし、環境防災科に入ることでここまで地震や防災の大切さを知ることができるのは、本当にすごいことである。いまこうして大切さを知ることができたのは、阪神・淡路大震災があったからだ。たくさんの人の命は奪われてしまったが、その方々のためにも生き残った方々は語り継いでいかならない。しかし、僕たちのように語る場所がない。そういった方々のことを今後考えなければいけないのも、一つの課題だと思う。誰かにしゃべりたくてもしゃべる相手がいなかった人はたくさんいたと思う。そのせいで孤独を感じて孤独死してしまう方々もいた。地震による直接の死ではなく、災害関連死である。耐震など道路の幅を広げたりすることも大事なことであるが、心のケアをするのもとても大事なことだ。僕はまず、人々の心の復興をしなければその地域は、前に進むことはできない気がする。心が壊れてしまったら戻すことは難しい。しかし、その人自身の持つ回復力（レジリエンス）を周りの人が支えてあげれば、辛い記憶があったとしても前に進むことができると思う。心のケアをするのを法律化するべきである。命を大切にする世の中になってほしいと心から思っている。僕もそんな世の中になるようにもっと努力をしなければならない。一人一人が人ごとだと思わず身近なことだということを分かってほしい。

僕は環境防災科に入れてよかった。入っていなければ災害にこんなに興味を持つことはなかったし、防災と関わる機会もなかったと。消防士になる夢も薄れていたかもしれない。しかし環境防災科に入れたことで自分の夢に少しは近づけたと思う。災害をたくさん学べたことに感謝して、これからも防災の大切さを語り継いでいきたいと思う。

語り継ぐ

外木場　浩太朗

１　母の震災体験

（１）１月 17 日

阪神・淡路大震災が起きた１月 17 日、私の両親は兵庫県三田市に住んでいた。５時 46 分に起きた地震で母は起き、体が揺さぶられ今までに経験したことのない揺れに驚いた。食器が壊れる音が聞こえ、本棚やタンスが揺れで動いた。急いでテレビをつけて情報を得ようとした。テレビでは変わり果てた神戸の街並みを映していて、この時初めて母は地震が起きたと気づいたそうだ。テレビを見ながら舞子に住んでいる父方の祖父母に連絡をとったがまったくつながらなかった。母方の祖父母も川西市に住んでおり、電気がつかなかったらしい。

母は会社に行くために駅に向かったが、電車がまったく動いておらず父も会社に行けず会社を休んだ。家にいると、母の祖母が住んでいる甲子園口にある家が全壊して隣の人の家に避難させてもらっているという連絡がきた。母はすぐに行こうと思い車で向かったが、道路が渋滞し思うように進めなかった。二次災害に巻き込まれるかもしれないと父に説得され、夜中に家に引き返した。帰り道の車の中でラジオを流しており、ラジオでは震災で亡くなった方の名前が呼ばれていた。そのラジオで母の祖母の名前が呼ばれ、母はショックを受け、とても悲しんだ。

（２）次の日

次の日、東京都に住んでいる親戚に情報の仲介をしてもらいどういう状況か教えてもらった。舞子に住んでいる父方の祖父母は無事だったが、家は半壊で屋根が崩れたり壁にひびが入っていた。

母の住んでいた三田市は家が壊れたりする被害はあまりなかったが、電車が通らず通勤できなかった。一番困ったことはスーパーに行っても商品を買いだめされていて、ほとんど何も売られていなかったことだった。母はスーパーに残っていた少ない食料を買って家に帰った。

（３）母の祖母

母は亡くなった祖母に会いに行くために甲子園口に向かった。普通に家から向かえば渋滞に巻き込まれると思ったので、川西市の実家に寄り福知山線に乗り大阪まで行って、阪神電車に乗り換え甲子園に行った。母の実家には震災後、避難した後誰も様子を見に行っておらず、母が見に行くと電気がついていて当時飼っていたインコ３羽が餓えかけていてひどい有様だったらしい。母は掃除をしたりインコに餌を与えて、甲子園に向かった。大阪府に着き甲子園に近づくにつれ景色が変わり、戦争が起きたのではないかと思うぐらいひどい有様だった。電車に乗っていたほかの人たちも変わり果てた街並みに言葉を失い、車内が重苦しい雰囲気になった。甲子園につき、母の祖母の遺体を安置している親戚の家に向かう途中、母が昔祖母と遊んだ公園や街並みがボロボロになっており昔の思い出と重なり悲しくなった。親戚の家に着くと祖母の遺体が一番に目に入った。そこで母の親戚が集まり水をくむのを手伝った。電気は繋がっていたのでこたつに入り暖をとりながらお互いの話を話し合った。

その後、母は毎日甲子園と家を行き来した。母の祖母の火葬がなかなかできず、一週間は遺体を安置していた。ドライアイスで遺体を保護しようとし、それに加えて冬場だったので遺体が腐ったりしなかったのが幸いだと思った。震災直後、火葬場では次々に遺体を焼いていくので業者の人が遺体だけを持っていき、親戚の人や母は火葬に参加できなかった。後日、遺骨だけが返ってきた。お葬式もなく、西宮市で行われた合同葬儀が母の祖母のお葬式になった。

（４）母の感想

阪神・淡路大震災などの災害は、街が壊れたり電車が動かなくなったり祖母が亡くなったりするなど、突然にたくさんのことが起こるものだと思った。また、水道やガスが使えなくなるなど不便になり、悲しい思いをしても不便の中で生活をしなくてはいけないのでいろいろな感情があった。スーパーで売り物が無くなったときは今まで見たことのない光景にとても驚いた。阪神・淡路大震災を通して、日本はどこでも自然災害が起きると思った。震災前は関西には地震が来ず、関東に来るものだという根拠のない噂を信じていたが、そのような考え方はだめだと思った。また、日々の生活が大事で、震災後は水や非常食などを置くようにした。災害に対する知識が少ない分備えをしっかりしない

といけないなと思った。

２　祖母の話

震災当時祖母は川西市に住んでいた。立っていられないほどの揺れにとても驚いた、戸棚のものや食器がいくらか割れていた。テレビをつけるとどのテレビ局も阪神・淡路大震災について報道しておりすごい災害が起きたと思った。祖母は叔父とすぐに甲子園に住んでいる曽祖母のもとに行った。道路は渋滞していて、なかなか進まなかった。また、甲子園に近づくにつれどんどん建物が壊れておりひどい状態だった。川西市に戻ると電気と水道は通っていたがガスが出なかった。祖母は隣の家に風呂を借りたり当時三田市に住んでいた両親の家にも借りに行った。祖母が震災後大変だったのは電車が運行していなかったり、道路が車で渋滞するなど、交通の便が不便になったこととガスが通らなかったことだ。特にガスは一週間使えないだけでとても苦労したそうだ。何十年も生きていてこれほどの人が亡くなったのは初めてのことで、災害が怖いものだと改めて感じた。日々の災害に対する用意が大切だと思った。

３　感想

（１）阪神・淡路大震災を知って

僕が阪神・淡路大震災というものを初めて知ったのは小学一年生の時、「しあわせ運べるように」を歌ったことによる。当時はまだ幼く、「しあわせ運べるように」は１月になったら必ず歌う歌だと思っており、阪神・淡路大震災についても大きな地震が神戸に来たという漠然としたイメージでしかなかった。その漠然としたイメージが具体的なものに変わったのは、小学六年生の時だった。１月に学校で阪神・淡路大震災の映像を見て、先生が実際に被災した体験を話すという授業があった。その時、初めて映像で見た震災の光景にとても驚いた。今まで道徳の授業などで震災の体験談を読んだりしたが、どこか現実味がなく他人事のように思っていた。しかし、映像では実際に壊れた街並みや火事がたくさん起こっているところや阪神高速が倒れているのを見た。動いている映像の中で見ることによってとんでもないことが神戸に起こったんだなと思った。その後、震災のことを思い出し話しながら泣いていた先生がいて大人が泣くなんてよっぽどのことがあったんだと思い、阪神・淡路大震災について興味を持つようになった。そしてそのことを親に話すと、環境防災科のことを教えてもらった。

環境防災科に入ろうと思ったのは中学三年生の時で、担任の先生の勧めで進路を決めた。前々から興味はあったがどんなことを勉強しているのかはよく理解をしていなかったので受験勉強で阪神・淡路大震災と環境防災科がどのような学科か勉強していき、阪神・淡路大震災がきっかけで環境防災科ができたのだと知った。そして環境防災科に入ることができ防災について学んできた。

（２）環境防災科で学んだこと

一年生の時は外部講師の方の話をたくさん聞いた。自衛隊や消防士の方の話では、震災当時にどのような救助活動をしたかなどを聞いた。特に自衛隊の方は救助活動だけではなく、炊き出しやお風呂、医療所を設置するなど生活の面での支援もしていてすごいなと思った。また、阪神・淡路大震災の時に日本中の自衛隊や消防士、警察が支援に来ていただいて困ったときに助けてもらえるのはうれしいなと思った。その他に、大阪ガス・神戸市水道局・関西電力の方の話では生活に必要なライフラインの復旧・復興について聞かせていただいた。震災後、2800 本もの電柱が折れたり地下の水道管が破裂して水が全部漏れたりするなどで生活に大きな支障をきたした。電気がなければ明かりがない、水がなければトイレにいけない、ガスがなければお風呂に入れないので、災害後は現代ではありえないような生活をしなくてはいけない。そのような時のために日々の災害に対する備えが必要だと思った。懐中電灯を持っていたり水を家においていたりすることで、災害後の生活が少し楽にもなるし、それが自分の命を守ることにもなる。また、北淡震災記念公園に野島断層を見に行き震災当時の地形を見た。道路の白線が隆起した地形によってめちゃくちゃになっているのを見て、自然の力は怖いなと改めて実感した。公園の隣にあったメモリアルハウスの中では震災後のキッチンを再現しており、食器や棚が倒れてすごい状態になっていた。食器は時として凶器になるので危険だなと思った。

二年生の時には校外学習を主にしてきた。最初にあったのは長田のまち歩きで、震災当時被害が多

かった長田の街並みを見た。僕は今まで長田にあまり行ったことがなく、どのような街か知らなかった。震災前は家が密集し道路も狭かったと聞いたが、今ではきれいに区画整理がされていて都市のようになっていた。しかし、区画整理をするということは住人の所有している土地を減らすこともあるので反対の意見も多くすぐには実行されなかったと聞いた。確かに震災直後、自分の土地の一部が行政のものになるのは嫌だと思った。だから、次の災害が起き同じように復興するときには意見を聞きできるだけ支援できるようにしないといけないと思った。六甲山のフィールドワークでは実際に仁川駅から甲山まで歩いて地質や街並みを見ていった。街を歩くことはその街を知る、街を知ることは防災につながるということを学んだ。次に、兵庫県広域防災センターで話を伺ったり放水や煙避難訓練など体験をさせていただいた。煙避難訓練は本当に前が見えず、もし自分一人だけなら到底避難できないなと思えるほどだった。その他に実際に震度７の揺れを体験したりするなどした。兵庫県広域防災センターで体験したことは実際の災害時でも生かすことができる貴重な体験であった。１月には消防学校に二日連続で行き、実際の消防士と同じ訓練をさせていただいた。一日目は規律訓練から始まり、午後からは班に分かれて活動した。特に布を使って包帯を作るのは、普通に生活していても何かけがをした時に必要になると思った。二日目は総合訓練をし、放水を担当した。自分もある程度放水はできるようになったのでよかった。

環境防災科では専門科目の中で災害や防災を学ばせてもらい、普通の高校生では学べないことをたくさん学ぶことができた。外部講師や校外学習を通して防災だけでなく人としての在り方も学ばせてもらった。このことは社会に出ても活かしていきたい。

（３）母と祖母の話を聞いて

今回の語り継ぐを通して初めて母と祖母に震災の体験談を聞いた。語り継ぐで阪神・淡路大震災の話を実際に聞いて震災が身近なものに改めて感じた。母の話では祖母が亡くなった話があったが、その話を聞いたことによって身近な人が亡くなっているという事実に驚いた。また、震災当時母は三田市に住んでおり、祖母は川西市に住んでいたためあまり震災とはかかわりはないのかと思っていたが、話を聞くとスーパーの売り物がほとんどなくなったり、三田市でも川西市でも電車が止まり、川西市ではガスが止まるなど被害が出ていて、阪神・淡路大震災は広い範囲に影響しているだと思った。母も祖母も日常からの備えが大事だと言っていたので、次に起こる確率が高い南海トラフ地震にも使える備えをしていきたい。

今まで聞いたこともなく知らなかった震災体験について聞かせてもらった。母の震災体験は初めて聞き、その話をたくさん聞けて良かったと思う。母が亡くなった祖母の話をしているときとてもつらそうに話していたので、つらい思いを思い出してもらっている分僕も真剣に話を聞かなければいけないと思った。僕がこの自分が書いた語り継ぐを最初に読んでもらいたいのは、話をしてくれた母と祖母だ。僕のために震災の体験を語ってもらえたことには本当に感謝をしなくてはならない。そして母と祖母以外にも、父や兄弟、友達に自分の書いた語り継ぐを読んでもらい、さらに親戚や知らない人にも阪神・淡路大震災を知ってもらいたい。また、語り継ぐは震災について広めたりするだけでなく、僕が今まで環境防災科で学んだこと、成長してきたことの集大成であると思う。今年で 18 歳になり選挙権ももらえ、ほぼ大人と言っても過言ではないような年齢になる。語り継ぐを読んでもらい自分は成長できたんだと思われるようにしたい。そして、今まで成長できたのは家族、友人、小中学校・環境防災科の先生方やクラスメイト、美容室の店長、整骨院の先生などたくさんの人とつながってきて恩をもらってきたからだ。自分はたくさんの恩をもらってきたので、これからはたくさんの人に与えていきたい。親から僕に、僕から子供に、子供から孫に、このようにして人はつながっていくんだと思った。次の世代に恩を伝えていくことが新しいまち、新しい日本を作っていくことにつながると思った。

４　世界の国から学べること

僕は世界の国々の歴史や景観、文化を学び実際に行ってみたいと思っているため、大学では地理学を研究したい。なぜこのようなことを思ったかというと、世界は自分たちの知らないことで満ちあふれているからだ。たとえば、マクドナルドでも世界各国でいろいろ違う。インドでは宗教上牛肉は食べられないので鶏肉や羊、魚、野菜などを使っている。発展途上国ではマクドナルドは高級料理店

で、家族と祝い事の時に食べにくるなどイメージギャップがある。また、日本は労働時間がフランスの２倍あり睡眠時間が二番目に多いなど日本のことも知ることができる。さらに、世界の国々のことを知ることで今環境防災科で学んでいる災害や防災についても、日本だけの視点だけでなく世界中の視点から知ることができ、新しい防災ができるのではないかと思い学びたいと思った。

授業でよく防災で大事なのは地域とのコミュニケーションだと教わった。しかし、今の世の中、近所の人と会話をすることも地域のコミュニティも少なくなってきている。そのような、日本の悪いところを直すために外国を見本にして、真似をし、改善していけば良いなと思った。ブラジルにはバールと呼ばれる喫茶店とレストランと飲み屋が混ざったお店がたくさんある。このバールの魅力はカウンターで隣同士になった見知らぬ人とすぐに会話ができる環境があるところだ。バールにはテレビがあり、サッカーの試合がある夜には、年齢、性別関係なく、近所からたくさんの人がやってきてみんなで騒ぎながらサッカー観戦をしている。このように日本も地域で交流できる場をもっと作り地域のつながりを強くしていくようにするべきだ。特にその土地特有の文化をもち、誰でも訪れることのできる場所が、地域の中で必要ではないかと思った。僕が日本で思いついたのは銭湯だ。それも大きなスーパー銭湯みたいなものではなく、地域に小さな銭湯を作ることだ。僕の近所にも父が子どもの頃からあった小さな銭湯があり、何度か父と行ったことがある。父はおじいさんたちとずっと話しており、お風呂の数も少なく、当時幼かった僕は面白く感じなかった。しかし、今思うとあの銭湯の環境は今の世の中には珍しく、地域のつながりを強くして防災に適していたんだと思った。

また、防災とはあまり関係ないが消費税についても外国を見本にできるのではないかと思った。たとえば、スウェーデンでは消費税が 25%ととても高い。しかし、スウェーデンにはもっと消費税を払いたいと言う人がたくさんいるそうだ。これには圧倒的に充実した福利厚生があるからだ。スウェーデンも日本も、もしもの時の支援が似ている。しかし、スウェーデンではもしもの時以外の日常の中にも福祉がたくさんある。子育てをする母親の支援で、ベビーカーを押す母親は市営バスなどに無料で乗車できるそうだ。出産にかかるお金も無料で、育児休業制度は、子どもが８歳になるまでの間に 480 日間の休みを取ることができる。医療費も 20 歳未満は無料で、それ以上の人でも年間日本円で一万円しかかからない。その他にも食品や教育に関する文房具にかかる消費税は低く、ゲームや電化製品などの消費税は高い。このように自分が国のため払った税金が、ちゃんと国民に反映されていることが分かりやすい制度がスウェーデンでは作られている。

日本は消費税が 2014 年の４月に８％にあがった。そして 2017 年の４月に 10%にあがる予定だ。僕は消費税が 10%にあがったら何がどうなるか全く分からないし、同世代の人たちも同じような感じだと思う。調べてみても文字が多く消費税を上げることによるメリットの根本が分かりにくかった。スウェーデンみたいに税金を払った先の使い方を明らかにしてもらえれば国民も理解しやすくなると思う。

これからの人生の中で日本だけではなく、やりたいことや学びたいことを世界に行ってチャレンジすることで自分の世界も広がると思った。地理にはその土地の記憶がすべて詰まっており、世界には僕の知らないことがたくさんある。しかし、楽しいことだけでなく、紛争や貧富の差、児童労働など悲しい話題にも向き合わなければならない。一人の日本人としてこれから世界とどうかかわって生きていくか考えないといけないと思った。さらに、日本の中だけで生きていくのはもったいないと思うので、世界について学んでいき環境防災科で学んだ防災・減災とつなげてたくさんの人に伝えたい。

語り継ぐ

滝村　佳理那

１　はじめに

1995 年１月 17 日に阪神・淡路大震災が起こった。現在 17 歳である私はもちろん生まれていない。その時のことを写真や映像でみることはあっても、実際どんなことがあったのかは分からない。

今回の体験談は私の母と父に聞いたものである。母と父は、神戸市西区にある現在私たちが住んでいるマンションに住んでいた。

２　母から聞いたこと

（１）地震発生直後

地震が起こるまで、神戸には地震が起こらないとずっと言われていたので、母もまさか地震が起こるなんて思ってもいなかった。しかし５時 46 分に地震は起きた。地震発生時は、和室で寝ていた。すると、ゴーーー！！という音がした。母はその音が何の音かわからず、１回目の揺れでは揺れという記憶がないくらい怖かったそうだ。２回目の余震で地震だということに気付いた。食器棚の中の食器はバキバキになったが、タンスなどは倒れなかったため、２人とも無事だった。

母と父は地震後すぐに横尾に住んでいる祖父母に電話をした。すぐに電話したためつながり、安否を確認することができた。しかし、その後、板宿に住んでいる祖父母に電話すると、被害が大きかったこともあり、つながらなかった。だから、横尾経由で板宿へ向かうことにした。

（２）祖父母のもとへ

母は祖父母のもとへ行く際､パニックになっていたため何を持っていけばいいのか分からなくなり、電話をするためのお金と近くにあった大きいぬいぐるみを持って、車で約７時間かけて向かった。迂回して板宿に向かっている途中、兵庫の近くでは大きな道路が割れていたり、電線が倒れていたりしたため、普通には通れず、電線をまたいで通ったこともあったそうだ。母は板宿や長田の被害を見たとき、ほとんどの建物が倒れていたり、つぶれていたりしていたため、何が起こったのか分からない感じになった。被害の状況はまるで戦争中みたいだったそうだ。そして心配していた、板宿に住んでいる祖父母はなんとか無事だった。

（３）家に戻って来てから

祖父母の無事が確認できたため、母と父は家に戻ってきた。家は大丈夫だったため、避難することはなかった。母が知っている近所の人たちも避難していなかった。

その時、母は妊娠していた。しかし、病院に行けず、地震から１週間後にやっと行くことができた。まだ妊娠数週間だったので、そんなに苦労することはなかった。

（４）メディア

地震が起こり、テレビや取材でいっぱいだったそうだ。その時のアナウンサーの人たちの服装は大抵スーツに革靴だったそうだ。母からすると、そんな人たちよりも動きやすい服装で、化粧もしているか分からないような人が取材していた方が安心できたそうだ。

（５）あれから 20 年たって

母は震災から５年たっても１人で三宮に出ることができなかった。現在は普通に出ることができるが、いまだに恐怖心は残っている。どこにいても、「もしここで地震が起きてしまったらどうしよう」とか､「もしここで埋まってしまったらどうしよう」など、もしものことを考えてしまうそうだ。そして、スカイツリーには絶対に上れないと言っていた。でも、今こうして生きられていて本当に良かったと言っていた。震災は嫌なことだけでなく震災のおかげで、近所の方々と喋れるようになれたそうだ。

３　父から聞いたこと

（１）　被害

父が見たのは、渡り廊下が壊れていてぐらぐらで危険な状態や、ある１戸建てが崩れ、道路に広が

っていたり、瓦などが崩れていて、ビニールシートを覆いかぶせていたりしていた被害だった。
父が仕事で行っていた、三宮のトアロードにあるビルが半壊していた。その建物はハウスダストでいっぱいだった。父は１ヶ月以上咳が止まらず、病院にも行ったそうだ。
妙法寺から南にいくと被害が大きく、建物がぐちゃぐちゃだった。父の実家は地震直後、大げさに言うと、一瞬家が宙に浮いたそうだ。浮いたと同時に、地面につながっていた排水溝などの管が破裂してしまい、そして着地のときつぶれてしまった。そして、隣の家が父の実家の方に倒れてきたため、実家の半分がつぶれてしまったのだ。祖父母ともに無事でよかったと思った。そのあと、太田中学校の周辺で火事が起こったのだ。祖母は安全な学校に避難したから大丈夫だった。

（２）実際は

メディアでは、支援物資をもらうときにしっかり列に並んでもらっているなど、良いところが報じられた。しかし実際は、板宿や長田の一部で、たくさんの問題が起こった。それは、強盗が多かったことだ。建物が少し崩れてしまって扉があいてしまっているお店などが多かったのだ。電話をかけているときも、後ろから、「早よせい!!」などたくさん文句を言われた。

（３）支援物資

支援物資はいろんなところから届いていた。しかし、届くのは長田など周りの方ばかりだった。父の会社は中央区の方にあった。中央区は中心にあるため、支援物資などがあまり届かなかった。やっと届いたお弁当を父が食べようとしたところ、そのお弁当は賞味期限が１日や２日前の物だったりした。しかし、父はお腹が空いていたので食べた。冬だったので大丈夫だったのかもしれないが、お腹を壊さずに済んだ。

（４）あれから 20 年がたって

父は震災で嫌なことやしんどいことがたくさんあったけれど、震災があったからこそ近所の方と仲良くなれたし、震災のときも「ご飯食べていき!!」などいろんな人に助けてもらえて、すごく感謝している。母と父は今の家に決める前、中央区や長田の方も考えていたそうだ。父は、今の家に決めていて本当に良かったと言っていた。次いつ災害が起こるかわからないから怖いけれど、事前にしっかり備えをしていこうと思う、と言っていた。

４　追悼式

私は高校生になって初めて東遊園地で行われている阪神・淡路大震災の追悼式に参加した。小学生や中学生の頃は、1 月 17 日にテレビで観たことがあった。その時はただテレビがついていたのを観ていただけで何も感じなかった。しかし高校生になり、環境防災科に入って震災のことや防災のことを勉強した上で実際に追悼式に行ってみると、テレビで観るのとは全く違い、心の中で思うものや感じるものがたくさんあった。灯りが灯されている竹にはたくさんの文字が書かれていて、私はその中でも、『母』という文字を見た瞬間、自分の心の中でいろんな感情がこみ上げてきた。その文字を書いた人は、どんな思いを抱いてその文字を書いたのかな、と思う。震災で犠牲になられた人だけでなく、その周りの方々のためにも、震災のことをもっと知って、これから起こるかもしれないと言われている災害で被害が増えないように、勉強をし、そしてより良い備えをしていくことが大切だと感じた。

５　環境防災科に入って

私が環境防災科に入りたいと決めたのは、中学１年生の時のことである。最初は入りたいという理由は特になかった。しかし、ずっと注目し、気になっていた学科だった。
そして、その年の３月 11 日に東日本大震災が起こった。私はその時、母と家のリビングにいた。すごくゆっくりの小さな横揺れで、変に酔いそうな感じだったということをよく覚えている。ドラマを見ていたのが一瞬で地震の速報に切り替わった。テレビには今までに見たことのない巨大な津波が映っていて、「こんなことが起こることってあるんや。」と、中学１年生の私は思っていた。そして、ニュースを見ていくうちに、自分でできることってないかな。役に立てることってないかな。と考えるようになった。しかし、地震のニュースを唖然と見ることしか私にはできなかった。そして、そのころから環境防災科のことについて調べて、目指そうと思うようになった。
私は、環境防災科に入って、本当に自分が誰かの役に立てていることってあるのかな、と思ったり

もした。しかし、ボランティアに行かせていただいたときに、「ありがとう」「頑張ってね」と、すごく励みや勇気になる言葉を言っていただいた。私はそのとき、「参加してよかった。」と強く心から感じることができた。

私は、環境防災科に入ったからこそやりたい夢を見つけられたのだと思う。そして、中学生の時はあまり興味がなかった防災にも興味を持つことができたし、防災が本当に大切だということを身に染みるほど感じることができた。

いろんなボランティアに参加させていただいて、たくさんの方々と出会うことができた。その方々と出会えたからこそいろんな意見を聞くことができ、そして自分自身も意見を言うことができたのだと思う。だから関わった方々に感謝しなければならないと思う。高校卒業まで１年もないけれど、環境防災科で学べることはすべて学び、そして、もっとたくさんのことに挑戦して、いろんなことを経験していきたいと思う。そして、社会に出ても恥じない人になろうと思う。

６　感想

（１）震災の話を聞いて

母と震災のことを何回か話したことはあったが、父から震災があったときのことを詳しく聞いたのは初めてだった。母は語ってくれているとき、「あの時はほんまに怖かった。外に１人で出かけられへんかった。」と言っていて、私にはその時の母の表情から当時大変だったことや、しんどさということが伝わってきた。母はその時に妊娠しており、自分の体を守るのにも精いっぱいなのにもかかわらず、おなかの中にいる子どもも守らなければならないという状況でとても大変だったと思う。私だったらパニックになり、どうしたらいいのか分からなかったと思う。でも、母はパニックになりつつも、即座に祖父母の家に電話したり、動いたりしていていた。私はこんなに大変な時でも判断し、行動する母を本当に立派だなと思った。しかし、私は母の心のケアがもっと早くできていたらよかったなと思った。それは、５年たっても三宮に出ることができないということを聞いたからだ。でも、現在は震災のことを話してくれているので、母の心は復興してきているのではないかと思う。

父は車の移動中に語ってくれた。聞いた話は結構具体的だった。父は震災のことをもっと話したいという感じで、移動しているときに、「この道は通れなかった。ここはまだ被害が小さかった。」などたくさん話を聞くことができた。父に震災のことを聞くことがなかったから、この機会に聞くことができて本当に良かったと思う。父は咳が止まらなかったことを母には言っておらず、その時は妊娠している母に迷惑をかけたくなかったという気持ちがあったということが分かった。震災当時は通ることのできない道があったという中で、いろんなことを考え、判断し、行動してくれた父に感謝をしなければならないと思った。

私は、授業などで阪神・淡路大震災のことをたくさん知ったつもりでいたが、テレビの報道で流れていないことも多く、被災された方々は１人１人違ったいろんな思いを抱えているのだなと思った。

ずっと神戸では地震が起こらないといわれていたのに、なぜこんなに大きな地震が起こったのか。逆に私はなぜ起こらないと思っていたのかが疑問だった。起こらないと言われていたために、備えをしている人が少なかったのだと思う。だから、起こらないといわれていても、もしもの事を考えてしっかりと準備していくことが大切だと思う。

震災では、6434 人のたくさんの人の命が失われた。前の日までは、何の変りもなく楽しく暮らしていたのに、何でこんなことが起こらないといけなかったのだろうか、と私は思った。私は、犠牲になられた 6434 人の方々のためにも、これからも阪神・淡路大震災のことを知り、たくさんの人の思いを受け入れることが大切なのではないかと思った。

私が今回震災のことを聞いて感じたことがあった。１つ目は、「家族みんなが生きていてくれて本当によかった。」ということだ。家族がいなかったら、今の自分ではなかったし、私自身生まれてもいなかったのだ。だから、今このように過ごせていることに感謝して、毎日を大切にしていこうと思う。私はいつも私のために誰かが何かをやってくれたときに「ありがとう」、悪いことをしてしまったときに「ごめんなさい」という言葉が素直に出せない。本当はとても感謝しているのにその時に素直に言えなかったり、意地を張ってしまったりして、他の意見を聞こうとしない時がある。だから、私はそういう言葉を当たり前に言えるようにしたいなと思う。

２つ目は、「震災ではたくさんの辛いことが起こったが、辛いことだけではない」ということだ。震災があったからこそ、近所の方と親しくなることができたし、いろんな方と助け合うことができたのだと思った。父も震災の時に全く知らない人にご飯を分けてもらって本当に助かったと言っていた。だから、私は出会いを大切にしていこうと思う。毎日近所の人にあいさつをするだけでも、もしもの時にお互いが支え合えると思うので、たいしたことではないけれど、あいさつをすることは日常時だけでなく、災害時にも役立つ大切なことだと思った。

（２）語り継ぐ

この「語り継ぐ」を書くにあたって、いろんな先輩の「語り継ぐ」を読ませていただいた。たくさんの先輩の経験や震災の時の話が書かれていた。そのとき私は、この「語り継ぐ」に軽い気持ちで取り組んだり、聞いたことを書いたりしてはいけないと感じた。私はこの「語り継ぐ」を両親に見てもらいたいと思う。それは、震災当時のことをたくさん聞かせていただいて、その聞いたことをたくさんの人に伝えていっているということを知ってもらいたいからだ。環境防災科で学んだことは、これから先の社会ですべてが役に立つこととは限らない。しかし、この「語り継ぐ」をこれで終わりにするのではなく、たくさんの人に伝えていかなければならないと思った。夢はあるが、将来どんな職業に就くにあたっても、何かしら防災の大切さをいろんな方法で、たくさんの人に広めていきたいと思う。

私は阪神・淡路大震災を経験していないが、授業や両親からの話を聞いて、絶対に風化させてはいけないと感じた。阪神・淡路大震災から 20 年がたって、震災を経験している人は減っていき、経験していない人が増えてきている。しかし経験していないからと言って、震災を全く知らないというわけではない。だから、経験した人から話を聞いて、語り継いでいくことが大切だと思う。次世代や未災地にこの震災で失敗したことや、報道には流れなかったことや、被災されたたくさんの人の思いなどを伝えていくことが私たちにできる大切なことではないかと思う。

７　将来の夢

私の将来の夢は、建築士・インテリアデザイナーになることである。私はもともと物を作ることや海外の建物に興味があった。しかし、建築士を目指そうとは全く思っていなかった。目指そうと思ったきっかけは、高校２年生の校外学習で「Ｅ－ディフェンス」に行った時のことである。その時に、建築の面白さやもっと知りたいという思いを感じることができた。私はその仕事で、形にしていろんなことを伝えていきたいと思う。形にして伝えていく理由は、少しでもたくさんの人に興味を持ってもらうためである。何を伝えていくにしても、目で見て手で触って記憶に残る伝え方をしていきたいと思う。

防災をするにあたって耐震をすることは大切なことであり、命を守るにあたって重要なことである。しかし、耐震工事というのは、安価でできるものではない。だから、私が建築士になったら、安く、地震に強い建物を作っていきたいと思う。そして、災害が起こらないといわれている国でも、これから先も絶対に地震が起こらないとは限らないので、貧困な国でもできるような防災を考え、耐震などに取り組むことの大切さについて伝えていきたいと思う。そして、日本だけでなく世界中の人々に防災を身近に感じてもらいたいと思う。

阪神・淡路大震災の時にたくさんの失敗があったと授業で感じた。同じような失敗をしてはならない。だから過去の震災のことを勉強して、どんな失敗をしてしまったのかなどを知っていこうと思う。そして、今自分がしなければならないことを考え、１つ１つ前に進んでいこうと思う。建築士とインテリアデザイナーという夢を叶えるためにもたくさんの経験をして、これからの自分のためにも知識を高めておきたいと思う。そのために環境防災科で学べることをもっと学んでいこうと思う。

語り継ぐ

爲平　涼

１　父の体験

（１）地震の前

当時、私の父は仕事の関係もあって、西宮に住んでいた。母とはすでに結婚していたが、お腹のなかに赤ちゃん（私の兄）がいて神戸の病院に入院していたため、地震が起きた時は一緒にいなかった。父はマンションの二階に住んでいてあまり近所づきあいがなかった。一階はコンビニになっていた。

（２）地震直後・当日

地震直後、父は家で寝ていた。「ゴォー」という音が鳴り、そのあとの激しい揺れで起きた。はじめはミサイルでも飛んできたのかと思ったそうだ。電灯が頭の左に落ちて粉々になり、右側にあったテレビは自分を飛びこえて左側に飛んでいった。揺れがおさまってから辺りを見ると、食器はほぼすべて割れ、冷蔵庫は倒れて中身が出て散乱していた。

その直後、母の入院していた病院、母の実家、自分の実家に電話をかけた。すべてつながり、家族の安否はそのとき確認できた。家の電話は、地震直後はつながったが、それからすぐ、どこにもつながらなかったそうだ。

とりあえず、着替えて外へ出ようとした。玄関を開けると、コンクリートにひびがはいり、中の鉄骨が飛び出していた。外に出るとガス臭いにおいがした。目の前にあった二階建てのアパートはぺしゃんこになり、近くの人が「手伝ってくれ。」と助けを求めていた。1時間ぐらい、瓦礫をどけたりして中の人を助けようとしたが大きい瓦礫がじゃまでなんともできなかった。結局、消防や自衛隊の助けがないと救えないのでその場を離れ、家族の様子を見に行こうと思った。

家族とは家の電話ではつながらないので、電話ボックスを探していた。途中、阪神高速が一部、倒れているのをみた。トレーラーごと落ちていて中のジュースが散乱していた。運転手はいなくなっていたので生きているか分からない。バスが高速の上ギリギリで止まっていたのも見たそうだ。

そこらじゅうの建物が倒壊していた。二号線沿いのイズミヤ（１，２階はスーパー、３，４階が駐車場でその上はマンション）は駐車場の部分が潰れてしまっていた。

お昼ごろ、勤務先の兵庫トヨタに行ったら営業の先輩がいた。中はグチャグチャだったので、少し片づけた。上司から「金庫だけは盗まれないように。」と言われ、先輩が金庫を持って帰った。

夕方ごろ、母の病院まで自転車で行った。次第に暗くなっていき、そこらじゅう赤くなっていた。まるで空襲が起きた後のようだった。

夜、病院に着いた。被害は少なく、電気もついていた。母にも会え、待合室の長イスで寝ることができた。

（３）翌日

神戸の母側の両親がきた。灘のおじいちゃんおばあちゃん（母の祖父母）の安否が分からないと聞き、心配なので自転車で見に行った。家は半壊していて、中には誰もいなかった。となりの寺に避難していてどちらも無事だった。それを報告し、西宮まで自転車で帰った。夜は家の中で寝た。

（４）19 日

自転車は盗まれていた。夕方には戻ってきていた。スーパーで食糧を買い、神戸の病院に持って行ったが、病院には救援物資がたくさん届いていた。

（５）それから

１週間ほどして、父は荷物をまとめ、地元の加西に帰った。

１月末、残りの荷物を持って帰るため、再び車で来た。有馬街道を抜けて帰ったが、被害を受けている地域と受けていない地域の温度差に驚いたそうだ。

２　母の体験

（１）震災の前

母はもともと神戸の人で、中央区に住んでいた。

当時、父と結婚し、妊娠しておなかの中には長男（私の兄）がいたため、一か月前から元町のパルモア病院の産婦人科に入院していた。

（２）震災直後・当日

1 月 17 日の明け方、ドンッと下から突かれるような衝撃の後、ベットごと揺れだした。すぐにおさまると思ったが、激しい揺れが長く続いた。こんな地震が神戸で起きるわけないと思った。そう思いながら、赤ちゃんを守ろうとし、可動式の机に頭を入れ腰を下にし、ベットにしがみついた。メリメリ、ガシャガシャとものが壊れていく音がした。揺れがおさまり、頭を上げると、他のベットがぶつかり合い、ロッカーは倒れグチャグチャになっていた。みんなすぐ廊下に出て談話室へ行き、そこで待機していた。病院の人はみな無事だった。看護婦の人から父から電話があったと聞き、そこで父が無事だと知った。病院の窓から見えるビルは倒れそうになっていた。救急車、消防車、パトカーやヘリコプターの音がずっと鳴り響き、西側では太陽を隠すぐらい黒い煙が出ていた。そこですぐ近くで火事が起きているのだと知った。

昼、産婦人科の先生が近くの自分の家でお米を炊いてきてくれた。それをみんなで食べた。

夕方にやっと病院の自家発電により電気がついた。テレビも見ることができ、はじめてこの地震の状況を知った。同室の人はニュースで自分の家が火事で焼けるのを見て、泣いていた。母もそれを見て、つらくなり泣いた。

母の実家は半壊だったが、そこにいた母の両親、母の兄は無事だと聞いた。実家の裏のアパートは全壊し、母の兄が救出作業を手伝っていたが、瓦礫から出てきたほとんどの人が亡くなっていた。

夜、父が病院に着き、会うことができた。

（３）それ以降

それ以降、病院を移る人もいたが、この病院は頑丈だと聞き、ここで出産することを決めた。

食事は最初のほうは救援物資のおにぎりとバナナで、冷たいものばかりだったが、そのうちお好み焼きや焼きそばなど温かいものも出るようになった。

震災後は 10 日間ほどお風呂に入れなかった。名古屋から給水車が来て、震災後はじめてお風呂に入ることができた。トイレも流せないので、小のときは流さず、大のときだけバケツに汲んであった水を流した。生きていく上での水の大切さに気づかされた。支援物資のペットボトルの水は貴重に使った。

母は出産のため２月５日まで寝ていた。出産した日もまだ水はでなかった。赤ちゃんは無事生まれ、まわりのみんなが喜んでくれた。

住むところがなかったので、父側の実家の加西へ移り住んだ。助けてもらうだけで何もできず神戸を離れることがつらかった。子育てをするためにもいつか加西に移ろうとは思っていたが、まさか震災が原因で移り住むとは思いもよらなかった。自分が生まれ、育ってきた神戸の街がこんなにもむちゃくちゃになり、しかもいきなり離れなくてはならない。心がはりさけそうだった。

家族は無事でも、クラスメイトや、知り合い、友達の両親など多くの人をこの震災で亡くした。近所のよろず屋の夫婦は、震災前、「元気な赤ちゃん産むんやで！」と励ましてくれたのに、地震でどちらも家の下敷きになり亡くなられた。母はとてもつらい思いをした。

震災後、母はいろんな人から当時の話を聞いた。三宮にいた友達の家の飲食店は、震災後、ぐちゃぐちゃになり、中にあった高価なお酒がいっぱい盗まれていた。震災では助け合いや相手を思いやる気持ち以外にも、何かを盗んだり、そういった人間の負の部分もすべてさらけ出されていた。

母の実家は半壊だったが、そこに新しく復興再建マンションが建つ計画が出て、「長年、住んできた土地だが、みんなの為になるなら。」と祖父も思い、土地を提供し、家は取り壊された。今、その土地はマンションの通路になっている。

３　感想

両親から震災の話をこれほど詳しく聞いたのは初めてだった。

小さい頃、初めて震災の話を聞いて、そのあとＭＢＳの震災の記録映像をビデオで見たとき、大きな衝撃を受けた。神戸の街は祖父母がいたため、毎年、正月とお盆には泊まりに行っていた。まさか過去にこの街で大きな地震が起きていたとは思いもしなかった。

小学校低学年の頃、初めて人と防災未来センター―に行ったとき、恐くて夜も眠れなかった。あのとき、それだけ自分は、あそこで見た映像に大きなショックを受けたのだと思う。

でも時が経つにつれ、震災のことが頭から離れていった。当時の話も両親から聞かなくなり、自分も、そういうことはあまり聞いてはいけないのではと思うようになっていた。そうするうちに、だんだん昔聞いた話の記憶が薄れていっていた。

環境防災科に入ったきっかけも、両親が被災した体験もあって、阪神・淡路大震災のことを学び、次に災害が来たときそれを活かし、自分が何かできるんじゃないかと思ったからだ。しかし入った後も当時のことについて聞くことはなかった。

今回、震災の話を聞いて、昔聞いたことを久しぶりに思い出したこともあったし、初めて聞いたこともたくさんあった。父があの高速道路から落ちそうなバスを、生で見たなんて、今回話を聞いて初めて知った。

父は震災の時、国は何もしてくれなかったといっていた。個人的な意見かもしれないが、ほんとに助けてくれたのは救助活動をおこなっていた消防や自衛隊だ、と言っていた。そう感じたのはやはり、あの頃、被災者に対する補償が少なかったからではないかと思う。

あの時から 20 年も経っているので、父にも所々思い出してもらいながら話してもらったが、いつも冗談しか言わない父が、あれだけ真面目な顔をしているのは初めてだった。父は話をした後、風呂に入った。リビングにいたが、父が鼻を何度かすする音が少し聞こえた。聞いた話があの時、父が体験した全てのことなのか分からない。ほかにも震災で、一生心に残るようなつらいことがあったのではないかと思う。

母の話をこれだけ真剣に聞いたことはなかった。普段、成績や学校のことについてああしろこうしろと言ってくるが、だいたい聞きながし、頭の中に入れようとしなかったからだ。

今回、阪神・淡路大震災の話を聞き、久しぶりにビデオも見せてもらった。父も母もとても悲惨な災害にあったのだとあらためて感じた。母はもともと神戸の人だったため、思い出の場所や建物、近所の人や知り合いなど、多くのものを亡くしている。その悲しみはどのようなものか想像できない。しかし、そういった悲しみや苦しみに耐えて生きているからこそ、兄や僕や弟が生きている。母には感謝し、強く生きていかないといけないと思った。

2 年のとき、環境防災科で六甲山フィールドワークという校外授業があった。甲山の地形や断層などを実際に見て学んだ。そのとき講師だった先生は僕たちに優しく、地震について詳しく教えてくださった。

帰ってきて母に今日あったことを話すと、母はふと思い出し、中学のアルバムを出してきた。教師の紹介のページに、若き頃のその先生の写真があった。母の中学校の時の担任だったのだ。僕は驚いたが、母はもっと驚いていた。母は先生のおかげで中学生活を楽しく過ごせたと言っていた。まさか親子二代でお世話になるとは思わなかったそうだ。先生は、将来神戸で大きな地震が起きる、と授業でも言っていた気がすると母は言った。もしそのとき、その言葉を真剣に受け止めていたら、もっと準備ができていたかもしれない。

震災からはもう 20 年も経っている。震災を経験していない世代がだんだん多くなっている。兄はちょうどその境界線あたりの歳だ。もうみんな大人になっている。震災を体験した人と比べて、体験していない人の防災の意識はとても低いと思う。

最近、テレビで防災のことについて特集されている番組を見た。生活する上で少し備えておくだけで災害のときに役に立つことがいっぱいあることを知った。しかし、そのいくつかは母が実践していることに気づいた。たとえば、窓ガラスが災害時、飛び散らない方法だ。これはカーテンを閉めておくだけで家の中にいる人にガラスが飛び散らないのだという。母はこの番組を見ながら、うちの家でもやっていると言ってきた。たしかに寝るとき、母は寝室のカーテンをいつも閉めていた。あまり外

にいる人に家の中を見られたくないのかと思っていたが、その本当の理由がそのときやっと分かった。母はそれ以外にも家具の上に突っ張り棒を付けていたり、食器棚の中に滑り止めのマットを敷いていたりと様々な防災対策をしている。僕は環境防災科で毎日防災を学んでいるのに何も実践していない。実際に過去に体験した人とこれほどにも意識に差があるのかと感じ、同時に何もできていない自分がとても情けなく思えた。学ぶだけではなく、生活の上で実践してこそ防災につながるのだと思った。

４　将来の夢

僕は将来、自衛官になりたいと思っている。きっかけは幼少期、親に連れて行ってもらった駐屯地の祭りで自衛隊の演習を観たことである。あのときはすごくかっこいいなと思い、ただただ興奮していた。戦車や兵隊のおもちゃでよく遊んでいたからかもしれない。最初はあこがれだけだったが、その後、災害派遣や国際支援活動など様々な活動をしている姿をみて、自分もなりたいという気持ちが強くなっていった。高校に入ってからは身体を鍛えることに興味を持ち、毎日必ず、決まったメニューをこなすようになった。筋肉が付いていくごとに達成感が得られた。これほど自主的に毎日続けられたものは、今までになかった。自分の趣味を活かすことができ、人の役に立てるのでいい職業だと思い、自衛官になろうと決めた。小さい頃からずっと変わらなかった夢なので、必ず叶えたいと思う。

ただ心配なのが、災害派遣のときに受ける心の傷である。自衛隊で勤め、災害派遣へ行った人の中に、遺体などを見て、食事が喉を通らなくなったことや、つらくなって辞めた人もいる、といった話を聞いたことがある。そのような経験はしたことがないので分からないが、自分がもし同じ状況にあったとき、心に大きな傷を負わないか、とても心配である。でもそんな時、少しでも心の傷を和らげられるよう、心のケアなどについてしっかり学んでおきたい。

もし家族ができたら、職業上、災害時に一緒にいることができないと思う。こんなとき、自分がいなくても災害から身を守るために、防災についてしっかり教えていかないといけないと思った。母が日頃おこなっていたことも真似して、自分もかげながら家族の命を守っていきたい。家族で防災について意識を高めていこうと思う。震災を生き抜き、父と母が繋げてきたいのちを、自分も未来へ繋げたい。そのためにも父と母の体験は語り継いでいこうと思う。

語り継ぐ

寺井　美紀

１　はじめに

阪神・淡路大震災から２０年が経つ。私は震災後に生まれたため、震災を体験したことがない。２０年前、震災で思い出したくもないような辛い体験をした方からすれば、私たちのような震災を経験したことがない世代が語れるわけがないという考えを持つだろう。それは、当然のことだと思う。しかし、震災を経験していないからこそできることがあると私は考えている。そのために、環境防災科で阪神・淡路大震災の教訓から、防災減災について深く学んできた。この「語り継ぐ」を作成しながら、自分にできることを探していきたい。震災で亡くなった方々の思いを感じながら…。

２　体験記

（１）震災以前

当時、三女である私と二女である姉は、まだ生まれていなかったため、平成５年生まれの１才８か月の長女と父母の三人家族だった。母は一か月後に生まれる予定の二女を身ごもっていて、大きなお腹だった。今と同じ垂水区の家に居住しており、震災前日の１６日は、中央区にある母の実家で晩ご飯を食べ、お風呂も済ませた後、夜遅くに垂水区の家へ戻った。その日はいつもと同じように寝床についた。数時間後に何千人もの人が犠牲になる災害が起こることなど想像もできない、連休明けの普通の日常の朝を迎えるはずだった。父は、その当時、神戸で一番高かった新神戸駅前のホテルに勤務しており、次の日もいつも通り昼前に出勤する予定であった。

（２）午前５時４６分発災

１９９５年1月１７日、午前５時４６分。母は、地震の発生と同時だったか、長女の泣き声で目が覚めた。今だかつて経験したことのない揺れで、縦揺れなのか横揺れなのか、とにかく恐怖で赤ちゃんの長女を抱きかかえることしかできなかった。何秒だったのか、何分だったのかわからなかったが、揺れがおさまってからとりあえず部屋の明かりを付けた。寝ていた部屋の被害はなかったが、長女を抱いて恐る恐る隣の部屋へ行くと、動くはずのないピアノが傾いて、重い椅子の前で踏みとどまっていた。その時までは部屋の明かりが付いていたが、寒くて暖房を付けようとヒーターのスイッチを入れると、付かなかった。停電だった。真っ暗な中とても不安だったのを覚えている。しかし、停電はその後数時間で復旧したのでホッとした。

父は、当時勤務していたホテルが折れているのではないかと思い、まだ暗いうちに車で中央区に向かった。母は赤ちゃんと２人きりになり心細かったのを覚えていると言う。

数時間後、部屋は明るくなりヒーターも付いた。そこでやっと、いったい何が起こったのだろうと考えた。中央区の両親が心配になり電話をしたが、繋がらなかった。住んでいた垂水区の家は、平成３年に新築したとき、祖父が「基礎はしっかりしとかんと」と言って土台基礎作りに普通よりお金をかけたおかげで、角地であったが被害はなかった。しかし、南側の角地の家は半壊だった。あのとき祖父が土台基礎作りはしっかりしておこうと言っていなかったら、この家も崩れていただろう。祖父のおかげで幸い家の被害はほとんどなかったので避難所には行かなかった。

（３）ライフラインの乱れ

その日から、水道・ガスが完全に止まり、電気だけの生活になった。お風呂に残り湯があったので、トイレは一日だけ流すことができた。電子レンジ・ホットプレート・電気の暖房器のおかげでガスが止まったことは大問題には感じなかったが、夜になり、お風呂が沸かせない、そもそも水をためられないことに気が付いた。当時は、何かいろいろな思考が停止したかのようにその時々に直面しないと問題点がわからない状態だった。

１月１７日以降地域によって復旧の速度には違いがあったが、断水は半月以上、ガスの不通は１か月以上続いた。しかし、電気だけは数時間で復旧したので、震災以後はオール電化が勢いづいた。震災を経験して、ライフラインは人間の生活の質に最も影響を及ぼすものであると痛感することとなった。

（４）母の体験

母は１才８か月の長女を抱え、そのうえ翌月、二女を出産予定の身重だった。幸い、自分の体も元気で、お腹の中の子も順調だった。当時は、近所のスーパーが開いていて、長女のおむつやミルクは買い溜めすることができた。その日から二女を出産するまでの１か月間はとてもしんどかった。大きなお腹でガソリンスタンドに水を貰いに行き車で家まで運んだり、食料品を調達したりしてなんとか家族３人で生活することはできた。しかし、お風呂だけは困った。遠い親戚の家へ行ったり、スーパー銭湯へ行ったりしていたが、ガスの復旧には１か月以上かかり、スーパー銭湯はどこも人がいっぱいでリラックスできる場所ではなかった。そのせいか、免疫力が衰え、膣炎や熱などの症状が出ていた。母は父が発災直後にホテルに向かったため、心細かったが、中央区に住んでいた母の両親が垂水区の家まで来てくれた。

（５）父の体験

父は、震災の朝、母と１才８か月の長女を家に残し、勤務先のホテルが折れているのではないかと、早々に車で出勤した。阪神高速道路は崩壊していたが、山麓バイパスは被害がなかったので、総合運動公園まで行き、山麓バイパスを使って中央区にむかった。料金所は係員が不在だったが、通行はできた。その上道路は全く混雑しておらず、震災の影響はほとんど感じられなかった。しかし、新神戸に着く頃には何か普段とは違う違和感があった。山のほうは煙で景色がかすんでおり、南のほうは何か騒然としていた。震災前日にいた母の実家はホテルからほんの数十メートルのところにある。父はホテルに行く前に母の実家に向かった。家の両サイドが鉄筋の建物だったため、家が倒れることはなかった。母の両親も無事だった。その後、父はホテルに向かった。

ホテルの中の様子は、後から聞いた話だと、レストランの棚に並べてあった高価なお酒が床に落ちて散乱し、レストラン内にお酒の臭いが充満していたり、客室のテレビが部屋の中央まで飛んだりしていたそうだ。建物の振幅は５ｍほどだった。幸い、宿泊客にけが人はなく、お酒のボトルや食器、家具などに被害があっただけだった。

その日からホテルは営業を停止し、ロビーは近隣の被災者でいっぱいになった。震災の被害は、三宮北の大きな交差点を境に、北はほとんど被害がなく、南はテレビの映像に何度も映し出された柏木ビル倒壊のように、多大な被害があったのだ。ホテル周辺では１日中救急車のサイレンが鳴り響いていた。その後、ホテルはガスや水道などの復旧の作業員の宿泊所となり、ホテルの従業員は、普段の役職など関係なく、みんなでベットメイキングや掃除をして宿泊施設としての役割を果たしていた。震災当日の夜、父がホテルから車で自宅へ向かう途中見た、山麓バイパスからの長田・丸山のあたりの景色は、夜なのに夕焼けと見間違えるほど真っ赤であった。それは、一面火が回っている様子だった。恐ろしい光景だったと言う。また、大阪の池田から１日がかりで歩いて出勤した従業員は、途中さまざまな光景を目の当たりにし、恐怖で足がすくんだと話していた。

３　感想

（１）身近な人の震災体験

私は今まで色々な方の震災体験を聞かせていただいてきた。特に、環境防災科に入ってからはガス、水道、電気などのライフラインの現場で私たちの生活を支えてくれている方々や、消防士、自衛隊など救助活動の最前線を走ってきた方など、さまざまな分野から専門的なお話をたくさん聞いてきた。しかし、最も身近な両親の震災体験は、あまり深く聞いたことがなかった。もしかしたら何か思い出したくないことがあるかもしれない。そう思うと自分からはなかなか聞くことができなかった。しかし今回、この「語り継ぐ」を作成するにあたって、両親から震災体験を聞く機会ができて今まで知らなかったことをたくさん知ることができた。父が当時、母と赤ちゃんを家に残して早々とホテルに向かったというのを聞いたとき、始めは驚いた。しかしよく考えると、家の被害はほとんどなく、母も赤ちゃんも無事だったため、家にいても父にできることは少ない。それに比べてホテルは、たくさんの宿泊客がいて混乱していることが予想できる。何が起こったのかわからない中、このような冷静な判断ができた父はすごいなと思った。しかし、いくら被害はなかったとはいえ、赤ちゃんと２人家に残された母はとても心細かっただろうなと思う。父に対する母の理解があったからこそできたことである。

また、同じ角地の家でも、震災前に新築をした家とそうではない家とでは大きく被害の程度が違ったことから、家の耐震化などの備えがどれほど重要かということが改めて分かった。ライフラインの乱れについても、身近な人から聞く話はリアル感があり、聞いていて当時の生活がどれほど大変だったのかがよく分かった。実際に何日間もガス・水道・電気が止まった状態で生活をするのはとてもストレスが溜まるものであり、それは経験しないと分からないことである。

地震は、いつ起こるか分からない。それはお風呂に入っているとき、寝ているとき、旅行中などでも起こるということだ。母の場合は、１才８か月の長女を抱え二女を身ごもっていたのだ。災害時は、人それぞれ様々な事情を抱えている。そのため、助け合う精神がとても大切である。災害直後にも関わらず、母が次女を安心して産むことができたのも、病院や周りの方々の助けがあったからだ。そのような日本の助け合いや思いやりの精神は、世界に誇ることができると思う。

（２）震災を経験していない私たちだからこそできること

阪神・淡路大震災から２０年が経った今、記憶の風化が問題になっている。語り部の高齢化などが原因として挙げられる。そのため、私たちのような若い世代が引き継いでいかなければならない。災害は忘れたころにやってくる。阪神・淡路大震災で亡くなられた多くの尊い命を無駄にしないためにも、語り継ぐことを途切れさせてはいけない。また、震災を経験していない人が震災について語り、減災を広めようとすることで、未災地や次世代の人々に他人事ではないということを分かってもらうことができるのではないかなと思う。しかしそれは簡単にできることではない。大切な人を亡くした方や苦しい思いをした方は、何十年経っても心の傷は残る。そのような人たちの気持ちをすべて理解することはできない。私たちにできることは、心に寄り添うことだ。それは、私たちが震災について語り継いだり減災を広めたりすることに繋がると考えている。

（３）ボランティア元年

阪神・淡路大震災は、ボランティア元年と言われている。発災直後から、国内外からたくさんのボランティアが被災地を訪れた。震災は、失うものばかりではなく、人の心の温かさを感じることができた出来事でもある。震災の悲惨さも伝えつつ、人々の思いやりや助け合う心が様々なところで生まれたことも忘れてはいけない。

（４）「語り継ぐ」という意味

私の曾祖母は、広島の原爆で亡くなった。当時、爆心地に程近い裁縫所に家があり、曾祖父の弟とともに即死した。広島の平和公園の記念館には、名前と遺影が残っている。戦争については、小学校のころから平和学習でたくさん学んできた人が多いだろう。だから、私たちは戦争がとても恐ろしいものだということを知っている。そしてそれは、先人たちが今まで語り継いできてくれたから分かることだ。現在生きている人で、当時のことを知っている人や話すことのできる人はとても少ない。それにもかかわらず、私たちが戦争の悲惨さを知っているのは、当時の人たちの「もう２度とこのようなことは起きてほしくない」という強い思いがあったからだ。原爆ドームがその一例である。あの建物を残すか残さないかは長きにわたって議論されてきた。原爆ドームを見るだけで辛い体験を思い出してしまう人がたくさんいるからだ。しかし、原爆ドームを残すことで、それを見た人はだれでも戦争の悲惨さを感じることができる。また、平和公園の記念館には、たくさんの遺品が展示されている。そうやって語り継いできてくれたからこそ、今の日本は平和でいられるのだ。

戦争はなくすことができるが、自然災害はゼロにはできない。しかし、尊い命が亡くなった原爆も震災も、亡くならずに済んだ命だと思うと、今これから生きていく私たちに課せられた「語り継ぐ」という意味はとても大きい。日本に住んでいる限り、一生のうちに災害に遭う確率は非常に高い。私たちができるのは減災だ。そのためには、過去の災害から教訓を学び、そこからどのようにすれば被害を減らすことができるかを考えなければならないのだ。

（５）次の災害に備える

３０年以内に南海トラフ巨大地震が発生する確率が６０％～７０％と言われている。今起こるかもしれないし、明日かもしれないということだ。少なくとも、私が生きている間には確実に起こるだろう。現在、小規模の地震や火山の噴火が増えてきているのも、この巨大地震に関係している。また、南海トラフ巨大地震が起こる前に、２回ほど阪神・淡路大震災のような直下型の地震が起こるとも言われている。みなさんは今、この瞬間、大地震が起きても迅速に対応し、避難することができま

すか？自信を持って「できる」と言える人はとても少ないだろう。私はそれでいいと考えている。減災に終わりはないということだ。どんなに備えをしていても、それ以上の災害が起こるかもしれない。しかし、備えをしていなければ助かる命も助からない。減災に終わりがあるとすれば、どんなに大きな規模の災害が起きても、被害が確実にゼロになることだが、それは到底できないだろう。「備えは完璧だ」と思ってしまっては、それ以上の災害が起きた時に対応できない。常に想定外を考え、どうすれば一人でも多くの命が助かるかを考え続けることが減災である。

防災や減災といえば難しいイメージがあるが、簡単にできることはたくさんある。例えば、１００円ショップで防災グッズを購入する、つっぱり棒などを使って家具を固定する、ラジオや懐中電灯などを常にそばに置いておく、家族で話し合って避難場所を決めておく、寝ている場所の近くに何か倒れてくるような家具が置かれていないか確認する、など今すぐにでもできることはたくさんある。また、笛も防災グッズの１つである。災害時、自分自身が建物の下敷きになるまたは建物の下敷きになっている人を助けるというとき、大きな声で助けを求めなければならない。しかし、周囲も混乱していて色々な音が飛び交っているなか、自分の声を通すことは難しい。そこで、笛を使うのだ。笛を使えば大きな声を出すことよりも簡単に周囲に助けを求めることができるのである。これを読んでくださった人は、何か１つ、その日のうちに実践してみてほしい。

（６）夢と防災

私は将来、高齢者を支える仕事に就きたいと考えている。きかっけは、３つある。１つは、幼い頃からお年寄りと接する機会が多く、一緒にお話をしているときや何か手伝ってあげたときのお年寄りの笑顔が大好きだからだ。２つ目は、小学校の頃に友達の祖母が入所している老人ホームに行ったとき、入所している高齢者の人数に対して介護士の人数が明らかに少なく、高齢者一人一人にゆっくりと時間をかけて介護できない現状を知ったからだ。３つ目は、環境防災科に入って災害時要援護者について学んだからだ。災害時要援護者とは、災害時、健全な人と同じような危機回避行動や避難行動ができず、他者による援護を必要とする人のことで、高齢者の他にも、妊婦さん、子ども、土地勘のない人、外国人などが含まれる。災害は弱きに強く当たる。私は、このような災害弱者を守りたいと考えるようになった。

東日本大震災で大きな被害を受けた老人ホームがある。１つは、入所者全員で６７名、職員は２０名前後のうち、死者４７名、行方不明者９名の被害がでた老人ホーム。もう１つは、入所者全員で６７名のうち、死者４６名、行方不明者２名、職員も１名死亡した老人ホーム。どちらも、津波により、このような大きな被害が出ている。その原因として、情報の入手の遅れで避難開始が遅れてしまったことや、入所者のほとんどが、車いすや自分ひとりでは歩けない人であるのにもかかわらず、介護士の人数が少ないため、全員を避難させるには１人の介護士が何台も車いすを押し、坂道を何度も往復しなければならなかったことなどが挙げられる。この問題の背景には、少子高齢化や介護士の給料の低さなどの社会問題がある。このようなことから、老人ホームで近隣の小中高生と連携した防災・避難訓練をもっと積極的に行うべきだと思う。また、老人ホーム自体を高台に建てる、車いすや足の悪い人でも避難しやすいように避難経路を全てスロープにするというような備えをしていくべきだ。

災害後の対応も重要である。仮設住宅や復興住宅での高齢者の孤独死や引きこもりが多く、阪神・淡路大震災や東日本大震災でも問題となった。環境の変化に適応しにくい高齢者にとって、避難生活はとても苦しいものだ。そのため、周りの支えがとても大切である。近年では他に、老老介護や認認介護が増えてきている。老老介護とは、高齢者が高齢者を介護することで、認認介護とは、認知症高齢者同士で介護をし合うことだ。介護が必要になったとき、家族が介護の担い手となることが多いが、専門的な知識がない中での介護はいずれ身を潰してしまう。そして、これらの平時に潜む脆弱性は、災害時に浮き彫となって社会に突き付けられる。どちらの場合でも、閉鎖的環境を防ぎ、できるだけオープンにして周りからの助けを受け入れることが必要であり、そのためにはやはり周囲の気遣いや手助けが大切だと言える。これらのことから、福祉と防災の連携というものは、被災地支援や早期の復旧復興のためにはとても大切だということが分かる。

（７）最後に

阪神・淡路大震災はたくさんの命を奪い、たくさんの人々の心や身体を傷つけた。その悲しさと苦しさ、また、そこで生まれた人々の温かさを１０年先も１００年先も語り継ぐことが、今を生きる私

たちの使命である。そして、私たち若い世代が災害に強い社会をつくっていかなければならない。語り継ぐことが、２度と同じようなことが起こらないようにする一番の近道である。

「１．１７」「３．１１」語り継ごう、いつまでも…。

語り継ぐ

寺尾　莉子

阪神・淡路大震災が起こったのは、１９９５年1月１７日午前５時４６分。１７歳であるわたしたちが生まれる２年前のできごとである。この日父と母が生き延びてくれたから、今わたしは存在できている。父と母の震災体験を、わたしなりにしっかり「語り継ぐ」。

１　父の震災体験

（1）１９９５年1月１７日　午前５時４６分

神戸市須磨区高倉台のコンクリート建てマンションの１階に、その当時父は住んでいた。まだ母とは結婚しておらず、祖父(父の父)と祖母(父の母)と３人で住んでいたという。伯母(父の姉)は結婚して大阪に住んでいたため、無事だった。この日、いわゆる“虫の知らせ”というのかはわからないが、普段目覚めることのない５時４０分ごろに目が覚めた。その後すぐ地鳴りがし、「グワー」「ゴーッ」というとにかく低く、言葉では言い表せないような音とともに、地震が発生した。今まで経験したことのないような揺れに、父は動けなかったという。ガラス戸は「ビシビシビシ」というものすごい音がしていた。別の部屋で寝ていた祖母が部屋に飛んできて、父にしがみついて離れなかった。部屋にあったものはたくさん落ちたが、それほどひどくはなかった。高倉台は山を切り取った地形で、地盤が固かったと考えられる。近所の方も無事で、父によれば高倉台の目立った被害は皆無に近かったらしい。

（2）発生後

発生から約４５分後の午前６時半。当時神戸市垂水区名谷にあったガソリンスタンドで所長をしていた父は、店が心配になり、祖母の反対を押し切って車で店に行った。必死だったため途中の景色は覚えていないが、行く道に苦労はしなかった。実際、店の様子はガソリンが漏れているわけでもなく、ものが倒れた程度で済んだ。停電もなくテレビをつけることができ、また水も出た。この水はその後もかなり長く出ていたため、後に近所から「分けてほしい」と言ってきた人に配ることになる。その後家に戻った父は、テレビで鷹取や長田の街で火の手が上がっている様子を見た。父は思わず「どないかしてくれ！」と叫んだ。第二次世界大戦の際、淡路島から神戸が燃えている様子を見た経験がある祖母は、ただただその映像を見ていたという。

震災から何日か経った後、ガソリンスタンドの兵庫支店に行く際には原付を使った。車が通れる状態ではなかったそうだ。兵庫支店に行くには、鷹取や長田の火事があった跡地を通らなければならなかった。変わり果てた街の様子を見て、父は泣きそうになった。阪神高速の倒壊した様子は母と見に行った。「野次馬といわれればそうかもしれんけど、不謹慎やったかもしれんけど、ちゃんと目に焼き付けとかなあかんって。そういう気持ちやった。」父は言った。

話は前後するが、９か月後、父は電気工事士となり仕事をしていた。尼崎の現場へ向かう際、普通は高速道路を使うが使えなかったため、片道３時間かかった。毎日帰宅時間は夜の９時や１０時になった。仕事内容は自販機を使えるようにするための金属の柱を立てる工事。また、家の復旧やリフォーム。「お金は出すからとにかく早く」と依頼されることが多かった。普通ではない話だ。信じたくはないが、こういった被災者の方の心の焦りを利用したような、建築関係の詐欺まがいのようなものは、多々あったらしい。後で経緯は書くが、母方の祖父の家は屋根の修理を頼んで直してもらった後すぐ壊れたそうだ。

２　母の震災体験

（1）１９９５年1月１７日　午前５時４６分

母が住んでいたのは神戸市垂水区向陽。家は木造２階建てであり、母が寝ていたのは２階だった。父とは違い、母は揺れで目が覚めた。とにかく布団の中で縮こまろうと布団をかぶるため引っ張ると、布団が動かない。足元にタンスが倒れてきていたからだ。揺れが収まり、祖母(母の母)に呼ばれた母は、１階に降りた。まだ暗かったが、食器棚が倒れていることはわかったという。母はそれ以外

の被害はなさそうだと思い、倒れている食器棚をまたいで、その奥の部屋で祖母とともにもう１度寝たそうだ。祖父(母の父)が外の様子を見て、起こしに来た。父の話のところでもふれたように、母の実家は“半壊”とされた。屋根の瓦はすべて落ちていた。同じような造りをした家が両側に建っていたのに、半壊という被害が出たのは母の家だけであった。母の家のところにだけ、断層があったなどの理由があるかもしれない。

（２）発生後

母はそのころ、近所のわりと大きな病院で受付の仕事をしていた。その日はいつもより早い時間に出勤した。歩いて行ける距離だったので歩いて向かった。いつも受付ではテレビをつけているが、この日はつかなかったという。病院の近所の人はすぐに「診てほしい。」と病院に来た。受付の電気がつかなかったので、明るくなるまで懐中電灯を上からぶら下げて受付を行った。診察室も電気がつかず、自家発電がついている手術室で診察を行った。廊下は重傷者であふれかえり、簡単なカルテを作って対応した。明るくなってきて廊下を見ると、血まみれでびっくりしたという。衛生的にもよくない、と掃除も並行して行った。垂水より東の病院は震災により機能していなかったため、ぞくぞくとその日の夕方ごろから、長田や兵庫のほうより歩いて患者さんが来た。普段なら夜の７時ごろには受付を閉めるが、この日は２４時間オープンだった。家が近いという理由で、母は他の受付の人より長く残って仕事をした。仕方がないことだが、どうしても理不尽さを感じてしまったという。

家では、髪の毛を洗うお湯はカセットコンロで沸かすなど、不便な生活が何日も続いた。祖母(母の母)は震災後、ガスで炊く炊飯器から電気で炊くものに変えたそうだ。そして持ち手を下に下げると水が出るというものだった水道は、震災後持ち手を上にあげると出るものに変わった。物が落ちてきたときに水が出しっぱなしになるからだ。教訓が生かされている。

父と母は震災から１０か月後に結婚した。結婚するときに家を探したが、「賃貸を探している。」と言えば門前払いだった。長田の家がつぶれてしまった人々が比較的被害の少なかった垂水に移り住み、長く住むわけではないため賃貸にし、空きがなくなったと思われる。

わたしの両親はこのように家の被害も少なめで、知り合いに亡くなった方もほとんどいなかった。しかしガソリンスタンドの所長・電気工事士と病院の受付という仕事をしている中で、少し苦労があったようだ。

３　過去・今・未来

（１）神戸に生まれたということ

神戸に生まれ、神戸で育ったわたしは、小学生のころから阪神・淡路大震災についていろんなお話を聴いた。１月１７日が近くなると、授業で阪神・淡路大震災がとりあげられるのは毎年のことだった。「しあわせ運べるように」もずっと歌っていた。小学生のころはあまり関心がなく、「へー、こんなことがあったんか。すごいことが起こったんやなあ。」という程度にしか考えていなかった。家族も、ニュースを観ているときに両親や祖父が少し話をしていた程度で、積極的に話をしようとはしていなかった。今思えば、この状況が風化への一歩なのではないかと思う。

中学生のころに東日本大震災の被害の様子を見て、初めて「災害」や「防災・減災」というものに自ら関心を持った。そして環境防災科に入りたいと思った。環境防災科に入らなければ、こんなにも両親の被災体験を真面目に聴くことはなかったし、震災に関するニュースをじっくり観ることもなかった。

環境防災科に入らなかった場合の、自分の未来を想像すると怖い。自分が今必死に防ごう、止めようとしている風化を、自分からしていたかもしれない。しかし、たいていのわたしと同年代の人たちは、そんな状況が普通だ。学校で授業を受け、「そんなことがあったのか。」という少しの驚きがあり、家族からそんなに被災体験を聴くこともなく、大人になって子どもができても語り継げない。後の世代はもうエンドレスだ。全員がそうだというわけではもちろんないと思うが、やはり一般的にはそうなってしまうのではないかと思う。そういった年代に、どうやって関心を持ってもらい、風化を防ぐのか。１つの大きな課題だ。

阪神・淡路大震災で被害をあまり受けず生き延びた両親。震災発生２年後の神戸で、その両親から生まれたわたし。小学生のころからずっと聴いてきた阪神・淡路大震災の話。あの日見た東日本大震

災の映像。環境防災科という学科。いろんな偶然が重なった。１つでもこの偶然がなければ、わたしは今頃防災・減災や災害のことについてあまり真剣に考えずに生きていただろう。だから、わたしが神戸に生まれ、防災・減災を学ばせていただいているのは、必然であったという気がしている。そしてそれは同時に使命でもあるのだ。これからどんどん、阪神・淡路大震災を経験した方々は減っていき、阪神・淡路大震災を知らない若者は逆に増えていく。そんな中で災害や防災・減災のことを学び、阪神・淡路大震災の当時の様子を知り、「わたしがしなくて誰がする。」という気持ちでこれからも活動していきたい。大切なのは周りから伝えていくこと。わたしが活動することで、少し興味を持ってくれる友達も出てくるかもしれない。この間もそうだった。環境防災科を特集していただいたテレビ番組。「同じ学校の人たちが特集されているのなら。」という思いで、番組を観てくれた普通科の友達が多くいたようだ。他の学校の友達もそうだ。結局、きっかけなんて何でもいいとわたしは思う。「友達が出ているから。」という理由でテレビ番組を観て、少しでも災害やボランティアについて興味を持ってくれたなら、とてもいいことだと思う。自分はそんな、災害の勉強や防災・減災、ボランティアをあまり専門的に行っていない人たちに、少しでも興味を持ってもらえるきっかけづくりをしていきたい。そのことは結局、いざという時に自分自身を守ることになる。若者のいざという時の行動が変われば大人も変わり、被害を少しでも減らせるかもしれない。

わたしが神戸に生まれたということ。災害を学ぶこと。防災・減災を推進していくこと。いざという時の被害を少しでも減らすこと。そして、風化させないこと。

（２）両親の話を聴いて

今回、阪神・淡路大震災の被災体験を聴かせてほしい、と申し出たわたしに、両親はとても熱心に話をしてくれた。両親とわたしでの話は１時間にも及んだ。普段から会話が多い家庭なのだが、いつもとは違うとても感じのいい時間を過ごせたと思う。しかしそれは、この「語り継ぐ」を作成することにならなかったら、ないものになっていただろうなと思う。何事もきっかけがなければ「始める」ということは難しいことだ。

両親の話を聴いて１番印象的だった言葉は、「最後に伝えたいこととかある？」と聞いた時のものだ。「『なんで神戸やねん。』っていう思いはすごくあったな。京阪神は地震がないっていう話やって、それ信じてたから。そんな中で地震があって、復旧・復興していく街の中で生きていくのに精一杯やったわ。」父も母も、同じことを言った。まず、京阪神では地震は起こらないというデマ。両親のように、この話は多くの人が信じていたと思う。災害への備えを十分に行わないまま、災害についてあまり知識を持たないまま、震度７・マグニチュード７．３という大きな地震が来てしまった。どれが本当の情報なのか、特に情報であふれているこの世の中に生きているのだから、しっかり見極めなければならないなと思った。特に、今は想定にとらわれないということも大事だ。そして、「復旧・復興していく街の中で生きていくのに精一杯だった。」という言葉。わたしは毎日、朝起きて学校に行き、友達と授業を受けて部活動をし、帰宅する。ご飯も３食用意してくれて、お風呂にも入ることができるしあったかい布団もある。何より帰る家がある。待っていてくれる家族がいる。そんな毎日がどんなに恵まれているのか、わたしはこの言葉で再確認した。しかし近いうちにまた、大きな災害は必ずやってくる。その日常が壊される日がやってくるのだ。毎日後悔のないように生きたいと思う。毎日「この日常に感謝しないと。」と頭の中では考えていてもどうしても「明日がまたくる。」という前提で日々を過ごしている。その「明日」がこなかったら後悔はしないのか、そんな生活を送ることができているのか、もう１度自分に問いかけたい。何よりも大切なのは命であるということを忘れず、日々一生懸命生きないといけないと強く思った。

（３）これからの自分

わたしがこれからもっと考えたいと思っているのは、災害時要援護者の支援だ。考えたいと思ったきっかけは弟の存在である。わたしの弟は養護学校の小学校６年生だ。小さいときは入退院を繰り返し、危ない状態だったこともあった。今では入院することはほとんどなくなったが、自分で立つことができず、自分でご飯を食べることもできない。自分の意思を伝えるのも難しい。イメージとしては、赤ちゃんがそのまま大きくなったという感じだ。それでも毎日大好きな学校に行って、よく笑うし、言葉にはできないがしゃべろうともする。わたしはこれからも弟をしっかり守っていきたい。

しかし災害時はまず逃げるところから苦労する。自分で動けないので頭を守ったりするのが難し

い。避難の時も抱っこしなければいけない。避難所に逃げるにしても、食べ物はミキサーでペースト状にしないと食べられないので確保がしにくい。しかも非常食のように日持ちしないので、家で備えておくのも困難だ。夜寝る時間は大体決まっているが、たまに大泣きしながら深夜やひどいときは朝方まで目が覚めてしまうことがある。大きな声で泣き、周りの目も気になってしまう。環境の変化にも対応しにくい。そういった方は、わたしの弟以外にもたくさんいるはずだ。

弟はこれでも断然、症状としては軽いほうだと思う。実際、わたしはよく弟の養護学校の行事を見に行くが、弟より症状が重そうな子はたくさんいる。例えば弟は口から食べ物を食べることができるが、中には胃に直接チューブで食べ物を入れて食べる方法(胃瘻)をとっている子もいる。いつもモニターといういろいろな数値(脈拍数など)が表示される機械を、体につけておかなければならない子もいる。

そういった方々に対して優しい避難所はいったいいくらあるのか。それを明確にしないことには、弟のように障がいのある方々はいざという時に避難所に避難しにくいと思う。中には避難を自粛する方も出てくるだろう。ただでさえ食べ物や寝る場所を確保するのも難しいのに、さらにこんなに条件が重なるとかなりつらいはずだ。わたしは、そういった方々でも避難所に来やすいように工夫ができる人になりたい。

南海トラフ巨大地震は、わたしや弟が生きているうちに起こる。その時に自分はちゃんと動けるのだろうか。自分の命を守りつつ、弟のことも守れるのだろうか。もう１度自分に問いかけたい。また、障がい者を家族にもったからこそ、わかることがたくさんあるはずだ。それを活かし、言葉にできない弟の気持ちを、わたしが代わりに伝えたい。弟もきっと、それを望んでいるはずだ。

そしてわたしの将来の夢は、まだ迷っているが新聞記者か警察関係の仕事をすることだ。

新聞記者は、環境防災科に入り持った夢だ。災害が起こった時には、被災地の様子や被災者の方々のニーズなどを正確に、いち早く伝え、被災地と、何かしたいと思っている未災地の懸け橋になりたい。そこで大事にしたいのは、被災者の方々の気持ちを考えて取材をすること。この想いは、大川小学校を訪れた時に強く抱いた。

その想いを抱くまでについてのエピソードがある。高２の夏、わたしは初めて東日本大震災の被災地を訪れた。初めて直接見た被災地の様子。特に大川小学校とその周りの地域の様子を見たときには、立ちすくんでしまった。涙もあふれて止まらなかった。写真に撮ったりメモを取ったりして、この場にいない友達や家族にも伝えなければと思ったが、どうしてもできなかった。しかしその時わたしたち環境防災科を密着取材してくださっていたカメラマンさんたちは、大川小学校の校舎や、慰霊碑をずっと撮っていた。そこに地元の方が「あの人たちはずっと撮ってるの？」とわたしに聞いた。「そうですね。」と答えると、辛そうな表情を浮かべながら、「嫌だなあ。」とおっしゃった。その時、ずっと被災地の様子を撮っていたカメラマンさんたちは、もちろん自らの仕事をまっとうしていらっしゃるのだが、わたしはもっと違う、被災者の方々の気持ちを考えた取材の仕方があると思った。そこで、被災者の方々の気持ちをもっと考えて取材ができる新聞記者になりたいと思った。そしてさらに、報道の減少によってボランティアが減るなどといった事態をなくしたい。また、災害が起こっていない時は、ニュースももちろんだが、「防災・減災」の重要さや、先ほど書いたように災害時要援護者のことについてもっと伝えたい。そして、障がい者に対する差別をなくしたい。わたしたちは周りに恵まれ、弟をかわいがっていただいているが、ずっと学校や町中などで耳にしてきた障がい者を差別するような言葉には、どうしても胸が痛んだ。だから、そんな思いをする障がい者の方や家族の方が少しでも減ってほしい。このような記事を書きたいと思っている。

警察関係の仕事は、小学生の頃から抱いている夢だ。警察の特番やドラマはほぼ欠かすことなく観て、手に取る本もそういったものが多かった。何か自分の中でカチッと合った分野が警察関係であり、気が付いたらのめりこんでいた。小・中学生の頃は憧れという気持ちが大きかったが、高校生になって環境防災科に入り、外部講師に来てくださった方から災害時の警察の様子を知り、大変な仕事だな、その中で誠意をもって活動してらっしゃるのだなという思いと、もっと災害時に早く警察が出動できるように工夫できるのではないかという思いが募った。そして今は憧れという気持ちと、警察の活動を通常時も非常時もしっかり支えたいという気持ちを持っている。だから、“警察官“と断定せず、警察事務などの仕事も考えている。

しかしその前に、わたしは大学進学を希望している。大学でも、災害や防災・減災、ボランティアなどの災害関係に関わっていきたいと思っている。なぜ大学でまた、災害関係について学びたいのか。それは、３年間の高校生活の中で災害について学び、防災・減災を進めることが、とても素敵なことだと気付いたからだ。災害についての知識を持ち、事前に備える(防災・減災をする)ことで防げる命がたくさんあるのだ。それはとても素敵なことだと思う。だからわたしは大学に進んで、また災害関係のことについて学びたい。そして、たくさんの人の命を守れるような人になりたい。

将来大学を卒業した後、どちらかの仕事に就いているかもしれないし、もしかすると別の仕事に就いているかもしれない。どちらにしても高校生活の中で学んだことを活かしていきたい。というよりも、活かさなければ意味がない。先生方がおっしゃっていたように、どんな仕事に就いても、どのような環境にいても、防災・減災というものは取り入れられる。そして高校３年間で災害について学んだわたしたちが、率先避難者になるべきなのだ。率先避難者になるのに、職業も状況も関係ない。そのために今の時間を大事にして、しっかり勉強したいと思う。口先だけにならないようにする。自分の中でしっかりそれを志そうと思う。何より自分の置かれた恵まれた環境は当たり前ではないことを絶対に忘れずに、勉強し続けたい。

語り継ぐ

中林　真鈴

１　はじめに

震災当時私は生まれていないため、これは父と母から聞いた話だ。

２　父、母の阪神・淡路大震災

（１）震災前

当時、私の家族は父、母、兄の三人で神戸市垂水区神陵台と道路を挟んで隣接する西区に住んでいた。６階建てのマンションの５階だった。１月１６日、『ガタンッ』という縦揺れに、母は２歳になったばかりの兄を抱きしめた。ふと外を見ると、不気味な数の鳥が飛んでいくのが見えた。その夜、父と兄は和室に。何日か前からインフルエンザにかかっていた母は、兄にうつすまいと１人だけ隣の洋室で寝ていた。午前５時過ぎ、トイレに起きた。ふと何気なしに兄が布団に入っているか気になった。案の定布団からはみ出していた。そして兄を父の真横に寝かし、布団を掛けた。

（２）地震発生

『ゴォォォォォォ』という聞いたこともない大きな地鳴りとともに目を覚ました。はじめに頭をよぎったのは戦争。戦車や大きな軍隊などが外で動いているのだろうか。そう思った瞬間、『ドンッ』という大きな音とともに直下型の大きな揺れに襲われた。３０センチほど宙に浮いたと思った瞬間、頭と顔に本や雑誌、そして時計が降ってきた。そのときに地震が来たのだと分かった。父は隣で寝ていた兄を大きな揺れの中自分の体の下に引っ張り込むような形で覆いかぶさった。隣のキッチンから聞こえる『ガシャンガシャン』という食器棚が倒れ、食器が割れる音とともに母の声が聞こえてきた。とにかく揺れがおさまるのを待った。母は、立つこともままならない中、和室で寝ていた父と兄のところへ這っていこうとした。体が壁や扉にたたきつけられ、まるで洗濯機の中でかき回されているようだった。家具が倒れる音、食器や鏡が割れる音、地鳴りに混じり、物が壊れていく音が暗闇を襲った。その時、「あぁ、日本が沈没する…」などとぼんやり考えていた。大きな揺れがおさまっていくときは、『グラグラ』が小さくなるのではなく、『ドスンドスン』とした揺れがゆっくりと静かになっていくようだった。

（３）地震直後

揺れがおさまり家族の安否を確認。丁度兄が寝ていた真横には婚礼ダンスの上のアーチ形の大きな鏡が落ちていた。父があの時兄を自分の体の下に引っ張り込んでいなかったら、父が兄の方へ行っていたら二人とも命はなかった。そう考えるととても背筋が寒くなった。本当に危機一髪だった。少しずつ夜が明けてくると、ほかの部屋の様子が見えてきた。リビングにあったリビングボードと洋室ダンス、ベビーベッド、テレビが３メートル移動し、倒れずリビングの真ん中に立っていた。キッチンは食料品、食器、調理器具が床に散乱し、壁には亀裂が入っていた。冷蔵庫と食器棚は横に１メートルほど飛んでいた。洗面所は、棚のほとんどのものが落下し、トイレは水浸しになっていた。洋室のテレビは一回転し、逆さまに落ちていた。そのとき母は家具の倒れ方から、南北の揺れであるとわかった。母は玄関の扉を開けに行きお風呂の浴槽にお湯をためた。母は小さい頃から、地震が来たら断水するから、風呂に水を溜めるよう母(祖母)から教えられていたそうだ。特にマンションはタンクが屋上にある場合、地震直後はタンクに溜まっていた水が出るが、底をつけば出なくなると聞いていた。父は「断水することはないだろう」と言っていたが、水を溜め終わった直後本当に水が出なくなった。外の様子を見ると毛布にくるまって、小学校の方へ歩いていく人たちが見えた。見渡す限りでは、幸い倒壊した住宅はなかったが、塀や電柱が倒れ、瓦が落ちていることは遠目にもわかった。私の家は幸い避難所に行くほどの被害ではなかったため、揺れがおさまったあとも家で生活することができた。

（４）その後

しばらくすると父が当面の食料を買出しに行き、帰ってくると外の様子を話し出した。マンションの階段や、外壁のタイルが崩壊していたこと。駐車場の車が１メートルほど前に飛んでいたこと。近

くのコンビニエンスストアには行列ができており、商品が売り切れ状態で買えたのは菓子パン１つだったこと。道路の亀裂から青い火が噴出していたこと。外はガスのにおいが充満して危険であること。父は想像をはるかに超えた災害が起きたことを実感した。その後、インターホンの電話が停電時に切り替わり聞きなれない音がした。電話は名古屋の母の友人からだった。「無事でよかった！」テレビに映る神戸の様子を教えてくれた。その時初めて、淡路島が震源だと知った。その後電話はつながらなくなった。きっとたくさんの人が安否確認等の電話をかけ、回線が込み合っていたのだろう。午後になり、近くに住む叔父が建物の地盤が傾いていると、家へ避難してきた。こういうときは一人でも多い方が強いと感じた。

午後には電気が回復した。母はテレビに映る恐ろしい光景に言葉を失った。空は、火事の煙と雪雲で真っ暗だった。たくさんの灰が静かに降り、ガスの匂いが締め切った家の中まで入ってきた。家の前のガソリンスタンドに引火し、爆発でもしたらと考えると怖くなった。何度も何度も消防署へ電話をかけ、やっと繋がったが、「自分の身は自分で守ってください！危険と感じたら逃げてください！」と言われた。いかにも人手が足りない様子だった。外へ避難するにも危険だと判断し、数日間は、電気調理器で家にあった保存食で食いつないだ。お風呂の水は、一回ご飯を炊き、その後はトイレを流すために使った。しばらくして、遠方の親せきからお米や野菜、水のタンクが届いた。何よりありがたかったのは、兄のオムツだった。水は２月初旬に出たがガスの復旧は３月までかかった。他県のガス会社の人が、ガスを出しに復旧作業をしに来てくださった際、「長い間不自由でしたね。やっと今日からガスが使えますよ。」と親切な言葉をかけられた。コンロに点った火を見たとき、胸にこみ上げるものがあった。震災後、救急車が通るたび、兄は布団の中にもぐった。小さいながらも目に見えない傷を負っているように見えた。しばらくの間、母は兄が安心できるように歌を歌い、本を読み聞かせして過ごした。兄は１月末に神戸大学病院で手術の予定が入っていた。地震直後は、病院から延期の知らせがあったが、神戸大学病院付近は被害が大きく、入院患者を被害の少なかった病院へ搬送したため、急遽兄の手術が予定通り行われることになった。母は１１日間、兄に付添い病院で寝泊まりをした。病院では、風呂はガスではなく、ボイラーで沸かされており、入浴させてもらった。病院から見える景色は、軒並み倒壊した家々やビルだった。震災直後の入院生活は言うまでもなく平常ではなかった。

（５）母の思い

母の住んでいた名古屋では東海地震を想定し、学校では地震の時に机の下にもぐる訓練や避難訓練が頻繁に行われていた。もちろん、地震に対する備えの大切さも繰り返し学校で教えられてきた。しかし、その温度差を感じるようになったのは社会人になったばかりのときだった。母が職場にいる時地震が起こった。山崎断層が動き、神戸でも震度４の揺れだった。母ひとりが机の下にもぐり、上司や先輩に笑われた。咄嗟の行動は普段からの意識で変わる。母は、阪神・淡路大震災の経験、そして職場での経験があり、ひょうご防災リーダー講座を受講するなど、防災への取り組みを始めている。伝えていくことの大切さを伝えたい。

３　感想

（１）震災体験を聞いて

私は阪神・淡路大震災を経験していない。これまで母の震災体験を聞くことはあったが父の震災体験を聞くのはこれが初めてだった。小学生や中学生のとき親の震災体験を聞くという宿題で何度か話を聞いたことはあった。そのたびにいつも話をしてくれるのは母だった。幼いながらに、父に聞いてはいけないのかと考えたこともあった。しかし、今回語り継ぐを書くために話を聞かせてほしいと父に頼むと進んで話を聞かせてくれた。実際父はあまり当時のことをはっきりとは覚えていなかったが、もしかすると嫌な出来事を記憶から消し去りたかったのかもしれない。母の震災体験もこうして詳しく話を聞くのは今回が初めてだった。

震災以前、母は防災のある程度の知識は持っていたが、特に防災活動を行ったり、耐震化を行ってはいなかった。そのため話を聞いて、両親がこうして今も生きていること、兄が危機一髪で助かったこと、今私がここに存在していること。なにもかもが奇跡なんだと思った。たくさんの偶然が重なって今を生んだのだと思う。奇跡に感謝したい。しかし、今回は奇跡が起きて命が助かったものの、奇

跡は毎回起きてはくれない。自分の命は自分で、守っていかなければならないのだ。

母が震災前日に不気味な鳥が飛び立つ様子を見たという情報はたしかな前兆なのかもしれないと思った。たしかに昔から鳥が多く電線にとまっていたり、赤い月や異様な雲を見るたびに母は、「地震が起こるかもしれないね」と繰り返し言っており、次の日に震度１や震度２の地震が起こることもあった。４年前の東日本大震災の前日にもイルカが大量に打ち上げられたり、異様な雲が発生するなどの前兆があった。そのため、地震の前兆をもっと分析し積極的に調査していけば人々の命を守ることにつながるかもしれない。また母の話から、昔から耳にしてきた防災の知識はいざというとき本当に役立つものなのだと思った。実際に地震の多い名古屋に住んでいた母は小さい頃によく聞いていた知識で玄関の扉を開けに行きお風呂の浴槽にお湯をためるなどの行動をとることができた。この、昔からの知識とちょっとした行動が後の生活に影響し役立つのだ。震災以前の神戸は、防災があまり浸透していなかったため、耐震化はもちろん地震が起きてからの避難行動など知る人はいなかった。もし、今のように小学校や高校で防災教育などが当時なされていたら、もっと多くの命が助かったかもしれないし、もっと多くの方が震災後楽な生活を送れていたかもしれない。そう考えると、これからの教育の課題は子どもたちにもっと防災を浸透させることが重要となってくると思う。今も同じだが、昔から１月１７日には必ず学校で「しあわせ　はこぼう」という阪神・淡路大震災を学ぶための教材を読んだり「しあわせはこべるように」という復興ソングを歌っていた。教材内の震災体験を読むたび、何度もつらく悲しい思いをした。泣きそうになったこともあった。高速道路が倒壊している写真や、上空から撮ったであろう神戸の写真もたくさん見た。写真で見る神戸は、悲惨で今の神戸のまちからは想像もつかなかった。また神戸で地震があったことや、両親や兄も被災したことは知っていたが、どこか他人事だった。私の中で阪神・淡路大震災は生まれる前の過去の出来事でしかなかった。環境防災科に入って３年目を迎える今も、もしかするとどこか他人事だと思っている自分がいるのかもしれない。しかし、昔と違うのは他人事で終わらせてはいけないと考えていることだ。そして、私と同じように今の小中学生の中にも阪神・淡路大震災を他人事、そして過去の出来事だと思っている人は少なくないと思う。年々、震災を知らない世代が増えているのと同様に、その子どもたちの親や、先生などの語り継ぐ側が震災を知らない世代ばかりの時代となっていく。そうならないために今、私が、私たちが震災を語り継いでいかなければならないと思う。私たちの使命だと思う。

（２）母と防災

阪神・淡路大震災が発生した日、１月１７日は母の誕生日だ。誕生日に、巨大地震が起こった母。毎年どんな思いで１月１７日を迎えているのだろうか。どんな思いで阪神・淡路大震災を考えているのだろうか。きっと複雑な気持ちなのではないかと思う。そんな母は、私が環境防災科に入るきっかけを作ってくれた人だ。母は、自分が阪神・淡路大震災を経験したこと、４年前の東日本大震災を見たことにより自分から防災を学ぶようになった。東日本大震災当時は、自分からネットで被害状況を調べたり、頻繁にニュースを見るなどして情報を得ていたが、いつのまにか県内で行われるひょうご防災リーダー講座へ参加するなどかなり防災に積極的になっていった。私自身、そんな母を「勉強熱心だなあ」としか考えたことはなかった。中学３年になり進路先で悩んでいたとき、母から「こんな防災の学科があるんだけど、見に行ってみない？」と声をかけられた。初めはなんとなくの気持ちで見に行ったが、何か環境防災科にピンときたものがあった。先輩方の発表や、活動報告等を聞いて、防災を知りたい、広めたいと思った。もともと人前に出るタイプでなかった私が、募金活動や発表などで人前に出る活動の多い学科に入りたいというと、中学の先生はみんな反対したという。しかし、当時の担任の先生はそんな先生たちの反対を押し切って応援してくださった。今思えば、母の一声や、中学の担任の先生の応援がなければこの科には入っていなかったと思う。入るきっかけを作ってくれた母や、応援をしてくれた中学の担任の先生に感謝したい。

（３）環境防災科に入って

環境防災科に入る前は、母の話を一方的に聞くだけだったが入学し、防災を学ぶようになってからは、母と防災の話をし合えるようになった。母がいろんなアンテナを張って取得した知識と、私が学校で学んできた知識を共有しあい、今では家族内で「もし〇〇にいるときに地震が起きたらどうする？」「とりあえず〇〇に、家族みんな集まろう」などの話もできるようになった。また、今までよりも防災を身近なものだと感じるようになった。昔のように他人事で済ますようなことはできないと

思った。なぜなら防災は人々の命を守るためのものだからだ。人々の命を守ることは誰もが担うべきことだ。そしてせっかく命を守るための方法があるのだから、学ばないのはとても損だと思う。また私が環境防災科に入って２年目の時、父が東日本大震災の映像をネットで観ていたことがあった。父は普段ネットをよく使用するが、これまでにそのようなサイトをあまり観たことがなかった。これも私が防災を学ぶようになったことで父が震災の映像を観て、災害を知ろうと思うきっかけをつくれたのかと思うと嬉しい。

また環境防災科に入って２回ネパール訪問をさせていただいた。ネパールでは、英語が世界共通語なのと同じように防災も世界共通の取り組みなのだと感じた。地震や津波などの自然災害はどこででも起こりうるし、命を守りたいと思うのは誰もが同じなのだと思う。だからこそ、これからはもっと世界に防災を発信し、防災を共有し合えるような社会になるべきだと思う。

（４）夢と防災

私は将来、養護教諭になりたいと思っている。養護教諭として、生徒の体調管理や応急処置はもちろん、それらに加えさまざまな形で防災を発信していきたい。養護教諭が直接生徒に授業する機会はないため、阪神・淡路大震災や防災を生徒に直接伝えていくには難しい部分がある。しかし生徒に直接授業をする先生方に防災の研修をすることで、そこから生徒にも広めてもらうことはできると思う。また、災害時には養護教諭だからこそできるサポートがあると思う。その１つとして保健室は生徒の相談場所としても来室しやすい１つの場所であるため、災害時には経験と専門性を活かした人々の心のケアをできると思う。またその中で学校全体での防災活動も進めていきたい。防災訓練や避難訓練はもちろん、地域とのコミュニティづくりとして地域の方との交流をはかるなど、体験を通して生徒たちに防災の大切さ、人の命を守ることの大切さ、阪神・淡路大震災の教訓である「共助・近助」の大切さを知ってもらいたい。また地域の方々と交流することで、生徒と地域の方のつながり、地域の方同士のつながりを作り上げることができると思う。私は防災を知る者として、防災を広めていく者としてそのきっかけづくりをしたいと思う。

そして、私にはもう１つしたいことがある。それは、貧困、ストリートチルドレンのために何か行動を起こすことだ。これまでの２回のネパール訪問で、ストリートチルドレンの子どもたちに出会った。ストリートチルドレンの子どもたちは、親がいなかったり、親がいても子ども自身が働きに出なければいけない、お金を稼がなければいけない状況にある子どもたちのことだ。今から２か月ほど前、そんな子どもたちのいる、発展途上国ネパールで大地震が発生した。誰もが恐れていた事態だった。未だ私たちが現地へ入れる状況でなく、今現在、子どもたちがどうなっているのかすらわからない。ただ、親がいなかったり、家がなかったりで、路上で生活を送るストリートチルドレンの子どもたちの安否や、心の状態が心配だ。今すぐに何か行動を起こすことはできなくても私は将来そんな子どもたちのために平常時や災害時の継続的な支援活動を行っていきたい。

私がこう思うことができたのも、考えてみれば、阪神・淡路大震災があったからだ。阪神・淡路大震災をきっかけにこの環境防災科ができ、この科に入った。この科に入っていなければ、父や母の震災体験を聞くこともなかった。逆に言えば、この科に入ったからこそ父や母の震災体験を聞くことができた。この科に入って得たものは多く、発信するべきものも多い。そして私はこの科に入ったことを無駄にはしない。また私は将来、一見防災と関連しにくい職に就きたいと思っているがどんなに防災を広めることが難しい環境でも阪神・淡路大震災の被災地、神戸に生まれ、今防災を学んでいる者として、今後防災を広めていくことは私たちの使命だと思う。

語り継ぐ

西田　芽生

私の両親は当時、須磨区名谷町に住んでいた。祖父母は私が今住んでいる、垂水区清水が丘に住んでいた。私は生まれていなかったので、阪神・淡路大震災を経験していない。
今回の話は両親と母方の祖父母から聞いた話だ。

１　両親の話

（１）震災前日

12 月 18 日に結婚して、新婚一か月。おやすみと言って普段通りに寝た。

（２）地震発生

遠くからドドドドドという大きな音が聞こえた。二人で寝ていたベッドが揺れて揺れて揺れた。食器がぼこぼこ落ちて、バリンバリン割れた。父が母に覆いかぶさった。とても長い時間揺れているように感じた。縦・横によく揺れた。遊園地の乗り物に乗っている感じだった。

（３）発生してから

揺れが収まって、外を見ると長田方面の空が赤黒かった。朝焼けなのか、火事なのかわからなかった。こんなの見たことなかった。何が起きたのか分からなかった。

（４）地震後の暮らし

電気・水道・ガスが一時的に止まった。電気はすぐに復旧して、水道もしばらくしてから復旧した。両親の家は、祖父や祖母や友達の風呂屋さん代わり、洗濯物屋さん代わりになっていた。父は地震発生後すぐから会社に出勤していた。いつもは、公共交通機関で行っていたが、すべてストップしていたため、原付で仕事場の伊丹まで通勤していた。会社の上司の人から食料をいただいたりもした。地震発生からしばらくはサバイバル生活だった。普段通りの生活の有り難さを身をもって実感した。給水所から水を運ぶことがとてもしんどかった。父方の祖父の兄弟が、船で食糧を運んできてくれたりした。父方の祖父は、おにぎりを作って、自分のトラックに乗せ新長田や長田の町に届けていたという。

２　母方の祖父母の話

（１）震災前日

前日は新年会で、祖父母は一緒に参加してその夜はぐっすり眠れた。

（２）地震発生

祖父は、布団の中にずっとくるまっていて、瓦が落ちてくる音や食器が割れる音が聞こえた。何分かのゆれだったのに、とても長く感じた。なんて大変なことが起こっているんだ。自分の家が一番被害にあっているんではないか、と思っていた。祖母は、なぜかは分からないけど、何かが起こると思って慌てて外に出た。外で地震にあって、怖くて怖くて仕方がなかった。

（３）発生してから

揺れが収まって、テレビをつけてみてみたら、長田の町は火の海だし、垂水なんて被害にそんなにあっていないなと思った。祖父はその日のうちに原付で灘の祖父のお父さんのところに行った。幸い、祖父のお父さんは無事だった。灘は垂水よりも被害がひどくて垂水なんか全然ましだと思った。祖父はそれから毎日、原付で灘まで通った。いつも使える道は使えなくなっていて、灘まで遠回り、遠回りして行った。３～４時間ほどかかっていたそうだ。

３　両親・祖父母の話を聞いて

初めてこんなにしっかりと話を聞けて、いい機会になったなと思った。けれど、やっぱり少し母は、整理ができてない感じがしていた。小さいころ、母からは阪神・淡路大震災の話はきいていたが、父や、祖父、祖母の話は初めて聞いた。母からは聞けていなかった話や、祖父母の話を聞いて、同じとを感じている部分があるなと思った。「揺れがとても長く感じた」。4 人に聞いて、4 人とも同

じことを言っていた。それほど、怖い経験だったんだなと思う。私がもし、今住んでいる地域で阪神・淡路大震災にあっていたらどうなっていたんだろう。父や母のように新婚１か月で被災していたらどうなっていたんだろう。私は自分自身を守れていたんだろうか。生き残ってもその先、生きていけたのだろうか。私がこうやってどうだったんだろうと悩んでいることを私の家族は乗り越えてきたから、私の家族は強いし、私は、家族を誇りに思う。

母は昔から、阪神・淡路大震災の話をしだすと泣きそうになっていたが、今回話を聞いていたら吹っ切れていたように話してくれた。２０年経って、少し気が楽になったのかなと思う。阪神・淡路大震災は私の家族にもたくさんの見えない傷を残していったんだと思った。傷がいつ治るかはわからないし、もしかしたら一生治らないのかもしれない。私の家族はずっと阪神・淡路大震災とともに生きていくんだと思う。絶対に忘れないし、忘れられない体験になったんだと思う。「阪神・淡路大震災で被災した家族」の一員として、私も一生、阪神・淡路大震災と共に生きていきたいと思った。私の家族が体験したことを、私もいろんな人に伝えられるようになりたいと思った。

父方の祖父はもう亡くなったが、私の祖父がそんなことをしていたのかと思うと、とてもうれしく感じた。父方の祖父はトラックの運転手をしていて、地震発生時、第二神明の高速道路を走っていた。私の祖父は無事助かった。父から聞いた話だが、走っていた道路はぐらぐら揺れて、死ぬかと思ったと言っていたと教えてくれた。心の底から思うのは、私の家族が無事に生きていてくれて本当に良かったということだ。

４　環境防災科に入った理由

私が環境防災科に入った理由は、二つある。一つは、私が中学２年生の時に東日本大震災が起こったことだ。その日は、一学年上の先輩の卒業式で、帰りに友達と遊んでいた。「大きい地震が来たらしいで」と友達に言われ、「ふ～ん。」としか思っていなかった。その日は自分の家に帰らず、家から近い祖父母の家に帰った。祖父母の家ではテレビが付いていて、黒い水が田んぼを飲み込んでいくような様子が映っていた。最初映像を見たときその黒い水が「津波」ということが祖父母も私もわからなかった。私は家に帰って一日中母親に私が見た「津波」のことばかりずっと話していた。父が勤務先（伊丹）から帰ってきて、「こっちでもだいぶ揺れたで」と言っていた。それから見るテレビはニュースばかりで、ニュースの内容は地震のことばかりやっていた。私が見た津波の映像も何度も流れた。テレビに映る青枠には、「〇〇で死者〇〇人行方不明者〇〇人」と書いてあるテロップがたくさん流れていた。ニュースキャスターはみんなヘルメットを被っていた。ニュースの生放送中に何回も余震が来ていた。中学２年生ながらにとても衝撃が強かった。「同じ日本で大変なことが起きたんだな」と思った。それからしばらく経って、母親からたくさんの子どもが震災で亡くなったことを聞いた。その時「私に何かできることはないんかな。」と思った。そして、担任の先生に「環境防災科というところがあるよ。」と聞いた。それを祖母に話すと、「人様のために一生懸命になれることはいいことやから、頑張り」と言ってくれた。とても嬉しかった。東日本大震災が起こらなければ、私は環境防災科に入ることはなかったと思う。実際に被災したわけでもないし、その時何かできたわけでもない。でも阪神・淡路大震災のことや東日本大震災のことは決して忘れてはいけないことだし、忘れないように、勉強したことを伝えていけたらいいなと思う。

中学３年生の時に、環境防災科のオープンハイスクールに参加した。参加したことが、環境防災科に入学したいと思った二つ目の理由だ。オープンハイスクールで、環境防災科のことについてパワーポイントで２学年上の先輩方が発表してくれた。その先輩方がとても堂々と発表していて、「私もこんな風になりたい。」と思った。しかし、私は、みんなの前で発表したり、発言したりすることがとても苦手だった。だから「環境防災科は私には向いてないのかな。」と思った。環境防災科には、みんなの前で何かしたり、リーダーシップがとれる人しかいないのだと思っていた。その後、先輩方とお話しできる機会があり、一人の先輩に「私も発表するのとても苦手だったよ。けど、環境防災科に入って、たくさん発表する機会があって、みんなの前で発表することができるようになったよ。」と言ってくれた。それを聞いて私も自分を変えたいと思って、受験を決めた。今では、発表させていただく機会も増えて、とても緊張はするけど、楽しくなってきている。環境防災科で自分を変えることができたし、成長もできた。中学３年生の時の自分の気持ちを無駄にせず、「なりたい自分」という

のに１歩近づけたかなと思う。環境防災科に入学して本当に良かったと思っている。

５　ボランティア活動

何度か、募金活動をさせていただいた中でいろいろと声をかけてもらったことがたくさんある。募金活動は東日本大震災への支援を主にさせていただいている。「暑い中がんばってね」と温かいことばをかけてくださったり、「あの時の恩返しやから。」といって募金してくださる方もたくさんいる。「あの時」というのはきっと阪神・淡路大震災の時だと思う。そういうことばを聞くと、「日本ってつながっているんだな」と思う。どこかで困っていたら、どこかほかの場所の人が助ける。日本はそういうことができる国だと思う。そしてどんな形でも、助けてもらった時の恩を返す。とても素晴らしいことだと思う。しかし、逆に「あんたら東日本大震災体験してないんやろ？」「阪神・淡路大震災のとき生まれてなかったんとちゃうん？」と言われることもある。そう言われた人たちにどう反応すればいいか正直まだわからない。実際に、東日本大震災も阪神・淡路大震災も経験していないことは本当のことだし、もしかしたら私が募金活動をすることによっていやな思いをする人がいるんじゃないかと思う。でも、私ができることはそれぐらいしかないし、知識を学んでも行動に起こさないと意味がないと思う。何が正解で何が間違っているかはわからない。けれど、自分が正しいと思ったことや、自分がやりたいと思ったことをやらないと、後悔すると思う。だから、相手の気持ちも考えながら、行動を起こしていけたらいいなと思う。

また、募金活動だけではなく特別支援学校との交流にも参加させていただいている。一年生の時に「行ってみようかな」という思いで聴覚特別支援学校との交流に参加させていただいた。最初はどうコミュニケーションをとっていいかわからなかったし、戸惑いもたくさんあった。手話は正直何も知らなかった。先輩が自分のことを手話で紹介していて、「なんで覚えてこなかったんだろう。」と後悔した。また、私が戸惑ったり、緊張していたりすると、交流する側も戸惑ったり、緊張してしまうことが分かった。二年生で「去年後悔したことをリベンジ！」という思いでもう一度同じところに交流させていただいた。手話で自己紹介するととても喜んでくれた。また、一年前の時と比べると防災への知識が増えていて驚いた。私が知らないことまで知っていて正直少し焦った。三年生ではどんな交流をさせていただけるかとても楽しみだ。

障がい者の方々は災害時、災害弱者となる。災害弱者は障がい者の方々だけではなく、子ども、妊婦さん、お年寄りの方などたくさんの人が災害弱者となる。そういった災害弱者の方々をどう支援していけばいいか、考えていかないといけない。こういうことを考えられるようになったのは、特別支援学校の生徒さんたちと関わらせていただけるようになってからだ。阪神・淡路大震災の時、災害弱者の方が多く亡くなった。どうしたら災害弱者の人たちが助かるのか。地域のコミュニケーションだったり、隣の家のことをよく知っておくべきだったり、しないといけないことはたくさんあると思う。私は将来、子どもと関わる仕事に就きたいので、これからも考えていきたいと思う。

６　将来の夢と防災・減災

先ほど、将来は子どもと関わる仕事に就きたいと書いたが、私の将来の夢は幼稚園教諭だ。この夢を持つようになったのはいつからかわからない。母親が幼稚園教諭をしているので母親に憧れていたのもある。

東日本大震災が起き、被害の大きさを知り「もっとたくさんの子どもが生きられたんじゃないかな」と思うことがある。「もっと避難訓練をしとけば…」「もっと普段から防災意識を持っていれば…」と考えることは多い。実際、たくさんの子どもの命を守れた先生もいる。私は、今まで３年間勉強したことを将来に役立て、いろんな人に広めていきたい。子どもの力はすごいと思う。子どものパワーは計り知れない。幼稚園や小学校など教育機関で防災教育を取り入れて、その日やったことを子どもが親に話す。そういう風に、子どもから防災・減災の輪が広がっていくのでなないかなと思う。全国に広めるのは大変なことだと思うけど、まずは身近なところから始めていけばいいと思う。私から、子ども。子どもから親。親からまた別の人。そういった輪が大きくなっていけばいいなと思う。

今の子どもたちは阪神・淡路大震災を知らない。これから、阪神・淡路大震災を経験していない人が親になっていくと思う。私も体験はしていない。けど、将来、幼稚園教諭になるにあたって子ども

たちに阪神・淡路大震災のことを伝えていきたいなと思う。私は、両親が阪神・淡路大震災を経験しているから、直接話を聞けるけど、経験していない人が親になったら子どもに阪神・淡路大震災の話を伝えられない。勉強してきたり、話を直接聞いてきたりした私たちが次の世代の子どもたちに阪神・淡路大震災を伝えていかないと、いつか本当に風化してしまいそうで怖い。だから、将来私が関わっていく子どもたちには、自分の住んでいる地域で何があったか、それがどんなに大変だったか、少しでもわかってほしいなと思う。小さな子どもでも阪神・淡路大震災のことがわかるように、伝え方を工夫して、そこから防災教育や避難訓練につなげていけたらいいなと思う。

７　感想

今回、語り継ぐを書くにあたって、たくさんのことを改めて考えさせられた。家族の震災体験を聞いたり、自分の夢について考え直したり、自分がなぜ環境防災科に入ったのか、ボランティアを通して何を学んだのか。たくさんのことについて考えた。私は語り継ぐでこういうことを考えられてよかったと思う。普段、ずっと過ごしている中でこんなに考えることはないし、家族に話を聞く機会だってない。普段恥ずかしくてこういった深い話をできなかったりするから、今回のおかげで自分自身も少し成長できたんではないかなと思う。

今年、阪神・淡路大震災から２０年ということで、去年たくさん阪神・淡路大震災の特別番組をやっていた。それを妹とみていた時に、「姉ちゃん、絶対忘れたあかんで、ちゃんと伝えなあかんで。」と言ってくれた。とても嬉しかった。環境防災科に入って、自分は何が出来ているんやろうと思っていた時期もあったので、身近な妹にそう言ってもらえたら、自分がやっていることが、人に伝わっているんだなと思った。そして妹も少し防災や災害のことについて興味を持っていてくれていることがわかって、ものすごくうれしかった。

最近、防災や災害について、妹だけではなくて、父や母も興味を持っていてくれている。「じいちゃん、ばあちゃんはどうやったら助かるん？」「ここに津波は来るんやっけ？」「どこで寝たらいいん？」私が、環境防災科で学んだことを、家に帰って雑談がわりに喋っているとそうやってたくさん聞いてきてくれる。２年半ほど防災を学んで、人に伝えることを学んで、やっと家族に伝わったんだなと思った。伝えることは簡単でも、興味を持たせることはとても難しいと思う。「どうやったら相手に興味を持ってもらえるように伝えられるか。」今度の課題はこれだと思う。でも私が話すことで、興味がなくても「そういえば、誰かが阪神・淡路大震災のこと話していたなぁ。」とか、少しでも記憶に残る伝え方をできるように、努力していきたいと思った。そうやって記憶に残る伝え方をすれば、風化を防げると思う。そしてそこから私の話を聞いた人が、防災について考えてくれたり、次来るかもしれない地震に備えてくれたら私の話が役に立ったんだと思える。そしてその人が災害にあった時に助かる命になっていけばいいなと思う。実際に経験していないから語れないのではなく、「経験していないからこそ語る。」ということもできるのではないかと思うし、「経験してないから語れない。」ですませてはいけないと思う。だからこそ、私たちが３年間で学んだことを無駄にしてはいけないし、阪神・淡路大震災を経験した世代の人がいなくなっても、「私たちがいるから阪神・淡路大震災は絶対に忘れさせない。」という気持ちで、いろんな人から聞かせていただいた「語り継ぎ」を語り継いでいけたらいいなと思う。

語り継ぐ

萩野　彩未

これは母の体験談である。当時、二歳の長男とお腹の中に長女がいた。家族は伊川谷の団地に住んでいた。

１　震災前日

（１）水族館

１月１６日､家族で水族館に行っていた｡まだ二歳だった長男はイルカショーを楽しみにしていた。だが、その日のイルカは様子がおかしい。いつもならきっと調教師さんの言うことを聞きショーをするのだと思うのだが、一匹も言うことを聞かずショーにはならなかった。調教師さんも「今日はなんだか様子がおかしいね～」と言った。

（２）実家

水族館の後は､実家に寄った｡実家は西区の天が岡というかなり急な坂を登ったところに家があり、周りは山、下には櫨谷川が流れていた。住んでいる方のほとんどが高齢者である。ゆっくりしているといきなり何台もの車がぶつかったかのような大きな音がした。何かあったのかと思い外に出ても何もない｡”今日は変な一日だな”と思い、家に帰った。

今思えば、これが地震の前兆だったのかもしれない。

２　震災当日

（１）午前５時４６分

家族みんな同じ部屋で寝ていた。するといきなりゴォーーーと音が聞こえてきて、目が覚めた。隣を見ると長男がキョトンとした顔で黙って座り込んでいた。なんだか嫌な予感がし、長男を抱きかかえた瞬間凄まじい揺れが襲ってきた。揺れている間は何も考えることができず、ただただ長男とお腹の中にいる長女を守ることしか考えなかった。揺れがおさまり部屋を出てみると、食器棚は倒れ食器は全て割れていた。テレビは元あったところからかなり飛んでいた。家を出ると団地の方たちが外に集まっていた｡「団地にヒビが入っている。危ないから早く避難した方がいい」と近所の方が言い、とりあえず洗濯物を済ませてから、実家に避難することにした。

（２） 実家に避難

実家までは車で移動した。道は寸断されてはいなかったが、デコボコしていて走りにくかった。天が岡は幸いに被害が無いに近かった。高齢者が多く住んでいる地域なので被害が無いに近くてよかったと思う。実家は二階の棚の物が一つ落ち、水道が止まっただけだった。だから家が悲惨な目に遭ったことは信じてくれなかった。実家での避難生活は約一週間続いた。水道が止まっていたため、給水車が玉津第一小学校まで来ていたので毎日汲みに行った。また知人が仕事で東京まで行く予定があったので、食料と水を持って帰ってきてもらった。テレビやラジオを聴いていると、神戸には来ないと言われていた大地震がまさに今目の前に起こっており、被害の大きさや震災の規模の大きさを目の当たりにした。

３　おばあちゃんの地元

母（私の祖母）の地元は三宮であり、長田にも長くお世話になったらしい。実家に避難している時、母はテレビで三宮や長田の被害を知って大きなショックを受けていた。三宮は建物の崩壊が酷く、長田は火の海となっていた。長田の状況を知ってから母は長田まで足を運んだ。支援できるわけでもない、自分に何かできるわけでもないが、ただ自分が知っていた長田のまちを最後に一目でも見たかったそうだ。復興してから長田にまた足を運んだ母からの一言は、「変わってもうたな～」と。

４　家に帰宅

約一週間の実家での避難生活が終わり家に戻った。家はガスと水道は止まっておらず、何とか生活

はできるほどだった。長男もお腹の長女も無事で本当に良かった。

５　母から話を聞いて感じたこと

震災前日にイルカの異変や変な物音を経験した母は、震災当日すぐにゴォーーーという音に気付き長男や自分の命を守ることができたのだと思う。もし、異変に気付くことがなかったら命を落としていたのかもしれない。そんな命を一枚の壁で仕切られているような震災を経験した母の体験談は、被害が多かろうが少なかろうが貴重な話だと私は感じた。

また､私の母は家の中がぐちゃぐちゃになったり､家が倒壊する恐れがあったりと被害を受けたが、祖父母の家は大きな被害がなかったため母の言っている事が信じられなかったと聞いて､“災害”は非日常的なものであり日頃から意識がないと実際に起きた時に受け入れることができないものと感じた。

救援物資も被害が大きいところに先に行ってしまうので、被害が比較的少なかった私の祖父母の家の近くには来ず、家から離れたところにしか来なかった。そのため、遠方に行く用事があった人に食料や水を頼まないと無かったと聞いて、災害時の救援物資の配給方法の改善や、各地域で非常持ち出し袋の備蓄をするべきだなと感じた。それと一緒に、避難訓練や避難経路の確認も各地域で行うべきだと感じた。

祖父母が住んでいる天が岡という地域には自治会があるが、私が今住んでいる二ツ屋というところには自治会がない。あってもなくてもしっかりとコミュニケーションが取れていて、避難訓練や避難経路の確認をしていたら、一人でも多くの方の命を救えたかもしれない。母からの話を聞いて、自治会の在り方や各地域でのコミュニケーションの大切さを感じた。

母は、「大きな被害は受けてないし、何も話すことないよ。」と言っていたが、私はそんなことないと思った。災害は様々な被害をもたらし、母はその中でも幸い少ない被害だった。中には大きな被害に遭い大切な人を亡くした方もいる。災害は被害だけでなく大きな悲しみや怒り、恐ろしさももたらす。被災された方一人一人のお話がこれからの未来の巨大災害の防災へと繋がっていくと私は思う。だから母の話も無駄じゃない。話してくれた量ではなく、その中にある母自身が体験した阪神・淡路大震災への想いをこの「語り継ぐ」を通して未来の方に感じてもらいたいと思う。

６　環境防災科に入った理由

中学３年の時、私は進路でどこの高校に行くか悩んでいた。その時はまだ環境防災科という存在は知らなかった。色々な高校のオープンハイスクールに参加し舞子高校に行くことに決めた時、担任の先生から環境防災科の話を聞いた。はじめは「防災に特化して学ぶ？」という疑問が頭の中にあったが、気になって環境防災科のオープンハイスクールに参加することにした。その時のオープンハイスクールの内容は、パワーポイントを使った学校説明・先輩方の環境防災科に入った理由・先生方のお話しだった。聞いているうちにだんだん興味が湧いてき、新しいことにチャレンジすることが好きだったため、環境防災科を受験することを決めた。受験することが決まってからは担任の先生からの勧めにより、防災に関する新聞記事を切り取ったり、環境防災科の先輩方の活動が書かれている記事を探したり、自分から“防災”について関わるようになった。私の中学校も東日本大震災が起きてから、募金活動を校内でしたり、≪今の自分たちにできることは何か≫ということを考え合唱コンクールの課題曲を生徒みんなで作り、語り継いでいく活動などをしていた。気付かないところで自分自身も何か被災した方々の役に立つことをしていたのかもしれないと感じ、環境防災科にはいって様々なボランティアに参加したい、またこれからの大災害に備えて知識を身につけたいと思い始めた。

実際に入学してからは、想像を超える体験が待っていた。まさに「防災に特化して学ぶ」その通りだった。阪神・淡路大震災、東日本大震災、過去の大災害や大事故、これからの災害、海外の災害など様々な面からみた防災、災害を三年間通して学ぶことができた。入って間もない頃、何も災害を体験もしていないし話もちゃんと聞いたことない人間が環境防災科に居ていいのかと考えたこともあったが、防災に初心者など関係なく、これから震災を体験した方が少なくなっていく中で私たちが市民のリーダーとなり周囲に語り継いでいくことが大切と教えていただき、私はこの学科で頑張ろうと思った。

７　将来の夢と防災

私の将来の夢は、ウエディングプランナーになることだ。ウエディングプランナーになって多くの人を笑顔にし、「人生で一番輝け、最高の日になった」と思ってくれるような一日をつくれるようなプランナーになりたい。じゃあ、私は高校卒業後防災と離れるのかと言ったら違う。一見防災と関わりの無さそうな職業でもある。私も初めはそう思っていた。だが、担任の先生に「どんな職業でも防災と関係ある」と言われたときに、ウエディングプランナーだからこそできる防災をこの世界で続けていきたいと思った。どんな関係性があるかなと考えた時に一番に思いついたのは、災害によって結婚式を挙げることができなかった方への支援だ。大きな災害が起こってしまうと、結婚式を挙げるつもりだったお二人はもちろん、会場自体も被災していると思う。結婚式当日までお二人はたくさんの準備を重ねてきていると思う。それを災害によって壊されるというのは悲しいことだ。そんな方を私は支援していきたい。一度壊された夢でも、被災していない人が受け継ぎお二人の夢を叶えたい。そんな支援のやり方も私はあると思う。また、過去の災害によって結婚式を挙げることを逃した方ももしかしたらいるかもしれない。そんな方たちへの支援というのもしたい。

防災は被災してからの対応以上に“備え”が大切である。どんな世界でもいつかは災害とぶつかることがある。だから他人事として考えてはいけない。私は、ウエディングプランナーになって備えをすることはもちろん、多くの人に防災を広めていきたい。まずは自分がいる場所から関わる人に防災の大切さを伝えたい。また、災害時に率先して行動できるリーダーになっていきたい。その次に、ウエディングプランナーという仕事は多くの人と関わる時間が長い仕事だから、この仕事と共に活かせる防災や、災害時に率先して行動できるリーダーを育成していきたい。

今現在、大きな災害を経験した方というのはとても少なくなってきている。その中で過去の災害を風化させてはいけない。次世代の私たちが語り継いでいかなければならない。次世代の私たちが防災を担っていかなければならない。だからこそ、どんな世界でも防災と関わっていかなければならないし、できるだけ多くの人に語り継いでいかなければならない。私はウエディングプランナーとして、語り継いでいきたい。

８　感想

「語り継ぐ」を書く際に、母に阪神・淡路大震災当時の話を聞いた。もともとあまり被害を受けていないということは知っていたが、まともに話を聞いたのは今回が初めてだった。色々な偶然や奇跡から母は被害が少なかった。だが、その中の一つでも崩れていたら母の命も危なかっただろうし、長男の命も危なかっただろう。災害の恐ろしさは、人の体験談からでも伝わるものだと感じた。また、母から祖母の地元の長田が火の海になり、祖母が現地に出向いた話を聞いた時は泣きそうになった。

災害が起きた後には様々な問題が出てくる。その中に、災害時に被害を受けた建物やまちなみを残すか残さないかという問題が出てくると思う。残したい方の意見は、「災害が起きたことを忘れないために」や「災害の恐ろしさを忘れないために」など災害を風化させないための理由が多いと思う。残したくない側の意見は、「恐ろしかった災害を思い出したくない」や「辛い出来事がフラッシュバックする」など災害に関連する辛い出来事を思い出したくないという理由が多いと思う。どちらかが正解でどちらかが間違っているわけではない。人それぞれ想いというものはあるからどちらも正常な考えだと思う。

きっと私の祖母は、災害前の長田のままであってほしかったのだと思う。災害が起きても、負けずに昔の姿のままでいてほしかったのではないかと思う。祖母の話を母から聞いて、このような災害時に被害を受けた建物やまちなみを残すか残さないかという問題は、簡単に解決できる問題ではないなと感じた。

私たちは阪神・淡路大震災から二十年という節目の代である。私はこの節目の年に初めて１月１７日に東遊園地で行われる追悼式に参加した。今までは、阪神・淡路大震災を経験していない私が行っても、被災者からみればいい気はしないだろう、見物客と思われたら嫌だと思い行くことができなかった。しかし、同じ神戸市民として想いは共有したいし、防災を学び広めていきたいし、これから世代を担う側として阪神・淡路大震災を忘れないために参加しようと決意した。

追悼式の朝。多くの被災者や被災者のご家族、阪神・淡路大震災を忘れないと想う方々が東遊園地

に集まっており、私はこんなにも多くの人が二十年経った今でも想い続けていることを、身をもって感じた。それと同時に私は恵まれた環境で生きてきて、恵まれた環境で災害と防災を学ぶことができていることに感謝し、私たちが語り継いでいかなければならない大切さを感じることができた。

今までは災害を経験していない私が色んな方から聞いたお話しを語り継いでいいのかと思っていた。しかし、追悼式に参加して今後語り継いでいけるのは私たち若い世代となると分かった。きっと被災者の中には、「何も体験してない人が語り継ぐなんてできない」とか、「語り継ぐとか簡単に言うな」と思う方もいるだろう。それでも私たちには語り継いでいく使命がある。それは阪神・淡路大震災を風化させないためであり、阪神・淡路大震災を想う方々の気持ちを大切にし、後世に受け継ぎ今後の巨大災害に備えるためである。

今後起こると言われている“南海トラフ巨大地震”は阪神・淡路大震災よりかなり大きな被害がでると想定されており、南海地震だけでなく東海・東南海地震も連動して起こるかもしれないと言われている。三十年以内には起こる確率は６０～７０％、五十年以内は８０％と言われているが、いつ起こるかはわからない。もしかしたら明日かもしれないし、一時間後かもしれない。多くの人は「起こらない」とか「自分は大丈夫」と思っている。また想定にとらわれすぎて、国が出している想定被害内での備えや避難を考えている人も多くいると思う。想定はあくまで想定であり、実際はそれ以上の被害がでることは全くおかしなことではない。阪神・淡路大震災や東日本大震災を通して考えると、災害の怖さは十分にわかると思う。それなのに人間は時間と共に忘れ、防災意識は低いままである。日常生活の中で災害と向き合う時間がないから防災意識は低く、甚大な被害がでてしまう。一人一人が、今災害が起こってもおかしくないという意識を常に持つことが防災意識を高めるための一歩だと思う。

これから環境防災科を卒業して社会に出ていくが、この三年間の重みは忘れたくない。防災や災害について学び、様々なボランティアに参加させていただいた。防災は“継続性”というものがカギとなる。防災を続けることで防災意識が高まり、防災に強いまちをつくることができる。ボランティアを続けることで支援をし続けることができ、被災地と繋がることができる。続けることの大切さを知った三年間でもあった。社会に出てウエディングプランナーという夢を叶えても、防災とはずっと関わっていきたいし、ボランティアをさせていただく機会があるなら積極的に参加していきたい。特に私が継続していきたいのは“募金”だ。募金は被災地や支援を求めている場所から離れていても支援をすることができ、募金を呼びかける側だけがボランティアではなく、募金する側もボランティアだから、まちやお店で募金を呼び掛けていたら進んで参加したい。

被災された方々の想いやそのご家族の想い・私たちの想い・私たちの家族や祖父母の想いがこの「語り継ぐ」を通して多くの学生や震災を体験したことのない方など様々な方々に伝わればいいなと思う。この「語り継ぐ」が舞子高校のホームページや冊子になっていること自体もっと多くの人に知ってもらいたいし、授業や本屋さん・他のインターネットのページでももっと取り上げてもらえば、想いは共有することができると思う。それを実際に行動に起こすのは難しいことかもしれないが、自分たちにできることからはじめていきたい。次世代を担うのは今の十代の私たちである。また神戸市民として阪神・淡路大震災を忘れてはいけない。忘れないためにも語り継いでいかなければならない。私たちがこうして想う気持ちも、被災された方々やそのご家族の想う気持ちも無駄にしてはならない。この「語り継ぐ」を多くの人に読んでいただいて、私たちが阪神・淡路大震災を風化させないことや、経験や体験を後世に語り継いでいくという意志がしっかりあることを知ってもらいたい。経験していないから語れないというのは間違いであり、経験していないからこそ語り継げるものがある。

語り継ぐ

長谷川　瑞起

はじめに

僕は、阪神・淡路大震災を経験していない。親も神戸から少し離れた姫路に住んでいたためそれほど大きな被害は受けていない。それでもこの阪神・淡路大震災を風化させないためにも語らなければいけないと思う。環境防災科で学んだことや、親から聞いた震災当時のことを書いていきたいと思う。

１　阪神・淡路大震災の概要

阪神・淡路大震災は１９９５年1月１７日午前５時４６分に起こった震度７マグニチュード７．３の大きな地震だった。この地震の特徴は直下型の地震で縦揺れが激しく、古い木造住宅の倒壊がとても多かった。また、住宅密集地では火災が発生し特に兵庫区や長田区などで大火災が発生した。水道、ガス、電気などのライフラインはほぼ使えなくなり壊滅的な被害を受けた。死者は６４３４人でほとんどの人が家屋の倒壊による下敷きとなって圧死してしまった。

２　父の話

（１）震災当時（１９９５年）

父は、当時母と二人暮らしで、姫路市飾磨区の築３か月の２階建てのハイツの２階に住んでいた。建物は鉄骨づくりだったので割としっかりした建物だった。父の仕事は会社員で、液晶ディスプレイの製造をしていた。

その頃は、過去の地震でも大きな被害にあっていないこともあり、地震に対する警戒心は低く、防災意識は無かった。だから、震災前日も普段と変わらない生活をおくっており、特に備えもしていなかった。

（２）震災当日（1月１７日）

午前５時４６分、就寝中のところ突然下から突き上げる大きな振動と建物全体が大きく揺れ家財道具の落ちる音がした。姫路の震度は４ぐらいだった。揺れがおさまってからは、恐怖心よりも揺れがおさまった安心感でその場を動かなかった。安否確認は父、母の実家に電話で連絡し、身内が無事であることを確認した。電気、水道、ガスなどのライフラインは、ガスだけ緊急遮断装置が働きストップしたが、マニュアルに沿って解除したので、すぐにすべてのライフラインが使えた。被害の情報は、数時間は詳細がわからなかったが、テレビで、知っていた街並みが火災で燃えていたり、倒壊したりしている様子が放映され、時間が過ぎるにつれ被害の甚大さが浮き彫りになった。困ったことは、物流の遅れで品薄になったことぐらいだ。神戸・三宮方面のアクセスは不可になったが、特に神戸へ行くこともなかったので、それほど困ったことはなかった。祖父母の家や親戚の家なども、幸いにも神戸市に住んでいなかったので生活に支障はなかった。

（３）震災翌日～３日目（７２時間）で起こったこと

職場では、連日の震災報道の話題でもちきりだった。被災地では懸命な救助活動が続くなか亡くなられた方の多さや建物、インフラの壊滅状態がテレビでCMもほぼなく中継されていた。死者は約６４００人にのぼっていた。このうち木造住宅の倒壊で下敷きになり（１階で就寝している方で）亡くなられた方が約５０００人を超えていたと思う。「古い木造瓦屋根やったかな…」

（４）１週間以内に起こったこと

被災された方には申し訳ないという気持ちもあり…。２月に予定していた結婚式・披露宴を東海道新幹線が不通となり、遠方の親戚を迎えられないことから延期を決定した。

日常生活については震災前後で大きな変化は感じられなかった。ただ、迂回渋滞の影響で交通の不便さはややあった。

（５）震災当時に見聞きしたまわりのこと

神戸方面から通勤していた仕事の同僚は道路の凸凹がひどく、渋滞も多くなり通勤時間も１・５

倍～２倍になったと言っていた。それよりもライフラインが使えないということが一番つらいと言っていた。こういう話を聞いて、私は普通の生活が送れていることに、被災された方に申し訳ないという気持ちと、大変ありがたいという気持ちで一日一日をすごしていた。

（６）震災が起こってから気をつけるようになったこと

防災の知識は様々な情報元から吸収しているが、具現化に至っていないのが実情だ。万が一への備えに投資する優先度をつけられない甘さや危機意識の無さがあるのだと思う。今回のことをきっかけに我が家の防災意識を家族の意見を尊重し進めていきたいと思う。

（７）今の思い

災害は事前の備えでリスク軽減できると思う。しかし、近年の自然災害の脅威は人間の力では防ぎようのないものだと強く感じている。もし自分が被災者になったときに自分のことだけしか考えない心の貧しい人間にはなりたくない。同じように困った人を思いやり助け合いができる人材になりたいと思っている。息子には物理的な防災は難しいとするならば学校で学んだ防災の知識、経験を多くの皆さんに周知し今後の防災への取り組みに役立ててもらえる役割をしてもらいたい。

３　感想

（１）父の話を聞いて

今回の語り継ぐをきっかけに初めて真剣に父から震災の話を聞いたと思う。被災はあまりしていなかったということで、正直、あまり詳しい話は聞けないと思っていたが、父の話は思った以上にリアルだった。特に驚いたことは同じ兵庫県内である姫路と神戸で被害の状況が全く違ったということだ。ライフラインが使えるか使えないかや、水や食料を飲みたいときや食べたいときに口にできていたかや、道路の被害状況など、同じ兵庫県でも真逆の生活を送られていたということにとても驚いた。ライフラインについての話を聞いて思ったことを少し書きたいと思う。神戸ではすべてのライフラインが止まってしまったのに、姫路ではガスが一瞬止まっただけですぐにすべてのライフラインが使えた。ガスが使えなければ料理を作ることやお風呂を沸かすことができない。電気が使えなければテレビが見られず情報収集がスムーズにできない。震災当時は１月ということでストーブが使えず寒さをしのぐのがとても大変だったと思う。水道が使えなければお風呂に入ることもできないしトイレを流すことができず臭いや感染症などの危険性を恐れながらトイレを使わなくてはいけなかったはずだ。ライフラインが使えないという生活を考えてみると、本当に神戸の方は大変で、しんどい生活を送られていたのだなと申し訳ない気持ちになった。今回話を聞くにあたって初めて聞く話もあった。結婚式を延期した話や迂回渋滞の影響が姫路にまで及んでいたことなど、被災していなかったからこそ聞けた話もあると思うのでもし伝えられることがあるならば伝えていきたいと思う。父が最後に「今の思い」で「息子には物理的な防災は難しいとするならば学校で学んだ防災の知識、経験を多くの皆さんに周知し今後の防災への取り組みに役立ててもらえる役割をしてもらいたい」と語ってくれたので、環境防災科に通わせていただいた３年間を無駄にしない活動をしたり、職業に就いたりして、一人でも多くの人を助けることができればいいなと改めて思った。今の生活がどれほど幸せでありがたいかというのを考えながら生きていかなければいけないと思った。

（２）環境防災科に入って

僕は環境防災科に入ってたくさんの貴重な体験や活動をさせていただいてきた。とくに印象に残っているのは１年生の時に校外学習で行った野島断層保存館で聞かせていただいた米山さんのお話だ。米山さんは、阪神・淡路大震災の語り部をしてくださっている方だ。米山さんの話は、とても迫力があり、リアルで、震災を経験したことも見たこともない僕だったがとても分かりやすく、震災当時の状況のイメージが頭の中に浮かんだ。地域コミュニティーがしっかりしているからこそできた救出法や、消火栓を使用しようとしたが、水道管が破裂して使えなかった話やチェーンソーは役に立たずロープやジャッキなど家にあったものが役に立った話など、阪神・淡路大震災の経験から今後災害が起こった時に役に立つ話がたくさんあった。災害が起こった時にこの米山さんの話が活かされるように地域の避難訓練や学校での防災教育の時に伝えていかなければいけないと思った。このお話の中で忘れられない言葉が一つある。それは、防災の基本は「自分の命は自分で守る」という話だ。当たり前のように思うかもしれないが、それができていないから悲しむ人が出てしまうのだと思う。自分の命

が守れないのに他人の命なんて当然守れないと思う。まずは自分の身の回りの備えをしっかりして、もしも屋外で災害にあってしまった時にはどうすればいいかなど知識も頭に入れて、自分の命をしっかり守って、他の人も助けたいと思う。

この他にも環境防災科ではたくさんの外部講師の方に来ていただいて貴重なお話を聞かせていただく機会があった。この外部講師の方々から聞いたお話は僕の中で一生残っていくと思う。僕の中で留めておくだけではいけないと思うので、家族を中心にこの話を伝えていきたいと思う。

（３）夢と防災

僕の将来の夢は消防士だ。初めは阪神・淡路大震災がきっかけで消防士を目指すようになったわけではない。別のある災害がきっかけで一人でも多くの人を救いたいと思うようになり消防士を目指すようになった。その災害は祖母の家がある佐用町で起こった水害だ。僕は水害が起こってから１週間も経たない頃に、祖母の家に水を届けに行った。佐用町の姿は変わり果てていた。泥だらけの車が倒れていたり、橋が流されてなくなっていたりとても悲惨な光景だった。祖母や母の友達の方から水害当時の話を聞くことができた。その内容は、車に乗っているときに水没してしまって動けなくなった話や人が目の前で流されたという話で、とてもリアルで水の恐ろしさを知った。水害が起こってから数年がたち、高校の進路で悩んでいた。その時に佐用町の水害の時にボランティアをしていた高校生の姿を母が覚えており調べてみると舞子高校の環境防災科だということが分かった。この学校では防災が学べるということで消防士を目指している僕にとって探し求めていた学校だった。環境防災科は阪神・淡路大震災がきっかけでできた学科だ。環境防災科で阪神・淡路大震災について勉強しているうちに、さらに消防士になりたいという思いが強くなった。僕が消防士になったら地域の防災訓練や避難訓練を行い、多くの人に備えの大切さを伝えていきたいと思う。なぜ、備えの大切さを伝えていきたいかというと、この３年間環境防災科で防災について学んできて僕が一番大切だと思ったことが「備え」だからだ。備えるだけで助かる命は増えると思うので、何をどのように備えたらよいかなどを分かりやすく伝えていきたいと思う。それと、保育園や小学校などに行って子どもたちに防災を伝えていきたいと思う。なぜなら、子どもに伝えることで、その聞いた話を家で話してくれて、防災につながると思ったからだ。大人は子どもに言われると危機感を持つということをテレビで見たことがあるので、僕は子どもを中心に防災活動をしていきたいと思った。

消防士という職業は命がかかっているので絶対に死なないという思いと、絶対に人を助けるという強い思いでやっていきたいと思う。思うだけでは当然無理なので強い体づくりと、消防士としての勉強も頑張って、体力としっかりとした知識を持った消防士になりたいと思う。また、地域の人や職場の人から頼られる存在になりたいと思う。

（４）最後に

今回語り継ぐを書かせていただくことによって家族と阪神・淡路大震災について深く話すことができたのでとてもよかったと思う。未来の災害に対する備えに活かしていきたいと思う。

今回僕が書いた内容が少しでも風化を防ぐためのメッセージになっていると感じてくれる人がいればとてもうれしいです。読んでくださってありがとうございました。

たくさんの『 奇跡 』

濱岡　小矢佳

１　母の記憶

（１）当時

私には兄２人、姉３人がいる。私は阪神・淡路大震災から３年後６人兄弟の末っ子として産まれた。兄弟のなかで震災を経験したのは当時小学生だった長兄と長女、幼稚園に通っていた次女だった。母のおなかの中には約６か月になる双子の兄と姉がいた。

母は当時切迫早産の恐れがあると医師から告げられ、絶対安静にするようにと震災の約１か月前から入院していた。母方の祖父は灘区の市場で店を出していた。父はその手伝いをするため毎朝早く出かけていた。そのため、父方の祖母の家に預けられていた兄や姉たちはその１か月間小学校にも幼稚園にも通うことができなかったそうだ。

（２）前日

母は兄や姉たちをなんとか学校に行かせてあげたいとずいぶん前から退院を申し出ていた。だが、ひどい貧血もあったため医師は「絶対にダメ」の一点張りだった。そんな医師が突然「退院しても良い。でも何かあったらまた入院やから」という条件付きで震災前日の１月１６日に退院させてくれた。母はその時の医師の言葉を思い出しながら『ご先祖様が先生を動かしてくれたんかもしれんなあ』と言っていた。確かに震災前日にその言葉がなかったら、家族はバラバラの状態で震災にあっていたかもしれない。おかげで母は少なくとも自分の子どもと一緒にいられた。母はそのことを何度も『奇跡』と言った。

夜の６時くらいから何度か地震があった。まさか次の日にあんな大きな地震に遭遇するとは思わず、ただ『揺れている』と思っただけだったそうだ。母は『久しぶりに学校へ行かせてあげられる』と子どもたちの登校準備をしてその日の晩眠りについた。

（３）１９９５年１月１７日

早朝、母はドーンという大きな音とともに突き上げられるような地震で目が覚めた。瞬時に兄や姉たちの上に覆いかぶさった。後ろを見てみるとさっきまで自分が寝ていたところにたんすが倒れてきていた。兄や姉たちがいなかったら、母はおなかの中の双子の兄と姉とともにたんすの下敷きになっていただろう。揺れがおさまって外を見ると、いつもは何かしらの街灯で明るいはずの外が真っ暗になっていた。だが、玄関のドアの向こうから非常灯の光が差し込んでいるのが見えた。家の前の集会所に向かうため、母はその光を頼りに兄や姉たちを連れてなんとか外に出た。その時ドアは開いたものの、閉まらなかったという。外に出ると「おーい。大丈夫かー」という声が聞こえたそうだ。近所のおじさんたちが安否確認をしてくれていた。どこの家の人が何人出てきていないとか、どこは無事だとか、そういう話が多く飛び交っていたという。こういう時、集合住宅というのは安心できるし住んでいてよかったと感じたそうだ。

集会所に着いた母たちは、集合住宅に住んでいる近所の人とたびたびくる余震におびえながら身を寄せ合っていた。余震がおさまると近所の人は自分の家に一度戻って家にあった食べ物を分けてくれた。大人になって兄や姉たちが「すっごいおなか空いてたん覚えてるわ。あのころはお母さんにも言えんかったしそれちょーだいってほかの子に言うわけにもいかん」と話してくれたそうだ。母はおなかの中の弟、妹のために自分たちがもらったものを“栄養に”と分けてくれていた優しい子どもたちにつらいことをさせてしまったと言っていた。また、兄や姉たちは覚えていないと言っていたそうだが、当時集会所の床は畳で、その畳はひどく傷んでいた。母は動くことができないため、冷やさないようにといつも靴下を履いていた。だが、寝るときに靴下を履いていなかった兄や姉たちは裸足のまま靴を履き、集会所に来たため畳のくずが刺さって足の裏がとても痛々しかったそうだ。母はこのことを話してくれたとき『食べさせてあげれんかったことと靴下履かせてあげれんかったこと、今でも一番後悔してる』と話した。

夜が明けて明るくなってくるとやっと現状を把握できるようになってきていた。空にはヘリコプターが飛び回っていて、いつも行っているコンビニには長蛇の列ができていた。長年住んだ街並みが全

く違うように見えたことだろう。

（４）家族

しばらくして父があの火事があった長田区を通り、渋滞の中長時間かけて帰ってきた。母方の祖母は、祖父が市場に朝早く出ていき一人ぼっちだった。だが、震災が起こる前から直後までは電話がつながっていたという。祖母は仕事の関係で京都に住んでいる叔母（母の妹）に励ましてもらっていたらしい。

自分の母が心配だったということもあり、比較的被害の少なかった母方の祖父母のところに行くことになった。会ったとき、泣きながら抱き合いお互いの無事を喜んだそうだ。母は普段と変わらぬ祖父母の家の周りの静けさに驚いたと言っていた。住んでいた家の近くではヘリコプターが飛び交い、サイレンが鳴りやまず、普段のまちの様子とはかけはなれていたのに。

叔母が食料の入ったリュックサックを背負い、京都から電車に乗り、途中まで来て、神戸は電車が走っていないため線路を歩いて名谷の祖父母の家まで来てくれたそうだ。母は『あの子は強い。本当に強い』と私に何度も言った。人間はしようと思うとなんでもできる生物なのではないかと私は思っている。もちろん家族のためならなおさら。叔母は家族のためを思って線路を何時間もかけて歩いてやってきた。もし叔母と母が逆の立場ならば、母も同じことをしただろう。いつもの母なら。母はあの震災があった当時、子どもたちを守ること、見ていることなど、もしかしたら私が想像している以上のもっと多くの相当な負荷がかかっていたのだろうと思う。後に、当時大阪に住んでいたもう一人の叔母の家族も祖父母の家にやってきてその日みんなで泊まったそうだ。

その後母たちは学校が再開されるまで祖父母の家で過ごした。兄や姉たちは母の入院で１か月もの間学校に行くことができなかった。そして冬休みをはさみ、やっと学校に行けると喜んだ翌日に震災があったため、学校が再開されるまでの長い期間友達と会うことさえもできなかった。卒業アルバムを見ても、どの写真でも満面の笑みで写っている兄たちの過去にこんな悲しいことがあったとは想像もしなかった。

（５）奇跡

母は落ち着いてから病院に行った。おなかの中にいる赤ちゃんの検診のためだ。震災前入院していた病院は地震を受けてぐちゃぐちゃの状態だったという。病院へ行ったら“生きてたん！よかったなあ！噂してたんよ”と言われたそうだ。普通でも生きているのが奇跡という状態のひどい貧血と切迫早産の恐れがあった母は病院内で“あの状態であの人が今回の地震を生き抜くことはできなかっただろう”と噂になっていたらしい。母の強運と震災前後に起きた奇跡に私はとても感謝している。すべての奇跡が重なって、母と当時おなかの中にいた兄と姉、そして家族のみんなも助かったのだから。

まさか自分の母が兄と姉を産むとき、そんな大変なことになっていたとは思わなかった。『あんた産んだときはめっちゃ楽やったなあ。一人ってこんなに楽やっけって思った』そう私にいった母はすごく笑顔だった。

私は話を聞いたとき母や家族のみんなが生きていたことは本当に奇跡だと思った。同時に、奇跡が起こらなかった方も大勢いたのだと感じた。私とは真逆の、お母さんが生きていたら産まれていた命があったかもしれない。はっきり言って、なぜこの奇跡が起こったのか、なぜ奇跡と感じたのかはわからない。もちろん私は母や家族が生きていてよかったと心から思うし、同時に幸せでもある。だが、後世で私のように母が生きていたことは奇跡だと感じる子どもがいないようになればもっと幸せが増えると思う。そして、せっかく自分が今ここにいて防災を学んでいるのだからこれからこの奇跡を奇跡としてはならないと思った。命が助かったという奇跡をなくし、宮城県釜石地区の子どもたちのように自分たちや周りが助かったことは“あたりまえだ。奇跡なんかじゃない”と胸を張って言える世の中になっていけるように自分のできることをしていきたい。

２　環境防災科に入った理由・夢

私が環境防災科に入学したいと思った大きなきっかけは２つあった。１つ目は姉だ。姉は私が中学２年生になる前、高校受験で舞子高校の環境防災科を受験すると言った。最初は“なにそれ”としか思わなかった。だが高校生になった姉はよく“防災”や“災害”について学校で学んだことを教えてくれた。勉強はあまり好きではなかったけれど、姉に聞く防災の話はとても面白かったし、興味を持

った。ボランティアではリーダーとしてみんなをまとめ、後輩からも同学年からも信頼を得ている姉は私にとっての目標であり、尊敬を抱く一生かなわないと感じた先輩だったし、これからもそうだ。きっとどれだけ頑張っても姉を超すことはできない。だが、私は私なりにやれることをしていきたい。何より、私の目標である姉が信じてくれているからだ。私は今、貧困について興味を持っている。専門的な知識を得たい、貧困について研究したいと思っているわけではない。本をたくさん読んで日本や世界の貧困層の子どもたちについて知っていきたい。そして、何かしらの方法で貧困についてかかわっていきたいと思っている。そんなことを思ったのは環境防災科に入り、ネパール訪問をしたからだ。環境防災科に入学し、学ぶことがなければ貧困について何も知らないままだったかもしれない。環境防災科に興味を持たせてくれた姉は私の人生に大きくかかわった人間でもある。

もう１つは４年前の３月１１日に起きた東日本大震災だ。いつものようにテレビを見ていると速報が入り、津波の映像が流れた。環境防災科に合格して間もない姉が前に飛んできたのを覚えている。衝撃だった。その後、姉が東北ボランティアに行かせていただき帰ってきたとき話を聞いた。写真も見せてもらった。保育士になりたいとい思いが一層強くなった出来事だった。“子どもが好きだから”という単純な理由で中学生の時の夢は保育士になることだった。だが、東日本大震災の映像を見て“自分が防災を教えて多くの子どもの命を守るんだ”と思うようになった。

高校１年生の夏に東北訪問させていただいた。初めて生で２年経った被災地を見た。津波の悲惨さを物語っているあの大川小学校を見た時の衝撃は今も忘れられない。頭が真っ白になり、自分が何をしにここへ来たのか、帰ってから何ができるのか、すべてがわからなくなった。本当に震災がやってきたとき“自分じゃ子どもに何もできひん”と強く感じた。夢が一気に崩れ落ちた。

それから１年以上周りに吐き出すことができず、また東北訪問で感じた自分の無力さや現地の悲惨さを思い出すと涙が止まらなくなり、ただただ苦しかった。２年生になり、もう一度東北訪問をさせていただいてもっと苦しくなりある人にすべてを吐き出した。この時、その人は「無力って気づけたことがまず１歩」だと言ってくださった。この言葉は絶対に忘れない。自分自身本当に救われたし、三度目はないだろうと思っていた東北訪問に参加し、今度はみんなにちゃんと発信しようと決意したきっかけであったからだ。そして、アウトプットできなかった時期があった私だからこそ、無力だからこそできることがきっとあると感じた一言だった。

今、私はエステティシャンになりたいと思っている。エステティシャンは、一見防災に関係のない職業だと思われるかもしれない。だが、どんな職業でも防災・災害には関係がある。たとえば茶話会に参加し、簡単なマッサージをすることができる。また、癒しの場をつくる職業でもあるため、心の余裕がない人たちの居場所をつくってあげることもできる。私は一見かかわりのない職業だと思われるような職業から、それでも自分たちにできることを精一杯することや誰でも防災に関わる機会はあるのだということを伝えたい。また、自分自身の夢と今気になっている貧困や、防災・災害についての関係を見つけていきたい。

３　今の思い

（１）ネパールについて

２年生の夏、東北訪問の前にネパール訪問をした。行こうと思ったきっかけは外国に行ったことがなかったため、興味があったというほんの些細なことだった。まさかこれがきっかけで自分の高校生活の中で学びたいことができるとは思っていなかった。

ネパールで一番気になったのは、貧困についてだった。毎日３食、食事がおなかいっぱい食べることのできる私たちは現地に行かなければ悲惨さに気づくことはできないと思う。世界遺産建築物の周辺でストリートチルドレンに遭遇した。目の前で友達が物乞いをされているところが映像として今も目に焼き付いている。きっと何年経っても忘れることはできないだろう。それくらい衝撃な光景だった。

（２）神戸を語り継いでいく

私が阪神・淡路大震災のことを知ったのは小学生の時、毎年１月１７日に行われていた黙祷と震災当時のビデオ鑑賞だ。あのときは何がなにかわからず、ただその行事に参加していた。親からも兄弟からも震災のことについて聞いたことはなかったため、まったく知らなかった。だが６年にわたり観

ていたあの映像だけは鮮明に覚えている。小さい頃の印象的な出来事は意外に記憶としてどこかで残っていたりするものだと感じる。

また「しあわせ運べるように」は１月１７日が近づくと必ず歌っていた歌だ。東日本大震災の時には「神戸」を「ふるさと」に変えて歌われた。母は、毎年１月１７日前後にテレビで阪神淡路大震災の特集でこの歌が始まると毎回チャンネルを変えたり、どこか違う部屋に行ったりする。東日本大震災の時も被災地の子たちが歌っているのを目にしたとき涙を流していたのを見たことがある。母は「しあわせ運べるように」を聞くと当時兄や姉が歌っていたのを思い出して涙がでてくるそうだ。『あの歌、お兄ちゃんたち、歌ってたんよ。ずーっと歌ってた。』と言うときの母の顔はいつも悲しそうだった。その意味を今回のインタビューできちんと知って考えた時、わたしは泣きそうになった。もしかしたら母のように「しあわせ運べるように」が聞けない人もいるかもしれない。母以上に子どもに対して申し訳なさと後悔が残っている人がいるかもしれないと思ったとき、自分には何ができるだろうと疑問に思った。環境防災科として過去・現在・未来の震災について学んでいるけれど、兵庫県内外の子どもたちに伝えるとき、私は本当にこういった人たちの思いを伝えることができるのだろうか。

環境防災科のとある先輩と福島の子どもたちの特集を見ているとき「記憶に震災が残っている世代・記憶には残っていないが震災時産まれている、もしくはおなかの中にいて震災を自分と関係があると感じることができる世代・知らない世代」というような話があった。「ああそっか。兄弟で私だけや、しらんの。知らない世代なん私だけなんや」とつぶやくと母が『あんたたちみたいに知らないのに学ぼうと必死な子らが一番すごいし必要なんよ』と言ってくれた。私はこの言葉を聞いて阪神・淡路大震災や東日本大震災のような大地震の教訓を後世に伝えていくとき、自分たちのように“知らない世代”が学んでいかなければならないと強く感じた。

来年の３月、東日本大震災から５年という節目を迎える。もう５年、まだ５年だ。その年月が阪神淡路大震災のように２０年を迎えた時、“知らない世代”はもっと増える。今、震災当時中学生だった子たちが高校生・大学生の年齢になっている。産まれていなかった子どもたちはいずれ小学校になり、３月１１日の付近になると震災のテレビをなんとなく目にしたり、何かを思ったりする。こういった子どもたちに震災について伝えていくとき、私たちの活動がなにか小さなことでもきっかけになったりするのだろうか。そう考えると今私たちがしていることはとても重要だし、必要なことなのだと感じる。何か小さなきっかけでもいい、つくれればもっと多くの人が震災や防災について知り、災害時に悲しくなるような人が少なくなるかもしれないと思った。

母の話を聞き、家族や親せき、近所の人たちの大切さについて改めて思い知らされた。兄や姉たちが幼いながらに見せた母や自分の弟・妹への優しさ、叔母の家族への思いのあらわれ、近所の人たちによる助け合い。それぞれが私にとってなぜかキラキラして見えた。震災はとても悲しいもので苦しいものだと思う。けれど、私がキラキラと感じたように本当にうれしいことや素敵なこともあると思う。私は“震災は悲しく、苦しい”ばかりではなくてもっとたくさんのいいことにも目を向けて伝えていきたいと思った。そして、これから語り継いでいく際に自分なりの言葉で、震災での多くのキラキラを伝えていきたい。

私はこの間ある人から「無力。そう気づいて考えていること自体、何か動いた証で、まず無意味じゃない。そして、無力なんかじゃないんだよ」と言ってもらった。私の心がなぜかすっと軽くなったような気がした。「無意味じゃない」この言葉にひっかかった。“自分のやっていることは無意味じゃなくて、何かにつながるかもしれない”そう思えた。母も何かを思って私に話しをしてくれたのだろうか。母が話してくれたことも、体験も、すべて無意味じゃなく意味があるとしたら、私には伝えていく責任がある。そして、顔も知らない弟や妹を守っていた兄や姉たちのように、後世の人たちを守っていけるような教訓を残すことが大切である。ひどい貧血と切迫早産、震災が重なったにも関わらず母は生きて兄や姉を産み、私を産んでくれた。自分の命はあの時多くの奇跡が重なった末にあるものだと強く感じる。この奇跡を無駄にしない為にもそして後世のためにも、自分のこれからを意味のあるものにしていきたい。

語り継ぐ

平井　祐衣

１　はじめに

私は、阪神・淡路大震災を体験していない。しかし、「経験していない」という言葉で終わらせるのではなく、今まで聞いてきた被災者の方の生の声、親から聞いた震災当時の体験、外部講師で来てくださった方のお話を多くの人に聞いてもらい風化させないことが、今私たちにできること、また、しなければならないことだと思う。

２　母の被災体験

（１）震災直後

阪神・淡路大震災が発生する１０日前、私の兄が生まれた。母は当時、長田区の御蔵通にある実家に母の父、母、姉、そして生後１０日の兄といた。そして１月１７日午前５時４６分、あの阪神・淡路大震災が神戸を襲った。激しい揺れでガラスは飛び散り、家の中はぐちゃぐちゃになった。電気は消え、外はまだ暗かったため母は手探りで兄を探したそうだ。その日、偶然にもベビーベッドの柵を外していたため兄は毛布にくるまれて床に転がり落ち、奇跡的に無傷だった。ベッドの上には飛び散ったガラスが散乱していた。もし、あの時ベッドの柵を外していなかったら、兄は傷だらけになっていたかもしれない。

（２）避難

地震の揺れはおさまり、母と家族は家を飛び出した。周囲には、一階が潰れてしまっていて二階部分しかない家が多くあり、母はまだ幼い兄を抱いて倒壊している家の屋根を歩いたそうだ。空は真っ赤な炎と真っ黒な煙で覆われており、消防車や救急車のサイレンが鳴り響いていた。その後、垂水から迎えに来た父と合流し、父方の実家へ向かった。

３　父の被災体験

（１）震災直後

震災当日は、神戸市垂水区学が丘の店舗の二階で、一人で寝ていた。地響きとともにグラグラと大きな横揺れで目が覚め、暗闇と突然の恐怖で「ワ――ッ」と叫んで身動きが取れずにいた。今までは、地震を感じたらすぐに外へ避難すると思っていたので、揺れがおさまり外に人影があるか様子を見ようとカーテンを開けると、鍵をかけていない窓は揺れで開いた状態だった。そして、何もなかった様に静まり返って、人影もなく不気味だった。３０分ぐらいすると毛布を羽織って道路を歩く数人の話し声が聞こえてきたので少し落ち着きを取り戻した。台所では割れた食器が散乱していて、電気もガスも水道も止まっていた。当時は、台風や雷雨などで停電することが度々だったので、ミニ懐中電灯とカード型ラジオをいつも持ち歩いていた。そのおかげで、地震の状況を徐々に把握することができ、長田区の妻の実家近くに大きな被害が出ていることが分かった。

平成７年１月７日に長男が生まれて、須磨区の産婦人科医院から長田区の妻の実家に移ったばかりの妻と子どもが心配になり、何度も電話をかけたが繋がらなかった。

明るくなるのを待って、店舗の様子を見ると多少歪んでいて、モルタル塗りの壁は所々ひび割れていたが、外壁を弾力のある塗装に塗り替えたばかりの為か大きな損傷はなかった。そして、店舗から１０分位の名谷町の実家に、ちょっとした四輪駆動ブームで災害の時に便利かも、と乗っていた車を取りに行った。実家は、門柱や灯ろうが崩れただけで、水道、プロパンガス、電気も大丈夫だった。場所により、被害がだいぶ違うようなので、まず、軽油を給油するために山側の道を選んで明石方面へと車を走らせると、見た感じではほとんど被害はなく、普通に給油することができた。それから、ラジオの情報で菅原市場から須磨の間にかけて渋滞で車が動かない状況が分かったので、山麓バイパス経由で西市民病院の近くの御蔵通の実家へ向かった。隆起や陥没道をほとんど渋滞することなく行くことが出来た。山麓バイパスから見た長田の町は、いたるところから黒煙が上がっていた。妻の実家に近づくにつれ、町の様子は変わっていった。電柱は折れ曲がり、倒壊している家を見ながら実家

に向かっている時は恐ろしく、絶望感がこみ上げてきた。
角を曲がると、倒壊した隣の家の屋根にのしかかりながら辛うじて倒壊を免れた家の様子を見て一安心した。この家は改装補強工事をしていたため倒壊を免れた。しかし、家には誰もいなかったので、近くの西市民病院に探しに行くと、病院の中は怪我人であふれていて、トイレも使える状況ではなく、寒い中外にいた所に会うことができ、被害が少なかった名谷町の実家に家族を連れて帰ることができた。
また、毎週月水金曜日の６時半頃に東灘あたりの高速道路を通って仕入れに行っているが、７日に出産があったため、年が明けて初めて震災の前日に仕入れに行って、知人と食事をしている時、夕方に小さな地震があった。それから、妻の実家に様子を見に行くと、赤ちゃんのための加湿に石油ストーブを使っていたので、「大きな地震が来たら火事になるから危ないね」と話をしたところ、すぐにやめたおかげで火事にならなくて済んだ。

４　話を聞いて

この「語り継ぐ」というものがなければ、こんなに詳しく当時のことを知る機会はなかっただろう。家族が助かったのも、たくさんの偶然と、「備え」が重なっていたからだと感じることができた。そして、この話をここで終わらせてしまうのではなく、しっかりと伝えていくことが震災を体験していない私たちの役目だと思った。

５　しあわせ運べるように

私は、「しあわせ運べるように」という曲を小学校の時に聞いた。毎年１月１７日が近づいてくると音楽の授業でこの曲を歌う。手話も一緒に教えてもらったことを今でも少し覚えている。当時の音楽の先生が「しあわせ運べるように」を作詞・作曲した臼井真さんと知り合いだったそうだ。臼井真さんは震災から約２週間後、変わり果てた神戸の姿を目にし、１０分という短い時間で曲を作り上げたという話を聞いた時は驚いたのを覚えている。この曲は、避難所でも歌われ、たくさんの人に勇気を与えたそうだ。２０年たった今でも、小学校や追悼式典などで大切に歌い繋がれている。また、海外でも歌われていて、２０１１年の東日本大震災では神戸から東北にこの歌が届けられた。同じ被災地として、助け合う気持ちや歌での繋がりなど、音楽の大切さを知ることができた。

６　語り継ぐこと

この、「語り継ぐ」を書くにあたって、私は両親から話を聞くことにした。私の両親は、阪神・淡路大震災を体験している。実際に体験しているからこそ知っている当時の状況など、詳しく聞くことができた。私が母に阪神・淡路大震災の話を聞いたのは小学校の時だ。最初に書いた母の被災体験も、この時になんとなく聞いていた。そして、当時のことを語ってくれた母は、今はもういない。この体験談を知っているのは私と父だけだ。実際、阪神・淡路大震災を体験した人は徐々に減ってきている。風化させないためにも、「阪神・淡路大震災」をどう残していくのかが重要になってくるのではないかと思った。

（１）ルミナリエ

一番印象に残るのはルミナリエだ。しかし、ルミナリエがどういうきっかけで作られたとか、何のためにあるのかとかまだ知らない子どもたちも少なくないのではないかと思う。実際、私も昔は光っていて綺麗だなというぐらいにしか思っていなかった。私はまだルミナリエを見に行ったことはないが、テレビや新聞を見ていると毎年たくさんの人が行っているのが分かる。今後、何十年経ってもこの行事は続いていくと思う。そして、私自身も今年から行こうと改めて思った。

（２）１．１７追悼式

私が環境防災科に入ってから行くようになったのが、１．１７のメモリアル行事だ。三宮の東遊園地で地震が起きた５時４６分に黙祷をする。その時に時刻を知らせる時計の音が今でも印象に残っている。初めて行った時、まだ空も暗くて寒かった。震災当時は、なにが起きたのかも分からず、薄暗く寒い中、恐怖と不安でいっぱいだったと思う。１．１７という数字に並べられた竹の中にはロウソクが暖かい光を放っていて、そのロウソクに手を合わせる人、涙を流す人などそれぞれの想いがたく

さんあり、テレビで見るのとは全然違う感じがした。去年はインフルエンザにかかってしまい、行くことができなかったが、これから高校を卒業しても毎年行こうと思う。多くの犠牲者の為にも、私たちの為にも、この震災を風化させてはならない。そして語り継いでいかなければならない。これは多くの人が震災のことを考える一年に一度の大切な行事だと思う。

７　東日本大震災について思うこと

２０１１年３月１１日に東日本大震災が発生した。テレビでは、すべてのチャンネルが地震情報で、ＣＭも同じものばかりが流れていたのを覚えている。初めは、何が起きているのかが分からず、恐怖と不安でいっぱいだったが、津波が町を容赦なしに呑み込んでいく映像を目にし、ことの重大さが分かった。けれど同じ日本で起きていることとは思えなかった。震災から４年が経ったが、被災地の復旧復興はまだ終わっていない。

２年生の夏に、東北の被災地訪問があったが、私は部活動があり、行くことができなかった。しかし現地に行くことがすべてではない。たとえ現地に行けなかったとしても、募金など、自分にもできることはたくさんあることに気付いた。私は、東日本大震災の募金活動で初めて募金を呼びかける側の立場になった。たくさんの人が募金に協力してくださり、「頑張ってね」「お疲れさま」など、暖かい声もかけていただいた。大勢の方が東北の被災地のことを想っているのだと身を持って感じることができた。

８　環境防災科に入って

環境防災科という環境で今までたくさんの経験をさせてもらった。なぜ、環境防災科という防災を専門に学ぶ学科を目指そうと思ったのか、それは私が中学二年生の時に母が亡くなったのがきっかけだった。もちろん、私や残された家族にとっての悲しみは考えられないくらい大きかったが、先生や友達など、周囲の人の支えがあったからこそ今の自分があるのだと思う。同じように、大切な人を亡くし、心に傷がある人がたくさんいる。そういう人たちに寄り添っていきたいという漠然とした思いがあった。環境防災科に入ってからも、誰かの役に立ちたいという想いは変わらなかったが、さまざまなことを経験しているうちに、はっきりとした目標を見つけることができた。

私は将来、栄養士という職業に就きたいと思っている。それは、がんや糖尿病などの生活習慣病で、亡くなる人や苦しむ人を少しでも減らしたいと思うようになったからだ。生活習慣病は、突然起こる病気ではなく日々の不規則な生活の積み重ねによって起こる。こういった防ぐことのできる病気で苦しむ人たちが増えないように食の面から予防する方法を学び、多くの人の健康をサポートしていきたいと思った。また、食を通して子どもたちに命の大切さを理解してもらいたい。

それに、もし大きな災害が起きたら避難所には多くの人が集まる。避難所では支援物資の菓子パンやおにぎりなどが配られるが、もちろん十分な栄養は摂れていない。そのため、体調を崩してしまう人も多い。また、ビタミンやタンパク質などが不足し、イライラなどの精神面での負担も大きくなっていく。避難所ではたくさんの人がプライバシーもあまりない状態で生活している。その中で、初めは譲り合いの気持ちを持つ人も多いが、段々と自分中心になって喧嘩などが起こってしまうことを知り、それは、食料が少なく栄養が足りていないことも一つの原因だと気づくことができた。避難所には、高齢者、乳幼児、障がい者、外国人などのさまざまな災害時要援護者と言われる人たちがいる。例えば、アレルギーをもっている人や高齢者は、避難所に食べられるものがあるとは限らない、いつ発生するか分からない災害に一人一人が常日頃から備えていかなければならないと思う。

９　未来の大震災に備えるための提言

（１）南海トラフ巨大地震

今後３０年以内に起こる可能性が高いと言われている南海トラフ巨大地震。被害を少しでも減らすために私たちができることは何かを考えていかなければならない。３０年以内と言っても、今日かもしれないし３０年より後かもしれない。私たちが今生きている社会では、危機感をつのらせている専門家もいれば、「まだ来ないよ」と何の対策もしていない人など、さまざまな人がいる。実際に、若い世代は震災の恐ろしさをまだ知らないし、想像もできなと思う。しかし、そういう考えでは、い

ざ地震がきたときに大きな被害を出してしまう。現在、発表されている兵庫県の最悪の想定では、死者が２万９０９７人と、３万人近い人が亡くなるとされている。この数字を見たとき、こんなことが本当に私の住んでいるところで起きてしまうのかと思うと怖くなった。しかし、過去の経験から言うとこの大地震はいつか起きてしまうということは分かっている。阪神・淡路大震災から学んだことは「備える」ことの大切さだ。私たちが今できることをしておけば、被害を少しでも減らすことができる。

備えるといっても何をどうしたらいいのか分からない人もたくさんいると思うが、ハード面、ソフト面でもさまざまな方法があるということを多くの人に知ってもらいたい。

（２）耐震化

住宅の耐震化にしても、莫大な費用と時間がかかり簡単にできるものではない。しかし、１９８１年に新しい耐震基準が導入されているので、自分の家がいつ建てられたのか知っておく必要がある。他にも、家が建っているすぐそばが山だったり、埋め立て地であったりする場合は、地震が発生したときに土砂崩れや液状化になりやすい。家を建てるときにはそういうことも考えていかなければならない。

また、警報や避難勧告、避難指示が発表された場合には適切な判断と行動ができなければ命取りになる。普段から避難経路を確認し、地域との繋がりを大切にしてほしいと思う。

（３）食の備え

食糧の備蓄方法については、「ローリングストック法」というものがある。これは、「備える」→「食べる」→「買い足す」を繰り返し、食品を循環させながら無駄なく備蓄する方法だ。カンパンのように、万が一の時にしか食べない非常食をずっと置いておくのではなく、スーパーに売っている缶詰やレトルト食品など、普段から食べられる食品を買っておき、食べたらまた買い足す。この方法は、わざわざ非常食を買う必要が無く、いつの間にか賞味期限が切れていたということがなくなるなど、誰もが気軽に取り組める。その他にも、食品だけではなくカセットボンベ・乾電池・日用品など、生活に必要な消耗品も備蓄しておくと良い。最近ではテレビなどでも放送されているが、この方法を知っている人は多いとはいえない。どうすれば、ローリングストック法を取り入れる家庭が増えていくのだろうか。まずは、家族や友達など身近な人から広めていくことが第一歩だと思った。

１０　終わりに

この、「語り継ぐ」を書くことによって、私の知らなかったこともたくさん知ることができた。そして、環境防災科という恵まれた環境で防災を学ばせてもらっていることに感謝し、今まで経験したことを活かして、もしもの時に率先して行動できる人間になりたいと強く思った。

語り継ぐ

平田　駿也

１　はじめに

１９９５年１月１７日午前５時４６分、阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）が発生。私は当時まだ生まれていなかった。父はその時大分の大学に通っていたので地震には遭っていない。実際に経験したその当時のことを母から聞いた話を以下の文章にまとめた。

２　午前５時４６分

母は、神戸市営地下鉄板宿駅から少し北に行ったところの板宿小学校の横に祖父と祖母、叔父２人の５人家族で住んでいた。祖父と祖母は一階で寝ており、母と叔父の２人は二階で寝ていた。あたりはまだ真っ暗で静かな夜明けに地震は起こった。「ドーン！」という地面を突き上げるかのような初めの揺れで、祖父母は飛び起きた。それと同時に、母が飛び起き、いつもは起こしてもなかなか起きてこない叔父２人があわてて階段を駆け降りてきた。母の第一声は、「とうとう怪獣がきてもた。」だった。それだけ大きな揺れと音だったのだろう。阪神・淡路大震災は、激しい縦揺れだったので身動きが取れずベッドにつかまるのがやっとだった。何が起こっているのかもわからなかった。

３　地震の起こった日

板宿は地震の被害がとても大きくライフラインの復旧もとても遅かった。さらにそれに加えるように、板宿から長田にかけてとてもひどかったのが火事だ。母の家の周りも大火事であたりが真っ赤に染まり、地獄絵図のように火の海が迫ってくるようだったと話していた。隣に住んでいたおばあさんとおじいさんの家も燃え、家の中からは「助けてくれ、熱い！」と叫ぶ声がずっとしていた。助けに行きたくてもドアが開かず、自分の部屋から出られなかったと母は話す。後から聞けば、近所の人たちが協力して二人を助け出せたらしい。家は全焼で、間一髪のところだったそうだ。火の手は母の家の横で止まっていて、それも運が良かったと言っていた。あたりが火事なので早く消火活動をしなければならない。しかし、災害前で区画整理も行われておらず緊急車両の入れる十分な道が確保されていなかった。「早く火を消してくれ！」「まだ中に人がおる！」など、あちらこちらから声が聞こえるのだが、水の供給も遅く消火活動ができなかった。近くの小学校のプールから水を引いて火を消し、時間がかかってしまったから火事の被害も大きくなってしまった。水もガスも電気も途絶えてしまい、何もできなくなってしまった。中でも一番困ったことは水が出ないことだった。二階の水道管が破裂してしまった。やっとの思いで元栓を閉めて水は止まったが、水浸しになって洪水になってしまったらしい。今でも祖父母の家の天井を一階から見るとその時の水のシミが残っていた。水がなければトイレも流せず、お風呂にも入れない。冬だったため、とても寒かったそうだが夏だと絶対に衛生面でとても危険で、感染症も引き起こしてしまっていたかもしれない。

落ち着く暇もなく、家に一本の電話がかかってきた。（一瞬だけ電話がつながった。）病院からだった。その当時母は少し離れた病院で受付をしていた。「早く病院に来てくれ！大変なんや！」とその電話の必死な声は今でも覚えているという。原付に乗り病院に向かったのだが揺れや火事によって倒された家が道をふさいでしまっていた。それによって渋滞が起き、思うように進まなかったらしい。いつもの倍ぐらいの時間をかけて病院に着くや否や悲惨な状態だった。たくさんの患者が次々にその病院に運ばれてきて、対応が追いつかなかった。

４　やっと復旧

ようやくライフラインの復旧も完了し、生活ができるようになった。すべてのライフラインが復旧したのは１ヶ月後のことだった。電気は２、３日で復旧し、ガスはボンベだったので１週間くらいで復旧した。しかし、水の復旧には時間がかかった。やはり、水道管が破裂したのが大きかった。水道管を直してもらわないと水が回ってこなかった。あちこちの家の水道管が破裂し、業者の手がいっぱいになり母の家は最後のほうになってしまったらしい。１ヶ月間という期間、水がない生活はとても

厳しかった。水がないと、生きることが出来ないので、家族全員で、各自ペットボトルやバケツなどを持ち、給水車の行列に並んだ。やっとの思いで手に入れた貴重な水をどのようにして、いかに効果的に使うか、みんなで何度も話し合ったという。

５　母の話を聞いて

母の話を聞いていると、やはり一番大切なものは水だと改めて知ることができた。自分たちが、普段何気なく使っている水が震災の時にはとても貴重になり、大きな存在となる。私たちが普段、何も気にしないで水を使っているからこそ、災害時の大切さがよくわかったという話を聞き、日ごろから節水を心がけたり、災害時に備えて、水を蓄えていったりしたいと思う。母の話を聞いていると、実際に体験はしていないが、水というキーワードが何度も出てきたので、これからの生活を見直すこともできた。

母は本当に災害でつらい思いをした。病院に勤めていたため、何百ものご遺体を見たそうだ。遺族の方が必死になって家族の身元を捜し、やっと見つけたご遺体の前で言葉をなくし泣き叫ぶ人も何人も見た母は、生きている自分が本当に情けなく、サバイバーズギルトを感じ、災害の１、２年後まではフラッシュバックに陥ってしまったそうだ。私は、母のように友人や知っている人をたくさん亡くし、昔から住んでいた自分の故郷を一瞬で消されてしまうような災害の被害をもう出したくないと思った。たった一つの出来事であんなにも多くの人々がつらい思いをした。私は、過去の災害を教訓にしたい。教材にするといえば失礼な言い方になるが、当時のよかったところや反省しなければいけないところを学び生かしていきたいと思う。

６　環境防災科に入って

私が環境防災科に入ろうと思ったのは、中学３年生の夏であった。部活動も引退し、あとは残りの中学生活と次の進路に悩む日々だった。普通の公立校に進学して、大学に通い、サラリーマンになって働けばいいかと思った時もあった。そんなある日に父から勧められたこの環境防災科。話を聞くまで、環境防災科についてなど一切知らなかった。また、防災というものもあまり知っておらず、小学校や中学校の時に震災の話を聞いたことがあったぐらいだった。父も防災関係のことはよく知らなかったみたいで、「お前が環境防災科で学んだことを教えてほしい。」と言われたのでこの学科に入ることを決めた。それまで震災とは全くつながりのなかった中学生が高校生になって震災と向き合い、防災・減災を学ぶとは思ってもみなかった。高校３年生になった今では、災害や防災についての知識がとても深まったり、災害を経験された方々との交流を経てのつながりだったり、様々なボランティアを通して学んだこと、これから自分がどのように考え、どのように行動しどう生きていくかがしっかりわかるようになれた。学んだ中で、１番大切と感じたものは「相手を思いやる気持ち」だ。どんな人にもそれぞれの思いやその人の考え方がある。一人一人への思いやる気持ちは大事だと思った。今この人がどのように考えているのか、何を思っているのかなど、考えながら人と接していると「相手を思いやる気持ち」が育つのではないかと思う。また環境防災科では、たくさんの外部講師の方々に来てもらい、講義を受けることができる。様々な職の方が来られるのでたくさんの知識をつけることができ、それによって興味がわいたり、自分の将来を考えたりできる。

いままで関わりのなかった防災について深く知れるのもよいことだ。知ったことを家族に発信することも増えた。これから起こる地震の備えや発生後のことなどをきっちりと話し合う場も作れるようにもなった。

７　語り継ぐ意味

冒頭でも述べたように私たちは１９９５年の阪神・淡路大震災の発生時にはまだ影も形もなかった世代だ。そんな世代の人がなぜ語り継がなければならないのか。それは、震災を風化させないためだ。今年は阪神・淡路大震災が発生してから２０年が経つ。２０年も経つと震災を経験した人の割合がとても減ってくる。語り継げる人がいなくなってしまう。防災・減災と向き合い一番身近な私たちが語り継いでいかなければならない。しかしなぜ語り継ぐことが必要なのだろう。それは、たくさんの人に震災のことを知ってもらうためだ。過去にあった災害やその災害によって出た影響、災害から学ぶ

反省点また、教訓もたくさんある。
私たちが語り継いでいかなければならないのは主に私たちの次の世代の子どもたちだ。過去にあった災害というのは､次の世代の安全につなげる教科書だと思う｡教材にするといえば失礼にあたるが、教訓を次の世代に伝えることで、１０年、１００年先の世代の暮らしの安全を今から作り上げていけるということになる。そして、語り継ぐことによって私たちの世代も災害と暮らしとの関わりをしっかりと知ることができて、これから起こりうる災害に対する備えや、防災に対する意識も高めていけるので、たくさんの方に災害を知ってもらい日本の国民全員で防災・減災について考えていき、これから起こりうる災害と向き合っていきたいと思う。
また、私は２０１１年に起こった東日本大震災の被災地を訪問させていただいた。そこで、今まで自分が体験したことがなかった災害の恐ろしさを、この目で実際に見たり、被災された方のお話を聞いたりでき貴重な体験をさせてもらった。訪問させていただいたことでたくさんの人に知ってもらいたいことや自分の地域に語り継いでいきたいことができた。

８　これから

これからの日本、世界を支えていかなければならないのは僕たちのような若い世代だ。今でも様々な災害はいたるところで起きている。地震や台風、豪雨による洪水被害などニュースを見ていると報道が絶えない。そのために今何が必要かを見極めることが大事になってくる。しかし、見極めるといっても何がどのくらい必要なのかどう備えればいいのかがわからない。そこで必要になるのが、過去の災害に向き合うことだ。過去に起こった災害から学ぶことが大事になってくるのである。過去に起こった災害なら情報も残っているだろうし、それぞれの災害時に必要なハード面とソフト面の備えをしっかり見極めることができる。そのために今一番必要になってくるのが、知識だ。日ごろから災害と向き合っていかなければならない。
私がなりたいと思っているのは理学療法士だ。理学療法とは、一般的に考えられている加齢・事故などによる身体の機能障がいからの回復を目的としたトレーニングだけではなく、脳卒中からくる麻痺、子どもの運動能力の発達の遅れ、循環器・呼吸器・内科・難病疾患等の身体的な障がいがある人に対して、医師の指示で基本的な体の動作能力の回復を図ることを目的に、治療体操や、その他の運動療法を行わせ、また、電気による刺激、水、マッサージなどの物理的手段を加えるものである。私が目を付けたのが〝災害後″である。災害前の備えは各々で備えたりすることができる。だが、災害が起こってからの復旧には専門的な力がいる。その中でも人の回復をしてあげるのが理学療法だ。理学療法といえば、体の面だけだと思われがちだがそうではない。心のケアも含めて回復させていく。心身ともに回復を図れたらよいと考えている。また、たくさんの患者さんとコミュニケーションをとることで情報を得ることもできるし、発信することもできる。共有できる空間を作ることも心のケアのひとつだと思う。理学療法は、体のケアや心のケアだけでないと思う。人間としての権利や、人間らしく生きられる尊重を回復することも仕事だと思う。そうして災害時に障がいのある方や、被災された方々の社会復帰に専門的に手をさしのべたいと思っている。

９　今自分がすべきこと

私たちの世代がしなければならないのは、知識をつけることだと思う。この世界には、さまざまな職種があり、それぞれの役割がある。しかし、どの職についても防災につなげることが出来ると思っている。だが、防災につなげられるといってもそんなに簡単なものではない。防災につなげるためには、災害のことを知っていないといけないと思う。たとえば、過去にあった災害から学ぶこともあるし、時事のニュースでも災害に関連したものもある。災害から教訓を得るのだ。
また、教えてもらうことも必要になってくると思う。災害を実際に体験している人が少なくなってきている時代で、過去と未来をつなぐパイプ役の私たちの世代は災害にあった人の話や反省しなければいけないこと､それに対してよかったことなどを聞き､次の世代につなげていかなければならない。今後起こりうる激甚災害にも負けない、成長した日本を作り上げていきたいと思う。そのためには、国民一人ひとりが災害について関心を持ち、知識を兼ね備え、災害に備えておくことが大事だ。先人たちに見られても恥ずかしくないような生き方をしたいと思う。

語り継ぐ

福田　智都

１　はじめに

私が生まれる２年半以上前に、阪神・淡路大震災は発生した。しかし私は震災の当時神戸がどのような状態であったのかまだまだ知らない。ましてや、自分の身近な人がどのような状況であったかも全く知らなかった。この機会により父から当時のことを聞くことができた。父は垂水に住んでおり、西区玉津の運送会社に勤めていて営業をしていた。以下の文は父が実際に震災を体験したことをまとめた被災体験である。

２　震災当時

（１）当時の家族構成

当時はまだ父と母は出会っておらず、父は垂水の団地で、家族(私の祖父母、妹、弟)とはとなりの棟で一人暮らしをしていて、その時は神戸に大きい地震が来るなんて考えてもいなかった。

（２）地震直前

父の友人が大阪から仕事の相談で来ており、夜から朝方まで仕事のビデオを見ながら話をしていた。父親が出張のため朝５時過ぎに母親が駅に送っていくので友人も乗せていってもらった。このまま寝ると仕事に遅刻するかもと思い、家族の住んでいる方の家に行って仮眠することにした。

（３）地震発生

１３歳離れた弟の横で寝ようと目を閉じた瞬間に下からドーンと突き上げる感じで大きく横に揺れ始めた。父はすぐに地震と気づきすぐさま隣で寝ていた弟の上に覆いかぶさり、地震により目を覚ました妹を呼び寄せ二人を毛布で包むように抱き、揺れがおさまるのを待った。台所から食器が落ちて割れる音がしていた。祖母は頭が良かったらしくタンスなどの家具と家具の間、家具と壁の間に５センチほどの隙間を空けていて地震の揺れで家具が動いたものの一つも倒れてこなかったらしい。祖母にも防災への意識があったのだと知って正直驚いた。

（４）地震直後

揺れがおさまると、外から男性の叫ぶ声がうっすらと聞こえ、窓を開けて何を叫んでいるのかを確認した。となりの棟から「ガスの元栓を閉めろー」と何度も叫ぶ声が聞こえ、慌てて真っ暗の台所へ行き元栓を閉めた。その時は、運が良く割れた食器を踏まなかったらしいがたいへん危ないことだと思った。しばらくして母親が帰ってきた。父と友人を駅に送り届けたあとの帰り道で地震に遭遇したらしく、父親も友人も電車の中だろうとのことだった。少し明るくなり、余震も続くので、一人ずつ毛布を持ち、家の外に４人で出た。団地の１階と道路をつなぐ階段は崩壊していて足の踏み場などなくジャンプして外に出た。外には沢山の人が出て皆の無事の確認をしていた。父親も友人も当時携帯電話を持っていなかったために連絡をつけることができず、携帯を持っている他の友人などに安否確認の電話をかけたが、回線がパンクし誰にも繋がらなかった。安否確認ができない不安のせいか時間の進みがすごく遅かったように感じた。余震も少しおさまったので、家に戻り割れた食器などを片付けている最中に電気が復旧した。明かりが確保出来ると思いほっとした。徐々に携帯も繋がり、友人らとも連絡をとることができた。幸い大怪我した友人もいなかった。

３　震災後の生活

父親と出た大阪の友人は途中で電車が止まり、父親は歩いて会社の様子を見に兵庫まで行き、友人は土地勘がなかったが歩いて何とか戻ってきた。それから２日の間そのままこちらに滞在した。水道、ガスの復旧には数日かかり、勤め先の西区玉津の会社で仕事帰りに大きなゴミバケツに水を毎日汲んで、風呂場に貯めて生活をした。お風呂は、北区の祖母の家がガスの復旧が早かったので、３日に一度程度、通常２０分で行くところを１時間かけてお風呂を借りに行っていた。この生活があと何日続くのだろうと不安に思ったらしい。

４　父が行った行動

父が勤めていた会社では水が止まっていなかったので、当時の部長が KISSFM というラジオの生放送から水に困っているところに水を配達しませんかとの依頼を受け、自衛隊がまわっていない被害の多い地域にゴミバケツ十杯程の水を届けていたそうだ。自分も大変だというのに一般人の父が、ここまで人のために働いていたと知って衝撃を受けた。

５　父の話しまとめ

当時父は２０歳前半とたいへん若かった。父の話を聞いて私にも同じような行動ができるのかと、とても不安になったが、父も不安の中で立派な行動をとったと考えると私もできると思うようになった。地震が起きた時にまず自分の命を守り周りの人を守っていき最終的には人々の助けになれるようにすると心に決めた。そのためにも災害への意識や、知識を蓄えしっかり準備したいと考えている。

６　感想

（１） 環境防災科に入った理由

２０１１年３月１１日に東日本大震災が起きた。当時テレビのニュースは被害状況を伝えるようなものばかりでニュースを見るたびに心が悲しくなっていた。その時にはまだ、環境防災科の存在を知らなかった。私が中学２年生の時、当時の環境防災科の生徒が中学に宮城の今の状況を伝えに来てくれた。そこで初めて環境防災科の存在を知った。話を聞くまでは授業がなくなってラッキーとしか思っていなかったが、話を聞いて、年も３つくらいしか変わらない高校生の人達が被災地に行って泥かきなどを行っている姿を見てかっこいいと思い感動したのを覚えている。それから時が経ち中学３年になり進路を決める時期になった。進路をどうすればいいか学年主任の先生に相談に乗ってもらっていると、「環防とかどうや？」と言ってこの環境防災科を勧めてくれた。その時から環境防災科が気になるようになり、人の助けができる仕事をしたいと考えていた私は親とも相談し環境防災科に入学し消防士を目指そうと決めた。

（２）環境防災科に入って

環境防災科に入って阪神・淡路大震災や東日本大震災について学校の授業だけでなく様々な分野で防災に携わっている方々からも学んできた。環境防災科に所属していなければ知ることができなかったと思う話が沢山あった。しかしまだまだ自分ひとりではわからないこともたくさんある。そのわからないことを先生の手助けやクラスの仲間との協力によって、理解し知識を埋めることができる環境防災科はとても素晴らしいところだと思う。また、ボランティア活動に参加させてもらう機会がたくさん出来た。私はまだ少しのボランティア活動にしか参加していないが、たくさんの知識を得た。小学校などで行われる夏まつりの手伝いでは地域の人々と実際にふれあい、コミュニケーションをとり、初めて会う人とでもすぐに打ち解け合えるようになった。兵庫県規模で行われる総合防災訓練では、消防士や自衛隊など災害が起きた時に活躍する分野の方や、普段の生活に必要なライフラインの職に就いている方も沢山こられておりとても多くの話を聞くことができた。垂水消防で３日間行われた消防体験では、基本中の基本である規律訓練を最初に体験した。規律訓練が一番しんどい訓練だと感じた。また、一番大事な訓練だとも感じた。その他の訓練、放水、救助などもとても大変だったが、大変だった分やりがいを感じた。それとは別に学校でも取り入れられている人命救助の方法を体験した。火災探知機の点検も行った。人の命を助けることは大事であるが、たくさんの人の命を助けるための準備が一番大事と知った。最終日にこれらを踏まえて総合訓練を行った。一緒に訓練している仲間と垂水消防で学んだ集大成を出すことができとても充実した３日間になった。また、消防体験を通して必ず消防士になろうと決めた。この３日間で学んだ基本の規律やしんどいことを積極的にする姿勢、何かを成し遂げた時に感じるやりがいを忘れずにこれからの人生を歩んでいきたいと感じた。

（３）父の話を聞いて

今回このような機会を頂いて初めて父から震災当時のことを詳しく聞くことができた。今までに何度か聞く機会があったがその時に聞いていなかった話がほとんどで驚いた。話を聞いていると、父の身近な人に亡くなった方はいなかったが、辛い経験を思い出させてしまった。父の表情は普段とは少し違って悲しそうに見えた。その時に私は心のケアなどを学んでいる環境防災科の人間としてまだま

だだと感じた。しかし父はとても真剣に語ってくれたので私も真剣に聞きとてもいい時間になった。話の終わりに父は「頑張って消防士になれよ。」と言ってくれた。またこのような機会があればまた同じ話でもいいから聞きたいと感じた。

（４）これから

僕の将来の夢は消防士になることだ。その消防士になるために、なったあとにも必要になる勉学、コミュニケーション力やリーダーシップ、フレンドシップ、心のケア、災害の知識をこの環境防災科でまだまだ学んでいきたい。またボランティア活動にも積極的に参加し、地域の人ともふれあい、そこから得られる自分にとって大切なことを自分の言葉に変え、震災でのできごととともに後世に伝えていきたいと思う。

また、地域のリーダーにもなりたいと考えている。そうなるためにはやはり上記の事が必要になると考える。

これらの夢や目標に近づけるように、まずは小さな一歩としてクラスで何かをするとなった時にリーダーとなってクラスのみんなを引っ張っていきたいと思う。

語り継ぐ

藤田　涼太郎

１　はじめに

私は、阪神・淡路大震災が起きた時まだ生まれていなかった。だから震災当時の神戸を生で見ていない。当時の本当の姿は、どれだけ勉強しても、たくさんの写真を見ても、イメージでしかない。だが、私たち震災を経験していない世代が語り継ぐことをやめてしまったら、阪神・淡路大震災は風化してしまう。風化させないために、父、母の体験談を語り継ぎたいと思う。

２　父の体験

（１）震災１週間前

父は、職場の研修を受けるため、尼崎市内の職場の寮に泊まっていた。

（２）震災当日

地震が起きた時、父は寝ていた。すさまじい揺れと「ゴオー」という音で目が覚めた。寝ている部屋が５階だったため、建物が倒壊するのではないかと思うくらい揺れていた。揺れている間は恐怖で全く動けなかった。揺れがおさまれば、すぐに母のもとに行きたかったが、父の仕事上それができなかった。父は、日が昇るとすぐに救助活動にあたった。建物の瓦礫をかき分け、救助する。その活動は日が沈むまで続いた。活動を終えた父が、母と連絡をとれたのは二日後のことだ。当時は、携帯電話が普及していなかったため、公衆電話で連絡をとった。母の声を聞いたとき、不安が安心になり、自然と涙が出たそうだ。

（３）震災二日目

夜は、余震がすごくて一睡もできなかった。前日よりも冷静に行動ができた。「冷静に」というのは、自分の周りの状況に気が回るようになったということだ。ほとんどの家が倒壊し、電柱も倒れ、道路は割れて、今まで生活していた場所とは思えない状況に父は絶望した。だが、何もしないわけにもいかず、目が届く範囲で人を助けることにした。救助に行くとき、道路には家や電柱が倒れかかっていて、車は通れないから徒歩で行った。瓦礫を掘るときに、人が埋まっているかもしれないから道具は使えず、素手で掘っていた。素手での救助には限界があり、終わりが見えなかった。だが、一人でも多く救助するためにと、地域で団結し、一生懸命瓦礫を掘っている姿が印象的だったそうだ。

（４）震災三日目

朝日が昇る前に自宅に戻るために、寮を出た。自宅に戻って、すぐ家を出て自分が普段勤めている職場に向かった。職場に向かうとき、震災で電車が止まっていたため、西明石から芦屋まで歩いた。歩いているときは、辛かった。歩くのがしんどくて辛いのではなく、歩いていくと、どこを見ても変わり果てた姿になっていたこと、家の前で泣き崩れている人を見るのが辛かったそうだ。だが一方では、瓦礫をかき分け人を助け出そうとしている人々にも出会い、勇気をもらった。

職場につくと、地震の対応についての会議が繰り返されていた。父もそれに加わり、どうすればスムーズに救助活動が行われるかなどを必死に考えたそうだ。

（５）震災経験者として

「備えあれば憂いなし」という言葉がよく言われているが、万全に備えていれば何も心配することはないかと言われると、そうでもない。どれだけ万全な備えがあったとしても、被害は出てしまう。だが、備えても備えなくても同じというわけではない。普段から備えているからこそ、何か起こってしまった時に、被害を最小限に抑えることができる。被害を最小限にするための備えが大切だ。「備えあれば憂いなし」というより、「備えあれば憂い少なし」という方が、正しいような気もする。父は、この阪神・淡路大震災で得た教訓を生活、仕事、災害時に役立てたいと言った。

３　母の体験

（１）震災前日

西明石市内の三階建のマンションの三階に、父と二人で住んでいた。結婚して約一年半が経ってい

た。
母は会社員だったので、一月十七日もいつも通り電車に乗って会社に行く予定だった。結婚して以来、いつもと同じ夜だった。唯一違ったことは、父が出張でいなかったことだ。

（２）震災当日

激しい揺れと地鳴りで目が覚めた。本棚が倒れ、ガラスが割れた。電気がつかず真っ暗な中、一人で震えていたそうだ。揺れがおさまっても、外に出た方がいいのか家にいた方がいいのか、何をどうしたらいいのかわからず、余震が続く中、途方に暮れていた。

余震が落ち着いてきた頃、母はリビングに行った。すると、普段ない場所にテレビや家具があり、食器棚が倒れ、食器の破片が飛び散っていた。だが、寝室にあったスリッパを履いていたため、破片を踏んで、けがをすることはなかった。母は、「スリッパがあってよかった。」と言っていた。

そんな中、西宮市内に住む同僚から電話があった。西宮市でも激しい揺れがあったことを聞かされ、今起こっていることが、夢ではなく現実だと痛感させられた。この電話を最後に、電話は不通になった。ガス、電気、水道、普段当然のように使っていたものが使えなくなると、こんなにも不便なのかと思ったそうだ。

日が昇るころに、おじいちゃんとおばあちゃんが迎えに来てくれた。おじいちゃん、おばあちゃんの顔を見たとき、不安が少しなくなり、涙がでた。だが、一つ心配だったことは、父の安否だ。父との連絡が取れず、生きているかどうかもわからないままだった。父のもとに行きたいと思ったが、行く手段はなく、ただ心配することしかできなかった。もし父に何かあったらと考えると、震えが止まらなかった。

（３）震災二日目

不安と余震で、夜はあまり眠れなかった。朝起きて、初めにしたことは父への電話だ。だが、電話は繋がらなかった。いつになれば、電話が繋がるのか見当がつかなかった。時間が経つにつれ、父に対する心配が膨らんだ。

母は、水を確保するためにおじいちゃんとおばあちゃんと一緒に、近くの公園に向かった。水は重くて、60 代のおじいちゃんおばあちゃんと、女性の力では、一回に運べる量に限界があったため、何度も並んだ。できるだけ水を使わずに生活をすることは難しく、ストレスになった。だが、自分だけがこんな思いをしているのではないと思うと、我慢できたそうだ。

（４）震災三日目

朝起きたら、昨日の水運びで腕がパンパンだった。この日も父に電話をかけた。すると、電話が繋がり、父の声を聞くことができた。震災から三日目で、ようやく聞くことができた父の声に涙が出た。

父の心配もなくなり、落ち着いた頃に、一度自宅に戻った。自宅に近づくと、倒壊している家屋や、家の前で泣き崩れている人がいた。それを見た母は、胸が苦しくなったそうだ。家に入り、使えそうなものを探し、おじいちゃんの家に持って行った。いつもなら、三十分ほどで着く道のりも、このときは、二時間以上かかった。

（５）震災経験者として

今でも、地震があると阪神・淡路大震災のことを思い出し、震えが止まらなくなることがある。だが、あの阪神・淡路大震災の経験を無駄にはできない。失ったものはたくさんあるが、得たものも多い。失ったものばかり見るのではなく、成功体験を広めることも大切なことだ。例えば、寝室にスリッパがあったから、食器の破片を踏んでも怪我をしなかったということだ。こういった成功体験を集めれば、自然災害が起きた時の最大の防御になると思う。母は、「阪神・淡路大震災を風化させないためにも、震災を経験していない若い世代に阪神・淡路大震災のことを知ってもらい、そのことをまた次の世代に伝えて欲しい。そうすれば、被害を最小限に抑えることができるし、人の悲しみも減らすことができると思う。」と言っていた。

４　感想

（１）震災体験の話を聞いて

私は、今まで防災について学んできたけれど、身近な人に震災の体験談を聞いたことがなかった。

父と母が話してくれた話には大きな重みを感じた。その重みは、実際に体験した人だからこそ語られるものだと思う。父と母が体験したことを自分がもし体験したらと思うと、考えただけでも怖くなる。自分がもし職場にいて、自分の仕事としての活動と家に残している家族、どっちを優先すべきかと問われると正直どちらを選べばいいのかわからない。一般的には、仕事の優先だと思う。だが、今の自分だと家族が心配で、自分の仕事ではなく家族を優先すると思う。けれど父は、仕事を優先した。それができるのは、母を信頼していることと、強い心を持っているからだと思う。自分もそういった信頼関係を築きたいし、強い心を持ちたいと思っている。このように考えるきっかけを作ってくれた父と母には感謝している。

父と母の話を聞き思ったことが二つある。一つ目は、備えの大切さだ。震災当時、家では地震に備えて食器棚、テレビ、本棚といった物を固定していなかった。だから食器が割れて飛び散り、普段ない場所にテレビがあり、本棚が倒れるという結果になった。この光景を見た母は、家具を固定しておけばよかったと後悔したそうだ。過去にこういった経験をしていても、備えを怠る人が多い。それは、「まだ来ない」、「自分は大丈夫」などのように、自分には関係ないと思っているからだと思う。そのような気持ちでは、地震が起きた時にまた、同じことを繰り返してしまう。それを繰り返さないためには、防災に無関心の人たちに、備えの大切さを伝えていかなければならない。その方法はたくさんある。地域単位で防災についての講演を行うのもいいし、実際に災害を想定した避難訓練を行うのもいいし、どんな形でもいいと思う。大切なことは、防災に無関心な人の命を救うためにはどうすればいいか、それを考え、行動に移すことだ。その起こした行動によって、防災に興味を持ってくれれば、そこからほかの人にも広がっていく。こうして、全国に防災が広がっていけばいいと思った。

二つ目は、この阪神・淡路大震災を風化させないことだ。この阪神・淡路大震災で失ったものは大きい。命、笑顔、家などたくさんある。だが、失ったものばかりではない。失ったものばかり見ていても何も進まない。だからといって、忘れろというわけではない。でも私は、震災から得たものに目を向けていきたい。震災での成功体験、震災から得た教訓、こういったものを大切にし、次に起こると言われている南海・東南海地震に生かしたいと思っている。だが、それを自分の中に持っておくだけでは、何も変わらない。それを広げていくことが自分の役割だ。よく、「震災を経験していない者に何がわかる」と言われる。だが、震災を経験していない私たちだからこそ語れることがあると思う。まずは、震災を経験した方々の気持ちを理解することが大切だ。理解をせずに語ることは失礼だからだ。理解したことを何か形にすることも大切だと思う。そして、私たちだからこそできること、それをやっていくことが、生かされた者の使命だと思っている。

（２）自分の夢と防災

私の夢は、消防士になることだ。阪神・淡路大震災の時に、消防があまり活躍できなかったことを聞いた。その時は、何も知らなかったから、「消防なのになんで」と思っていた。だが、勉強していくと消防が活躍できなかった理由がわかった。倒壊した家屋、倒れている電信柱、とても消防車が通れるような道路の状態ではなかった。それらの原因を無くすことができれば、次、災害が起きた時に同じことを繰り返さなくて済むと思う。だが、具体的な案は何も浮かばない。何も浮かばないのは、自分に知識が足りないからだ。だから、これからもっと防災のことを勉強したいと思っている。防災の知識の引き出しが増えれば、何か災害が起きた時に、冷静に対応することができる。自分のことだけでなく、周りにまで目を向けられると思う。それができるようになれば、災害時の対応の仕方がわかってくる。そうすれば、救える命が増えると思っている。

自分の夢の消防士と、防災の関わりは深い。私は消防士として取り組みたいことが二つある。一つ目は、防災の知識をたくさんの人に身に付けてもらうことだ。どうやって身に付けてもらうのかと言われると、答えはわからない。むしろ答えはないと思う。どんなやり方であっても、それは正解だと思う。自分自身が語り部となって、防災に全く興味がない若者に話を聞いてもらう、これも一つの方法だと思っている。年の離れた方の話を聞くことも大切だけど、防災に興味のない人からすると、聞きづらい話になる。だから、私が実際に経験した方の話を聞いて、自分の言葉でわかりやすくまとめる。その話だと、防災に興味のない若者でも聞きやすいと思う。震災を経験していない世代の私たちが、語り継ぐことをやめてしまったら、阪神・淡路大震災は風化してしまう。だから私は、語り継いでいきたい。二つ目は、人の役に立つことをするということだ。人の役に立つために必要なことはた

くさんあるが、その中でも情報を持っておくことは、とても大切なことだと思う。情報が全くない中で活動しても、それは役に立つどころか迷惑をかけてしまうだけだ。今、相手側が何を求めているのか、相手の立場に立ち考えることが大切だ。相手のニーズがわかった上で活動すれば、迷惑をかけることはないし、人の役に立つこともできる。今の社会では、情報がすべてと言っても過言ではないと思う。情報をたくさん持っている人は得するし、持っていない人は損する。これは、災害時においても同じだ。災害の前後に情報が多ければ多いほど備え・対応ができるが、情報がなければ備えも対応もできない。災害時のためにも、普段からたくさんの情報を手に入れておきたいと思う。この「情報を持つ」ということができていれば、人の役に立つことができると思っている。

（３）環境防災科に入って

私が環境防災科に入った理由は、消防士になるため、なった後に大切なことを知り、そのことを伝えていくためだ。そのために私は今、防災について学んでいる。

入学当初、防災について全く知識がなかった。だから、被害をなくすことができると思っていたし、自分もそういう活動をしていこうと思っていた。だが、災害が起こった時に、被害をなくすことは不可能なことを知った。それを知ったと同時に「減災」という言葉に出会った。「防災」は災害を未然に防ぐという意味で、「減災」は災害の被害を減らすという意味だ。この言葉を知った時から、僕の中で災害に対する意識が変わった。被害を減らすために自分にできることは何かを考えていると、知らないことが多すぎて、何も浮かんでこなかった。だが、一年の時にたくさん外部講師の方が来てくださり、いろいろな話を聞くことができた。やはり、どの外部講師の方の話でも「減災」という言葉はキーワードになっていた。どうすれば「減災」を実現することができるのか、自分なりに考えてみた。自分の答えは、防災を広めることで「減災」が実現できるということだ。自分だけが防災の知識があっても、周りの人に知識がなければ、その人たちの命は助からない。だから、地域単位で防災のことを学ぶ機会を設けることが必要だと思う。そうすれば、災害が起こった時に自分一人で指示を出さなくても、一人ひとりがリーダーとなって、その場に応じた行動がとれる。この一人ひとりの意識の高さが被害を減らすことに繋がってくると思う。こういったことから、防災をするために備えることが、結果的に「減災」になると私は思っている。

私は、環境防災科での三年間を通して、災害、防災についてもっとたくさんのことを知りたいと思った。具体的には、地域防災や災害被害の裏側にある社会環境についてだ。この二つのことを軸に大学で研究したいと思っている。研究したことを広めていく活動もしたいと思っている。その活動の準備は、今までなら自分でしなくても環境防災科というレールを進んでいれば困ることはなかった。だが、これからは自分の足で進んで行かなければならない。小さい準備からすべてを自分の力でできるようになりたいと思っている。そして自分がレールを作り、たくさんの人に防災について考えて欲しい。

（４）これから

今回聞いた話をこれからの生活にいかしていきたいと思う。具体的に言えば、父が言っていた「備えあれば憂い少なし」ということだ。自分は今まで、準備すれば心配することはないと思っていた。だが、それは間違いだった。実際に阪神・淡路大震災でも、備えていなかったわけではないが、大きな被害が出た。それは、心に油断があったからだと思う。災害はその心の油断につけこんでくる。だから心の油断を作らないことが大切だ。この「備えあれば憂い少なし」というのは、災害時に言えることだけではない。自分がやっていること全てにおいて言えることだ。だから、これから何かするうえで、準備をしたからといって油断せずに、何事にも取り組んでいきたいと思っている。

私は、この「語り継ぐ」をこれからの未来の担い手となる人に読んでもらいたいと思っている。これからの未来を担っていくのは、自分の子どもの世代だ。その未来の担い手となる子どもたちが、生活しやすくて、災害に強い社会を作っていくことが大切だと思う。そして子どもから孫へ、という縦の関係だけでなく、子ども、孫が地域のリーダーとなり防災を広めていく、横の関係も大切にしてほしいと思っている。その横の関係を築くことで、災害に強い社会になっていくと思う。今、私たちは阪神・淡路大震災を実際に経験した方々から話を聞くことができる。だが、いつかはそれができなくなる時がくる。だから、私たちが残す「語り継ぐ」を読んで、雰囲気だけでも阪神・淡路大震災について知ってもらいたい。そして、この「語り継ぐ」を読んで思ったことを次の世代へ伝えて欲しい。

語り継ぐ

松尾　優花

はじめに

阪神・淡路大震災から２０年が経った今、経験していない私たちができるのは語り継ぐことだ。この震災を忘れないために、私は家族の体験を伝えていこうと思う。

１　当時、三木市に住んでいた両親の話

（１）１月１６日

震災の前日は特に変わった様子も感じられず、いつものように過ごしていたが、後になって夕日がいつもより赤かったとか、地震雲が出ていたという話を聞いた。

（２）１月１７日　５時４６分

発生時刻の５時４６分はまだ寝ていたが、地震の揺れで目が覚めた。父はすぐに終わるだろうと思っていたが、なかなか揺れは止まず、「ゴゴゴォー」という大きな地響きが鳴っていたことを今でも鮮明に覚えている。

（３）揺れの後

揺れが収まった後、三木市では大きな被害は出なかった。父の話によると、当時住んでいたアパートでは、電気温水器の室外機からお湯が全部溢れ出し、ベランダが水浸しになった。室内では、食器棚にあった食器が外に出て何枚か割れたり、上の階の配管が壊れたため、押し入れが水浸しになったりした。地震直後は電気も通っていたため、実家に安否確認の電話をし、家族が無事だったことを知ったが、６時過ぎぐらいになると停電になってしまった。

（４）数時間後

その後、割れた食器などを片付け、近所の人も無事だったため、両親はいつも通り出社できた。停電になり、家にラジオもなかったため、その後の詳細は後から出社してくる人がカーラジオで聞いた情報で知ることになった。その話によると、震度６（その後震度７に修正）の直下型地震であること、自分たちの住んでいる三木市より東に行くほど被害が大きいということだった。そして父が一番驚いたのは、高速道路が倒れているというドライバーからの情報だった。のちに電気が復旧しニュースを見ると、取引先の会社のビルが倒れているのが報道されていて、想像を絶するようなとんでもない被害だったことを知った。

（５）１月１８日以降

三木市ではほとんど被害はないと思っていたが、道路が崩れているところもあって、トラックがぶら下がった状態で、何日か放置してあったのを目撃したそうだ。

（６）母の感想

子供のころに台風で土砂崩れが起こり、とても強い風が吹いていたことは記憶に残っているが、兵庫県で地震などの大きな災害はないと思っていた。そんな時にあの阪神・淡路大震災が起こり、天災の恐ろしさを初めて知ることになった。大きな被害はないところに住んでいたが、毎日のように報道されるニュースを見て、大切な物や人を失う悲しみや苦しみ、困ったときに助け合う人と人との深い関わりを考えさせられたと同時に、命の大切さや、人は一人では生きていけないということを改めて感じることができた。それは震災がなかったら見過ごされていたかもしれない。震災があったからこそ気づかされた思いをこれからも忘れてはいけないと思う。あの時のような大震災と苦しみが二度と繰り返されないようにと願っている。

２　神戸市西区に住んでいた祖母の話

（１）１月１７日　５時４６分

地震が起こったとき祖母はまだ寝ていて、「もう起きようかなぁ」と思っていた時に、ガタガタと揺れ始めた。今までに感じたことのない大変なことが起きたと思い、少しの間立ち上がれず、大声で叫んでいた。窓の方を見ると、土やほこりが舞っているのが目に入り、棚の上にあったものが落ちてきて、体が震えたことをよく覚えている。

（２）揺れの後

揺れが収まってから、家族のことが心配になり、すぐに隣の部屋で寝ている家族のもとへ行き、声をかけあった。家族の無事が確認できたので、家の中を見渡すと、キッチンに置いてあったものはほとんど落ちて、食器も割れていた。外に置いてあった植木鉢も割れてしまっていた。

自分の家は大きな被害がなかったので、別の家に住んでいた子ども（当時三木市に住んでいた私の両親）のことが心配になり、電話をかけたが、「物が落ちたりはしたけど大丈夫」という声を聞いたところで電話が通じなくなってしまった。それからは、恐怖から震えが止まらず、落ちたものを片付ける気にもならなかったので、しばらくボーっとしていたら、あたりが明るくなってきたので少し落ち着きを取り戻すことができた。特に大きな被害もなかったので、いつも通りに出勤できた。仕事場が家から近かったため、いつもより早く会社に向かった。途中でお墓の横を通り過ぎると、墓石がたくさん倒れているのを目撃した。信号機も壊れてしまっていた。そのうち、あちこちで救急車のサイレンが聞こえるようになった。

（３）１月１８日以降

テレビ、ラジオがほかの番組を取りやめて地震のことを放送していた。淡路、三宮、灘、長田が特にひどいので、どのチャンネルにしても放送されていたことを覚えている。次の日、家の近所では７，８件の屋根が崩れてブルーシートが掛けられていた。職人さんが忙しいので、すぐには直せないようだった。スーパーでは、道が通れなくなっているため、物が不足気味になっていた。知り合いの話を聞くと、家に帰るのにも職場に行くのも道路が通れず、２、３時間もかけて歩いて行ったそうだ。

３　家族の体験を聞いて

小学校のころから１月ぐらいになると震災学習が始まり、何回か両親に体験を聞く機会があったが、あまり想像できないことのほうが多く、なんとなく話を聞いているだけだった。だから、防災を学ぶ立場になって初めて聞いた両親の話によって、今までとは違う目線で震災について考えることができたと思う。

私は両親の話を聞いて、当時の防災力の低さについて考えさせられた。「兵庫県に大きな地震が来るとは思っていなかった」という話は両親からも、学校の先生からも、何回か聞いたことがあった。もともと災害が多い地域ではなかったため、防災についてあまり考えてこなかったというのが理由の一つだと思った。だからこそ、阪神・淡路大震災を風化させてはいけないと思う。また同じような大きな被害を出さないために、この震災の教訓を生かし、防災を広げていくことがこれからの課題だと思う。より良い復興として、災害に強いまちをつくるには、一人一人の防災意識を向上させ、まち全体の防災力にしていかなければいけない。そのためにできることは、イベントで防災のブースをつくったり、防災新聞をつくったりするなど、一般の人でも身近に防災と関われる機会を増やしていくことだ。また、地域で行っている防災訓練にも積極的に参加してほしいと思う。地域によって災害時に抱えている課題は違うと思うので、自分のまちがどのような面で弱いのか、災害時にはどんな行動をとるべきかを防災訓練を通して知ってほしいと思う。事前に備えること、知っておくことの大切さをもっと発信していかなければならないと思った。

また、「地域の温度差」というところにも気が付いた。私の母は、三木市に住んでいて大きな被害に合わなかったため、震災をだんだんと忘れてしまっている、と話していた。考えてみると、大きな被害に合わなかった方が、この２０年間で震災の経験を話す機会は少なかったと思う。そのことが、震災の記憶を風化させてしまう一つの理由かもしれないと思った。それは阪神・淡路大震災だけではない。東日本大震災の時にも、東北であれほど大きな被害を受けたのにも関わらず、他県では、震災についてあまり考えられていなかったという話や、県外避難した人が、周りに震災のことを話せる人がいなくてストレスを感じたというような話を聞いたことがある。被災地から離れたところに住んでいると、ニュースで大きく報道されている時は災害支援や募金をして、災害について考える機会が増えるけれど、報道が少なくなってくると震災のことをだんだんと忘れてしまい、まだ復旧復興していないのにもかかわらず、支援をやめてしまうというように、メディアに大きく影響されることが問題だと思った。被害を受けていない地域でも、今後、違う自然災害や大きな地震が来ないとは言い切れない。いつどこで起こるかわからないからこそ、他人ごとにするのではなく一緒に災害と向き合ってい

かなければならないと思った。
今回、「語り継ぐ」を書くにあたって、震災の記憶や想いを語ってくれた家族のためにも、この話を多くの人に発信したいと思っている。経験した人もしていない人も、震災と向き合い、これからの災害について考えるきっかけになってほしいと思う。

４　震災を振り返って思ったこと

阪神・淡路大震災から今年で２０年。この２０年で神戸は大きく変化したと思う。震災で大きな被害を受け、建物や道路が倒壊してしまった地域でも、現在はすっかり元通りになっている。また、震災前よりも一人一人の防災意識も確実に上がっていると思う。震災をきっかけに、災害と向き合い地域を守る取組がどんどん広がっていき、少しずつ安全安心なまちに近づいてきていると思う。復興とはハード面ばかりではなく、ソフトの面でもよりよいものをつくることだと思う。震災で大切な人を失った悲しみや、慣れ親しんだ土地を離れる不安や寂しさは簡単には消えない。そういった人たちを支える心のケアを続けていくことが大切だと思う。例えば、高齢者が多い地域では、お茶会を開いたり、休憩所をつくったりして、話し合える場所をつくってあげることでつながりを持つことができる。また、カウンセリングや訪問を行って定期的に様子を見に行くこともケアになると思う。震災から長い時間がたったからと言って支援は終わったわけではない。以前、福島の高校生と交流し神戸のまちを一緒に歩いたことがある。その時に生徒の一人が「神戸は復興できるまちでよかった。」と言っていたのを覚えている。東日本大震災では大きな津波被害が広範囲に及び、いまだにしっかりとした家に住めない人がたくさんいる。さらに福島は原発事故の影響により、普段の安全な生活すら確保できず、住み慣れたまちを離れざるを得ないという状況になってきている。震災から４年が経ってもなかなか復旧復興が進まず、先が見えないという現状を目の当たりにしている福島の高校生だからこそ、神戸のまちを見てこのような言葉が出たのだと思った。私はその生徒の言葉を聞いたとき、何も返すことができなかった。「神戸のまちは東北の復興モデル」ということはよく聞いたことがあった。しかし、福島の人たちにとって復興という言葉はまだ遠い未来のようなもので、先の見えない不安で覆われているのではないかと感じた。阪神・淡路大震災と東日本大震災は地震の規模も被害の大きさも全然違う。復興の仕方はそれぞれ違うけれど、東北に住む方が神戸のまちを見たときに、少しでも自分の住むまちの未来を想像できるように、これからも広く長い支援を続けていきたいと思う。
また、阪神・淡路大震災はこれからの災害とも深くかかわっていると思う。高齢化のため、将来的には災害時要援護者と呼ばれる方の数はだんだん多くなってくる。そのような状況の中でもスムーズに避難するために、普段から高齢者と関わる機会を増やさないといけないと思った。合同避難訓練を行い、地域にどんな高齢者がいて、どんな支援が必要なのか、お互いに伝えるというような機会を増やしていきたい。普段からコミュニケーションをとることで、災害時にも話し相手になることができ、ストレスを和らげることができるし、関連死も防ぐことができる。高齢者が、日常生活の中でも楽に過ごすためには、私たちのような若い人たちの力が必要だと思った。
震災を振り返って、神戸の防災への取り組みや、これからの課題を見つけることができた。阪神・淡路大震災の教訓は、東日本大震災や将来の災害にも生かされるべきだと思う。福島の高校生の「神戸は復興できたからよかった」という言葉に象徴されるように、福島は放射線の問題で、先が見えず、いつ家に帰れるのかわからない不安が続いている人もいる。東北の復興は確かに様々な問題があって、なかなか進んでいないのが現状だけど、少しずつ、一つずつ解決して、街を前のように明るく、笑顔あふれるような場所にしてほしいと思う。

５　語り継ぐということ

今回、執筆するに当たって、語り継ぐことの意味について深く考えることができた。正直に言って、語り継ぐことはすごく難しいと思う。もちろん私は阪神・淡路大震災も東日本大震災も経験していない。だから、語り継げることは経験した方から聞いた話になる。その話を誰にでもわかりやすいように語るには、自分の言葉にして伝えることが必要だ。次世代に伝えるといっても、中学生や小学生、幼稚園の子どもたちなど、幅広い年代が対象者となる。まだ災害や防災についてよくわかっていない子どもたちにはわかりやすい言葉で震災の事実を伝えていかなければならない。

私自身、環境防災科に入って、出前授業や発表などで誰かに伝えるという機会をたくさんいただいた。小学生や中学生、高齢者など、さまざまな年代の方にお話しさせていただいたけれど、防災に興味のある人は少なかったと思う。高校生になって初めて発信する側になった時、防災を専門に勉強している私たちの知識が、一般的にはあまり知られていないということに気が付いた。実際にお話しさせていただいた人の中には、「地震はいつか来るといわれているけれど、まだ確率が低いから大丈夫。」と思っている人が多かった。私たちは普段から、「地震はいつ起こるかわからない。だから備えることが必要だ。」ということを当たり前のように勉強しているけれど、普段防災と関わっていない人たちの間にはあまり広まっていない考え方だという風に感じた。だからこそ、普段の防災教育の時間をもっと増やしていかなければならないと思った。過去に災害にあった地域だけでなく、未災地の学校でも防災教育を取り入れ、「自分の地域で死者を出さない」という考えが広まっていけば、被害を少なくすることができる。また、ただ単に先生から教えられるだけの防災教育ではなく、防災ダックや防災クイズをして自分で考えたり、クロスロードを行ったりして、他人と意見を交換し合ったりするような参加型の授業を行うことが大切だ。参加型にすることで、楽しく学ぶことができるし、正しい知識が身に付きやすいと思う。このような一歩踏み込んだ防災教育を多くの地域で実施してほしいと思う。

私はこの３年間で子供たちに防災を伝えたいという目標ができた。将来起こるといわれている南海トラフ巨大地震のときに力となるのは、私たち高校生や子どもたちだ。高齢化社会が進んでいく中、若い人の力はとても大きな原動力だと思う。だからこそ、今のうちから子どもたちを災害と向き合わせて、防災訓練の強化や災害に備えることの大切さを伝えていきたい。また、過去の災害の教訓を知って、同じ被害を出さないような防災対策を考えるきっかけをつくってほしいと思う。子どもたちの命を守るために、語り継ぐということはとても大事だと思うが、自分が聞いた話の押し付けにならないようにわかりやすく伝えるようにすることが課題だと思う。

また、被災地から離れたところに住む人に伝える場合にも伝え方は変わってくる。震災当時メディアではよく取り上げられていたが、２０年経った今では忘れてしまった人もいると思う。私は、被災地外の人に阪神・淡路大震災を語るときに、復興の様子を中心に話をしたいと思っている。震災が起こった時、「ボランティア元年」と呼ばれるほど、神戸にはいろんな地域からボランティアの方が駆けつけてくれた。今の神戸があるのは自分たちの力だけではなく、そのようなたくさんの支援があったからだと思う。だから、今度は感謝や恩返しの意味を込めて、神戸の復興の様子、２０年経った今の神戸の話を伝えていきたい。また、災害はいつ、どこで起きるかわからないので、違う地域で大きな災害が起こったときに、神戸の復興を思い出して、災害に強いまちをつくってほしいと思う。もちろん神戸の復興はまだ終わっていないけれど、震災前より確実に防災意識は上がったと思うし、住民同士の絆も深くなったと思う。神戸の復興の失敗と成功をほかの地域で伝えることで、ほかの地域で防災に関する取り組みを進めていってほしいと思う。

語り継ぐことには、経験しているから、していないからというのは関係なく、震災を忘れない、風化させないという思いが大事だと思う。震災の記憶が途切れてしまうということは、将来、大きな災害が起こった時に教訓が生かされなくなり、また同じ被害を出してしまうことにつながるかもしれない。震災は多くの人の命や思い出、場所を奪ったけれど、たくさんのことを気づかせてくれたきっかけでもある。私たちが今できることは、震災で失ったもの、得たものを後世に伝え、未来へ震災の記憶をつなげていくいことだ。これからの若い世代が震災を語るということにも大きな意味があるのではないかと思う。

最後に、今、私が未来に残したいことは、「想定にとらわれるな」ということだ。普段の避難訓練で逃げている場所でも、危ないと感じたらすぐに他の所へ避難してほしい。想定を信じ込まず、災害時にも臨機応変に行動し、周りの人を巻き込んで、率先避難者になる力をつけてほしい。

語り継ぐ

三浦　秀也

１　はじめに

阪神・淡路大震災が発生した１９９５年の１月１７日、ぼくはまだ生まれてもいないしお母さんのお腹の中にもいなかった。だから阪神・淡路大震災を実際に体験したわけでもないから、どのようなものだったのかもわからない。今まで環境防災科に入っていろいろな方々から阪神・淡路大震災のことについてのお話を聞いてきたけれど、やっぱりその現場にいないとわからないこともあると思う。でもぼくたちはまだ生まれてもいなかった。だから「語り継ぐ」を作成して、それをぼくたちよりも後の世代の人たちに見てもらいたい。そして阪神･淡路大震災をもっとたくさんの方に知ってもらい、忘れないでほしい。

２　阪神・淡路大震災

（１）概要

平成 7 年 1 月 17 日、5 時 46 分、兵庫県南部に震度 6、場所によっては震度 7 の強い地震が発生した。この地域としては、昭和 27 年に記録した震度 4 をはるかに上回る大きなものであった。

震源地	淡路島北部　北緯 34 度 36 分 東経 135 度 02 分
震源地の深さ	16km
各地の震度	6（神戸・洲本）　5（豊岡）　4（姫路）など （神戸市、芦屋市、西宮市、宝塚市、北淡町、一宮町、津名町の一部では 7）
マグニチュード	7.3

（２）地震の特徴

人口 350 万人余が密集し､我が国の経済活動の中枢を担う淡路北部から神戸市及び阪神地域の直下で発生した内陸・都市直下型地震。

深さ 16km という比較的浅い部分で発生し、断層が横にずれることにより起こったもので、大きなエネルギーが一挙に解放されるタイプであった。

（３）被害の特徴

１大都市を直撃した大規模地震のため、電気、水道、ガスなど被害が広範囲となるとともに、鉄道、新幹線、高速道路、新交通システム、都市間交通・地下鉄が損壊し、生活必需基盤（ライフライン）に壊滅的な打撃を与えた。

２古い木造住宅の密集した地域において、地震による大規模な倒壊、火災が発生し、特に、神戸市兵庫区、長田区などでは大火災が多発した。

３神戸・阪神地域という人口密集地で発生したため、多数の住民が避難所での生活を余儀なくされた。

参照：兵庫県／**被害**状況・復興の歩み

（４）ぼくの住んでいる加古川の被害

ぼくの住んでいる加古川での被害は、死者２名、重傷者４名、軽傷者１１名、半壊１３棟、１３世帯、一部損壊３１０９棟だった。

参照：兵庫県／**被害**状況・復興の歩み

３　母の話

母は、当初加西市に住んでいたらしく、地震が発生したときそのとき和田山に住んでいた祖母が心配になりすぐに電話を掛けたが、つながらなくて安否確認がとれなかった。

でも、電話はすぐに使えるようになったそうで、安否確認はとれた。

４　父の話

父は、当初姫路の中学に通っていた。震災が起きた５時４６分、父は起きていたらしく倒れかかってきたタンスを支えていた。
そして、学校に行くと話題が地震の話でもちきりになっていた。
同級生のいとこが明石で被災して亡くなったということもあった。

５　将来の夢ときっかけ

ぼくの将来の夢は消防士だ。
消防士とは、地方自治体の消防本部や消防署に所属し、火災の消火や救急によって、人々の安全を守る仕事だ。消防士は「消火」、「救助」、「救急」、「防災」、「予防」の５つの活動が主な任務となる。
消防士になろうと思ったきっかけは、母に勧められたことだ。ぼくが将来の夢に迷っていたときに母に、「消防士になりんか」と言われました。お母さんの知り合いに消防士がいて、たぶん消防士の仕事について、その方からいろいろな話を聞いていたのだと思う。それを言われたのが中学校３年生になってすぐのときだった。
初めそれをお母さんに言われたときはあやふやに消防士のことを考えていました。あくまでも、自分の将来の夢なのだから自分で決めないといけないと思っていた。
そして、進学先をそろそろ決めないといけない時期のときにぼくはこの舞子高校の環境防災科のことを知った。なぜ知ったかというとぼくの中学の先輩が消防士を目指していて、その先輩が消防士になるために舞子高校に行っているということを知った。
ぼくは、そのとき舞子高校に興味を持った。
そして、舞子高校のことを詳しく調べてみると消防学校に行ったり、たくさんのボランティア活動が出来るということを知って、消防士になりたいぼくにとってぴったりな舞子高校に進学しようと決めた。
舞子高校に入学して一年生の冬に消防学校で一日、体験をさせていただいたときに、ぼくは消防士という職業にやりがいを感じ、さらに消防士を目指そうという気持ちが強くなっていきました。
二年生の消防学校では二日間体験でき、一年生の時の消防体験よりも体験メニューも多く充実した消防体験だった。
その消防体験を通して、消防士とゆう職業はこんなにやりがいがあるものなんだなと思った。
みんなで声を出して走ったり、少しの移動でも走らないといけないし、声を大きく出さないといけない。
本当はしんどいものだと思うけれど、ぼくはしんどくなくて、逆に楽しく思えた。でも、消防士とゆう職業はもっとしんどいものだと思う。厳しい訓練がたくさんあると思うけれどそれでも消防士になりたいとぼくは思っている。

６　将来の夢と防災との関わり

消防士の仕事は消火活動、人命救助、救急作業、防災活動などがある。
消防士の防災活動は、火災が起きないように啓蒙活動を行う。災害を未然に防ぎ、被害を最小限にくい止めるために不可欠な任務。
万一の事態に備えて、地域住民の防災に対する意識を高めると同時に、基本的な行動や避難路を知ってもらうため、町会・自治会を中心に、消火器や起震車などを活用して初期消火、身体防護、救出・救護等の訓練・指導を行う。
小学校などで防災訓練を行うこともある。そのほか、火災や地震のレベルを想定したり、地域の地形に基づく被災パターンを想定したり、地域ごとの実状にあった訓練を行っている。
消防士は防災と、とても強い関わりがあると思っている。ぼくは消防士になり防災訓練の見直しや避難訓練や防災訓練を増やすことや、地域のコミュニティーを深めるための場などを増やしたいとおもっている。そのためにも毎日トレーニングを欠かさずして、もっと体力をつけて体作りもしっかりしたいとも思う。そのためにも今からの勉強をがんばって、消防士になって夢を叶えたい。

７　最後に

今年で阪神・淡路大震災が発生してから２０年が経った。けれど、ぼくたちはそれを風化させないようにしないといけない。そのためにもぼくたちは様々な世代の方々に阪神・淡路大震災のことを語り継いでいかないといけないと思う。ぼくは、環境防災科で学んだことを無駄にしないためにも、環境防災科で学んだことをみんなに伝えたいと思う。その学んだことをみんなに伝えていくことも、一つの防災だと思う。そして、防災をたくさんの人に広げられるんじゃないかなと思う。それで、ぼくが伝えたことをさらに広げてもらえるように次の世代、また次の世代へと語り継いでもらえればいいと思う。

語り継ぐ

森脇　ますみ

１　はじめに

震災当時、妊娠８か月だった母の体験を語り継ごうと思う。母は父と２人で垂水区に住んでいた。震災の前日、家の近くをたくさんのカラスが飛び回っていた。後から思うと前兆だったのかもしれない。

２　１月１７日

午前５時４６分。大きな揺れで目が覚めた。すぐに地震だと気づき、布団にもぐった。とても怖かった。揺れは、自分のお腹に赤ちゃんがいることを忘れるほどの衝撃だった。父と母は一緒に寝ており、２人とも無事だった。揺れがおさまり、台所へ行くと冷蔵庫が移動していた。大きな冷蔵庫が移動するほどの強い地震だったことを知り、身の危険を感じた。車なら倒れてくるものがなく安全だと思い、車に避難した。家を出る際、幸いにもドアは傾いておらず、すぐに開いた。車の中でも余震を感じた。当時は、携帯電話が普及しておらず、父も母も携帯電話を持っていなかった。そのため連絡手段は家の固定電話しかなく、誰かから連絡が来るかもしれないと家と車を行き来していた。余震が続いていたため、母は、「また大きな地震が来るかもしれない」と思い、すぐに避難できるようにお弁当を作った。地震直後はまだライフラインはすべて通じていた。

父の仕事場は須磨区にあり、店の近くの寮で生活している仕事場の後輩の安否を確認するため、車で向かった。大きな炎や煙が上がっているのが、車内から見えた。なんとか店に到着し、後輩が無事であることを確認した。ほっとした。家に戻る際、来るときに利用した道は通行止めになっていた。「通ってもいいが、命の保証はできない。」近くにいた警察官にそう言われ、とても怖くなった。普段なら１５分ほどで着く仕事場も片道１時間かかった。家に着いてテレビを見ると、長田区で大きな被害が出ているという情報が入っていた。祖母や母の姉は長田区に住んでおり、とても心配になった。親戚はみんな命に別状はなかったものの、母の姉の家は全壊。親戚の家も傾き、唯一無事だった母の家に避難してきた。母の家には、総勢１４人の親戚が集まった。

３　１８日以降

食料を確保するため、近所のお米屋に行った。なんとかお米を２０ｋｇ買うことができた。数日後には、近所のコンビニでパンを売ってくれるという情報が入り、父と２人で朝の５時３０分から並んだ。パンは１人３つまでで、長い行列ができていた。

数日が経ち、再び寮へ向かった。寮で取り残されている仕事場の後輩のために、母はたくさんのおにぎりを握り、寮まで持っていった。震災当日に行った時よりスムーズに行くことができ、２、３日でこんなに変わっていることにとても驚いた。

母は、西市民病院の産婦人科に通っていた。検診のために病院へ行かないと行けないが、西市民病院は産婦人科のある５階がつぶれたため診てもらえず、カルテも出ないと言われた。他の病院を探すも、「生まれるなら来てください。」と言われ、診てもらうことはできなかった。１月２６日に、父の実家がある徳島に向かった。無事だということを伝えに行き、震災後、初めて検診を受けることができた。

震災から約２か月半経った４月７日。長女が生まれた。役所に電話したところ、国立病院を紹介してくれ、検診を重ねて無事に出産することができた。しかし、粉ミルクや紙おむつは売っておらず、調達するのがとても大変だった。粉ミルクは救援物資でもらうことができ、おむつは布おむつを使った。あとから思うことは、震災が起きた時に生まれていなくてよかったということ。また、震災当時を振り返って助かったと思うことは、家にたくさんのストックをしていたこと。インスタントラーメンや缶詰などの食料、ティッシュやトイレットペーパー、ガスボンベなどもあり、震災直後はあまり困らなかったという。また、家の食器棚は引き戸だったため、お皿が飛び出ることはなく、１枚も割れなかった。どちらも災害を意識していたわけではないが、役に立つことを知った。母の家のドアは

幸いにもすぐに開いたが、地震の衝撃でドアが開かなくなる場合があることを知り、近所の人と話し合ったという。災害時に、家の中に閉じ込められている人がいないか、近所の人でインターホンを鳴らし合って無事かどうかを確認することになり、阪神・淡路大震災をきっかけに近所の人との関わりが深くなった。また、定期的に地域清掃があり、地域の人が気軽に話ができるようになった。いざというときに助けてくれるのは、身近な人だと感じたという。

母は、阪神・淡路大震災での被災体験を二度と繰り返さないため、２つのことを行った。１つ目は、災害時に家具が動かないように、家具の固定をした。２つ目は、非常持ち出し袋を作った。使わなくなったリュックに乾パン・缶詰・ライトなどを入れて、いざというときに持ち出せるようにしている。

ライフラインは震災からしばらく経ってから止まった。ガスが止まってからはお風呂に入れない生活が何日も続いた。病院に行く前日、友達の家にガスが通り、お風呂にいれてくれた。

４　親戚の話

親戚の叔父は祖母と２人で新長田に住んでいた。家はラーメン屋を経営しており、１階が店で２階が住居だった。震災発生時、祖母は起きていた。祖母は毎朝仏壇の前に座り、手を合わせるのが日課だったからである。１月１７日の朝もいつも通り、仏壇の前に座っていた。５時４６分、大きな揺れで仏壇が祖母の方向に倒れてきた。同時に屋根の梁も倒れてきて祖母の場所に空間ができ、閉じ込められたものの下敷きにならずに済んだ。同じ部屋で寝ていた叔父はあまりの揺れの大きさに身動きがとれず、屋根の下敷きになった。意識はあったが、もう無理だと思ったという。あきらめていた時、「助けて。」と叫ぶ祖母の声が聞こえた。助けてあげないといけないと思い、必死で下敷きになった屋根から出た。出る際、屋根の柱が腕に刺さり、腕を負傷した。なんとか祖母のもとへたどり着き、一緒に外に出ることができた。叔父は、近くの学校が避難所になっていると思い、祖母を連れて学校へ向かった。しかし、すでにたくさんの人が避難しており、入ることができなかった。何も持たずに避難してきたため、貴重品を取りに一度自宅に戻った。店の金庫や必要最低限のものを持って避難所近くの親戚の家に向かい、祖母を預けて叔父は病院へ行った。病院も案の定、たくさんのけが人であふれていた。叔父は病院の廊下で治療を受けることになり、麻酔なしで腕を縫った。次に自宅へ戻った時には、全焼しており、店と家を失った。しかし、命が助かっただけでも十分だと思った。祖母は、「毎日仏壇の前に座っていたから、仏様が助けてくれた。」ととても感謝していた。

叔父は店を再建したものの、新長田はもう人が減っており、なかなか売れなくなった。震災から復旧しても、人の気持ちや居場所が復旧することはないのだと実感し、とても悲しくなった。震災によって避難した人や、引っ越しした人は新長田に戻ってこない。阪神・淡路大震災から復興し、新長田の街はとてもきれいになったが、心の復興はまだまだ課題が残っている。

５　母の話を聞いて

母の話を聞いて、被害の大きさは関係なく、伝えていかなければならないことがたくさんあると思った。被害が小さいからといって傷が浅いとは言えないと思うし、阪神・淡路大震災を経験した人だけでなく、その家族や親戚、すべての人が辛い思いをしたと思う。そんな人の思いをしっかりと受け止めて、自分にできることを考えたい。

私は、この語り継ぐをきっかけに母の体験談を聞くことができてよかったと思う。小さいころから震災当時の話は聞いたことがあったが、詳しく聞いたのは初めてで、こんな身近に辛い思いをしている人がいることを改めて感じた。母の経験は私が語り継いでいかないといけないと思った。２０年以上が経っても、話をするたびに震災時のことを思い出し、あまり話したくないと言っていた母がこの語り継ぐのためにすべて話してくれたことは決して無駄にしてはいけない。母をはじめとするすべての人がもう二度と同じような辛い思いをしないように、もっと防災の知識を身につけて大切な人を守りたいと強く思った。私は阪神・淡路大震災を経験していない。でも、経験しているしていないは語り継ぐ上では関係ないと思う。経験した人から聞く話は生々しさがあるが、母のように震災当時の様子を話したがらない人も多い。そんな人が心を開いて話してくれたことに大きな意味があり、私たちが受け継いでいかなければならない。

阪神・淡路大震災で父が店長をしていたお店も潰れた。時間はかかったものの、なんとか再開することができた。しかし、震災の影響でお店を続けることができず、父も職を失った。母の周りには震災で職を失った人がたくさんいる。父もその１人で、なかには職を失ったショックで自ら命を絶った人もいる。その話を聞いて、大切なのは命だけではないと感じた。災害時、どんな目に遭っても１番に守らなければならないのは自分の命だが、家や職を失うことが二次災害につながることを知った。命と生活はとても密接な関係であると感じ、命だけでなく大切な仕事や家も守らないといけないと思った。たくさんの命が奪われた大きな災害の中で命が助かっただけでもありがたいと思う人も多いし、私も母の話を聞くまでは命がすべてだと思っていた。しかし、命だけが残っても人は生きていけないことを知った。同時に命の尊さも改めて感じた。災害によって失われる命をなくしたいと強く思った。そして、今、生きていることに感謝し、１日１日を大切にしたいと思った。自分の命や大切な人の命はいつ奪われるかわからない。南海トラフ巨大地震は３０年以内に約６０％の確率で起こると言われている。私は母の生々しい話を聞いてとても怖くなった。身動きがとれなくなるほどの大きな揺れに襲われたとき、本当に自分の命や家族の命を守れるのか不安になった。阪神・淡路大震災で父や母、親戚が全員助かったのもたくさんの偶然が重なっていたことを知り、１００％助かる方法はないと感じた。しかし、備えを重ねることが自分の命や家族の命を守るためにできることだと思う。

つらい経験をした母だからこそ、語る言葉の１つ１つに母の思いがあった。その言葉を受け継ぎ、今ある家族との時間を大切にしたいと思った。

６　環境防災科に入学して

私が環境防災科に入ったのは、将来、人の支えとなる仕事に就きたかったからである。ボランティアなどたくさんのことを経験していく上で自分の夢を見つけたいと思った。中学の時からボランティアに興味があり、母も私に合った学科だと言ってくれた。無事、環境防災科に入学することができ、たくさんのボランティアにも参加させてもらった。自分の夢も見つけることができた。一方で防災の知識も身につけることができた。災害時には率先避難者になり、自分の命を守るだけでなく家族や地域の人と一緒に避難できる人になるため、環境防災科で学んだことをしっかりと自分のものにしていきたい。環境防災科だからこそ、経験できたこともたくさんある。私は、高校２年生の時に東北の被災地を訪問させていただいた。東日本大震災で、家族や友達を失った人にも出会った。でも、みんなとても元気で１日１日を大切に生きていた。私は、被災者との関わり方がわからず、何も言葉をかけることができなかった。その日から、心のサポートについてもっと勉強したいと思った。

７　将来の夢

私の夢は、聴覚特別支援学校の先生になることだ。きっかけは、小学生の時に耳の不自由な女の子が近所に引っ越ししてきたことで、そのとき初めて手話の存在を知った。公園で遊んでいるときに、お母さんと手話で会話しているのをみて、新しいコミュニケーション方法にとても興味を持った。そのときは、まだ小学生で「ありがとう」の手話しか知らなかったため、ノートに書いて会話をしていたが、手話で会話がしたいと思うようになった。そんな時、学校で指文字が書いてあるプリントをもらった。友達と一緒に自分の名前を覚えて自己紹介すると、とても喜んでくれた。中学生になり、手話に興味は持ち続けていたが、その女の子とは紙に書いて会話をしていたため、手話を覚えたりすることはなかった。

高校で、神戸聴覚特別支援学校との交流に参加することになった。あいさつや自己紹介などの簡単な手話しかできない状況で不安もあったが、ゆっくり手話をしてくれたり、口話をつけてくれたりしてなんとか会話することができて、とても嬉しかった。近所の女の子も、この神戸聴覚特別支援学校に通っていて私が来ていることを知って、とても喜んでくれた。「たとえ手話ができなくても、手話で話そうとしてくれることが嬉しい。」そういってくれた。高校２年生の時、手話講座に通い始め、少しずつ手話を覚えるようになった。神戸聴覚特別支援学校との交流にも引き続き参加させてもらい、高校に入って手話にふれる機会が多くなった。もっと手話ができるようになりたいと思い、この夢を持つようになった。

８　聴覚特別支援学校と防災の関わり

聴覚特別支援学校の生徒は災害時に要援護者となるため、さまざまな方法で防災と関わっている。舞子高校もそのうちの１つで、交流しながら○×クイズを通して防災の知識を身に付けている。一般的に誰でも答えられるような○×クイズだったが、間違ったことを覚えている子や、直感で答えている子が多いように感じた。また、音での情報が得られないため、目で情報を得る必要があると思った。災害時に要援護者になる人を少しでも減らすため、防災の知識をもっと身につけるべきだと思った。

全県一斉募金の時に、舞子高校と一緒に聴覚特別支援学校の生徒も募金活動を行った。同じ班ではなかったが、募金活動に参加してくれたことがとても嬉しかった。募金という形で災害に関わっていることを知り、これからも一緒に継続していきたいと思った。

耳が不自由なため、健常者より危険度を察知することが難しい。そのため、避難指示を明確に伝える必要がある。しかし、危険だということを言いすぎるとパニックになってしまうかもしてないため、落ち着いて情報を伝えることが大切だ。また、災害時だけでなく雨などの自然現象の時にも雨の音がわからないため、日常から気をつける必要がある。日頃からの判断や行動が災害時の防災につながると思う。

聴覚障がい者は災害時、避難が遅れるリスクが一番高いと言われている。そのため、少しでも早く危険だということがわかるように防災の知識を身につける必要があると思う。健常者と違い、その場の状況に応じて臨機応変に対応することが難しいため、先のことも考えておくことが命を守るために大切になると思う。

将来は、聴覚障がい者などの災害時要援護者について、心のサポートについてもっと勉強していきたい。環境防災科で、さまざまな災害について勉強してきたが、被害者の気持ちをわかることは難しいと　感じた。外から見える状況は知ることができるが、震災時の精神状態まで理解することはできない。でも、少しでも気持ちが楽になることはあると思うし、話を聞いてあげることは誰でもできることだと思う。大切な人や仕事を失い、生活が１からのスタートになっても、気持ちを１からにすることはできないし、一生付き合っていく心の傷を少しでも和らげられるように自分にできることを見つけたい。そして、行動にうつせる人になりたい。

９　最後に

この語り継ぐを通して１番伝えていきたいことは、被害の大きさと心に負った傷の大きさは違うということ。命が助かっても、大切な人やものを失ったつらさはその人にしかわからない。身近な人が今もあの時のつらい思いを背負って生きていることを忘れてはいけない。

私はこの語り継ぐを母にも読んでほしいと思う。母の話を聞いて感じたことを自分なりの言葉で表現し、語り継いだことを母に知ってほしい。また、私達のように阪神・淡路大震災を経験していない人にも読んでほしいと思う。それが風化させないことにつながると思うし、話してくれた母の思いでもあると思う。私は、この語り継ぐを決して無駄にしない。

母の思いを私が語り継いでいく。お母さん、話してくれてありがとう。

語り継ぐ

山崎　祐太

１　はじめに

阪神・淡路大震災当時、私はまだ生まれていない。私には体験談は語れない。どれだけ震災の体験談を聞いても、いくら勉強しても、経験だけは語れない。だから、今回は父の体験談を書こうと思う。父は、震災当時神戸市北区にある鈴蘭台に、祖父母と父の弟と住んでいた。

２　父の体験

（１）１月１６日

父はいつもの様にアルバイトをしていた。その夜父は、夜中の３時まで勉強していた。そのおよそ３時間後に地震が来るとは知らずに・・・。

（２）１月１７日

１９９５年１月１７日午前５時４６分、猛烈な揺れで目が覚めた。揺れは４０秒近くに感じた。父は寝ていた布団から転がるようにして、自分の上半身を机の下へ潜り込ませるので精一杯だった。地震が収まると、祖母の家族の無事を確認する声と、祖父の「家から出て一旦公園に避難しよう」という声に従い家族は動き始めた。その間も断続的に揺れは続き、船酔いのような地震酔いで気分が悪くなった。着の身着のまま公園に出た時、既に多くの近所の住民も避難していた。暫く公園で避難していたが、雪が舞い始めた。暖をとる為とラジオで情報収集をする為に車へ移動した。ラジオからは、震源地が神戸らしいという情報はあったが詳しい状況はわからなかった。

（３）翌日にかけて

夜が明け、一旦自宅へ戻ると家財道具が倒れ、食器などが割れ散乱していた。その間も、断続的に大きな余震がきていた。午前８時過ぎ、電気が復旧し、テレビをつけた。すると神戸の街の被害状況が映った。自宅付近だけではわからなかった今回の地震による被害の大きさをこの時初めて知った。この時、家族全員が今日からの生活に不安を覚えた。

被害の大きさを知り、ライフラインの復旧に時間がかかると思い、当面の食料を確保する為、祖母と父はスーパーへ買い出しに行った。スーパーは人で溢れており、１人３品までと制限があった。しかし、やっとの思いで買えたのは、カップラーメンのみだった。

（４）地震から５日

地震から５日程経つと、少ないながらもスーパーに商品が並び始めた。水の確保については、まず、トイレの水はお風呂に溜めていた水を使い、飲料水はジュースや給水車からの水で確保していた。

（５）地震から２週間

この頃には、家の片づけも終わり、各ライフラインも復旧し、自宅付近は少しずつ元の生活に戻り始めていた。しかし、交通はまだまだ復旧しておらず、大きな被害が出た海沿いの地域へ行くと、倒壊した建物、火事で燃えた住宅街は手つかずのままだった。

この時父は、慣れ親しんだ街の風景の変わりように、涙を流した。

３　父の思い

震災を経験してから２０年が経った今、息子である私は、環境防災科に通っている。父は私に、自然の脅威が襲ってきた時に備え、何気ない日常の中で震災時に対応できる知識を身につけ、経験をしてほしいという。この父の思いを大切にしたい。

４　父の体験を聞いて

私は今まで、震災の体験を詳しく聞く機会があまりなかった。今回話を聞く中で、もし、自分が父と同じ体験をしていたらと思いながら聞いた。今自分が同じ体験をしたらと思うととても怖くなった。

私は高校１年の時に参加した合宿で、早朝の寝ている時に震度５弱の地震を経験した。私は、揺れている間怖くて叫んでいた。揺れの恐怖で何も考えることが出来なかった。父の話のように揺れがと

ても長く感じた。また、いつ収まるかわからずとても怖かった。最初は地震だとは思わなかったし、全く冷静な判断が出来る状態ではなかった。その時は、物が飛んでくることもなかったが、部屋にあったロッカーが「ガタガタガタ！」と大きな音を立てていたのを今でも覚えている。泊まっていた建物は特に大きな被害はなかったが、もしも、阪神・淡路大震災の時と同じ状況だったらどうだろうか。何も出来ずに死んでいたかもしれない。そう思ったとき、毎日何事もなく、同じ様な生活をしている時に、突然襲ってくるのが災害なのだと、改めて感じた。私はこれを経験するまで、自分が地震で死ぬかもしれないとは思っていなかった。自分は大丈夫だと思っていた。

しかし、それは間違いだと思い知らされた。今まで、父はあまり被害を受けておらず、それほど大変な思いをしていないと思っていた。しかし、家の様子や何が起こったのかわからないという状況だったことを聞くと、自分が経験した地震の時に、父や母の情報がなかったらと思うととても不安になった。また、情報が少ない中で、さらに余震が断続的に続いている状況で停電したまま、１晩過ごすのがどれほど怖いものか想像もつかない。話の中で、父は街の風景の変わりように、涙したと言っていた。私は、父が泣いている姿を見たことがない。どんな時も父は、堂々としているように感じる。その父が泣くほどの事が起こった。今まで聞いてきたどの体験談よりも私は、聞くのが辛かった。普段普通に喋っている父がもしかしたらいなかったかもしれない。

災害は突然起こるもので、いつ起こるか、誰にもわからない。だからこそ、阪神・淡路大震災についてもっと知りたいと思うし、自分の家族や大切な人を守りたいと思った。今学んでいることは、今の生活や周りの人、これから出会う人を助けることだ。他の所では絶対に学ぶことのできないことだからこそ、自分達が語り継ぎたい。今まで防災の授業を何回かしてきたけれど、体験していない分、どうしても伝えにくいことが多くあった。しかし、身近な人の体験談を通して少しでも伝わりやすく喋れるようになりたいと思った。

５　環境防災科

私は高校で３年間防災について学んでいる。しかし、まさか自分が防災について学ぶとは想像もしていなかった。元々中学校に入るまで京都に住んでいた私は、中学校に入ってからも、阪神・淡路大震災に関して興味をもつことはほとんどなかった。では、なぜ環境防災科に入ろうと思ったのか、それは次のことがきっかけだ。

中学２年生ももうすぐ終わろうとしていたある日、それは突然起こった。その日は中学校の卒業式で、３年生以外はほとんどの生徒が休みの日だった。私も当然休みだったので、家にいた。その時、東北で大きな地震があったとテレビで流れた。それまで災害に無関心だった私が、テレビに釘付けになった。その日は、両親が帰ってくるまでずっとテレビを見ていた。その後暫くして、高校生がボランティアをしていることを知った。それが環境防災科だ。３年生になり、進路を担任の先生と話していた時、環境防災科の事を思い出した。「ボランティアがしたい」その時そう思い、進路を決めた。

環境防災科に入ってすぐに、「ボランティアがしたい」というのは間違いだと言われた。それを言ったのは、当時科長だった先生だ。ボランティアはない方が良いと先生は言った。ボランティアは困っている人を手助けすること、ボランティアに呼ばれるということは困っている人がいるということだ。言われてみれば簡単なことだが、言われるまで気づかなかった。それは今でも忘れていない。

高校では、たくさんのボランティアに参加した。その中でも私が印象に残っているのは、東北の高校生との交流だ。震災の体験談を同じ高校生から聞くのは初めてだった。１泊２日でワークショップを行った。１日目の夜遅くまで、自分達の意見を話し合った。環境防災科だけでなく、神戸の他の学校も様々な活動をしていることを知った。また、東北の高校生の被災体験も聞いた。怖い思いをした話も聞いたが、海から離れていて、あまり被害がなくほとんど変わらない生活を送っていた話も聞いた。その人は、少し離れたところで多くの人が困っていたのに、何も出来ず悔しかったと言っていた。自分は同じ東北に住んでいるのに、周りも被害が少なかったから震災に関心が薄かったと話していた。その時、自分の無力感を痛感したそうだ。同じ年代だからこそわかったことも多かったが、話に対して返す言葉が思い浮かばなかったことも多かった。震災の体験をしているかどうかで感じ方の違いを感じた。

ワークショップの中で印象に残っていることがある。それは、ボランティアに来た時に、心配して

ほしくないと言われたことだ。被災から立ち直ろうとしているから、心配するのではなく、盛り上げて欲しいと言われた。私は、自分が辛い時に他人に心配されると嫌な思いになったことを思い出した。辛い時ほど楽しく接してほしいのは、被災した人も同じことを知った。

また、国際交流と防災をテーマにした交流にも参加した。交流には、様々な国の方が参加していた。ワークショップの間は全て英語で話さないといけなかった。英語は話せないし、相手が何を言っているのかもわからなかった。その時感じたのは、英語が話せることで、人との繋がりの幅が広がるということだ。同じ日本の高校生が他にも参加していた。その高校生達は、海外の方と話していた。話し合いをするだけでなく、楽しく会話もしていた。私は海外の方と会話出来ず、悔しかった。海外の方と繋がる機会を無駄にしてしまった。高校に入ってから得た経験は、とても大きなものだ。この経験を忘れず、高校を卒業してからの生活に活かしていきたい。

高校では、人の命について考える機会が多くあった。しかし、高校２年生になるまでは、身近な人が亡くなった経験もなくあまり実感が湧かなかった。高校２年生になって、私は、２人の人の死を経験した。１人は部活の先輩だ。事故だった。その人は、部活ではチームを盛り上げ、友達も多く、誰に対しても優しく、楽しく接している方だった。私自身、先輩には、お世話になった。突然の死に実感が湧かず、最初は何も感じなかった。お葬式の日に、先輩の顔を見た時、涙が止まらなかった。しかし、写真を見れば笑っている先輩の姿があり、その後も亡くなった実感がなかった。人の死を実感したのは、もう１人の方の死を経験した時だ。その人は高校１年生の時から授業でお世話になっている先生だ。私は亡くなる直前まで、授業はわかりやすいが、すこし変わった先生だと思っていた。先生は心臓が悪く、授業をするのもやっとの状態だったことを亡くなる直前に知った。２学期が終わろうとしていた時、先生は学校で突然倒れた。倒れた時は心肺停止だった。その日の午前中に私たちのクラスは、その先生の授業を受けていた。それが先生の最後の授業だった。学校で倒れてから先生は目を覚ますことなく、亡くなられた。それを経験した時、人の命の重み、大切さを実感した。私は、防災を広める時に、命の大切さも伝えていきたいと思った。

阪神・淡路大震災から２０年が経ち、今まさに、南海トラフ地震が起きようとしている。火山活動の活発化、大きい地震もたくさん起こっている。誰もが危ないのではないかと思っている。だが実際どのようにすればよいのか、分かっていない人がたくさんいる。今こそ、環境防災科である私たちが、阪神・淡路大震災を語り継ぎ、新たに起こる災害に立ち向かっていかなければならないと思う。その為に、備えの大切さを広めたいと思う。南海トラフ地震は、備えをすれば被害を軽減することが出来る。また、地震後すぐに避難をすれば、被害をさらに減らすことが出来る。私たちが学んだことを様々な形で広めていきたい。

６　高校卒業後

高校を卒業して、大学で防災を続けて学びたいと思っている。高校の授業で知識がないのに防災は語ってはいけないと言われた。防災は人の命に関わることだからだ。私は、大学で、津波について学びたいと思っている。その理由は、私が初めて災害に関心を持ったのが、東日本大震災だった。それがきっかけで、津波災害に興味を持ち、本を読んだ。その本に書かれていた津波のメカニズムは、皆が思っている津波のイメージとは全く違った。中でも私が衝撃を受けたのは、津波の高さよりも高い防潮堤があっても津波は乗り越えてくるという事実だ。津波が海岸に迫ってくるということは、運動しているということだ。しかし、防潮堤にぶつかると津波は止まる。その時、津波の運動エネルギーは位置エネルギーに変化する。位置エネルギーに変わるということは、海面の高さが高くなる。そこに、次の津波が来る。最初に来た津波が３ｍだとする。２回目に来た津波も３ｍであった場合、５ｍの防潮堤があっても、２回目の時には、６ｍの津波が来たのと同じなのだ。これを知っていれば、防潮堤があるから逃げなくても大丈夫と思う人が減ると思う。

津波による被害は、その時そこにいる人の判断がとても重要になる。防災を伝えるだけでなく、災害時にどう行動すれば良いのか、考えてもらえるような伝え方をしたい。その為に、大学では、津波に関する知識や心理学についても学びたい。大学で学んだことを環境防災科に伝えに戻ってきたいと思う。たくさんの人に私が学んだことを知ってもらいたいと思っている。その為に、私一人が広めるのではなく、私が広めた人から、さらに多くの人に広めてもらいたいと思う。

７　将来の夢

私は、将来警察官になりたいと思っている。なりたいと思ったきっかけは、人の役に立つ仕事がしたいと小学生の時から思っていたからだ。しかし、警察官は、消防士などとは違い、普段は防災に関わる機会はとても少ない。むしろ、防犯が警察官の主な仕事だ。警察官が防災に関わるのは、災害が起きた時が主な場合になると思う。災害時を除くと警察官は、防災を広めるには機会が少ないと思った。しかし、先日参加したボランティアで地域の方と話していて、防災を広めることができると感じた。それは、地域のパトロールをしながら、地域の方と会話を通して防災を伝えるということだ。パトロールは毎日の様に行うし、自分の担当の地区を知ることもできる。さらに、今高校で行っている活動を活かせないかと考えた時に、学校で行われた防犯教室を思い出した。防犯教室や交通安全教室があるなら、防災教室をやってもいいのではないかと思う。それなら、今やっていることを活かせるし、大学で学ぶ事も活かせると思うからだ。また、小学生から高校生まで教えに行く機会があるので、たくさんの人に知ってもらえると思う。さらに、防災教室だけでなく、警察官の人にも防災を広めたいと思う。消防などと違い、防災に興味のある人はとても少ないと思うからだ。地域の方と関わる機会が多い分、必要だと思う。

私は警察官として地域の安全を守るのが１番やりたいことだ。地域の子どもから大人まで、毎日楽しく暮らせる街にしたい。自分が担当した地域の人、全員に私のことを知ってもらえるようになりたい。しかし、犯罪などから守るだけでなく、防災を学んでいるからこそ災害からも守りたいと思う。だから、先ほどのような教室を通して、地域の方に少しでも防災や減災について知ってもらいたい。私は、どのように対策をすれば良いかを考えていくのが、今はとても苦手だ。このような場合にあなたならどうしますか、と聞かれて思いつくことが少ない。警察官として防災を広めていくために、高校・大学の間にできるようになっておきたい。活動内容を増やすなどの意見も積極的に言えるようにしたい。自分が出来る範囲で、今はやっていないけれど、このような活動をした方が良いと思えば、実現に向けてやっていきたい。

８　地域住民として

将来、警察官として活動する以外にも、様々な形で防災を広めたいと思っているので、まずは自分の住んでいる地域から広めていきたいと思う。私が住んでいるのは、震災当時復興住宅が数多く建てられた場所だ。高齢者の方や小さい子どもまで、たくさんの方がいる。また、ここ数年でたくさんのマンションや家が建てられた。新しい街なので、人と人との繋がりがまだまだ薄いと思う。私がこの街に住み始めてから６年が経った。しかし、地域で防災訓練をすると聞いたことが１度もない。だから私は、毎日の挨拶などを通して、少しでも、地域の方との繋がりを大切にし、私自身が防災訓練を主催出来る人間になりたいと思う。

語り継ぐ

山田　力輝

１　祖父の話

（１）祖父の家

祖父の家は、相生市にある。つまり兵庫県の西のほうであり、阪神・淡路大震災で最も被害を受けた地域とは離れたところに位置する。山々に囲まれていて田んぼが多く、自然が豊かな場所で、家は２階建ての木造だった。震災が起こった当時は、祖父はこの家で祖母、父の弟とともに、３人で生活をしていた。

（２）地震の揺れ

震災が起こった１月１７日の朝、祖父が仕事のため、朝早くに家を出なければならず、祖父と祖母は朝早くに起きて用意をしていた。父の弟は２階の部屋で寝ていた。祖父が朝飯を食べたあと、そろそろ家を出ようかと思っていた頃のことであった。阪神・淡路大震災の揺れが祖父と祖母を襲ったのだ。経験したことのないぐらいの揺れだったという。祖父が住んでいた相生市は、震度４であったが、それでもすごい揺れで祖父は、「めちゃくちゃこわかった」と話した。その揺れは今でも忘れられないと言っていた。祖父と祖母は２階で寝ている父の弟を起こして逃げなければならないと思ったが、びっくりしてしばらくその場から動けなかった。木造建築の家が心配だったが、損傷、倒壊することはなく、祖父母と父の弟の３人は無事だった。結局当時高校生だった父の弟は、地震の揺れでは目を覚ますことが無かったので、地震が起きたことすら朝起きるまでは知らなかった。震源地から遠く離れた相生市でも経験したことのないくらい大きく揺れたのだから、震源地のほうはものすごい揺れだったに違いないと祖父は思った。今でも、地震で少し揺れただけで阪神・淡路大震災の時の揺れが頭をよぎり、ドキドキすると祖父は言っていた。

（３）当日

相生は、比較的地震の揺れが少なかったため大きな被害はなく、避難などもする必要がなかった。そのため祖父は、この地震がどれほど大きな被害をもたらしたのか知ることもなく、地震についての情報をまったく知らない状態で、何事もなかったかのように仕事に行った。事の重大さを知ったのは喫茶店で仕事の打ち合わせをしている時だった。喫茶店にあったテレビで、神戸の映像が流れていた。その時初めて、神戸が地震の被害ですごいことになっているのだと知った。さいわいなことに、当時、祖父母の親戚や知り合いで阪神・淡路大震災の被害が大きかった地域に住んでいる人はいなかった。震災が起こって間もないので、情報を入手することが難しく、祖父も祖母も、後で知り合いなどに聞いていろいろなことを知った。祖父は阪神・淡路大震災の日のことは今でも忘れられないと語った。

２　母の話

（１）当日の話

阪神・淡路大震災が発生した当時、母と父は広島県広島市に住んでいた。いうまでもなく、震源地からは遠く離れていて、地震による被害はほとんどなかった。広島市では震度３を記録していた。地震が発生した時、父と母は揺れによって目が覚めた。その時は、「けっこう揺れたな」とは思ったが、特に情報は確認せず、そのままもう一度寝てしまった。朝、テレビを見てはじめて神戸の方が大変なことになっているということを知った。それから、兵庫県相生市に住む祖父母のことが心配になり、家の電話で電話をかけたがつながらなかった。その後も何度も何度も電話をかけたが、つながらず、以前家の電話よりも公衆電話の方がつながりやすいと聞いたことがあったので、外に出て公衆電話を探した。公衆電話を見つけて相生の家に電話を掛けるとやっとつながり、祖父母の方は大丈夫だということを知ることができた。長電話をすると、さらに電話がつながりにくくなり、ほかの人の安否確認に支障をきたすと思い、最小限の話だけを済ませてすぐに電話を切った。

（２）数日後の話

それから何日か過ぎた日のことであった。母は買い物をしようとして、スーパーやコンビニへ行く

のだが、そこでいつもと違うことに気が付いた。スーパーやコンビニの陳列棚からペットボトルの水が消えてしまったのである。また、ペットボトルの水だけではなく、その他のいろいろなものが品薄になりだし、買いだめをする人が目立ってきた。ここまで品薄になると、いろいろな面で困る人が多くなるのではないかと母は思っていたそうだ。

３　母の友人から聞いた話

ここからは、母が知り合いの方から聞いた話によるものだが、震災当時垂水区に住んでいた母の友人は、その時、長男が産まれたばかりであったため、ミルク、おむつなどが多く必要であった。さらに、その近所の家族にも赤ちゃんがいて、ちょうどミルクを切らしていてそろそろ買いに行こうかなと思っていた頃に阪神・淡路大震災が起こった。地震の影響で、ミルクを扱うお店は閉まってしまっていて、買いに行くことができなくなってしまった。そのため、家にあった数少ないミルクを近所で分け合って、お店が開くまで何とかしのいだそうだ。また、ほかの知り合いには、水が出なかったため、お風呂に入ることができなかったという家庭もあった。その家族は、有馬温泉が無料で開放されるという情報を聞き、有馬温泉までお風呂に入りに行ったそうだ。

４　感想

私は、阪神・淡路大震災が発生した当時、大きな被害を受けた地域に住んでいた人が身近にいなかったため、いろいろな人から話を聞き、文章にすることにした。今回話を聞いてまず思ったのは、祖父や母はあまり大きな被害を受けていない地域に住んでいたにも関わらず、阪神・淡路大震災の被災体験は鮮明に記憶していたということである。それだけ震災の衝撃は大きかったのだと改めて感じた。祖父は、自分の被災体験を驚くほど細かく話してくれた。震災の被害が大きかった地域から遠く離れた相生市でも、「経験したことない揺れ」に襲われたという話は印象的だった。震災の被害の中心に住んでいた人たちがどれほどすごい揺れに襲われたのか想像できなかった。話を聞くだけで、阪神・淡路大震災の怖さが改めてわかるような気がした。また、母の話や、その知り合いの話を聞いて、震災の直接的な被害をあまり受けていなくても、店が閉まっていることや、品不足によって不便な生活を強いられたということを知った。災害時は、被害を最も受けた地域だけではなく、その周りの地域にも気を配り、最低限の日用品などは手に入れられる環境をできるだけ早く作ることも必要だと思った。

個人も非常時のために、最低限必要な日用品を常に蓄えておくということも災害時に困らないためにしておくべきことだと思う。災害に備えていろいろな蓄えをして避難袋を作ることは、小学生の時からさんざん言われ続けたことだと思うが、実際にそういった備えをしている人は意外に少ないと思う。もっと、災害はいつどこで起こるかわからないという意識が必要だと思った。

母の話では、災害時に家の電話がつながりにくくなったときに公衆電話の方がつながりやすいということを知っていて、そのことが実際に安否確認をする際にとても役立ったという話が出てきた。これを聞いて私は、どんなに小さな知識でも知っていて無駄なことは無いのだと感じた。全員が防災の専門家のように多くの知識を蓄える必要はない。理想を求めるとそうなるのだろうが、それは不可能なことである。こういうふうに、一人一人が、少しずつでも災害に関する知識、防災の知識を頭に入れておくとみんなで知識を少しずつ出し合うことができる。それによって災害時の苦痛が少しでも弱まるのではないかと思った。それを実現させるためには、災害、防災を今までよりさらに身近なものにすることで、人々の防災に対する意識を高めることが必要だと思った。具体的には小学校、中学校で防災に関する授業を取り入れる、町の目に付くところに防災ポスターを張ることなどがよいと思った。小中学校で防災の授業を行う際には、小中学生でも分かりやすいような内容にすることや、親にも内容を伝えてもらい、災害に備えて避難袋を作ったりするきっかけにしてもらうことが大切だと思う。また、授業の頻度としては、一年に数回程度でも十分だと思った。防災ポスターは記憶に残りやすい内容にすることでより効果が大きくなると思った。また、小中学校での防災の授業の際に、学生にポスターを書いてもらうのもよいと思った。

私は、阪神・淡路大震災は全く経験していない世代なので、誰かに話を聞くことや、本やテレビでしか震災のことを知ることができない。まして震災の体験のリアルな話は、人に聞かない限りは知る

ことができないだろう。今までは、阪神・淡路大震災の話を身近な人から聞くということはあまりなかったが、今回身近な人からいろいろな話を聞くことで、阪神・淡路大震災を今までより一層身近に、リアルに感じられたと思った。やはり、人から直接話を聞くということは、震災を風化させないためにとても重要なことだと思った。しかし、このようにして阪神・淡路大震災について人から話を聞くという機会は、防災に携わっていない人にはほとんどないと思う。私も「語り継ぐ」を書くというきっかけがなければ、このようにして身近な人から阪神・淡路大震災について詳しく話を聞くということは無かったかもしれない。さらに、これから阪神・淡路大震災を経験した人が徐々に少なくなっていくのだと思うと、震災の風化が心配である。阪神・淡路大震災の記憶を風化させないためにこうして聞いた話を文章にすることは大切なことだと思う。今回「語り継ぐ」を書くために身近な人にインタビューすることで、とても貴重な話を聞くことができたと思う。その意味で、この文集の執筆に関われたということはとてもラッキーなことだった。しかし、正直話を聞くまでは、震災のことをそんなに鮮明に覚えている人が身近なところにいると思わなかったので、震災の体験について、断片的な話しか聞けないだろうと思っていた。しかし、祖父や母は、震災当時の体験を鮮明に記憶しており、順序を追って正確に話をしてくれた。特に祖父は、「阪神・淡路大震災の体験について知りたい」と伝えただけで、とてもたくさんのことを話してくれて、すべてを話し終えるまでは質問などを挟む間もなかった。このように震災当時の記憶を鮮明に記憶しているのに、まだ外に吐き出せてない、話したことがない人がいたら、とてももったいないことだと思う。その人本人のためにも、次の世代である私たちのためにも、そういう人たちが話をできる場を少しでも作れたらいいのではないかと感じた。

今回聞いた貴重な話は、私は忘れることは無いと思った。このように、誰かから話を聞くか、文章を読んで、震災の誰かの体験が記憶に残る人が一人でも多くなることによって、震災を風化させないということにつながり将来その記憶を生かすことができる。震災の記憶を伝えていくためにこの「語り継ぐ」を一人でも多くの人に読んでもらいたいと思う。そのために、全国のたくさんの学校で「語り継ぐ」を教材として取り扱ってもらったり、阪神・淡路大震災に関する施設などで一部を無料配布したり、インターネットを通じて広めたりといったことを行えばよいと思った。

今回阪神・淡路大震災のことについて話を聞き、文章にまとめてみて感じたのは、震災を風化させたくない、風化させてはならないということだった。阪神・淡路大震災に限ったことではないのだが、災害が起きた時は多くのものを失ってしまうが、その災害の教訓を残すことで、次の災害に備えることができる。それができないということは、災害の後にはマイナスの面しか残らないのである。たくさんのものを失うだけ失って、何もそこから得ることができないのは絶対にしてはいけないことだと思う。後世に震災を伝えていくことで、少しでもこれから起こる災害の苦しみを少なくすることができるのならば、私たちは絶対に震災を忘れてはいけないと思った。

５　環境防災科で学んだこと

私がこれまで環境防災科で様々なことを学んできて最も感じたことの一つは、備えの大切さである。自然災害は、いつどこで起きるのか正確に予測することは不可能だが、どの自然災害も起きる可能性が高い場所や起きる条件などはわかることが多い。自然災害が起きる可能性が高い場所が分かっていれば、その災害に備えることは可能なので、その備えによって多くの命が救われる可能性があることを考えれば、備えるということは絶対必要だと思った。

備えといっても様々なものがあるが、耐震化などのハード面での備えは知っていたり実行したりしている人は多い。私は、地域のつながりの大切さなどのソフト面での備えについてもっと多くの人に知ってもらいたいと思っている。ハード面での備えは、どうしてもお金がかかり、その面で備えに時間や手間がかかってしまうのだが、その反面、ソフト面での備えにはあまりお金がかからないことが多い。したがって人々の意識が高くなれば、ハード面よりも少ない手間で備えることができる。ソフト面の備えをしっかりと行うことによって、災害時に命を救うことや人々の負担を経験することにつながる。私は将来、どんな職業に就くかまだ分からないが、ハード面だけでなく、ソフト面での備えの大切さも広めていきたいと思っている。具体的にいえば、ソフト面での対策の中でも、地域のつながりや、自分の土地の特徴を知るといったことは自分の身や周りの人の身を守るうえでとても大切な

ことだと思う。今までに起きた大きな自然災害では、地域のつながりがしっかりしていた地域は被害が少なかったということをよく耳にする。地域のつながりがしっかりしていることによって、どこの家に高齢者が住んでいるのか、隣の家の人はどこで寝ているのかなどを一人一人が理解し、迅速な救助や避難につながるのである。自然災害においては、自分で助かる自助、地域で助け合う共助、消防などに助けてもらう公助があるのだが、大きな災害の場合、消防などは人手が足りず、公助よりも共助や自助が大きな割合を占める。したがって、地域のつながりを強くすることによって、地域の防災の力を大きく向上させることができる。

地域のつながりを強くするにはまず身近なことから意識していくことが重要だと思う。例えば、近隣住民と出会った際に必ず挨拶をするということを意識するだけで、そこから小さな会話につながり、お互いを知ることにつながっていくのである。こういった小さなことの積み重ねが防災につながるということは、高校生になるまでは知らなかった。私は、中学生のころから近所の方との挨拶は常に意識していることなので、これからもこの心掛けを大切にしていきたいと思っている。

環境防災科で学んできて感じたこととして、語り継ぐことの大切さも挙げられる。大きな災害を経験し、多くのものを失うと、どうしたらその被害を少なくできたかを考える。これは次の災害に備えるにあたってとても重要なことである。しかしこれは当たり前の行為だ。そうすると、確かにその災害を経験した人々が次に同じような大きな災害に襲われたときに、被害は前より減るかもしれない。しかし、そんなことはなかなかないことである。次に同じ災害が起きた時、たいていの場合は世代交代をしていると思う。せっかく前の災害で、どうしたら被害を減らせるかを考えて次の災害に備えても、次の世代に伝えることができなかったら、また同じことを繰り返すだけである。災害で多くのものを失って、次の災害に備えて、世代交代して、また災害で多くのものを失うという繰り返しになってしまう。災害に限ることではないのだが、悲惨な出来事というのは、絶対に繰り返してはいけないと思う。災害では多くのものを失うが、同時に多くのことを学ぶことができる。災害というものは決して失うものばかりではないのである。しかし、その学んだことを次の災害に生かせないのであれば、失ったものが重すぎるのではないかと思う。

阪神・淡路大震災を経験していない世代の僕たちにとっては、阪神・淡路大震災を知るための手段は、実際に体験した人の話を聞くか、本を読んだりすることに限られる。震災をより身近に、リアルに感じるためには、実際に体験した人の話を聞くことが必要である。しかし、阪神・淡路大震災を体験した人がこれから減っていく中で、このような話を聞く機会はだんだん少なくなっていく。私たちが、震災について多くのことを学び、実際に体験した人の話を聞くことによって、少しでも多くの話を後世に広めていけたらと思う。それによって次の災害で失うものが少しでも減るのなら、自分たちのためにも、後世のためにも、自分の学んだことや知った話を語り継いでいこうと思う。

語り継ぐ

吉田　さやか

震災当時、私の両親と１歳だった姉は、垂水区の高丸にある団地に住んでいた。この大地震は神戸に嫁いでまだ数年だった母にとてつもない衝撃を与えた。「本当に運がよかった。あの数日間を乗り越えることができたのは全部偶然が重なったからだ。」と言う。

１　日常が崩れる音

母は近所の人を数人招いて食事会をする準備のために、早朝５時頃には起床していた。父は姉の横で眠っていた。朝の静寂のなか、物凄い轟音に両親は身を竦ませた。今まで聞いたことのないような地鳴りの音に、何が起きているのか咄嗟には理解できなかった。やがて家を根こそぎ持って行ってしまうような揺れが襲った。その場ではっと気が付いた父は本棚のすぐ傍で寝ていた姉を守るため、その上に覆いかぶさった。背中に本棚が倒れてきたが、大きな怪我をすることはなかった。母はキッチンで食器洗いをしていた時に大きな揺れを感じ、這うようにしてなんとか無事に二人の寝ている部屋に辿り着いた。ふとんに潜り込んで、倒れそうな家具から逃れることができた。長く感じられた揺れがようやく収まり、お互いの無事を確認した上で逃げることになった。母が一番心配していたのは東海地震だった。幼いころから東海地震の避難訓練をし、いつ来てもいいように心構えをしておくよう育てられた。そんな風に刷り込まれていた母は震源がきっと愛知県の沿岸部だと信じ、祖母の安否を心配していた。幸運なことに、この直後の電話だけが通じて実家に連絡がついたのだ。愛知県でもかなり揺れて、地震には慣れた実家のはずだったが、今度の揺れは心配だと話し合っていた。神戸の家の部屋の中はめちゃめちゃだけど、家族は何とか怪我もなく無事だと伝えることができたのだが、これ以降は全く電話が通じなくなった。

２　１月１７日

外が明るくなるのを布団の中で待ち、情報を得るために家を出て、車の中に避難してラジオをつけた。明石海峡が震源の大地震で、家屋の倒壊や火災、被害があちらこちらで出ていることや、高速道路や駅が倒壊していることなど少しずつ状況がわかってきた。大きな余震が何回も来て、四階建ての団地が今にも崩れてしまうのではないかと不安で、はじめは近所の西高丸小学校に避難しようと考えていた。しかし、１月の冷たく、乾いた空気の避難所で、どんな病気が蔓延するかわからない。年末に肺炎で入院していて退院したばかりで、なおかつ喘息を持っている当時まだ１歳の長女がインフルエンザになってしまえば、悲惨なことになりかねないと心配した。そのため、とりあえず自分の家に留まることにした。

家に帰ってまず頭に浮かんだのは水のことだ。地震の影響で水も電気もガスも止まってしまい、まずそれらの補給が最優先だと考え、水を貰いに垂水中学校へ汲みに行った。そこでは、水が出るには出るものの、水道から筋のように滴り落ちてくるだけで、500ml のペットボトルを全部入れるのに一時間かかるような速度だった。これではとてもではないが生活用水を得ることはできないと断念した。さてどうしたものかと悩んでいる両親のもとに、どこからか「貯水場のタンクが割れてそこから水がくめる」という情報が舞い込んできた。藁にもすがる思いで車を飛ばした。すると、話の通り水を求めてバケツやペットボトルを両手に並ぶ人々の姿があった。貯水場の管理者らしい人が、「どうすることもできないのでご自由にお持ち帰りください」という呼びかけをしていて、両親は水を手にすることができた。だが、これはあくまで運が良かっただけだ。当日はあちこち探しても、水を手に入れることができなかった人たちもたくさんいたらしい。また、高齢者も多かったため、車に乗れない人たちもいた。そんな人たちは他県から来てくれた給水車から水を貰うために、寒空のなか長時間並ぶこととなったのだ。両親は幸い、生活用水にはほとんど困らなかった。前日、浴槽に溜めた水を、母は、朝洗い流そうと置いておいた。それが、そのあと十日間ほどの生活用水となった。そして、飲み水においても、運よく手に入れられた貯水タンクの清潔な水と、全くの偶然だが、父が 10 リットルほどの大きな箱入りの水を、少し前に何箱か手に入れていた。それらがあったために、水に

はあまり困らなかった。

３　遠い人とのつながり、近い人とのつながり

地震発生直後から神戸以外の地域では震災のニュースばかり流していた。心配した母の親戚や友人、父の仕事関係の人などからひっきりなしに母の実家へ電話がかかってきていた。神戸への電話はとてもかかりにくくなっていたからだ。そのせいで余計に周りが心配した。中でも、何日か経ってから教育テレビの通常放送を全て安否情報に変更していて、亡くなった方の名前を流していく映像を見ていた母の知り合いが、母と同姓同名の名前を見つけて慌てて電話をしてくるということがあった。家族は現地であわただしくしていたために、最低限の報告しかできず、連絡もとれる状況ではなかったのでしかたがなかった。それでも心配をしてくれるたくさんの人々に恵まれているのだなと思った。また、当日の夕方、家で食事をどうしたらいいのか考えていたところに、隣の家に住んでいる親しくしていた高齢の女性がきた。その家にはカセットコンロがあり、鉄板で料理をすることができた。そこで焼きそばを作って母にお裾分けをしてくれた。娘はまだ母乳の時期だったので、「お母さんが食べて体力を付けないと赤ちゃんにお乳をやれないから」と分けてくれたのだ。母はこの時ほど人の温かさを感じたことはないと語る。

４　焼野原と穏やかな光景

発生から何日かして、住んでいた県営住宅が危ないのではないかという噂を聞き、不安になった父方の祖母と父の妹が高丸の家に身を寄せてきた。父も母もそれを快く受け入れたが、どうしても普段別々に暮らしているためか、価値観や生活様式が少しずつ違う。うまく噛み合わないことも多々あって大変だったが何とか助け合って乗り切った。赤ちゃんを抱えているのに、何日もお風呂に入れず困っていたところ、西区の健康ランドが営業を始めると聞き、久しぶりに入浴できたときはとてもうれしかった。それから十日間ほどの共同生活のなか、行政から派遣された全壊、半壊認定をする人がきて、大丈夫とわかり祖母たちは帰った。

そのあと、洗濯物をしているなかに、娘のホルスタイン柄のかわいらしいカバーオールがあった。それが真っ黒の柄に変わっているのを見て、おかしいと思った母はベランダに出て確認をした。すると、その黒い柄の正体は風に乗ってやってきた長田の火事の灰だったのだ。これを見た母は、このままここにいるのは子どもにとってよくないと考え、愛知県にある祖母の家へ行くことを決めた。父は大阪での仕事のために家に残ることになった。母の実家へ向かうには、まず大阪に出なければいけない。そう思ったのだが、車で行くには、途中の道が地震の影響で寸断されていて、高速道路も倒れていた。車の道を諦めたとき、神戸の手前までバスが出ていることが分かった。母はそれに乗り、ハーバーランドまで歩こうと考えた。バスの道中、まだ煙が立ち込める長田のまちを通り過ぎた。家の前には「この下に人が埋まっています」と簡素な張り紙がしてあった。ほかにもそんな家だった場所にいくつか立札がしてあった。「テレビや写真で見た第二次世界大戦のときの東京大空襲の焼野原みたいですごく怖かった。」どうすることもできずに俯いて娘と静かにバスで揺られた。しばらくして、バスが終点へ着いた。そこからハーバーランドの波止場までベビーカーを押しながら歩いた。大阪までの船が出ていたのだ。船の値段はさほど高くなく、2000 円程度で乗れた。通常一時間足らずで着くところを、八時間近くかけて船で着いた先の場所は、まるで別世界だった。神戸から来た人間はみな同じようにジーンズにダウン、背中にリュックサックという格好だった。大阪に着いた途端、地震なんてなかったようにお洒落な服を着てお化粧をし、笑顔の女性がカフェでお茶をしていたのだ。その風景は母に地震は夢だったのだろうかと錯覚を起こさせるようなものだった。

５　父の出勤風景

父の会社は大阪に支店があり、父は震災前からずっとそこに勤務している。震災によって車や電車という手段が使えなくなり、どうやって出勤するのかが父にとって課題だった。母と姉が愛知へ行く少し前、会社の中で被災した社員へ見舞金がでた。その見舞金で父と母は原付バイクを買うことに決めた。車よりは使いやすく、出勤をするために最適だと考えたからだ。しかし、混乱状態で店があまり開いておらず、バイクを売ってくれる店を探すのに苦労した。なんとか見つけた店で、なんでもい

いから売ってくれと頼んでやっとバイクを買うことができた。手段は得たものの、やはり遠回りして大阪へ向かうため、早朝に家を出て昼すぎに会社に着くということが何度か続いた。これでは仕事どころの話ではない。また、何度も事故に遭いかけた。道路はどこもひどく傷んでおり、渋滞によって混雑しているために、実際事故が多発していたのだ。そこで、会社に寝泊まりなどしていた。それを見兼ねて、父の身体を気遣って職場の先輩や同僚、果ては取引先のお客さんまでもが自宅のライフラインが復旧するまでの間、家に泊めてくれた。ここでもたくさんの人に支えられていた。

６　子どもの心の傷

実家に戻ることができた母は、しばらくそこで娘と生活していた。愛知県北部にある木造平屋の家である。神戸とは打って変わって余震もない、当時安全な場所だ。しかし、震災で母が恐怖を感じたのと同じように１歳の姉も心に傷を抱えていた。実家では猫を飼っていたためふすまを開けて自由に出入りするときの小さな音に敏感に反応し、その度にびくびくと肩を震わせていた。抱っこされていないと不安そうだったので、決して一人にしなかった。夜泣きや原因不明の発熱もあり、近所の小児科に何度も通った。

７　感想

私が小学校のころ、毎月「今月のうた」と称してさまざまな歌を歌うことになっていた。1 月になると、他の季節の行事と同じように阪神・淡路大震災の歌である「しあわせはこべるように」を何の感慨もなく覚えて歌っていた。「震災集会」なるものもあり、幼い私には怖くていやな映像、というイメージの震災関連のビデオを見せられ、「阪神・淡路大震災」とはこういうものだと、いわば刷り込まれて大きくなってきた。だから、1 月 17 日が何の日かもちろん答えられたし、どこでも 1 月になれば震災について考えなければいけないのだと思っていた。違いについて気が付いたのは高校に入ってからだった。自ら志願して入学した環境防災科において、初めて阪神・淡路大震災を知らない同世代がいる、と知った。相当なショックを受けた。私のなかで常識だったことがまさか覆されるとは考えてもみなかったからだ。

今思えば、私はあの大惨事から何とか立ち直った神戸のまちで生まれ育ったために、震災について教わるのが当たり前だと感じていたが、被災していない他の地域では、それは当たり前ではないのだ。当然といえば当然の現象なのかもしれない。人は忘れるものである。そのうえ、20 年前のことを当事者でない人間が事細かに覚えていることはまず少ないだろう。しかし、その 20 年前実際に被災した人間からすればどうだろう。震災という傷痕は、拭っても拭いきれない深い心の痛手となり、今でもその人たちを苦しめ続けているのだ。被災地と未災地の意識の差、というものを生まれて初めて感じた瞬間だった。では、そこで「まあ忘れちゃうものだし、仕方ないよね」の一言で済んでもよいのだろうか。

もし大きな災害が起こり、その復旧やある程度の復興が整い、何もそこから学ぶことなく生活を続けていくとどうなるだろうか。行政の対策もなし、個人での備えもない状態でまた災害が起きれば、また大きな被害を出しかねない。ましてや、この島国である日本に住んでいる限り、どんな自然災害からも逃げられない。そんな状況のなかで災害は忘れてはいけないものだし、伝えていかなければならないのだ。これもまた、高校に入って初めて知ったことだ。震災を知っていくという「当たり前でないこと」を「当たり前」にしていくという責任感を持つことを教えられた。私が高校に入る 2 年前に東日本大震災が起き、その当時は、人々の防災に対する意識も高まっていた。だが 4 年経った今、人々の記憶は少しずつ薄れ始めている。大きな災害が起きてからあわてて改善するのでは遅いのだ。災害が起きるということは尊い命や築き上げた貴重な有形無形の財産が失われているということだ。人の命をかけなければ成立しない防災は明らかに矛盾している。防災とは人の命を守るために災害から身を守ることを考え、実行することだ。そのためにも、どんなに昔にあった災害であっても、それを後世に伝えていかなければならない。伝えていくためには、やはり経験者が広めるのが、話にも現実味を帯び、一番伝わりやすいはずだ。そうは言っても、阪神・淡路大震災においては発生から 20 年という時間が過ぎている。発生直後にはまだ現役で働いていた世代の方々が高齢になり、今はもう話をするのが難しいということも少なくない。語り継ぎには世代交代が迫られているのだ。震災を語

り継いでいくには、若い世代が必要なのだ。70 年前の戦災にしてもそうだ。今なら戦争を実際に体験し、伝えることができる人がまだおられる。だが、あと 20 年後この日本に何人いるだろうか。その頃戦争を語り継いでいるのは、体験者から語り継がれたそのまた下の世代だ。自然災害にしてもどんどん若い世代に語り継いでいかなければならないのだ。

今回、「語り継ぐ」を作成させてもらったのはとてもいい機会だと思った。自分より後の世代に伝えることももちろんであるし、阪神・淡路大震災を知らない同世代にも伝えることができるからだ。重ねて言うようだが、小さいときから震災の恐ろしさ、というものを嫌になるほど聞いてきた。しかし、それは断片的なものでしかなく、しっかりと聞く機会があまりなかったために、全容、そのとき何をしていたかなどは明確でなかった。専門的な知識を得た今、もう一度こうした場を設けて母から話を聞くことで、なぜ恐ろしかったのか、なぜこんな行動をとったのか、そんな部分をきちんと理解して聞くことができた。その上、被災者としての生の声を聞くことができ、机上で勉強するだけでは知り得なかったことを多く学ぶことができた。「被災地を教材にしてはいけない」とも言うが、震災体験はこれからを考えていく上で重要なものとなる。被災者のこころを第一に気遣うという考えを忘れずに色んな方からお話を聞かせていただけたらもっと防災の糧になるのではないかと思う。被災もしていない子どもだからそんなことが言えるのだと言われてしまえば返す言葉も見つからない。けれども、そんな人に震災を語り継いでいくことは大切なことだ、体験をしていない私たちに震災の恐ろしさ、教訓を語り継ぐことを許してほしい、という気持ちを伝えたい。近い将来起こるのではないかと懸念されている南海トラフ大地震。非常に起こる確率が高く、今、この瞬間に起こってもおかしくない状態だ。対策を打つためには、やはり過去から学ぶしかないのだ。行政による、堤防やハザードマップなどのバックアップというハード面だけでない。人々の「災害があっても、何が何でも生き残る」という防災意識の点でのソフト面も今以上に変えていくことが必要とされる。その過程で、この語り継ぐ行為が非常に役立つだろうと推測する。「あのときこんな風に備えておけばよかったなあ」「今だったらこうした方がいいよね」と話し合うことができる今、その貴重な機会を大事にしていきたい。

「語り継ぐ」を作成していて、自分の家族が助かったのは本当に奇跡的な偶然の積み重なりでしかないと思った。すべて、様々な環境に恵まれたからこそ、お互いに笑っていられるのだ。それは、震災当時に助けてくれた近所の人であったり、その後も、被災して不便だろうと私の家族にはたらきかけてくれた人の存在である。もちろん、発生直後、ものに当たらず、怪我一つすることなかったのも母の言うとおり、「運が良かった」のだろう。けれど、これから来るであろう大災害のときには、この偶然が起きないかもしれない。だから、私は二つのことについてやっておきたい。一つは、災害に対する物的、意識的な備えだ。非常持ち出し袋をつくる、地震がおきたらどこに集合する、そんな当たり前のことが実はできなかったりするので、その基本を定着させたい。二つ目は、地域コミュニティを確立させておきたい。自分の住んでいる場所ではそれなりに連携がしっかりしていると思われるが、それでも、阪神・淡路大震災時における長田や淡路のような動きができるかはわからない。そこで、地域の活動などに顔を出して、近所の人と「共助」ができるようにつながりを持っていきたい。これから大学生となり、もっと忙しくなるかもしれないが、身近な部分での結び付きをおろそかにすることなくやっていきたいと思う。

最後に、この体験を語ってくれた母へ感謝の気持ちを伝えたい。いくら被害が少なかったとはいえ、当時の恐ろしい光景を見て、母の心の傷は私が考えているより深いはずだ。それでも、この震災から 20 年という節目で、このような話をしてくれたことを本当にありがたいと思う。そして、震災から生き延びてくれてありがとうと改めてここで述べたい。震災の時に、いろんな人に支えられた家族がいたからこそ、今の自分がここにある。そうでなければ存在し得なかった私だ。そこで、私は災害時に人々の命を守る看護師という夢を実現することによって、支えてくれた人々に恩返しができるよう努力を続けたい。そして、語ることによって未来の被災者が減るよう、後世に阪神・淡路大震災を忘れずに伝えていきたい。

兵庫県立舞子高等学校

〒655 - 0004　神戸市垂水区学が丘３丁目２番

Tel : 078 - 783 - 5151　Fax : 078 - 783 - 5152